霧雨ラウの義兄魔術公式

猫之宮　折紙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霧雨ラウの義兄魔術公式

【Ｎコード】
Ｎ０５１２Ｊ

【作者名】
猫之宮　折紙

【あらすじ】
魔術が一人の少女に開発されてから数年。一般化した魔術は世界中にあふれていた。そんななか、魔術学校である清流学園（せいりゅうがくえん）のランキング最下位の来城月下（らいじょうげっか）は偶然にも二年前、魔術の開発者である二つ年下の霧雨羅羽（きりさめらう）の命を救う。そこから始まる可笑しなふぁんたじー学園生活。なぜか月下は魔術が使えない？　それにはふかーい理由が……。なんちゃって主人公最強なんちゃってハーレムなんちゃってコメディファンタジー系小説です。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

第一部まで連載します。
それ以降は「姫君と俺の錯乱日々」が完結してから投稿する予定です。

Prologue

ある時、世界はある発見をした。それは偶然に偶然を重ねて出来た奇跡。

『魔術』

その魔術を発見し、そしてこの世に具現化に成功した少女が居た。世界はその少女のことを注目の的、メディアの大々的な主役に引き上げたのだ。もちろんそれは当たり前である。日本人がノーベル賞をとった時よりも、オリンピック選手が金メダルを取ったときよりも、世界が戦争を始めても、この少女の話題だけは消えることはなかった。それは少女自体にも秘密があった。人気を無くさずに保ちつづける秘訣。それは『若さ』であった。たった十一歳の少女が世界中の有名な教授を呼び、千年以上かけてやっとの思いで実現できる奇跡をわずか一年と言う年月で成功させてしまった。

世界は少女を『本当の天才』と言った。だが、その魔術は誰でも使えるというわけではなかった。ある条件をすべて満たし、少女が開発した装置を体のどこかにつけていないと発動できないのである。それでもすごかった。ライターはオイルと着火する為に火花を手動で作る。この二つがあってライターで火がつく。他にも摩擦力で熱を発生させ、発火させる。それにも道具が必要だった。

『魔術』は違った。魔術はその条件と装置さえあれば火をどこからでも出せる。火だけではない、電気も氷も風も水も闇も光さえも作り出せれる。まさに奇跡。そして非現実的な現象。それが魔術。それが少女――霧雨羅羽（きりさめらう）の手によって可能にさせた。

霧雨羅羽はこの世の全てを手の居いれる事も容易くなった。魔術の開発者と言うだけで全ての人間が自分に従い、自分のために存在すると思っていた。だが少女はその幼さ故に過ちを犯してしまった。幼さ故に、大人の言葉にながされて犯してしまった罪だった。羅羽が初めて感じた初めての罪。

魔術の売買。

魔術の条件を満たさなくても発動できる魔術。初期のものに比べれば力は十分の一にも威力が落ちた。条件を満たす事によって魔術は絶大な力を発動する事が出来る。それが『完全な魔術（マジック・エンタイアティ）』と呼ばれるシステム。そしてその後に作った条件無しの魔術は『不完全な魔術（マジック・ディフェシャンシ）』と呼ばれるものである。売買された不完全な魔術（マジック・ディフェシャンシ）は世界の戦争の為に使われた。

少女は絶望した。自らの行い（おこな）に絶望した。そして世界は少女は用済みだと、今度は少女自体を魔術で消そうとした。自ら作った魔術によって幾つかの国から少女の命は狙われた。最初に両親を殺された。次に自分の居場所を無くされた。少女は三度絶望した。

少女は逃げた。

どこまでもどこまでも。

その足が止まるまで。

誰かに止められるまで。

「はぁはぁ……」

羅羽はまだ十二歳だった。最初の魔術を発表してからまだ一年ほどしか経っていない。太陽が沈んだ暗い町の路地裏を全速力で走っていた。走る目的はただ一つ。生き延びる為である。生きたい。少女はそう願ったのだ。自分の作った魔術で大勢の人々が死んでいった。そのせいで両親も死んだ。十二歳には重すぎる現実。少女には重すぎた才能だった。

「はぁはぁ……ここまで来れば…はぁ……大丈夫…かな?」

足は血だらけの裸足。逃げる途中で靴がだめになってしまった。痛かったが死ぬよりかはマシだろうと我慢した。羅羽はゆっくりと路地裏の壁を背もたれにしてずるずると座った。膝を抱えて顔をうずくめる。そして涙を流した。

「ママ……パパ……」

自分をかばって死んでいった両親。目の前で母親は氷漬けにされ、父親は火の玉で丸焦げとなって死んでいった。地獄絵図。思い出しただけで胸が痛い、自分の罪を呪いたかった。羅羽は虚ろな表情で顔を上に向けた。

「……雪」

空からは白い雪が降ってきた。羅羽はその雪を見詰めた。羅羽の腰まで伸びた銀髪と一体化するように雪は少しずつ羅羽の頭に積もっていく。冷えないようにと体を丸くして振るえた。荒い呼吸で白いもやが口から漏れる。

すると羅羽は何かに気づいたように勢い良く立ち上がった。そして路地の奥のほうを向いた。足音が聞こえる。耳を傾ければ足音が

一つ、二つ、三つ。どうやら三人ほどこちらに向っているらしい。自分を狙う暗殺者なのか。はたまたこの辺をうろついているホームレスなのか。この暗闇ではまだ確認できない。焦る羅羽をよそに足音はどんどん近づいてくる。

（……もう、殺されていいか…な？）

頭にそんな文章が思い浮かんだ。少女はもう疲れていた。生きるという呪縛に疲れていた。ここでいっそのこと死んでしまったら楽になるのではないのだろうか？　楽になってしまえばここで呪縛から解き放たれて両親に会えるのではないかと思った。

「よぉ、譲ちゃん」

三人の男が羅羽の目の前に現れた。顔を全て黒い布で多い、片手にはナイフ。これが先ほどまで逃げていた暗殺者である。三人の男は羅羽を見つけると布で隠れてても分かる笑顔が男達の表情があった。羅羽はぞっとした。死を目の前にするとやはり恐怖が少女に襲い掛かった。どんなに天才でも精神面はまだ小学生。死と言うものに恐怖する。

「おっと、逃げるんじゃねーぞ？　俺たちだって大変なんだからよぉ」

「あ、ああ……」

羅羽は一歩からだが後ろに引いてしまった。だが、次の一歩が踏み出せない。目の前にある五つの目が自分を捉えているかのようで体が動かない。ナイフという名の凶器で今から自分がどのように殺されるか考えただけで血の気が引いた。

じりじりと歩み寄ってくる三人。羅羽は震えながらもどうにか逃げようと考えていた。そう、走って逃げればいいのだ。今までそうやって生き延びてきた。だから今回もそうやって逃げれば良いじゃないか。なのに体が動かない。それが羅羽は震えで体の制御を失い、どうしようもなくなっていた。今自分が待つのは己の死だけ。だけど生きたい。生き延びたい。そう願った。

心から生きたいと叫んだ。

「まてよ」

不意に背中のほうから声が聞こえた。それもほとんどゼロ距離で。羅羽ははっとして後ろを振り向いた。最初に目に入ったのは体だった。黒色のTシャツにドクロのマークが入っていた。恐る恐る顔を上に向けるとそこには優しそうな黒髪の少年が立っていた。

「なんだぁ？　ガキ？」

「ガキ言うな。これでも十五だ。今年から高校生。義務教育からやっと時はなられたばかりの少年だが何か文句でもあるか？」

心外とでも言うように少年は男達に言い放った。すると男達は挑発に乗ったように顔をしかめた。どうやら少年に馬鹿にされたのがよっぽど頭にきたらしい。青筋が額に浮かんでいる。一方の少年は先ほどから笑みを崩さず男達を見ていた。その顔を羅羽はじっと見ていた。不思議と突然現れた少年には恐怖はなかった。それよりも安心感が溢れている。

（優しい……顔）

羅羽は正直な感想を心で述べた。

「このクソガキ！　俺達を馬鹿にしてそんなに死にたいか！？　なら殺してやるよ！」

三人の男達は一斉に羅羽と少年に突っ込んで行った。三方向に分かれて右上と左上からナイフを振り下ろすようにする男。そして先ほどからしゃべっていた男が真正面から少年と羅羽を狙っていた。

「さがってろ」
「は、はい！」

羅羽を後ろに下がらせ少年は右手を横に出す。

「Ｉ　ｈｏｐｅ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｓｐｅａｒ　ｏｆ　ｔｈｅｎａｍｅ　ｃａｌｌｅｄ　ａ　ｖｉｓｉｏｎ.」

少年と一言で右腕に霧がかかりそして集まる。みるみる霧は形を象っていった。そして少年は切りの塊――武器となった塊を握った。

（槍……？）

羅羽は少年の背中に隠れながら少年の持っている武器を見た。銀色の槍だった。だが、武器を持ったところでプロの暗殺者に勝てる見込みは少ない。だが、少女は信じていた。少年を何故か信じる苦とが出来た。それは何故か？　それは少年の先ほどの笑顔が羅羽の求めていたものだったから。

勝負は一瞬だった。上空にいる二人の男は槍の長さを利用して少年に行き届く前に華麗に横から吹っ飛ばされた。そのまま流れるように少年の男のナイフを弾き飛ばしてそのまま男の顔面に足を食い

込ませた。もちろん三人とも気絶して路上で伸びていた。

「さて、と」

少年は槍を一振りさせると元の霧のようにふっと消えてしまった。羅羽はゆっくりと少年に歩み寄る。羅羽は振り返る少年の顔を頬を染めながら見ていた。そして何か心に感じる熱いものに疑問を抱いていた。

「おまえ、足怪我してるぞ？」
「え、はっえ？」
「たく、んでお前誰だ？」

少年はぽりぽりと頭をかいて少女の名前を聞いた。名前を聞かれて戸惑った。それは魔術を開発した人物だからである。この名前のせいで自分は苦しんできて人々に嫌われてきたから。今回もこの少年に名前を告げて、そして嫌われる。そんな結果を予想していた。

「……」
「なんだ？　名前ぐらいえるだろうよ？」
「えっと……」
「ん？　何だ？」
「その、き、霧雨羅羽ですっ！」

羅羽は決心して名前を叫んだ。ああ、これでまた私は一人かな、と考えて悲しくなってしまった。だが、少年は「ふーん」と呟いて腕組をした。

「霧雨……羅羽ね。魔術の開発者だったな。たしか小学生ぐらいだったし」

「そ、その迷惑なら私はこれで……！」
「ちょっと待て」
少年に迷惑にならないようにと走ろうとした瞬間に少年に腕をつかまれた。羅羽は「えっ？」と呟いて少年の顔を見た。
「お前なんで逃げるんだよ？　怪我してるだろ？」
「え、でも……」
「でもじゃない。そんな理由はどうでも良い。行方不明とか世間では言われてるけど、実際は殺されそうだから逃亡中ってところか？　なら、なおさらお前は俺と一緒にいなきゃな」
言葉の意味が理解できない。一緒にいる？　何で一緒にいなきゃダメなの？　と口に出してその場で少年に問う。すると少年はきょとんとした表情になった。
「なんでって、お前まだ小学生だろ？　死ぬのは早すぎる。それに魔術を作ったって勘違いしているお嬢さんにはちゃんと理解してもらう必要があるしな」
「理解？　え、なにそれ？」
「いいから、とりあえず俺の家に来て治療させろ。話はその後だ。どうでもいいけど」
そう言って少女を抱き上げ、お姫様抱っこにする。
「なななななにを！？」
「だって怪我してるし、歩くのはさすがにいけないと思ったから」
確かに正論だった。なので何も言い返せない羅羽。歩くたびにリズム良く体が揺れる。じっと少年の顔を見つづけてまだ名前を教え

てもらっていない事に気づいた。

「えっと、お兄ちゃん。名前はなんていうの？」

「ん？　俺か？　そういえばお前に名乗らせておいて俺が自分の名前言っていなかったな。悪りぃな」

そう言って優しく少年は微笑みながら羅羽にそう言った。羅羽は恥ずかしくなってしまい少々目が泳ぐ。そんな事を気にせずに少年は名乗った。

「俺は来城月下（らいじょうげっか）。一応お前が開発した魔術よりも先に古代の魔術を身体に無理やり捻りこませた魔術師だ、それこそどうでも良い」

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

魔術詠唱の役。

Ｉ　ｈｏｐｅ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｓｐｅａｒ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｎａｍｅ　ｃａｌｌｅｄ　ａ　ｖｉｓｉｏｎ

「我は幻想という名の槍を望む」

The first The low rank（最下位）（前書き）

今日はここまで

The first The low rank（最下位）

君は誰？

俺は何？

私は貴方に守られている人

貴方は私を守る人

俺は君を守っているか？

貴方は十分に私を守っています。

なら、

なら良かった

……お、おお寝てた。俺は欠伸を噛み締めながら上半身を起こした。風が吹く。いつも見ている風景。いつも居る場所。それは俺の通っている学校の屋上。清流学園（せいりゅうがくえん）という中等部と高等部の二つに分かれており、この学園の中学受験に受かると自動的にこの高等部に進学できるエスカレーター式の学校だ。それなりの金持ちが集まるこの学園。一癖も二癖もあるやつ等ばかりが集まっている。

どうやら昼休みに何時ものように屋上にきてそのまま寝てしまったようだ。黒の携帯電話の液晶画面を確認するとそこには１７：００と表示されていた。どうやら午後の授業は全部サボったようだ。どうせ俺はこの学園に居る意味なんて一つだけだ。勉学なんて興味はない。

立ち上がって緩んでいたネクタイを締めなおす。きゅっと締め終わると無言のまま俺は屋上を後にする。この学園の制服は黒と白のデザインのブレザー。胸の部分に銀色で描かれた六芒星の中にかかれている『高』という文字。この学校の校章だ。そして何よりこの学校が教えているもの。運動は三の次、勉学は二の次、一番目に教えるもの。それは『魔術』。この世界に溢れる魔術。数年前に一人の少女が開発した。それを社会的に活かせるようにと作られたのがこの清流学園である。

ここでは勉強のほかに正しい魔術の使い方、魔術の発動の仕方、魔術に対する知識、魔術に対する全ての事を教えてもらう事が出来る。世界でも数校しかない魔術学校に入学するにはそれなりの知能と権力、地位と金が必要だ。

そんな学校で俺は日常を謳歌している。普通に生活する事で特に困った事も起きない。起きるはずがないのだ。それは誰も俺を相手にしないからである。学校ではランキングが存在する。高等部と中等部に分かれ、高等部ではこのランキングの上下関係が激しい。

高等部には約、千五百人近くの生徒が学園に通っている。中等部は千人弱。もちろんランキングが高ければ高いほど教員や他の生徒達からは特別な扱いとされる。三学年すべてで総合評価されるこのランキングは毎日が順位の入れ替わりが激しい。

ランキングを入れ替えるために必要な事。それは魔術決闘（マジックバトル）という一対一で行われる試合である。特別な部屋に入り、一対一での戦いをする。ルールは簡単。相手に「まいった」の一言を言わせるか気絶させる。とても簡単なルールである。勝てば、その勝った相手のランキングと自分のランキングの順位が入れ替わるのである。だから最下位が一位と決闘して奇跡的に最下位が勝ったらその人物は晴れて一位である。しかしそんな事はありえない。何故なら奇跡は二度も起きない。すぐに一位は別の順位の奴に負けてランキングが入れ替わるからである。

話は戻るが先ほど俺が相手にされないといった理由はそれだ。最下位。そう、俺は高等部最下位の生徒なのだ。来城月下（らいじょうげっか）。この名前を知っているものはこの学園内ではとても少ない。知っているのはクラスメイトと数少ない友人ぐらいだろう。最下位の順位なんて誰もほしくはない。だから俺はいつも安全に生活する事が出来る。魔術決闘（マジックバトル）は挑まれたら必ず受けないと退学という面倒なルールが存在する。だがそのルールなんて俺には関係がない。最下位だから。

屋上から教室のある棟まで続く階段をおりて、二年生の教室の前をポケットに手を突っ込んで歩いて行った。一年。この学園に通って一年が経つが未だになれない学園生活。広すぎる土地と秀才が集まるこの学校と言う名のフィールドは息苦しかった。

「あ、ライライ♪」

「んあ？」

後ろから不意に誰かに呼び止められた。こんな中国人のような名前で俺を呼ぶのはあいつしかいない。振り向いてその人物の顔を確

認する。百五十センチに達しているかいないかの小柄な身長。体も幼児体型で顔も幼さが残っている。俺と同じ高校二年生、クラスメイトの国塚乃愛（くにずかのあ）がこちらに向って走ってきていた。特徴的な金髪のセミロングの髪とチェックガラのスカートを揺らしながら手を振っていた。

「ライライ、まだ帰っていなかったの？」

「ああ。国塚もまだだったのか？　下校時刻は過ぎてるぞ？」

「ライライみたいな用事がないのに無駄に校舎の中を歩き回るような生徒じゃないよ。ノアは今からテニス部に顔を出すんだからっ！」

「はいはい、そりゃ元気がいいことで」

右手で頭を適当になでてやると「はにゃ」と訳のわからない声を出して喜び始めた。１７０センチある俺はノアはどこからどう見ても小学生である。なんとなくだが守ってやりたくなるのは母性本能をくすぐっているからか？　といっても俺は男だ。母性本能に目覚められたら俺が困る。自分で自分を殴りつけないといけないな。

「で、ライライはどうしてここにいるの？　もうお昼の時に帰っちゃったと思ってた」

「いや、屋上で寝てただけだ。普通にサボリ。つうかカバンがあっただろ。俺の机の横にかけてたはずだ」

「あ、そういえばあったね。あちゃー、ノアまちがっちゃたね」

こいつのまったり性格には困ったものだ。だが、そこが人気と言うこともある。この国塚乃愛は高等部ランキング五位。それなりの実力がある。このマスコットキャラ的な可愛さで男子からはいつも可愛いと言われている。俺も正直可愛いと思う。まぁそこまで意味深ではないけど。

「じゃ、ノアは行くね」
「あいよ、そんじゃ頑張れよ」

うん、と肯いたノアは駆け出していき何か思い出したように振り向いた。

「あ、それと校門の前でラウちゃんが待ってたよ。可愛い妹なんだから大事にしなきゃダメだよ！」

と大声で言って駆け出して行った。俺は「うん？」と口から漏れてしまった。何でラウが校門で待っているんだ？　あいつは俺に何か用があったのか？　と疑問を頭の中で思い浮かべて自分なりの答えを探してみる。何か忘れているようで何も思い出せない。あー、うん、何も思いだせな――

「ああ！」

思い出した。今日、家を出る直前に「今日は部活がないから一緒に帰ろう！」と笑顔で俺に向けて発したラウの言葉を思い出した。あちゃー、と右手で顔を覆い溜息を吐いた。約束を破る事が一番嫌いなラウはたぶん俺が来たときどのように調理するか考えながら校門の前で待っているだろう。ならなおさら行かないと拷問のレベルが上がってしまう。俺はカバンを取るために誰もいない教室を目指し、そのままもうダッシュで校門を目指した。

⇔

カバンを右手に持ってせっせと走りながら校門を目指した。するとそこにはカバンを両手に持って校門を背もたれにして下を見詰めている少女が居た。銀色の綺麗な腰まで伸びた髪と大きな瞳が特徴的である。誰が見ても美女といえる少女。そんな少女が足音に気づいたのか俺のほうを向いて顔を明るくさせた。

「遅いです！　兄さん！」
「わりぃ。ちょっと昼寝してたら寝過ごした」

息を切らして少女の前に立った。顔を上げて少女の表情を確認する。清流学園中等部二年生。そして中等部ランキング一位を保つ少女。今年で十四歳。名前を霧雨羅羽（きりさめらう）と言う。俺の義妹である。俺と一緒に住んでいる少女だ。そして何より魔術の開発者。一番の魔術の理解者であり、一番魔術を使いこなせるエリートである。

「もう、こうなった兄さんの晩御飯は私が作ります」
「それだけはご勘弁ください！　てか、自分の料理がマズイってこと自覚してんだな！？」
「もう……なんども食べましたから」
「……一応味見はしてみたのね」

勉強、運動、魔術全てにおいて完璧だったラウの唯一の欠点は料理が出来ない事。彼女の作る料理は食べると軽くて一日中気絶するか、重くて一週間痙攣しながら病院送りだ。俺は生きているのが不思議なぐらいだ。一年の間に五十回ほどは病院のベッドの上で朝を迎えた。

「悪かったって。なんなら家に帰ってお前の言う事を一つだけ聞いてやる」

「本当ですか！？」
「ああ、俺が嘘をついたことがあったか？」
「中学校の入学式にきてくれるって言ったのに来てくれませんでした」
「よし、三つお願い事を聞いてやろう」

やった！　と喜ぶラウを兄として嬉しい気持ちで見詰める。ラウは約二年前に俺が自分の家に連れてきた。俺は両親が死んで親戚に面倒を見てもらっていた。恩返しをしようと頑張って勉強した。まぁその結果、有名な高校に入学する事が決定した。

冬、そんな喜びを胸に秘めて夜の街中を歩いていた。後、１ヶ月ほどで入学だ。頭の中は嬉しさでいっぱいだった。そんななか、路地裏で見かけない男たちを見つけた。三人の怪しい黒ずくめの男達。後を付いていくとラウが命を狙われていた。どうにか助けようと遠回りしてラウの後ろから登場。そして呆気なく男たちを倒した。そして行くあてもないラウを俺の家――だが、親戚の古東（ことう）さんの家に連れて行った。そしたらあらビックリ。ラウの母親の兄が古東さんだった。俺の従姉妹に当たるラウは結局古東さんのところで引き取る事になり、俺達と一緒に住むことになった。そして、ラウは古東さんのおかげで清流学園の中等部に入学。そして俺は何故かボディーガードとして有名高校の入学を止めてそのさらに上の清流学園高等部に入学した。なんでこうなるのと最初はもちろん思った。ちなみに古東さんはここら辺の地主で家は屋敷のようにでかい。なのでラウも俺もすんなり清流学園に入学できた。

そんな家に義妹のラウと古東さん、その奥さん。娘さん。そして俺の六人で住んでいる。普通に楽しい生活だ。別に俺がラウのボディーガードをしなくてもいいような気がする。なんせ、中等部ランキング一位のラウだ。本当は俺よりも強いんじゃないのか？

「兄さん、そういえばランキング戦しないんですか？」
「またその話か？　俺はそんなものには興味がない。おまえが清く正しく生きている事を確認できればいいんだから」
「ですが、兄さんは強いじゃないですか」
「そうか？　俺は『最下位』ってのがお似合いだと思ってるんだけど」
「そんな事はありません。兄さんはいつも私を助けてくれましたし」
と、右手を頬に当てて顔を赤く染めるラウ。いつのことを思い出しているのだろうか？　俺の予想だと一番初めにあった冬のあの日のことを思い出しているに違いがない。
でも
俺は自分が弱いと知っている。両親が死んだ時何も出来なかった。
そう、何も……
「兄さん、着きましたけどボーッとして大丈夫ですか？」
「ん？　あ、ああ、そうだな」
何時の間にか見慣れた玄関の前に立っていた。どうやら考え事をしていたうちに家に着いたようだ。その間ラウはじっと話し掛けずに俺を待っていてくれたのだろう。心が優しいラウは義妹として誇りに思う。俺も何かしてやれれば良いんだけどな。
「ただいま」
二人で声をそろえて玄関のドア――というよりも門を開けて先に

進む。広い敷地は門を通って十メートル先にある母家がここの家だ。他にも道場や蔵などもあるんだが、あまりその辺には出入りした事がない。

そのまま母家の本当の玄関まできてスライド式の昔ながらの玄関を通過する。

「ただいま」「ただいま」

声を揃えて挨拶をすると、奥のほうから「お帰りなさい～」と声が聞こえてきた。その声を聞いて何時ものように靴を並べて居間の方へ行く。襖をあけると古東さんの娘さんである古東宝香（ことうほうか）が畳の上に座ってテレビを見ていた。先ほどのおかえりの声も宝香さんの声だったのだろう。

「おかえり、月下、ラウちゃん」

「ただいま、ってそれよりも宝香さん学校で聞きましたけど今日のランキング戦大丈夫でしたか？」

「あんなのちょろいちょろい。私をなめてるのかね？　ランキング四位が十位ごとに負けるかって」

この古東宝香。清流学園の三年生で高等部ランキング四位。そして生徒会執行部、書記。茶髪のポニーテールが特徴的。古東さんの一人娘で俺の姉のような存在。ラウと俺を本当の弟と妹のように接してくれる頼れる姉貴だ。

「そんでさぁ、今度魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りがあるじゃない？　クラスから三人ずつで戦うアレ」

「ああ、はい。クラスの皆さんもそんなお話をしていました。私は出る事が決定しているようですけど」

「そりゃラウは俺と違って中等部一位だからな大事な戦力なんだから」
「今年も中等部と高等部に分かれてするみたいだし。ま、どの道勝つのは私たちのクラスだろうしね」
「いや、宝香さんのクラスランキング上位の人ばっかりじゃないですか」
「あ、そうだったそうだった。まぁいいんじゃない？」

宝香さんの言っている魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）とは、クラスから三人ずつ代表の生徒を出し、魔術で競うという勝負だ。中等部は一年生、二年生、三年生で各学年ごとで戦い、高等部は希望のあるクラスだけが代表を三人出し、一年、二年、三年関わらず全学年入り乱れて戦う事である。

「月下はでないのか？」
「俺は知っての通り１４２６位の最下位ですよ？　そんなのが戦えるわけないでしょうが」
「あ、そうだったね」

そう言って宝香さんは頭をぽりぽりかきながら答えた。全く、この人は。俺をからかって何が面白いのかが分からない。まぁ逆に丁重に扱われてもこちらの対応が困るだけだから別に良いんだけど。と、そんな事を思っているとラウは何か不機嫌そうに俺の目を見ていた。

「兄さん」
「ん？　なんだ？」
「隠し事はいけません」
「な、何のことかな？　ら、ラウさん？」
「兄さん、何故貴方はそこまで――」

「ああ！　そういえば伯父さんに用事があったんだ！　そう言うことだから俺はこれで！」

そう言って俺は急いで立ち上がって部屋を出る。その寸前にラウが俺の名前を呼んだが「また後でな！」と言ってその場をやり過ごした。あ、あぶねー。あの事は誰にも知られちゃいけないのに、なんでさらっと教えようとしてるんだよ。俺は嘘を吐いたにも関わらず、何故か足は本当に古東伯父さんのほうへ向っていた。

一方そのころ

「どうしたんだ月下は？　あんなに慌てて？」
「……兄さん」
「あ、それはそうと後で魔術の特訓に付き合ってくれよ。月下よりも魔術の開発者のラウちゃんのほうが頼りになるからねぇ」
「あ、はい。分かりました」

ラウはにっこりと宝香に微笑んだ後、やはり納得がいかないようで顔をしかめた。

The first Promise（約束）

「伯父さん」
「ん？　なんだ、月下（げっか）か」

とりあえず言い逃れで古東（ことう）伯父さんの所に結局来てしまった。穏やかな表情と笑顔が特徴的にな伯父さん。俺はこの人が怒っているところはあまり見たことがない。あるとしたら俺が嘘をついて誤魔化そうとした時。それも俺が怪我や悩んでいる時に無理をして嘘をつくとこの人は俺に激怒する。でもその時、何故か安心感を覚える。この人がちゃんと俺を見てくれているのだと思うからじゃないか。

「どうした？　宝香（ほうか）が何か言ったか？」
「いや、特に何もないですよ。それより……」
「ん？　何かあったのか？」
「俺の魔術が宝香さんにバレそうになりました。まだ、ラウは俺の魔術を鮮明に覚えているようで」
「うむ、そりゃ困ったな。二年も経つのにラウちゃんはまだあの日のことを覚えているのか？」
「ええ」

俺は部屋に入って古東伯父さんと向き合うように畳に座った。その間に伯父さんは「困った」と腕組をしながら呟いていた。ここまで隠しとおしたい事。それは俺の力。この力は俺が生まれてすぐに身につけたもの。両親もさっぱり心当たりがなかったらしく、人前にこの力を使うことを禁止した。

「しかし困ったな。他人にばれないようにとお前さんの両親には言われておるんだが」

「今までどおり俺はこの力を隠しとうそうと思います。父さんと母さんはそれを望んでいたんですから俺は育ててくれた両親の言葉を純粋に守るだけです」

俺の力を知っているのは俺と伯父さん、それとどうやらラウも知っているようだ。伯母さんは全く魔術に対しての感心がないので話をしてもどの道理解が出来ないといわれてしまう。俺の力は本当に特別なものだった。だから両親は他人に隠すようにといったのだろうか？

「月下、とりあえずお前はいつも通りラウちゃんの護衛をしてくれ。いつ、狙われるか分からないからな。頼りになるのは事情を知っているお前だけだ」

「分かっています」

「それと、お前の力だが――」

「……」

「必要と思ったときに自由に使え。お前はその力のせいでランキングというもので最下位じゃないそうか」

「いや、それはただ俺が弱いだけで。それに父さんと母さんは俺に力を使うなと――」

「隠す必要はない。お前は全力で立ち向かえば良いんだ」

「……分かりました」

⇔

俺は何時ものように六人で食事をとった後、風呂に入ってすぐに自分お部屋に入って寝た。考える事は何もない。伯父さんが言った言葉は別に「使いたくなかったら使わなくてもいい」といっているのと同じものだ。だから無理して使わなくていい。明日もいつも通りに学校に行ってラウを守るだけだ。守って、守って、守り抜いて、やる事だけするんだ。

そう思って俺は寝た。

寝た

ねた

……ね…た……

「ね、寝れねぇー」

がばっと布団から上半身を起こして一言呟いた。昼寝をしすぎたせいか全く眠気がない。何時もなら布団に入ったらすぐに寝れるはずなのに今日に限って寝れない。頭の中のもやもやとしたものが取れない。ああ、くそ。こんな時だけ。

と愚痴りながら立ち上がって部屋を出る。中庭の長い廊下を歩いてパジャマ姿のままサンダルを履いて庭に出る。こういう時は何かに集中して体を存分に疲れさせてから寝るのがいいだろう。そしたらすぐに寝れる。俺はポケットから指輪を取り出してそれを右手の人差し指にはめる。これが魔術を発動させる為の装置。『不完全な魔術（マジックディフィシャシ）』だ。これが二年前の魔術戦争で使われた装置である。これは『完全な魔術（マジック・エンタイアティ）』とは違い、条件を満たさずにも魔術が使える代物だ。もっとも完全な魔術（マジック・エンタイアティ）と比べたら十分の一しか力が出ない。

「魔術、開放（オープン）」

呟くような一言で全身から力が溢れてくる。これが人の体内にあるエネルギーを無理やりこじ開けて使用する装置。不完全な魔術（マジックディフィシャンシ）だ。これが無いと大抵の人は魔術が使えない。清流学園（せいりゅうがくえん）でも九割は不完全（マジックディフィシャンシ）な魔術である。そしてほんの一握りの人間、主にこの家に住んでいる宝香さん、義妹のラウ、クラスメイトのノアなどのランキング上位――と言っても学園内で十人ほどの人間が完全な魔術（マジック・エンタイアティ）を使えるのである。この装置は指輪のほかにもブレスレット、ネックレス、剣、刀、杖、扇子、靴、手袋など形は様々である。人は自分にあった装置を探し、大金をつぎ込んでそれを手に入れる。俺の場合はラウが俺専用に作ってくれたものだ。何気に宝香さんの使う拳銃型の完全な魔術（マジック・エンタイアティ）もラウが作った。

「――っ！？」

一瞬、体から力が抜けていく感じがした。その後はどんどんプールの水のように体からエネルギーが出て行く。大量のエネルギーと大量の冷や汗が全身から吹きだすのが分かった。そのまま立っていられなくなりその場に膝を突いて座り込む。夜の庭に俺の荒い息遣いと風の音しか聞こえない。うーん、何が原因なんだ？　やっぱり何かの力が邪魔しているのか？

「また……かよ」

これが俺が最下位の理由。誰でも使えるはずの不完全な魔術（マジックディフィシャンシ）が、ラウが作った完璧な装置を使ってでも、

俺は普通の魔術が使えなかった。

装置を使った魔術が使えない理由が分からない。この体質の所為で俺は最下位となってしまった。魔術が使えなくて勝てるわけがない。試合が始まってそうそう白旗をあげる。これが一年間続けてきた俺の魔術決闘（マジックバトル）。平和的にその場をやり過ごしていただけだ。どうでもいいけど。

「兄さん？」

立ち上がって深呼吸をはじめようとしたところに丁度後ろから呼び止められた。振り向くとラウがピンクのパジャマの上からカーティガンを羽織り、心配そうにこちらに歩み寄ってきていた。俺は「ラウ」と名前を呼んですぐさま息を整えた。

「魔術の練習ですか？」

「ああ、お前に態々作ってもらったのに活かせなかったら意味がないだろ？　伯父さんにランキング上げるのも頑張れって言われたしよ」

「そうですか……」

ラウは両手を合わせて何か思いつめたように俯いた。不思議に思い「どうした？」と声をかけてみた。すると我に返ったように「は、はい！」と裏返った声でラウの返事が返ってきた。ここで笑ったら俺は悪党だろうか？

「いや、その……あ、そうだ。兄さん、約束覚えていますか？」

「はぁ？　約束？」

「ほら、忘れてる。兄さんは昔から忘れっぽい人です」

何故か怒られてしまった。

「で、俺はお前にどんな約束をしたんだ？　俺の記憶力は三歩歩いて忘れるニワトリ並の脳しか持っていないからな、どうでもいいけど」

「もう、またそんなこと言って。……、兄さんは学校の校門の前で私に『三つ、何でも言う事を聞く』って言っていたじゃありませんか」

「あ、ああー、あ。確かに、言ったな」

「ですね」

俺の記憶力は本当に悪いらしい。確かにそんな事を言ったようなことを覚えているような気がする。結局は気がするだけ。覚えているか覚えていないかといわれるとほとんど覚えていない。悪い癖だ。どうでもいいような事はすぐに忘れる。そしてここにはじめて来た日の事や、ラウと出会った日、高校に入学した日、両親が殺された日。印象に残りやすいものだけは鮮明に覚えている。何の狂いもなく覚えている。人の記憶なんてこんなものなんだろうか？

「それで、ラウは俺にどんなお願いをするんだ？」

「そうですねぇ……最初はまず、私に嘘をつかないと約束してください」

「え？　そんなのでいいのか？　分かった。お前には絶対に嘘をつかない」

「約束ですよ？　それじゃ二つ目は――」

ラウはゆっくりと俺に近づいてくる。妙にこの二年間で大人びたラウを見るとたまに見惚れてしまう事がある。小学生だった少女が中学二年生になるとここまで違うのかと実感した。そしてラウはどんどん近づいて顔までゆっくりと近づけてきた。そして――

「私の料理を今度は残さずに食べてください！」
「……は、へ？」
「はへ、じゃありません。私の料理をちゃんと食べてくださいよ！」

「あ、ああ」と戸惑いながらも返事をする。目の前には飛びっきりの笑顔でこちらを見詰めている少女。あ、あぶねぇー。今絶対変な想像してた。いや、うん相手は義妹だ。妹には違いがない。俺も兄として義妹に好意をもつのはさすがに危ない。だが、あんな素振りを見せられたら誰だってそう言うことは考えてしまう。特に男は。

「三つ目は……それはまた今度にしておきます」
「そ、そうか。なら、俺は寝るからな」
「もう寝ますか？　分かりました。兄さん、おやすみなさい」
「ああ、お休み」

そう言って俺は本日二回目、ラウから逃げるようにこの場を後にしたのだった。

「兄さん、私は――」

残されたラウはずっと月下が走っていた方向を愛しそうに見詰めていた。

次の日、何時ものように朝起きて。何時ものように朝食をとり、何時ものように登校した。だが、今日はクラスが騒がしいのは宝香さんが言っていた魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りが行われるからである。優勝したクラスは学校から特別に賞品が支給される。去年は三年生のどこかのクラスが優勝して一人一台、大型テレビをもらえたとか言う話だ。流石は清流学園、金の使い方が違う。と言うか荒い。

クラスに入ってすぐに俺は自分お席に座る。廊下側の一番後ろと、中途半端な場所だ。できれば外の風景が見れる窓側が良かった。そしてカバンを机の横に引っ掛けて、昼寝モード。学校では大抵寝ている。これでよく俺は二年生に進級できたかが不思議なくらいだ。留年は覚悟していたが、俺がここの地主である古東さんの血筋と分かって留年は止めておいたのであろう。別に俺はどうってことないが。ま、どうでもいいけど。

「おはよー！　ライライ、今日も爽やかハッピーだね♪」

朝から五月蝿いのが俺の席の前に立ってきた。

「はよう、国塚（くにづか）」

「うーん、おはようにはちゃんと『お』をつけなきゃ。『はよう』って挨拶はノアはあまり嬉しくないんだぞ？」

「どうでもいいだろ？　朝からそのテンションは流石の俺もついていけないんだけど」

「ダメダメー、ライライは元気があったほうがかっこいいんだよ？　だから、ほら！　笑顔笑顔！」

無理やり俺の口元を掴んで引っ張るのはクラスメイトの国塚乃愛（くにづかのあ）。
元気を擬人化させたような人間。俺はこいつの事をそんな風に見ている。そもそも、ランキング五位のこいつと最下位の俺が知り間ということが不思議なくらいだ。まぁあちらから一年の時に俺にしゃべりかけてきたんだけどな。

「今日って知ってた？　今日は魔術決闘しても順位が入れ替わらないんだって」
「へー、で、何で？」
「ライライの言い方は何時も関心がないなぁー。まあいいや。それでね、理由は今度ある魔術決闘祭り（マジックバトルフェスティバル）の準備があって、今から順位が変わられると祭りに混乱が応じるんだって。だから今日から魔術決闘祭り（マジックバトルフェスティバル）が終わるまでランキングの順位は入れかわらない。まあ決闘は申し込めるんだけどね。まずはこの期間に決闘をするような人はいないと思うけど」
「ふーん、そういうもんか」

何となく適当に納得した。実際はあまり興味はなかった。俺は何時もと変わらないから、魔術どうしの戦いなんて何が面白いんだか。魔術というものは戦う為に作ったんじゃないとラウは言っていた。ラウは『楽しい』と思えるように作ったと言っていた。この学園は矛盾しているところが多すぎる。確かに、就職先で魔術警備隊（まじゅつけいびたい）と言う、魔術を使う警察がある。だからと言って全員が全員その集団に入るわけではない。それならランキングなどと言う上下関係など作らないほうが良かったのかもしれない。俺は何度もそう思っていた。

「私はライライと違って五位だもんね。数少ない完全な魔術（マジック・エンタイアティ）をつかえるんだもんね」
「はいはい、そりゃ良かったな。怪我をしない程度に頑張れよ」

「心配してくれるの？　うれしー！」
「と言って抱きついてくるな」
「うきゃ♪」

なんか飛び込んできたからチョップして止めたけどこいつ、喜んでねーか？　それはそれで危ないんだが、抱きつこうとしなくても良かったろうに。ま、こいつの考える事なんて俺が予想もしていないビックリするようなことばかり考えているからな。考えている事がさっぱりわからない。

「よぉ、来城」
「ああ、なんだ隈井か」
「あ、クマクマ」
「なんだとはなんだ。それと国塚さん、その呼び方はどうかと思うよ？」

そして、今度俺の目の前に現れたのはうちのクラスでは一番ランキングの高い奴だ。隈井龍牙（くまいりゅうが）。名前は龍とかっこいい名前だが、苗字がクマとかわいい名前なので大体のやつはこいつのことをクマとか隈井と呼ぶ。何よりもこいつは顔がよすぎる。ちょっと目つきが悪いが俺と同じく身長も高く、染めた茶色の髪がとても似合っている。ちょっとだらしないところも女子にはたまらないんだとよ。ランキング三位の実力を持つこいつ。なにかと俺と一緒にいる。まあ親友のようなものだ。

「んで、来城。おまえはこのランキングが入れ替わらない間に魔術の特訓でもするのか？　するなら俺がてつだってやるぜ」
「うるせーよ、俺はこの最下位というポジションを好んでいるんだよ。態々好きな場所を離れるバカがどこにいるんだよ？」
「お前がまずバカだ。最下位のどこがいいんだよ。一年よりも下だ

ぞ？　全校生徒の最下位だぞ？　そんな場所のどこがいいんだよ？」
「まったり、平和に暮らせるところ」
「あ、あのなあ～、おまえ……」

隈井は頭をかきながらどうにか俺を説得させようと考えているようだ。となりでは国塚がニシシ、というように笑って俺と隈井を交互に見ていた。俺からしたらこれも日常。何時もの日常。だが、だがだ。今日はこの日常が崩された。どう言う風に崩れるのか。それは今日のこの日、あの一言で俺の日常はいとも簡単に玉砕される。もちろん――

「来城月下はいるか！　この俺と魔術決闘（マジックバトル）だ！」

結局はこんな事だ。

The first Gramary of the truth（真実の魔術）

第一部は完です。

「来城月下（らいじょうげっか）はいるか！　俺と魔術決闘だ！」

そう言って威勢良く教室に入ってきた男子生徒。教室の中はシーンと静まり返り、クラスの生徒は俺を見たり、男子生徒を見たりと交互に顔を向けていた。俺はバカっぽくぽかーんと口をあけ、隣にいた国塚乃愛（くにづかのあ）と隈井龍牙（くまいりゅうが）も驚いたような顔をしていた。男子生徒はそれでも堂々と教室のドアの前に立っていた。

「誰だ、あいつ？」

「さー、隈井が知らないんなら俺が知っているわけがないだろ。どうでもいいことだから」

「えっと、あの人は確か友枝浅木（ともえだあさぎ）。ランキング十位でこの学園の三年生。イケメンな顔立ちで女子からは人気が高いみたい。身長は１７９センチメートルで得意な魔術は『氷を出現させる事』。不完全（マジックディ）な魔術（フィシャンシ）だけど、実力は確かな人。でも、ノアはライライとクマクマの方がかっこいいと思うよぉ♪」

「「そりゃどうも」」

すると、何時の間にか友枝先輩が近くの男子生徒に俺の事を聞いてどうやら俺と言う事を確認したようだ。大股だこちらに近づいてくる。隈井と国塚は俺の後ろに回って、友枝先輩が俺の前に立てるようにした。はた迷惑だ、と呟いたが二人から帰ってくるのは笑顔。何が面白いんだか。

「君が来城君かね？」

「はい、そうですけど、先輩。今日から魔術決闘（マジックバトル）しても順位は代わらないんですよ？　大体、最下位の俺の順位がほしんですか？」

「違うね。俺はこのイベントを利用しに来たのさ」
「利用……ですか？」
「ああ、利用さ。もちろん俺と君が戦って俺が勝ったら俺は最下位になる。だが、今回は関係ない。君を思う存分に痛めつけて全校生徒の恥さらしにしてやる」
「あの、すません。話の内容がさっぱりわからないんですが」
俺は申し訳なくなってしまい右手を小さくあげた。じゃないとこの先輩は話が通じないただの痛い人になってしまう。それは流石に俺もかわいそうだと思いここで話の折り目をついてもらうことにした。
「ああ、申し訳ない。俺も少々血走っていたよ」
元からだろ？
「俺が君にこんな憎しみを抱いているのは君の妹の霧雨羅羽（きりさめらう）に原因があるんだ」
「ら、ラウがですか？」
「そうだ、それは昨日の放課後だった。俺は見てのとおりのイケメンだ。たくさんの女を俺は落としてきた。今回のターゲットは霧雨ラウ。彼女だった。中等部のなかでひときわ輝く彼女を俺はほしいと思った。そして俺と付き合えと言ったんだ。普通の女はそこで『はい』と答える。だが彼女は『興味ないのでお断りします』と答えた！　どう言うことだと俺は思ったよ。その疑問をぶつけてみたら『兄さんより弱い人には私は興味がないんです』だってよ。だから俺は思った。明日、兄である来城月下を全校生徒の目の前で倒すと。昨日はちょうど古東宝香（ことうほうか）にも負けてむしゃくしゃしてたんだ。君は丁度いい俺の獲物って分けだ」
「……」

このナルシスト野郎、ぶん殴っていいですか？

そもそもラウに手を出そうとする高校三年生はロリコンだ。中学二年生のラウは確かに大人びている。大人びているにしてもまだ中学二年生。身長も１５５にも達していない女の子。そんなラウに告白する高校三年生はかわいそうだがロリコンだ。そしてこの野郎はナルシストでバカだ。後ろの二人も不愉快そうに友枝先輩を睨んでいる。

「ま、そう言うことだ。今日の昼休み、中庭に来い。あそこは客席が三千人見れるようにしてあるからな。あそこだったら君の無様な敗北がみれるだろう。それでは、また後で」

友枝先輩は笑いながら教室を出て行く。先輩が出て行くまで俺は開いた口がふさがらなかったのは言わなくても分かってくれ。だって、この世にあんな先輩が存在するとは思いもしなかったんだから。ああ、父さん母さん、世界は広いようです。世の中は今後どうなっていくのでしょうかね？　地球の未来が心配になった。どうでもいいけど

⇔

時間は過ぎて昼休み。ここでこの学校の『中庭』と呼ばれる施設について説明をしよう。

この学園には魔術決闘（マジックバトル）が出来る空間がいくつかある。その中でも一番広い空間と言うのが『中庭』である。中庭はドーム型で高等部と中等部の真中にある。大きさは丁度福岡にある野球ドームと大きさが同じである。そして本当に野球ドームのように観客席が三千人分あり、魔術決闘の観戦が出来るようになっている。体育祭もこの中庭で行われ、快適な決闘が出来る場所である。

そして、俺は逃げる準備をしていた。

「離せ！　俺はヘタレだ！　十位なんかに勝てるわけがないだろ！」
「にげるなライライ！　私は応援してるよ！」
「そうだぞ来城！　妹さんのことを思ってお前は頑張るべきだ」
「俺が負けたからと言ってあいつがあんなナルシスト野郎の彼女になるわけがないだろ！？　まず、宝香さんがラウに寄り付く男を抹殺するから！」

さて、場所は中庭の選手控え室。ここにいるのは俺と隈井と国塚の三人。窓から逃げようとしているところをこの二人に止められている。くそ！　なんでこの二人がついてきているんだよ！？　まず、俺がこの部屋にいる理由だが、この二人に引き摺られながらやってきた。説明終わり。俺が自ら望んでここに来ると思ったか！？

「もう、諦めてあの先輩とたたかっちゃいなよ、ライライ」
「そうだぜ。俺はあの人が嫌いだ。なんかむしゃくしゃするんだよね。だから俺の代わりと思って倒してくれよ」
「誰に向ってそんなお願いをしていると思ってんだあんた等二人は！？　最下位だぞ！？　最下位！？　１４２６位が十位に勝てるわけがないでしょ！」
「「グッジョブ」」
「どこがだ！？」

俺はもう、少し諦めていた。ここでわざと負けて逃げるそう言う手段もあるが今回はそうもいかないだろう。土下座をしたところであの先輩は俺を逃がさない。だから思う存分に殴らせておいて俺はそのまま気絶して巻ける。これしか方法はない。

「まったく、それじゃそろそろ始まると思うから俺と国塚は応援席に行っとくぞ？　逃げないように先生達には中庭の入り口で警備してもらってるからな」

準備のいい奴だ。

「それじゃライライ、またあとでね」

国塚のその言葉を聞いて控え室のドアが静かにしまった。取り残された俺は溜息をついて窓から離れて椅子に座る。テーブルに置いてある水を一気に飲み干す。ゴクゴクという音が脳内に響いた。

「ぷはあ～、……さーて、死んでくるか。どうでもいいけど」

俺は立ち上がって控え室をでた。

⇔

その頃。

「あ、国塚先輩」
「おお、ラウちゃん来たね。ささ、私の横に座って」
「はい」

中等部の生徒も高等部の生徒も全員がこの中庭に集まっていた。もちろんラウも例外ではない。ノアと龍牙が座っている席にちょうどラウが着たので二人は隣に座らせた。とりあえず、ここは月下応援隊になりそうだ。ノアは知ってかしらずか月下の似顔絵が書いてある団扇を持ってきていた。

「私の所為で兄さんが大変な事になりました」
「ああ、そこんところは大丈夫だよ。来城の奴は『俺の大事な妹はあんな奴にはやらん』ってやる気満々だったし」

もちろん龍牙が行っている事は大嘘である。

「でも……」
「大丈夫だよ。だって貴方のお兄さんは強いんでしょ？　ノアたちはちゃんとそのお兄さんを応援しなくっちゃ！」
「……そうですよね、兄さんを応援しないと」

ラウは少し表情がやわらかくなりドームの中心部分を見詰めた。そこにはすでに敵である友枝浅木が腕組をしながら立っていた。表情は余裕と言う事がすぐに分かる。だが、ラウは浅木など見てはいない。来るであろう自分の兄の姿が見える選手入場口をずっと見ていた。

「あ、あそこ。雲神春之美（くもがみはるのみ）先輩だ」
「二位のお出ましかよ」

「その隣には狩亜純樹先輩」
「今度は六位か」
「で、その後ろに古東宝香先輩」
「四位でラウちゃんと来城の姉貴だったな」
「そしてその隣にいるのが――」
「学園内で最強って言われているランキング一位、轟坂小梨先輩…
…だな。三位の俺と五位のお前。結局、完全な魔術を持つ奴はここ
に来たか。てっきりコナシ先輩は『そんなものに私は興味がない』
とか言ってこないかと思った」
「私もそう思ってたからビックリだよぉ」

そんな龍牙とノアの会話は中等部一位の霧雨ラウの耳には届いてい
なかった。

⇔

よし、ここまできたらさっさと気絶して帰ろう。と、思ったが簡単
に人間気絶できるものなんだろうか？　俺は人生生きてきた中で一
度も気絶した事がない。気絶させた事はあったとしてもだ。どんな
に喧嘩の時殴られても、蹴られても、ぶっ飛ばせられても、俺はこ
の生涯の中で気絶した事は一度もない。……嘘だ。ラウの料理を食
って気絶した。だが、それはラウの料理限定だから問題は無い。と
なるとまた、新たな作戦を練らないといけない。

そこで、思いついたのが逃げ回って先輩の魔術エネルギーをゼロに

する方法だ。この魔術エネルギーとは昨夜、俺が魔術の練習をした時に体から湧き出てきたエネルギーのことだ。これがゼロになると人は立っている事も出来なくなり、最悪の場合は先輩のほうが気絶する。これで勝つしかないのだ。

「これしかないか」

ここまできたら逃げて逃げて生き延びるまで。心にそう誓い、さっさと帰って寝る事を俺は望んだ。

そして歩き出す。一歩ずつ歩くたびに入り口から見える光が眩しくなっていくのが分かった。人々の声もだんだん大きくなってくる。緊張しながらも進み、俺は入り口を出て中庭の中央へと歩いた。湧き上がる歓声、目の前で不気味な笑みを浮かべる先輩。どれも俺には新鮮なものだ。こうやって魔術決闘（マジックバトル）をするのは初めてだから。これで俺も魔術決闘（マジックバトル）デビューである。嬉しくないけど。

「良く逃げずに来たな、来城月下」

「俺だって逃げたかったんですけど悪友の二人が逃げるなって五月蝿かったんですよ」

皮肉な事を初めから言われた。この先輩は人の心と言うものがないんだろうか？

「それじゃはじめようか」

「いいですよ。それじゃ、一、二、三の掛け声で始めましょう」

「なら、カウントは君がするがいい。ハンデをあげよう」

「……了解しました」

いちいちむかつく先輩だな。まぁいいや、とりあえず逃げるか。俺

は先輩から三メートルほど離れ、ポケットからラウから貰った指輪をはめる。装置を必ずつけておかないといろいろと怪しまれるからな。

「それじゃ、カウントを始めますよ。一」

観客に悪友の国塚と隈井の視線を感じる。

「二」

そしてそのすぐ近くに宝香さん、そしてランキング上位の方々。特に一位の轟坂小梨先輩の注目。

「三」

そしてラウの心配そうな表情が心に痛かった。

「魔術、開放（オープン）！」

叫んだのはもちろん先輩である。先輩はポケットから素早くメリケンサックを取り出し両手に装備する。その後魔術を開放し魔術エネルギーを体のそこから沸かせている。俺はとりあえず背を向けて逃げた。この中庭はとても広い。逃げるには絶好の場所だ。

「逃げるのか？　まあいい。そのほうが楽しいじゃないか！」

先輩は拳を真っ直ぐ逃げる俺に標準を合わせて右手の腕を後ろに引く。俺は先輩の姿なんて見ていないからこのあとどうするか分からない。だが予想はつく。

「氷の雨（フリーズ・リニー）！」
「え？　ちょ、ま――！」

先輩が俺に向けて振った拳から大量の氷の粒が真っ直ぐ俺に向って飛んでくる。その大きさ、約バスケットボールほどの大きさじゃないか？　俺は間一髪後ろを振り向いて気づく事が出来、横に飛んで逃げる事が出来た。そのすぐ近くでは砂煙が舞い上がる。地面はえぐられ、あんなものが人に当たったらただでは済まないだろう。

「良く避けたな、来城月下。俺の得意とするのは氷系統の魔術だ。この装置も俺と完璧にシンクロするように特注で作った。お前の持っている装置とは全く違うんだよ」
「はいはい、そうですか」

言いたい奴には言わせておけばいい。この装置は魔術を作った張本人、霧雨ラウが作ったなどと思っていないのだろう。訳の分からない装置職人よりも信頼できるこのラウの作った装置。それを馬鹿にされるのは少々頭に来た。だが、ここで血が上って負けに行くのはダメだ。今は生き延びる事のほうが大切だ。その後に思う存分ぶん殴ってやるよ。

「それじゃ、君も魔術を見せてもらおうか？　ま、最下位の使える魔術なんてたかが知れてるがね　ははははは！」
「っち、バカにしやがって」

俺はどうやら選択を間違っていたらしい。この先輩、伊達に十位という数字を持っていない。先輩の魔術エネルギーは体中から溢れている。そこを尽きる気配が全く見えない。普通の生徒だったら先ほどの技で大量のエネルギーを消失し、エネルギー切れになる。だが、先輩のエネルギーはまだ減った様子すら見受けられない。逃げる、

という選択は間違っていたのかもしれない。

「ほらほら、いくよ！」

「っち」

先輩は拳を左右連続で突き出す。それにあわせて大量の氷の塊が俺に目掛けて飛んでくる。避けようと必死に横に飛んで逃げるが、氷の雨はやむ事がない。どうしても逃げる俺のほうが氷の飛んでくるスピードに間に合わない。

その時、一つの氷が飛んでくる事に気づかなかった。氷柱のように尖った細長い氷。空気の抵抗が少ない為、普通の氷の数倍スピードが速かった。そのまま氷は俺の腹部を貫通する。右の脇腹辺りだった。俺の目に映るのは貫通して俺の血で真っ赤になった氷が俺の腹から生えている光景。ボーットしている間に他の氷が俺を殴るように全身に当たった。言葉が出ない。そのまま俺はこけるように地面に転がった。

「ありゃ？　もうおしまいか？　一つだけ貫通性の高い氷を混ぜたんだが見事にそれにあたったか。は、やっぱり最下位は最下位か？」

先輩は俺に近づいて欺くかのように笑う。虚ろな瞳で俺は先輩を見ていたのであろう。貫通した脇腹が痛い。だけど気絶はしない。ああもう、なんか全てが嫌になってきた。だが、ここで降参といっても先輩は俺を攻撃する。人間サッドバックにして俺で遊ぶつもりだろう。

「それじゃ、君はもうちょっと俺の遊具となってくれ。悪いけどまだ鬱憤は晴れないのでね。君の妹、ラウを恨むといい。ここまで俺を怒らせた彼女を。ははははははは！」

俺の意識はもう、朦朧としていた。なのに気絶しない。この精神はどれだけタフなのかが分からない。だがそのタフな精神が俺の安全を邪魔する。なら、俺に聞こう。何故俺はここまで頑張らないといけない？　こんなわけの分からない奴の遊具になって頑張らないといけない？　俺は……なにがしたいんだ？

「兄さん！」

ドーム内に良く響く声。先輩を見ていたときと同じ虚ろな瞳で声の主を探した。そこには一人だけ立ち上がり両手を絡めて振るえている少女の姿が見えた。……ラウか。ラウは震えるからだと震える声でこう言った。

「兄さん！　約束したじゃないですか！　嘘をつかないって！　なんで、なんで強いのにそこまで隠しとおそうとするのですか！？私は理解できません！　だから、だから私は三つ目のお願いをします」

少女は震えながら、無理をして微笑んだ。

「勝って下さい」

ラウの隣にいた国塚と隈井は妙に嬉しそうな表情でラウを見ていた。俺はというと何故か意識がだんだん何時ものようにはっきりとしてきた。……はぁ。父さん、母さん、貴方の息子は約束を破る大馬鹿者です。ですが俺には守る事があります。そいつの命令なので仕方がありません。伯父さん、とりあえず貴方が言っていたようにやれるだけやってみます。そしてラウ、お前の約束は俺がきっちり守ってやっからな。

「ん？　まだやるっての？」

ゆっくりと立ち上がる俺を馬鹿にしたように表情で笑う。俺はゆっくりと邪魔になる氷の塊を尖っている部分だけ拳で砕いた。無理に抜くと、血が止まらなくなって危ない。これはしばらく痛いが体に刺しておく必要がある。

「ああ、あ。今気づけば俺達の会話ってマイクで拾われてドーム内に聞こえていたんだな」

「そうだとも、君の叫び声もばっちり聞こえていたさ」

はぁ、だから俺の苦しむ声を聞いてラウはあんな事を言ったのか。俺に負けてほしくないと思ったのか。世話のかかる義妹だか、兄思いの義妹だか、全く分からない。まあ、別にいいけど。

ゆっくりと右手の人差し指につけておいた指輪をとってラウのいる観客席に投げ込んだ。見事にラウがそれをキャッチする。観客は俺の行動に驚きを隠せないようでざわめき始めた。一方の先輩は何かがおかしかったようで笑っている。

「まさか君、素手で俺とやりあうのか？　俺はまだ魔術もつかえるしボクシングもやっているんだぞ？　君が勝てるわけがないだろ」

この先輩はボクシングをやっていたのか。と妙な関心を抱いて俺は深呼吸をする。

まず、体の奥底にある魔術の塊をイメージでこなごなに砕く。そしてその塊が血液と一緒に体中を巡る。最後にその魔術の破片の力を――解放する！

「！」

ドーム内の観客の声が消えた。それは声が出せなくなったわけじゃない、声を出す事が怖くなったからだ。魔術を一度使うと相手の魔術エネルギーを感知する事が出来る。たまにその魔術エネルギーを見ることができる人もいるらしいが、その一人が俺だ。自分の魔術エネルギーを見て、操作する。それが俺の力。そしてその大量にあふれ出るエネルギーに観客は驚きをかうせなかったのだ。このエネルギーは一位の轟坂小梨を越える。

「な、なんだよ……おまえ、そのエネルギーは……」

「一つ言っておく、俺はラウが作ったものは魔術とは認めていない。先輩達が使っているのは『魔法』だ。装置の力を借りて人間の潜在能力を引き出す。それは魔法なんだ。ＲＰＧでもあるだろ？　魔法使いは杖などの道具を使って魔法を使う」

「な、なにを……言っているんだ……？」

「魔術とは、己のみの力で発動させる奇跡。それが魔術。古代よりこの世にする奇跡だ」

先輩は何を言っているか分からないようで一歩、後退り俺を化け物でも見るかのように見ていた。もちろん俺はそんな化物じゃない。ちゃんとした人だ。だが、ここでの俺は人じゃない。ま、どうでもいいけど。

「俺は『魔術師』だ」

「……魔術師」

「ああ、魔術師。悪いが先輩には負けてもらいますね。大切な義妹のお願いなんで」

ゆっくりと右手を横に上げてる。深呼吸して魔術エネルギーを右手に集める。

「Ｉ　ｈｏｐｅ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｓｐｅａｒ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｎａｍｅ　ｃａｌｌｅｄ　ａ　ｖｉｓｉｏｎ」

そして体に中にある魔術エネルギーを具現化させる。魔術とは詠唱によってその姿かたちを変えるのだ。今俺が言った魔術の詠唱の意味は『我は幻影と言う名の槍を求む』と言う意味。そして、集まった魔術エネルギーは詠唱にしたがって銀色の槍に変化する。

「ぎ、銀色の……槍」

「今から先輩は俺に一撃も与えられないで気絶する。どうですか、魔術師の予言は」

俺の自信ありげな笑みに先輩は不気味に感じただろう。だが、こういう精神状態を削るのも一種の魔術である。だから俺は『魔術師』。魔法使いじゃないんだ。

俺は槍を構えたまま先輩に駆け寄る。どんどん近づく俺に対して先輩は恐怖を感じがむしゃらのまま拳を突き出す。再び氷の雨が俺の目の前に現れた。だが、槍を回転させるように投げて氷の塊を砕いて行った。俺が通る道だけでよかったのだが、砕いた氷が他の氷にぶつかって全ての氷が木っ端微塵となった。槍は先輩のすぐ横を通過する。かすりそうなほどの距離で先輩はゆっくりと通過した槍を見ていた。

「Ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ　ｉｓ　ａ　ｓｗｏｒｄ　ｏｆ　ｈｏｐｅ　ｔｈａｔ　ｔｅａｒｓ　ｕｐ　ｔｈｅ　ｄａｒｋ」

今度は俺の右手に小さな羽の生えたナイフが出現する。勢いを殺さずに先輩の腹部を切ろうとナイフを横に振った。さすがボクシングをしていただけのことがある、とっさの判断で肘でナイフを持っているほうの俺の手の甲を叩き、ナイフを手から落とした。そしてそのまま、メリケンサックを装備している手で俺の顔を狙う。

「Ｅｓｃｕｔｃｈｅｏｎ　ｏｆ　ｉｍｐｒｅｇｎａｂｌｅ　ｄｅｆｅｎｓｅｓ　ｗｈｅｒｅ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ｉｓ　ｄｅｆｅｎｄｅｄ！」

早口で詠唱を済ませると俺の目の前に大きな盾が現れる。左半分が黒で、右半分が白。そして中央に二本の剣でバツ印を作ってあるマークがある。大きさは大体俺の身長より少し小さいぐらいだから１６０センチメールほどだ。見事に先輩の拳は盾にあたり、金属音が響く。

すぐさま離れて次の詠唱を行う。

「Ｔｈｅ　ａｘ　ｂｙ　ｗｈｉｃｈ　ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ　ａｎｄ　ｐｅａｃｅ　ａｒｅ　ｒｅｑｕｅｓｔｅｄ　ｂｅｃｏｍｅｓ　ｔｈｅ　ｌａｃｑｕｅｒ　ｂｌａｃｋ　ｔｈａｔ　ｅａｔｓ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ」

今度の詠唱は長い。だが、この武器は魔術の中で一、二を争う武器。詠唱が終わると俺の両手に真っ黒な斧が現れる。大きさもおれの身長と同じぐらいで巨大なものだ。そしてその斧を先輩に向って投げつけた。

「ひっ！」

必死に避けようとしゃがみこもうとしたのは良いが、その場にうつぶせになってこけてしまった。これでチェックメイト。

「Ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ　ａｎｄ　ｓｗｏｒｄ　ｔｈａｔ　ｒｕｌｅｓ　ｈｅｒｏ．　Ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ，ｉｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｓｗｏｒｄ」

うつ伏せになっておいた先輩の頭の横に巨大な大剣を突き刺す。赤と黒のデザインの大剣は力強さがイメージできる。先輩はその剣を見て震えていた。あれほど馬鹿にしておいて今更震えるなんて俺は少々イラっときた。だが俺の目的は勝つこと。先輩を殺す事じゃない。だから、これ以上のことは何もしない。

「先輩、チェックメイトです。まだやるなら俺は構いませんが？」

「いいや！　俺の負けだ！　だから頼む！　見逃してくれ！」

この瞬間、勝負がついた。観客は興奮のあまり立ちあがって歓声をあげる。俺は少々照れ臭くなりながらもラウのほうを向いた。目と目が向き合った時に口パクでこう言った。「約束、俺は破らないだろ？」と。するとどうやら伝わったようで「はい」とにっこりと微笑みながらラウは答えた。周りの音で本当はなんていったか分からないが、そう答えたはずだ。

そして、この日から俺の日常は砕け散る。

最下位である男子生徒は実は最強で魔術師という珍しい者。

俺を狙うのはこの先輩で終わる事はなかった。

どうでも――よくないか……

The first Gramary of the truth（真実の魔術）

第一部はここまでです。
姫君と俺の錯乱日々が完結してから、この小説は連載復帰となります。
受験勉強に入って行きますので、今からはまったく顔を出す事が出来ませんが、帰ってくるので、応援宜しくお願いします。

魔術詠唱の訳

The sword is a sword of hope that tears up the dark

「短剣は暗闇を滅ぼす希望の短剣」

Escutcheon of impregnable defenses where everything is defended

「すべてを防ぐ鉄壁の盾」

The ax by which destruction and peace are requested becomes the lacquer black that eats everything

「破壊と平和のためにすべてを破壊する斧」

The sword and sword that rules

hero. Therefore, it is the strongest sword

「英雄を統治する剣と剣。　したがって、それは最も最強な剣。」

The second Twin satan（双子の悪魔）（前書き）

時間が空いたので、一話だけ更新します。
姫君と俺の錯乱日々も更新できたらします。

The second Twin satan（双子の悪魔）

とりあえず、今学園内で話題となっている事を一つずつあげてみようか。まずは学校行事。一学期にあるのは、まずは魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りがある。一応、高等部は参加自由と言う事だったのでとりあえず俺等のクラスは参加する事にした。高等部は全部で八クラスの参加となる。開催されるのは一週間後。

そして次に体育祭だ。一学期の中で一番大きいイベント。学園の体育祭はハードである。体力、知識、そして魔術をフル活用して行われる体育祭はある意味魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りより魔術の使用量が多いかもしれない。

そして三つ目は高等部一位の轟坂小梨（とどろきざかこなし）先輩のことだ。彼女を初めとする生徒会執行部は今現在四人。六位――狩亜純樹（かりあじゅんき）先輩が会計。四位――古東宝香（ことうほうか）さんが書記。二位――雲神春之美（くもがみはるのみ）先輩が副会長。そして一位――轟坂小梨（とどろきざかこなし）先輩が生徒会長。これが学園内のトップに立つ人間だ。そして今度、この生徒会と魔術決闘（マジックバトル）をするイベントがある。これは自分たちの能力を測るためのことで勝ち負けは関係ない。ただし、生徒会執行部の誰かに勝てた場合は何かしらのご褒美がもらえるという噂。

最後に四つ目の話題。これは新聞部、ともに放送部が学園内に一気に広め、そして何より話題性が高い話。一人の男子生徒が十位の男子生徒に打ち勝つと言うもの。ランキング戦に関係はないが魔術決闘（マジックバトル）の話題が新聞部や放送部が取り上げるのは珍しかった。だが、取り上げなければならない理由がある。そう、勝った男子生徒、俺こと来城月下（らいじょうげっか）のランキングは最下位。そして勝った相手は十位。約１４６０位差があるはずだった。だが俺は特殊な力、不完全な魔術（マジックディフィシャンシ）で

もなければ完全な魔術（マジック・エンタイアティ）でもない力。そして新聞部の誰かが俺の力をこう呼んだらしい。

真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）

俺の力が真実の魔術。そして本物の魔術。装置を使わずに己のエネルギーで発動させる奇跡。それが俺の魔術。だから俺は魔法使いじゃない。魔法は魔術（マジック）。魔術は魔術（グレメリー）。『魔術師』としての力だった。

⇔

「ああ、神様。俺は日頃から勉強や魔術に対して向上心を向けることはありませんでした。ですが、これからは一生懸命取り組みます。だから、だから神様。いいや、神様、仏様、おしゃか様、ご先祖様。この状況をどうにかしてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

ええ、皆さんこんにちわ。来城月下です。すいません、初めから大きな声を出して。まあ誰だって後ろから物凄い数の生徒がデジカメやビデオ、マイクとかもって走ってきたら怖いよな？　うん、それが今の現状だ。後ろにいるか方々は放送部と新聞部。三日前の騒動の張本人である俺にインタビューでもしたいのだろう。普通は受け答える。だが今回は断る！　俺の魔術は見世物じゃない。それ故に人にはあまり見せてはいけないのが魔術の基本の考えだ。

だが、俺の義妹の霧雨羅羽（きりさめらう）が開発したある一定の条件を満たした人物が使える完全な魔術（マジック・エンタイアティ）と、誰でも使えるが完全な魔術（マジック・エンタイアティ）より十分の一ほどしかない不完全な魔術（マジックディフィシャンシ）はこの世界に溢れきっている。家では誰もが装置を使い、魔術を使う。そしてその魔術を社会的に使えるようにと設立されたのが数少ない魔術学校の一つ、清流学園（せいりゅうがくえん）である。

このように基礎的な考えは見事に打ち砕かれて、魔術は一般化していた。

それはさておき、数日前の戦いで怪我を負い、先生の治療魔術でどうにか生きている俺。そんなことは今はどうでもいい。結局俺はこの状況をラン・アンド・ランという無限ループからは抜け出せていない。昼休み、俺は何時ものように廊下を歩いていた。歩いていただけだった。よし、ちょっと回想をしてみよう。

何時ものようにラウの作った弁当を食べて、トイレに行こうと廊下を歩いていた。教室から一メートル離れた。まだ何も変化はおきない。教室から三メートル離れた。うし、気配も何も感じない。まだ大丈夫だった。教室から三メートル一センチ。

『来城ぉぉぉぉおおおおおお！！　取材を受けろぉぉぉぉおおおおお！！』

「何故に！？」

たった一センチ歩いただけで後ろから突然現れた放送部と新聞部。こいつら、もして神出鬼没？　はたまたどっからかワープしてきたのか？　というぐわいに現れた二十人ほどの男子と女子。うん、目が逝ってるね。逃げた俺はヘタレじゃないよね？　普通に怖かったんだから逃げただけだよね？　え？　それがヘタレって？　うん、

俺もそう思う。

「来城とまれ！　俺等はただ取材をするだけだ！」
「黙れ！　このメディアオタクども！　お前等のせいで話が大きくなっただろうが！！」
「来城君、それは違うわ！」
「何が違うんだよ！？　言ってみろよ！」
『俺（私）達の妄想のなかの来城（君）さ！』
「かっこよく揃えて言ってみたけど、結局は間違った情報じゃねーか！？」

先日、この放送部と新聞部はたいへん俺が不機嫌になるような事をした。まずは新聞部。俺の魔術は世界を壊して初めから作り直す事の出来る神（ゴッド）だとか、予知能力が彼には備わっていて、世界の終わりがいつなのか知っているなどなど、もう出任せのようなことをいちめんにして新聞を全校生徒に号外で配りやがった。おかげで変なオカルトマニアから五月蝿いぐらいに言い寄られた。

次に放送部。放送部はお昼の放送にとんでもないような事をしでかした。手始めに何時も流れている最初の音楽の曲を、俺が戦った時に叫んだ魔術の詠唱にしていたりとか、放送の内容が俺のプライベート（主に家族である宝香さんをゲストに呼んで、ゲストトーク）をばらしやがった。何故そこまで知ってるの？　というようなことまでばっちり全校生徒には知られてしまっている。

と、言うわけで俺はこの二つの部から逃げている。な？　ろくな事がないだろ？　いままでもいい事はほとんどなかったが、今回は何時もの不幸より性質が悪いらしい。廊下をはしるな！　と書いてあるポスターは今の俺達にとってはただの紙切れ。いつも紙切れだけど。

「こうなったら！」

俺は曲がり角を右に曲がり、すぐさま「環境倉庫室」という場所に入った。ここは普段は使われないが学園の大掃除の時に使われる掃除道具が保管されている。すぐさまドアの近くでしゃがみこみ、かぎをかける。ドタドタとやってきた放送部と新聞部の会話が聞こえてくる。

「くそ、来城のやろうを見失った」

「えー、私たち必死になったのに。まあ、いいや。私たちは次の新聞で使えそうな走っている来城君の写真がとれたし」

「俺等はまた古東さんにゲストにきてもらうか。何気にあの人のトークは人気があったしな」

なんて会話をしながら立ち去っていくことを足音で確認した。今度新聞部に潜入して写真を回収。その後に宝香さんは俺の弁当で釣って放送を阻止するか。

なんてことを考えて立ち上がろうとした瞬間に後ろから気配を感じた。

「っな！」

「おっと、逃げないでよね。あたしたち、ずっと君がくるの待ってたんだから」

「そうです、こんな場所にいて肩がこっちゃた」

俺の耳元から聞こえる同じ声。いや、少しトーンの高さが違うような……。まあそれは良しとしておこう。俺が言いたいのは、何故俺は後ろにいる二人の人物から抱きしめられているかが分からない。

後ろから感じる軟らかい感触と声からして二人は女子生徒だろう。
え？　見分け方が変態っぽいって？　仕方ないだろ、あたってんだから。

「えっと……」
「ああ、いいよいいよ。言いたいことは分かっているから」
「私達が誰だか知りたいんでしょ？」

そう言って二人は俺の腰に回していた腕を離した。しゃがみこむような体勢だった俺はすぐに立ち上がり後ろを振り向く。そこには見たこともない女子生徒が二人。そして何より双子だった。片方は赤いリボンで地面につきそうな茶髪をツインテールにしている。一方の方は青色のリボンで同じく長い茶髪を右の横の部分だけ結んでいた。

「私が姉の七瀬幹奈（ななせみきな）です。高等部の三年生で放送部の部長。ランキング２５位よ。よろしく」

どうやら青いリボンで片方だけ結んでいるのが姉のようだ。

「あたしが妹の七瀬幹穂（ななせみきほ）ね。新聞部の部長。同じく三年でランキングは姉さんの一個下の２６位よ」

ツインテールの方が妹。姉がおしとやかで妹がやんちゃのようだ。

「……七瀬先輩――」
「なんですか？」「なによ？」
「……」

ま、まぎわらしいなぁー！　双子だとここまで間際らしいか！？

ちなみに俺が呼んだのは姉の幹奈さんのほうだ。彼女は話が通じそうだが、妹の方は一筋縄では行かないようだ。なので俺は姉の方を呼んだつもりだったのだが、どちらも「七瀬」なので面倒臭かった。

「ああ、名前で呼びなよ。姉さんと区別する為にはそれしかないからね」

「私もそれが良いと思います」

「そ、それじゃ幹奈さ――」

「なんであたしじゃないのよ！」

「ぐふっ！？」

殴られた。何故か幹穂先輩に殴られた。一方姉は「あらあら」とか言ってマイペース。自分の妹が暴力振っているんだから姉として止めろよ。それに幹穂さんのパンチは予想以上に痛かった。伊達に２６位ではないということなのか？

「……そんで、幹穂先輩は俺にインタビューやら取材やらしたいんですか？」

「そんなに強調しなくても……ま、そう言うことね。あたしとしてみれば個人的な用事もあったけど」

「個人的な用事」

「そうそう、あたしが知りたいのは貴方の魔術よりもあなた自身を知りたい」

「はぁ、俺自身？」

殴られた頬を擦りながら幹穂先輩を見た。その目は少々釣りあがっており、何かまた不機嫌になるような発言を俺がしたようだ。で、俺は自分でどの言葉で怒らせたのかが分からない。俺の言葉のどこが悪かったんだ。まぁそれは今から幹穂先輩が言うと思うけど。

「あんた、私はあんたのことを知りたいっているのよ？」
「そうですか……で？　怒っている理由は？」
「……」

みるみる幹穂先輩は顔が赤くなりトマトのようだ。俺の警告ランプが点滅を始める。「今逃げないと明日の朝日は拝めない」と。こうなったら逃げるが勝ちだ。すぐさま後ろを向いて走ろうとしたが――

「ちょっとお待ちください」
「おわっ！？」

幹奈先輩に捕まった。左腕を捕まれ、女の子なのにまったく俺はびくとも動かない。この姉妹はもしかして握力とか普通に６０を超えているんじゃないんだろうか？　現に俺の左腕の骨が軋む音が聞こえる。うん、間違いなくあと一分ほどで折れるね。

「って、先輩方！？　俺を殺す気ですか！？」
「うるさい！　あんたは言葉の意味を知らないの！」
「なんのですか！？」
「せっかくロマンチェックに告白したのに……ってあんたは！！」
「最初の方をぶつぶつ言われて聞き取れなかったのに突然キレられてもこまるんですが！」
「幹穂、私がいるのに抜け駆けなんて……仕方ありません。折ります」
「折るって俺の左腕！？　違うと言って！　幹穂先輩の心を折るんですよね！？　そうですよね！？」
「姉さんも相変わらず見かけによらず大胆ね。こうなったらあたしも……捻り折る」
「捻って折るなよ！　それも心ですか！？　それとも俺の残された右腕ですか！？」

「「首」」

「まさかのとどめをさす!?　ちょっとあんた等!　ここで学園密室殺人事件になっちゃうから!　ジャンルが変わっちゃうから!」

なんなんだこの先輩達は……

⇔

「おつかれぇー、ライライ♪」

「おつかれぇー……」

なんとか環境倉庫にあった洗剤であわを作って先輩達を俺の腕からすべらせてドアをぶち抜いて逃げてきた。教室に帰った頃にはすでに授業が始まろうとしていた。ギリギリセーフと言う事で許してくれたが、俺の左腕はギリギリアウトでシャープペンシルが握れなかった。あ、俺ちなみに左利きね。と、言う事で保健室にシップを貰いに行って今帰ってきたところだ。もう授業は終わっていた。

「まさかシップを探すのに五十分フルに使うなんて……」

「災難だったねぇー」

俺の机の前に腕を後ろで組んでいる少女――国塚乃愛（くにづかのあ）が心配そうに……ではなく楽しそうに俺の顔を覗き込んでいた。俺は机にひれ伏すように倒れこみ、もう限界の状況だった。

「大丈夫か、来城？」
「隈井……お前も道連れになればよかったのに」
「さらっとひどいな」

ついでに隈井龍牙（くまいりゅうが）までもが俺の机の周りに集まる。まぁこのメンバーが集まるのは大抵予想通りだ。何時もこうやって集まっているから。

「今日の授業は先生達の会議でもうないみたいだし、帰って休んどけ」
「ああ、そうするよ」

そう答えて右手を上げる。すると隈井は微笑して俺の手を叩いた。これは昔から俺と隈井の暗黙の了解で行われる合図だ。これをした時は「ありがとう」の意味である。心配してくれた隈井に「ありがとう」と伝えておいたのだ。これを使っているのは俺と隈井、そしてラウと隈井の妹である隈井玲虎（くまいれいこ）ちゃんだ。レイコちゃんはラウと仲良くやってくれているようでたまに家に遊びに来る仲である。俺のことを「ツキ兄ぃ」と呼ぶ。「月下（げっか）」のツキの部分でそう呼んでいるんだろう。

「そいや、レイコちゃんってランキング何位だっけ？」
「突然どうした？」
「いや、ふと思っただけ」
「レイコは中学部二位で生徒会副会長。ラウちゃんが生徒会長でランキング一位だろ？　それなりに仲いいもんな、あの二人」

ああ、そうだった。この隈井兄妹は二人そろって成績優秀だった。俺は特にない……ってわけでもないか。ラウが一位で俺は最下位。ただし、真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）という特殊な力の持ち主。この四人はある意味

似ていたのかもしれない。

「疲れているところ悪いんだけどねぇー、ライライ」

「ん？　なんかあったのか？」

「えっと、今度ある魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りね、ノアとクマクマ、そして三人目にライライがうちのクラスの代表だってぇ」

「……」

ほら、俺の日常は崩れた。

The second Twin satan（双子の悪魔）（後書き）

はい、久々顔を出した夜月猫です。
みなさん明けましておめでとうございます。
２０１０年初投稿です。
さて、お前勉強してんの？　みたいな質問は「あっと…まぁまぁ頑張ってます」という中途半端な返事でお願いします。
さて、この小説はストックがかなりあります。
姫君と俺の錯乱日々のストックはありません！
なので今から書くのは無理なので、時々書けたら書いて、投稿できたら投稿します。それでは、みなさん良いお年を。

The second Magic duel festival（魔術決闘祭）

何故か今日も更新できましたぁ

The second Magic duel festival（魔術決闘祭）

四月も終わり今日から五月だ。体育祭に向けての準備もそろそろ始まる頃、俺は今日というどれだけ無くなってほしいと願いつづけただろうか？　その願いは叶う筈はない。一日がまるまる消える現象は魔術でも魔法でない、『世界の終わり』と俺は思う。世界が消えれば一日はなくなる。誰も時間を感じない。感じれない。感じる奴がいない。だから『世界の終わり』。って、こんな事はどうでもいい。

「あー、うん。俺ってここに居るべきじゃないよな？」
「さー？　ライライは一応、ノア達のクラス代表だし」
「そうそう、俺達は代表だからな」

さて、今日は誰もが待ちに待った（俺を除いて）魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りである。今は全校生徒は、先日俺と友枝（ともえだ）先輩が死闘を繰りひろげ、俺の日常が崩れ去る原因となった場所である『中庭』に集まっていた。全ての生徒は中庭の観客席に座って中央にいる学園長の話しを聞いていた。まじめに聞く人、適当に聞く人、様々である。俺は現実逃避をする為、隣にいる国塚乃愛（くにづかのあ）と隈井龍牙（くまいりゅうが）に話し続けていた。だが、先ほどから返ってくる言葉は「諦めろ」の一言。そのたびに口から漏れる溜息。これで何回目だ？

「にしても学園長の話し長いよな」
「ライライは文句ばかりだね」
「まぁ来城（らいじょう）が言いたい事もわかるぜ。学園長の隣に立っている生徒会の先輩達は足が疲れないのか？」
「知るか」

生徒会の四人。この大会で超えるべき壁。轟坂小梨先輩、狩亜純樹先輩、古東宝香さん、雲神春之美先輩達だ。四人中、三人が女子生徒、唯一の男子生徒、狩亜先輩は無表情のまま立っている。他の三人もほとんど無表情だ。俺はこの四人とは戦いたくない。理由？それは――まあ後々分かる。

「それでは、今から魔術決闘祭りを開催します」

やっと終わった。俺と国塚、隈井は立ち上がって選手控え室に向った。

⇔

すでに控え室には俺達以外の選手が集まっていた。中等部の方は全クラス出場なので昨日のうちに済ませてしまった。優勝はもちろん俺の義妹、霧雨羅羽のクラスが優勝した。だが、それはあたりまえのようなものだった。ラウのクラス代表はまずラウ、そして隈井の妹の隈井玲虎ちゃんだ。そして三人目はクラトイト・ホクトームというイギリスからの女子中学生。この三人はランキング一位、二位、三位と並んでいる。これじゃ勝てるわけがない。でも、ラウはとても楽しそうに戦っていた。魔術を作った少女はこういう『楽しさ』の為に魔術を作ったのかもしれない。だが、戦争や人殺しに使われ、一度は涙を流した。それでもこうやって笑えるラウは強いと俺は思った。

話は戻るがこの場所にいるのは２４人。俺等が部屋に入った瞬間に室内の空気が大きく変わった。目線は俺に注がれる。先日、俺はあんな魔術を見せたんだ。最下位だが、要注意人物として扱われるだろう。一人一人の目線が冷たい。

ここでトーナメントの説明をしておく。この選手控え室で選手は待つことになる。まずはＡブロックから初め、次にＢブロックをはじめる。今年は八クラスなのでＡブロックに四クラス、Ｂブロックに四クラスと偶数で割る事が出来る。対戦状況はこの部屋にある大型テレビでリアルタイムで見ることが出来る。シンプルな勝ち抜き戦、負けたら終わり。シンプルイズベストだな。

そして俺達は２－Ｄクラス。一年生は全部で六クラスで、二年生は八クラス、三年生は七クラスと流石学園と言うべきか、普通の高校よりもクラスが多い。

そしてトーナメント表はこちら。

Ａブロック

１－ＢＶＳ３－Ｃ

３－ＦＶＳ２－Ｄ

俺達は初戦は三年生らしい。ま、ランキング上、国塚と隈井がいるから問題は無いと思う。大丈夫だと思いたい。だが、ところがどっこい。勝ったとしても次、あがってくるであろう３－Ｃは困った事に生徒会の雲神春之美（くもがみはるのみ）先輩のいるクラス。ランキング二位。とりあえず別の二人はそこまでランキングは上じゃないだろう。その二人を倒せばいい。

Bブロック

2－EVS1－F

3－AVS3－G

こちらはもう戦場と化すだろう。俺の予想だと3－Aが決勝まで勝ちあがってくると思う。理由は簡単。チーム構成が轟坂小梨（とどろきざかこなし）先輩、狩亜純樹（かりあじゅんき）先輩、古東宝香（ことうほうか）さん――と、生徒会最強メンバーである。優勝候補のチームであるからには間違いはない。いえることはただ一つ。怪我をしない程度に頑張ればどうにかなると思います！

「それでは第一回戦を始めますね。まずはAブロックの1－BVS3－Cの試合をはじめようと思います。選手の方は入場してください」

放送が流れた。呼ばれた一年生と3年生は控え室から姿を消した。そして俺達の緊張は現れた。どうしようもないぐらい――楽しい。面倒臭いとか思っていて、日常が崩れたなんて思っていたけど、人前で戦うという事がこんなにも楽しいとは思わなかった。まだ、戦っていないけどな。

「ライライ、最初誰が行く？」

「ああ、順番か。まあ別に何でも良いんじゃないか？」

「なら、ノアが最初で次はクマクマ。最後にライライの順番でいい？」

「何でだ？」

「俺が思うに国塚はお前をまだ最終兵器としてまだ対戦相手に観察させたくないんだよ。ほら、この間のは突然お前が強くなっただろ

？　だれもお前のことなんか研究してない」
「だからノアはライライには最後に出てほしいの」
要するに俺は楽ができるってことだな？
「よし、その話乗った」
「決まりだな。だけど俺か国塚のどちらかが負けたら来城は勝たなきゃいけないけど」
「大丈夫。ライライは勝つから。なんたって八つの理（エイトルール）を破ってるすごい魔術師なんだから♪」
「ま、確かにな」
国塚の言葉に納得する隈井を横目で見ていた。さきほど国塚が言っていた八つの理（エイトルール）とは魔術の基礎となる魔術エネルギーの五つの種類のことだ。八つの力が全て交わり、初めて魔術エネルギーとなるのだ。
火、風、水、土、氷、雷、光、闇の八つの力。例えば、先日に戦ったとも枝先輩は氷の力が強かったので氷の魔術を主に使ってきた。分かりやすく言うとグラフだ。１００の力があるとする。これを八つに分けなければならない。その時に一番数が多いのが自分の得意な魔術となる。たまに完璧な人間がいる。これは先ほどの例えで言うと８００の力があるとする。すると八つ全ての力に１００ずつ、力が振り分けられる。これが完璧な人間。八つの力を全て使いこなせる人間。ちなみに例えにした１００や８００と言う数字は魔術エネルギーの強化、つまり筋トレのようなものをして自ら上げるしかない。その数値が高ければ高いほど強力な魔術が発動できる。
そして俺の魔術の場合は、どの力にも属していない。そもそも武器などを具現化させるほうが珍しいぐらいだ。俺以外にも武器やその

他のものを具現化させることができる奴はいる。それは完全な魔術（マジック・エンタイアティ）より数は少ない。出来るのは世界でも今のところ千人程度。世界で千人……俺が知っている限りでこの学園には四人。ははは、世界ってこんなにも狭いものか？

「３－Ｃの勝利です。流石３年生。Ｃ組みは雲神さんは出ることなく終了。やはり、一年生には厳しすぎましたね」

なんて解説の先生の声が聞こえてくる。どうやら俺の予想通り雲神先輩の居るクラスが勝ったようだ。だが、放送を聞く限りでは雲神先輩は戦闘を行っていない。と、言う事は他の二人がやったという事か。ボーットしていたので戦いを見ていなかった。と、言うよりもテレビの画面辞退をあまり意識していなかった。今ごろだがテレビに映る雲神先輩の顔を見る。特徴的な高い背、スタイルが良く出ているところは出ていて引っ込むところは引っ込んでいる。右目が隠れている前髪。セミロングで茶髪だ。美人だ。可愛い国塚と美人の雲神先輩どっちが人気だろうか？　ま、結局は生徒会長の轟坂先輩がだんとつで一位になるだろが。

「それでは次に３－ＦＶＳ２－Ｄの試合を始めます。選手の方は入場してください」

どうやら俺等の番が来たようだ。気合を入れるために軽く頬を二回ほど叩いた。よし、大丈夫だ。あの時のようにやればいい。あの時のように戦えば良いんだ。目線をテレビからドアに移し変える。心臓が小刻みに震えていた。緊張する体。はあ、俺は結局ヘタレのようだ。どうでもいいけど。

「それじゃ来城。行くか」
「行こう、ライライ」

「ああ、分かった」

この後俺たち三人は中庭に入るまで何もしゃべらなかった。

⇔

「それでは第二試合を始めます。まずは選手紹介。まず３－Ｆから選手紹介です。まず初めにランキング十位、友枝浅木（ともえだあさぎ）さんです」

誰かと思えばあの先輩だった。向こうも俺の顔を見た後に顔色が青くなる。

「続きまして七瀬幹奈（ななせみきな）さん。ランキング２５位です。続きまして双子の妹の七瀬幹穂（ななせみきほ）さん。ランキングは２６位」

あー、うん。これは不幸と呼べるだろう。よりにもよって新聞部と放送部の最悪姉妹が対戦相手。あちらの二人はのんきに手を振ったり、ニヤニヤしている。あ、手を振っているのは幹奈先輩で変に笑っているのは幹穂先輩だ。

「次は２－Ｄの選手紹介です。最初にランキング三位、隈井龍牙（くまいりゅうが）さんです。完全な魔術（マジックエンタイアティ）の使い手です！　ランキング五位の国塚乃愛（くにづかのあ）さん。同じく完全な魔術（マジックエンタイアティ）の使い手ですね。最後にランキング最下位。ですが、不思議な魔術である真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）を使う、来城月下（らいじょうげっか）さんです」

中庭は拍手と歓喜でいっぱいいっぱいになる。あの時もそうだった。友枝先輩と戦った時もこの空間は人々がすべて一体化していた。すべてのものと同化して、そして交わる。重なるのは心と身体だった。

「それでは初戦です。選手の方は一名、前へ出てください」

国塚が「はーい」と手を上げて前へとことこと歩いていく。アイドル的存在の彼女に掛けられる応援はすさまじいものだった。ファンクラブまである彼女。うん、親衛隊とか俺と隈井に襲ってきたからね。返り討ちにしたけど。

「あ、貴方ですか。無様にライライに負けた先輩」

「誰が無様だ!?」

おまえだよ、と言う隈井と俺の発言でとも枝先輩は意気消沈。精神的ダメージは与える事が出来たようだ。うん、これはチームプレイだ。誰も「死ねロリコン」や、「このド変態が」とか思っていない。心でなんか言っていない。口に出しているから。

「それじゃ、はじめようかな」

「くそ、俺のことを馬鹿にしやがって」

そう言って先輩はメリケンサックがたの装置を指にはめる。国塚は白い扇子を取り出した。これが国塚の装置。確か名前を付けてたな……えっと、確か――

「いくよ！　うっちー！」

そう、うっちーだった。扇子なのに「うちわ」といいはる国塚。まあ名前なんてどうでも良いんだけどよ、こいつのネーミングセンス

のなさには困ったものだ。国塚の持っている扇子は白が主な色で、開いていくと鮮やかな赤色の桜の花びらが散るようにが描かれている。このことからこの扇子は俺達の間で『死桜(しざくら)の扇子(せんす)』と呼ばれている代物。

「試合はじめ！」

放送が聞こえた瞬間に二人は動いた。国塚は扇子を広げる。そこに描かれている血塗られた桜の花びら。そして笑う国塚。うん、女って怖いな。どうでもいいけど。

「「魔術、開放(オープン)！」」

魔術エネルギーが開放される。二人の周りには説明不可能な不思議な力が体中を覆っている。開放された力はそのままゆっくりと二人の装置へと吸い込まれていく。

「最初から飛ばすぞ！　氷の雨(フリーズ・リニー)！」

前へ突き出された拳からは氷のつぶてが大量に発射される。その破壊力は大の大人でも当たったらただでは済まないだろう。だが、この戦いは魔術ならなんでもしてもよいというルールがある。怪我をしても自己責任で終わってしまう。だから大抵の人は怪我をしない程度に攻撃をするのだが、この先輩は手加減という言葉を知らないらしい。

「ふ、ふ、ふ♪　ノアにそんなのは効かないよ！」

扇子で口元を隠してにっこりと笑う。そして彼女の周りには螺旋を描くように魔術エネルギーとは別の力が彼女を守っていた。案の定、

氷の粒は国塚に当たる前にこなごなに砕けてしまった。国塚から約二メートル離れた場所で氷は砕けた。友枝先輩は信じられないような目で国塚を見る。

「ノアの魔術は風なんだよ。この風は絶対防御で絶対攻撃。分かるかな？　この魔術を食い止められるのは生徒会の先輩達とクマクマ、そしてライライの七人。まあ、ノアはこれ以上ランキングを上げるつもりはないんだけどね」

国塚は扇子を構え、友枝先輩と向き合った。

「風よ、舞え。踊る風神（ダンシングウィンディー）」

カマイタチ。この表現がぴったりだった。風は鎌のように先輩の制服を切り刻んだ。鎌のような肉眼でも確認できる風。黄緑色のような、透明のような風。色のない風は国塚の魔力によって色付けされる。そして何故か赤色の桜の花びらも一緒に舞い散る。これも国塚の魔術エネルギーの固まりか何かだろう。

上手い事身体を傷付けないようにしているようだ。先輩はよっぽど怖かったのかそのまま倒れて気絶してしまった。無数のナイフが飛んで来る恐怖に近かっただろう。あるいはそれ以上。気絶しても仕方がない。

国塚の魔術は「風」に特化している。それも尋常じゃないほどに。例えで使った数字。８００あったとすると国塚の魔力配分は「風」に７００、残りの１００で残った七つの力に配分される。彼女のとりえはもう「風」しかないのだ。

「第一勝負、２－Ｄの国塚乃愛の勝利です！」

「いぇーい♪」

ぴょンぴょンはねながら客席にピースを送る。そんな可愛らしい彼女の後ろで俺と隈井は同じような事を思っていた。

「「……女は怖い」」

さて、俺の日常はこれからどう崩れる？

The second Magic duel festival（魔術決闘祭）

ということで、昨日に続いて更新できそうなのでストックのある霧雨ラウの兄魔術公式を更新しようと思います。姫君と俺の錯乱日々はストックがないのでなかなか更新できないかと……

いっそのこと兄魔術の方はほとんど更新しようか……

ああ、もうその辺りは読者の皆様に任せます！！

今日中に書き込んでもらえば、明日の朝にちゃちゃっとしてしまおうかと思います。

それでは宜しくお願いします！

The second Duel start（決闘始め）（前書き）

あと二話だけ更新。

The second Duel start（決闘始め）

なんなくと友枝（ともえだ）先輩を打ち倒した国塚（くにづか）は満面の笑みでこちらにピースをする。俺と隈井（くまい）も同じようにピースで返事を返した。しかし、笑顔は引きつっている。国塚は風の魔術を使い、見事に先輩に勝った。だがそれは当たり前の事だと俺は居ていいと思う。ランキング五位と十位では差が一目瞭然だ。完全な魔術（マジック）と不完全な魔術（エンタイアティマジックディフィシャンシ）と比べればその威力は十倍。それに国塚の力も加わるからたぶん十五倍以上。こりゃ楽勝だったな。

「ははは！　ノアは最強なのだぁー♪」

「おい、隈井。さっさとあれを連れ戻して来い。見ているこっちが恥ずかしい」

「来城がいけ。俺はいきたくない」

「お前……あんな小学生みたいな体型をしている高校生が小学生みたいにはしゃいでいて恥ずかしくないのか？」

「恥ずかしいから保護者のお前が連れてこいよ」

「……分かったよ、分かった。行けばいいんだろ、行けば」

愚痴をはきながら俺は国塚がはしゃいでいる中庭の中央へ向う。手を握ってほとんど引き摺るような状態で連れ戻した。その間にも客席にサービスを忘れないようにと手を振ったり、ウィンクをしたり、やりたい放題である。連れ戻す俺の身にもなってくれよ。もちろん国塚には届いていないし、伝わっていない。……どうでもいいか。

「さて、国塚が頑張ったんで次は俺か」

「頑張れよ隈井。俺も先輩とだけはしたくはない。しいて言うなら楽がしたい」

「おおよ、お前の願いは隈井龍牙（くまいりゅうが）が叶えてやるよ」

そう言って、隈井は歩き出す。ランキング三位が負けるはずがないと俺は思った。二年生の中で一番ランキングが高いこいつ。こいつが三位の理由は今の六位である生徒会の狩亜純樹（かりあじゅんき）先輩を倒したからである。だから問題はない。あの生徒会を倒した男だ。俺は――そう思っていた。

「さて次は第二試合、ランキング２５位の七瀬幹奈（ななせみきな）さんです。放送部部長で学級委員をしています。次は隈井龍牙さん。ランキング三位で完全な魔術（マジック・エンタイアティ）使い。この戦いは見ものですね」

二人が中央へでる。出てきたのは姉の幹奈先輩だった。いつも通り上品に頭を下げて「よろしくお願いします」といっている。隈井のほうも「よろしくお願いします」と頭を下げた。この二人の戦いは確かに見ものだがランキングの差がありすぎる。隈井の方が有利じゃないのか？

「そんじゃ先輩。俺が勝ってもランキングの所為にしないで下さいよ」

「あら、私はそこまで意地っ張りではありません」

「そうですか、なら良かった」

そう言って隈井は制服の袖からトンファーを取り出す。銀と黒に輝くトンファー。これが隈井の装置。魔術を出す為の道具。一方の先輩はポケットからマイクを取り出す。あれが先輩の装置なのか？

「試合はじめ！」

「「魔術、開放（オープン）」」

二人の体から何時ものように説明不可能なエネルギーがあふれ出る。

そのまま二人の体に吸い込まれる。

「悪いですけど先輩、一撃で終わらせます！」

トンファーをくるくると回転させて棒の部分を先輩に向ける。拳銃のような構えになり、接近戦の武器から見た目だけが遠距離の武器へとはや代わり。といってもこれは本当にトンファーとしても銃としても使えるんだけどな。

「水の災い（フラード）」

トンファーの先端部分に魔術エネルギーが溜められる。そしてそれが形を作っていく。小さな水の球体が出来上がったと思うと、それはどんどんどん大きくなっていく。先輩はその間「まあ」とのんきに感心していた。水の球体は直径三メートルほどの巨大なものとなった。観客からも声がもれる。驚きの声。俺は見慣れた。この水の塊でコンクリートの塊を十メートルも吹っ飛ばせるのを知っていた。ま、それは水の塊のおおきさが八メートルになった時の話だけど。

「発射（ショット）！」

掛け声とともに、水の固まりは先輩目掛けて一直線。隈井も滑り止めなどがなく、自分の体を抑えるものがないのでそのまま後ろへすべりながら吹っ飛んだ。倒れないようにと足でふんばっている。地面を削りながら衝撃を抑える。そして先輩は――

「まぁ、大きいですね」

といって笑っていた。笑う。笑う余裕なんてどこにもないのに。丁度隈井がブレーキをかけ終わり、構えを止めた瞬間に先輩は目を瞑

ってマイクに向って呟いた。

「そうですね、火の玉なんて降って来たらどうでしょう？」

火の玉が振ってきた。一直線に。

「あ……えっと……」

隈井の目が点になる。俺も声が出ない。火の玉が飛んできた？　どこから？　それは空から。なんで先輩が言ったとおりに火の玉がこちらに飛んできた？　それは――先輩の魔術だから？

火の玉はそのまま隈井の放った水の塊にぶつかり、お互いを消滅させた。炎にあたった水は水蒸気となって辺りを白く曇らせた。そして先輩は何事もなかったようにその場に立っている。だが、隈井は何事かと思い立っている。それは自分の魔術がいとも簡単に粉砕された為。２５位が三位の魔術を防いだ為。

「ふふふ、２６位と思って甘く見ない方が良いですよ。三年生を甘く見ない方が――の方が正しいですね。私だけじゃなくて本当は他の三年生も強いんですよ、三位の貴方よりも」

「……と言う事は俺は狩亜純樹（かりあじゅんき）先輩に手を抜かれていたと？」

隈井は恐る恐る聞いた。それに先輩は当然です、といわんばかりに首を大きく振った。隈井の表情はいっそう険しくなる。俺だって信じられなかった。狩亜先輩が手を抜いて、隈井を勝たせるなんて。

「まあ、二年生にしたら貴方は一番か二番目に強いでしょう。ですが私や幹穂（みきほ）には勝てません。三年生はそこまで弱くありませんよ。ただ単に今年は受験があるのであまり魔術決闘（マジックバトル）をしないだけです。

といってもそこの友枝君は十位ですけど本当の実力は三十位ほどです。ですからランキングというのはあまりあてにならなんですよ」

先輩はマイクに向って再び声を出した。

「次はそうですね。岩が降って来るとか」

そう言うと空から流星の如く、幾つもの岩が隈井目掛けて降って来る。その大きさは小さい小石のようなものから一メートルはあろう大きなものまでいろいろな大きさのものが降って来た。隈井は舌打ちをして駆け出す。地面に次々と岩が刺さり、えぐる。隈井は転んだり、飛んだりして岩をよける。

「あら、流石三位ですね。結構しぶとい」

「はぁ……はぁ……先輩」

「なんですか？」

「貴方は魔術決闘（マジックバトル）をしたら実際は何位までいけるんですか？」

隈井の質問。それもそうだ。幹奈先輩の使う魔術、はっきり言うと友枝先輩なんて目ではない。なのにランキング２５位。質問したくなるのはわかる。でも俺はそれを聞いたところでどうするんだ？と隈井に問い掛けたかった。意味がないだろ、と言いたかった。

「私よ幹穂（みきほ）はほとんど力が同じですからね。そうですね、ま、生徒会の四人が一位、二位、三位、四位と順番に並べたとして私の実際の実力は――六位から七位。放送部のこともあるのであまりバトルは出来ませんがね」

「……そうですか。なら、ほかに聞きたいことも」

「はい、どうぞ」

「先輩の魔術は土ですか？　それとも火ですか？　それともどっち

もですか？」

先輩の使う魔術、火の玉や岩の塊。これらから見ると属性は土と火になる。隈井の場合は見てのとおり水に特化している。先輩の魔術は一つだけに特化しているわけではなく二つに特化しているのではないかと隈井は考えたようだ。

「うーん、答え様にはそれは二つともハズレですね」

「ハズレ？」

「はい、私の魔術は八つの理（エイトルール）に属してませんから」

「なるほど。来城と同じですか」

「はい。私の魔術は音声再生（リアルリピート）。私の言った言葉をリピートして現実にする。ま、それは結構限られていますが。だから『槍が降って来る』といったら槍がふってきま――」

「分かりました！　槍が俺に向って振ってきてるから！　分かりましたから！」

「あら、すいません。本当は『地面からナイフが隈井君目掛けて飛んでくる』っていうのがよかった――」

「のわぁ！　先輩！　マジで！　マジで信じますから、それ以上何も――ってかすった！　制服破れましたよ！」

「あら、すいません」

なんなんだ、このコントは……。

「はぁ……はぁ……俺に何か恨みでもありますか？」

「特にありません。ですが、私は勝たないといけないので」

「はぁ……はぁ……先輩、悪いですけど、はぁ…俺は……勝たせてもらい」

「隈井君の頭上から巨大なタライが――」

「当たるかぁ！！」

「振ってこずに横から飛んできた」
「ぐぼっ！？」
隈井が先読みして避けようと右に飛んだのはよかったのだが、先輩の方が言って先読みをしていた。避けた右側からタライが飛んできた。よって自らタライに当たるような形になって隈井の頭にジャストミート。ゴーン！　と大きな音が響く。
「あ……りで…すか……」
「ありです」
ばたりと倒れこむ隈井。この時点で隈井は負けたようなものだ。隈井は自分でもそれが分かっていたようで手をアナウンス席に向けて振る。これはもう、戦えませんと言う意思表示だ。先輩は「有難うございました」と笑って隈井を見詰めた。
「大丈夫です。貴方は三位であるべき人です。私に負けた事を恥じるべきではありません。これをばねにもっと強くなればいいのですから」
「……顔を洗って出直して来いってことですか？」
地面にうつぶせになって倒れる隈井が質問をする。
「ええ、ちゃんと貴方が強くなったら私が貴方の相手をします。国塚さんよりはあなたの方が強いです。あの水の攻撃も本気ではなかったのでしょ？　不完全な魔術（マジック）は完全な魔術（マジック・エンタイアティ）よりも弱いですが八つ（ナイト）の理（ルール）から離れているのならそれは例外です。魔術エネルギー（マジックディフィシャンシ）は関係ありませんから」
「……俺は強くなれますかね？」
「なれますよ。ちゃんと高みを目指せば」

そう言って「失礼します」ともう一度お辞儀をしてその場を後にした。隈井も立ち上がりこちらに歩み寄ってくる。さてと、俺はここでどう言う対応をしてやればいいか？

「なぁ来城」

「って、意外とここまでくるの早っ！」

「何を言っているのか知らないけど、俺負けちまったな」

「ああ、負けたな」

「……慰めの言葉とかないのか」

「ないね、おまえを慰めたら調子乗って訳の分からんお願いされても困る」

「だな。ま、いいや。俺は修行して頑張るから、とりあえず俺の分まで勝ってきてくれ」

「はいよ、まぁ面倒くさいけど」

溜息をつく。ま、隈井はさほど落ち込んでいるようすはない。これから先の試合には負傷はないだろう。国塚も「クマクマ、次だよ、次！」と慰めている様子。これなら問題はないな。問題はあるのは俺の試合。先ほどの戦いを見て七瀬姉妹には気をつけないと、と思った。俺が勝った友枝先輩以上の実力の持ち主。うん、困った。

「それでは第三試合。選手の方は前へどうぞ」

俺は息を整える為、目を瞑って深呼吸。おちつけ、まずはやる事だけするんだ。ラウも見ているだろうが問題ない。気にするな。ラウのことを意識するな。あいつがいるから緊張するなんて俺がみとめねーぞ、おい。って、これじゃ俺がただのシスコンじゃねーかよ。

「がんばってください！　兄さん！！」

ありゃ？うん。物凄く近くでわが義妹の声が聞こえる。声をする方を向くと大きく手を振る霧雨羅羽（きりさめらう）と隈井の妹である隈井玲虎（くまいれいこ）ちゃん、そして中等部第三位の実力を持つクラトイト・ホクトームという外国の少女が隣にいた。ラウは相変わらず銀色の綺麗な髪をなびかせ、レイコちゃんも青みのかかったセミロングと一緒に手を大きく振る。クラトイト・ホクトームちゃんは俺の顔を見るとぺこりと頭を下げる。金髪が四つの縦ロールわかれて、青色の目をしている。

さて、俺は緊張せずに戦えるか？

「ツキ兄ぃー！　ファイトー！」
「兄さんがんばれー！」

恥ずかしいから止めてくれ、ともいえずに苦笑いして小さくてを振る。ああ、もう俺の右隣から物凄く黒いオーラを放つ幹穂先輩の方に顔を向けるのがここまで恐ろしいとは思いもしなかった。とりあえず……頑張ろう。うん、どうでもいいな。

「さて、第三試合の選手を紹介します。初めに先ほど戦った幹奈さんの妹、七瀬幹穂（ななせみきほ）さんです。新聞部の部長です。続きまして近頃噂がすごい少年。来城月下（らいじょげっか）さんです。この学園で唯一、装置を使わずに魔術を使う真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）の使い手です」

また観客が騒がしくなった。それは俺が出て来たからか？　ま、自分でいうのもなんだが俺は今の生徒達にとって見世物である。普通見れないものを人様に見せる。大道芸か何かの一種と思っているだろう。中にはクラスの連中やラウやレイコちゃんのように本気で応援している奴もいるかもしれない。それこそ、どうでもいい。

「……ねぇ月下君」
「な、なんですかね」
「君の義妹のラウちゃんだったよね。ふーん、応援されて嬉しい？」
「そ、そりゃまーね。はい」
「へー」
な、なんか幹穂先輩機嫌悪くないか？

「それでは試合はじめ！」
「魔術、開放（オープン）！」
「Ｉ　ｈｏｐｅ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｓｐｅａｒ　ｏｆ　ｔｈｅｎ　ａｍｅ　ｃａｌｌｅｄ　ａ　ｖｉｓｉｏｎ.」
先輩の体から魔術エネルギーが吹きだし、体に再び吸収される。俺のおなじみの銀の槍を体から具現化させる。銀色の槍。これが俺の魔術。どれにも属さない魔術。

「さて、現れたね」
「って、先輩のその装置はなんですか……？」
「ん？　剣だけど」
「いやいやいや、俺が言いたいのはどこから取り出したんですか？」
「あ、それは女の子の秘密で」

さて、俺が疑問に思ったのは幹穂先輩が取り出した装置である。先ほど先輩が言ったとおりに装置は剣である。だが、その剣は先輩の身長とほとんど同じ。１６０ｃｍはありそうだ。それをポケットから取り出した。うん、ツッコミどころ満載だ。

「私も姉さんと同じで八つの理（ナイトルール）には属していない。ま、実力も双子の分、同じってことね」

「ああ、分かりました。んじゃ、そろそろ――」
「その前に知っておきたいことがあるんだけど」
「……なんでしょうか？」
「貴方のその槍、伝説上の武器よね？」
「……なんでですか？」
「いや、ちょっとそう言うのに興味があるのよ、私。それにその槍は投げ槍見たいだしね。あ、名前も大体わかるわよ？」
「……」
「その槍の名前は――」

そう、俺の武器は俺の幻想でも妄想でもない。

伝説上にある武器を体に埋め込んでいるようなものだから――

The second Arms of legend（伝説の武器達）

中庭の観客席には来城月下（らいじょうげっか）の義妹の霧雨羅羽（きりさめらう）と隈井龍牙（くまいりゅうが）の妹、隈井玲虎（くまいれいこ）、そしてランキング三位のクラトイト・ホクトームが座っており、月下の応援をしていた。

「がんばれぇーツキ兄ぃー！」
「兄さんがんばってください！」
「……ファイト」

三人がそれぞれ応援をする。周りにいる高校男子生徒はこの三人の少女をちらちら見ている。この三人はランキング一位、二位、三位と並んでいるが中等部の中でもこの三人は美人として一位、二位、三位と並んでいるのだ。男子生徒は中等部だろうが、高等部だろうが彼女達を見てしまうのだ。

「それにしてもツキ兄ぃが強いとは思わなかったなぁ。ねぇラウは知ってたの？」
「えっと、私を助けてくれた時に一度あの魔術を使ったんですけどそれ以降、一度も使わず私にも周りの人たちにも教えようとはしませんでしたし」
「……ラウのお兄さん、強いね」
「あ、クラムもそう思う？　ツキ兄ぃって昔から人に優しいし、強いし、モテるんだよねぇ。ふふん♪　でも私がツキ兄ぃのお嫁さんになるんだぁー♪」
「な!?　ダメです！　兄さんは私と結ばれるんです！　義妹キャラは結ばれるんですよ！」
「ふふーんだ。幼馴染キャラも方が結婚する確率が高いんだよぉ？　知らないの？」

「うう……で、でも妹の方がずっと一緒にいられるんです！　結婚なんてさせません！」
「無理だよ♪　私がツキ兄ぃをもらうもん！」
「兄さんは私の物です！」
「なにおう！」
「やるんですか！」

二人の間に火花が散る。って、月下は物ではない。そんな二人の横にすわるクラトイト・ホクトーム、ニックネームでクラムは溜息をついて中庭の中央をみた。そこにいるのは黒髪の少年。これといって特徴はないが、彼の顔は優しさと強さで溢れていた。その顔をボーット見ていた。

「……かっこいい」

誰にも聞こえないようにぼそっと呟いたクラムの頬は赤く染まっていた。

⇔

俺の魔術は言わば召喚魔法に近い存在だ。八つの理（エイトルール）に属さない魔術は基本的に空想、幻想、妄想、感想、思想、愛想などをこの世界、俺達のいる三次元に出現させる能力。これは存在しないものを世界にある物質。例えば空気。例えば磁場。このようなものに自分の魔力を注ぎ込んで創り出す。言わば等価交換のようなもの。創り出す

には結局、別の物質を犠牲にしなければならないというもの。

だが、俺の魔術。これはちがう。何もないところから、何も存在しないところから物を創り出す。創立者――魔術師の方があってるか。話はもどるが結局は奇跡を起こしている。それだけ。俺の魔術はそれだけだ。

「その槍の名前は――」

「ちょっと待ってください」

俺の持っている槍の名前を言おうとした幹穂（みきほ）先輩が突然俺の声で自分が言おうとした事を邪魔されたので眉をひそめる。少々怒ってしまったようだがここはビビらず前進するまで。

「俺の魔術――武器の召喚ですが先日俺が出した武器。槍、ナイフ、盾、斧、大剣。……これら全部の武器の名前を全部把握したんですか？　それとも槍だけですか？」

質問に少々機嫌をとりもどしたようす。どうやら頑張って調べた事をここで知ってもらいたいのだろう。分かりやすいというか、素直と言うか妙な性格をしている幹穂先輩。ニヤリと嬉しそうに笑うからには絶対にそうなんだろう。

「うんうん、調べたわよ。もう、すっごく大変だったんだから。ま、一応全部目星はついているわよ。あたしにかかればこんなものすぐに分かるんだから」

「すごい自信ですね先輩。なら、俺を倒せますか？」

「もっちろんよ。あんたの武器の弱点は全部知ってるわ。伝説上の武器でもそれを使った英雄は死んでいるんだから完璧なものなんてこの世にないのよ」

「なるほどそう言う考えですか」
「そう言う考え。ま、いいや。それにお客さんもあんたの武器の事知りたいんじゃない？」

その言葉に反応するように観客達が大きな声を出す。推理小説の犯人が早く知りたい読者のように観客は俺の正体を知りたいんだろう。せっかちな読者だ。ま、これは先輩の策略だろう。俺の正体をばらして俺が戦いにくくする。卑劣だなぁ。ま、別にそれで何かが変わるわけじゃない。俺は負けないから。

「それじゃ説明するわよ？　あんたの持つ武器――まずは槍ね。名前はグングニル」

グングニル――欧米神話の神槍。またの名をグングニール、ゴングナーなど。この槍はロキという神が創り出した秘宝。投げ槍でも使われその昔、オーディンと言う名の戦士がこの槍を戦場で投げたところ手元に戻ってきたとう伝説もある。だがこの槍の能力は的に当たっても、決して止まる事がない――つまり貫通するまで、貫通してもそのまま勢いを殺すことなく飛びつづける。主の命令がない限り。

実際俺は友枝（ともえだ）先輩の時にこの槍を投げた。だが能力を使わなかった。それは殺しかねない。あの先輩を殺しかねないからだ。絶対の勝利。それは敵を殺す事。絶対の勝利。だが、それを俺は望んでいない。だから能力は使わなかった。

「次はナイフかな。あれは伝説上の武器と言うよりこの世に存在しているわ。それはあまり資料がなかったけど名前は把握できた。ナイフ、短剣ね。名前はカルンウェンハン」

カルンウェンハン――キルッフとオルウェンと言う出典にでてくる名剣――短剣。あまり活躍はしていないがブロトンの長、アーサーが所有していたといわれる短剣。その名は小さな白い柄手を意味するらしい。

「次は……順番で言うと盾かな。あの盾はなかなか有名よ。名前をアイギス」

アイギス――ギリシャ神話にでてくる神、ゼウスが娘の女神アテナー（後にアテナ）に与えた防具。全ての邪悪と災厄から守るといわれている盾。アテナに与えられた後に英雄のペルセウスが倒したとされる魔物、メデューサの首をアイギスにはめたといわれている。それから、このアイギスは見たものを石にするという鉄壁の防御を誇ったという。

「だけど、あんたのアイギスはメデューサの首がはめられていないのよね。それが不思議なんだけど？」

「……話を進めてください」

「そう？　なら次ね」

俺の言葉を受け取り軽い感じで受け止めてくれた。とりあえず有難い。このアイギスにはめられているはずのメデューサの首。それは――まだ、まだだな。今考える事じゃない。そう、どうでもいい事だ。

「次は斧。斧の名前は二丁版斧（ニチョウハンブ）。これは中国の斧ね。しかも残酷な斧」

ニチョウハンブ――この斧は水滸伝という物語に登場する武器。李逵（り き）が使ったという武器である。リキの友人の一人が酔った勢いで書

いた反詩でその友人ともう一人の友が処刑される事になる。混乱したリキはこのイチョウハンブで人を、人間を、関係ない人々を――人を斬りまくった。斬って斬って斬って、人を殺して斬りまくった。血で濡れて、血で染まって、黒くなった斧。二丁版斧（ニチョウハンブ）。残酷で悲しい武器。

「最後の剣はこれぞ神話って感じだね。その名もエスカリボール」

エスカリボール――アーサー王の愛剣。魔剣、聖剣と呼ばれる伝説の剣。有名なエクスカリバーと同じではないかといわれている。だが、そのエクスカリバーは二振りあるといわれており、一本が石から抜かれた剣――エスカリボールであり、後にその剣は折れる。その後に湖の貴婦人から二本目を貰う。それがエクスカリバー。実際のところ、どちらがエクスカリバーでどちらがエスカリボールかは分からない。分からないが俺はあいつをエスカリボールと呼ぶ。それは、あの剣が「そう呼べ」と言ったから。他にもキャリバーンや、カレトヴルッフ、カリブルヌス、カリボルヌ、カリベオルネなどがアーサー王の名剣、魔剣とされているがエスカリボールとエクスカリバーは群を抜いている。

「お見事。まあ、調べようと思ったら調べられるのは分かっていましたけど」

「ふん、あんたの武器なんかすぐに分かったわよ！」

だから何故に俺は怒られているんだ？

「それじゃあたしもそろそろ本気で行くわよ？」

「了解。ま、能力は使いませんから安心してください」

「あたしを馬鹿にしないで！」

「い、いや……俺はただ単に先輩に怪我をしてもらいたくないと思

ったけで――」
「なっ!?　な、ななな何言っているのよ！　あんたになんか心配されてもうれしくないんだからねっ！」
「そ、そうですか」
この先輩の考える事はさっぱりだ。
「ま、別にいいわよ」
「だから何がですか？」
「能力を使わなくても良いってことよ。あんたは自分の不甲斐無さに絶望してあたしに土下座するんだから」
「するわけないでしょ。大体先輩そんな大きい剣。扱えるんですか？　俺のエスカリボールは召喚時に自動で人体強化魔術が発動されるから持ち上げれますけど、先輩はそれを使いこなせるんですか？
俺は無理だと――」
「ふんっ。あんたに心配されなくても大丈夫よ。って、あんた、あたしと姉さんがそれぞれ何て言われているか知ってる？」
「い、いえ。知りません」
「はぁーこれだから最下位は」
最下位は関係ない。
「なら特別に教えてあげる。最下位さん」
また侮辱された。
「あたしと姉さんは二人合わせて『現代の魔女姉妹』って呼ばれてるの。それで姉さん個人は『美声の尻尾』とか『放送部の魔性』って感じかな」

ロクなのがない。

「それであたしは何て呼ばれていると思う？」

「さー、新聞の鬼とか、ツインテールの悪魔とかじゃないんですか？」

「失礼な！　あたしはね、皆からこう呼ばれているの。『魔剣の貴女』とか『戦場の光』ま、一番気に入っているのはやっぱりアレね」

「アレってなんですか？」

俺はどうでも良さそうに質問をした。だが、幹穂先輩の方は聞かれたのが嬉しかったようで笑みを浮かべる。って、今日同じ場面を二度繰り返したような気分なのは俺だけですかね？　違うと思う人は直ちにこの目の前のツインテールに「お前はバカだ」っていって来い。そして俺が殺される。

「あたしのお気に入りの名前は――『鬼斬りの姫』かな？」

恐ろしい名前だった。

⇔

「それでぇ、ツキ兄ィの魔術は召喚魔法が主なわけねぇ～」

「はい、召喚魔法は魔獣や使い魔の召喚がおもですが武器の召喚は見たことがありません」

「ふぅ～ん、って魔術を開発したラウが知らないって言うなら本当

にツキ兄ィはレアだよね」
「私の開発した魔術はおもに数式で形どっています。数字は不思議ですから。クラムもそう思いますか？」
「……思う。……それに、お兄さんは魅力的」
「……クラムちゃん、さらっとライバル発言ですか？　兄さんに一目惚れですか？」
「……もち」
「にゃに！？　ツキ兄ィは渡さん！」
「そうですよ！　兄さんは私と一生、生涯、墓場まで一緒にいるんです！」
「……デレデレするのもあまり良くない」
「ふ、ふん！　ツキ兄ィは可愛がってくれるもん！」
「……ツンデレキャラが萌える」
「クラムちゃんはツンデレキャラじゃないでしょ！」
「……クーデレ」
「ううっ……お、幼馴染キャラと妹キャラにクーデレキャラ。私たちはツキ兄ィの恋のライバルになりそうねぇ」
「に、兄さんは渡しませんから！」
「……望むところ」
「ツキ兄ィは私のものよ！」

応援席でどうどうとこのような会話をしていた三人娘。もちろん周りにいた生徒達は会話を聞いて月下に殺意を向けるものや、微笑ましいと笑って乗り切る生徒、何故か自分までもが月下の鯉のライバルに入っていると思う女子生徒、赤面しながら聞く生徒、人それぞれである。

それにしても来城月下の名前をこの数日間で知らなくなった生徒はいないだろう。無名の最下位、来城月下。だが、今回は魔術師の来城月下。後者の名前の方が有名なのは確かである。装置の力を借り

て魔術を発動する１４２５人の高校生。そして1人だけ装置なしで魔術を発動する高校生。

世界でたった一人かもしれない魔術師、来城月下。この魔術が一般化した世界で『本当』の魔術が使える少年。さきほど、玲虎が言ったように彼はレアだ。宝くじが当たる確立よりも、一般人が総理大臣になる確率よりも、地球が生まれる確率よりも、彼の存在は確率的に低いものだった。存在しないはずのものが存在する魔術。

武器の召喚。この世にないものを創り出す奇跡。魔術は字の如く『魔の術』だ。魔法ではない。だが、魔法に近い。矛盾はしているものの、科学と数学の力でこの世に出現できる。それを霧雨羅羽が装置というなの魔術への『つながり』を作ったのだ。その『つながり』によって人々は魔術を発動させる。

来城月下は『つながり』をもっていない状態から魔術を発動させる。古代の魔術。道具も使わず、己の肉体だけで魔術を発動させる。奇跡……奇跡――鬼籍（きせき）。してはならない過去の持ち主、来城月下。彼の過ちから手に入れる事が出来たかけがえのない義妹（あやま）、霧雨羅雨。

これは運命か？

はたまた偶然か？

……否

これは違う。

運命でも、

偶然でもない。

なら、

なんなのでしょうか？

⇔

二人の間に生まれる緊張感。俺の握っている銀槍――改めグングニルにはびっしりと汗がこびりついていた。数分間、こうしてにらみ合っているがお互いに相手の実力に気がついてしまい下手に動きが取れないのである。俺の武器を知った幹穂先輩。先輩の実力を知った俺。互いに怖れていた。相手の強さに。

だが、こうして何時までもじっとしておくわけにもいかない。観客達も飽きてくるころだ。武器の能力を使って倒すのも良しだが、それでは先輩が怪我をする。怪我人はなるべく出したくはない。それよりも死人なんてなおさらごめんだ。武器はそれぞれ殺人能力を秘めている。アイギスだけはゴーゴンの首がはめられていないのでこの場合は論外だが他の槍、斧、剣、ナイフは危ない。死人が出る。特に斧と剣は。

「あんたが来ないってならあたしからいくわよ！」

来る！　そう思ったときには先輩の顔はすぐ目の前にあった。そう、わずか三十センチ。俺と先輩の顔までの距離、三十センチ。これはすぐにでも分かった。先輩の能力。移動速度が速いというわけではない。簡単なのことだ。

超人体強化魔術

「くそっ！」

とっさの判断で槍を顔の前まで移動させて上から降って来た巨大な剣を受け止める。その重力と圧力で槍は悲鳴をあげながら耐えていた。先輩の魔術は普通の人体強化魔法のさらに上を行く超人体強化魔法。聞いたことがある。この魔術は人体強化魔法の約１００倍の力を発揮できる。間接に言うとデコピンで一トントラックを五十メートル弾き飛ばせることができる。つまり、一撃でもまともに食らうと俺は――

お陀仏。

「そうはいくかよ！」

槍の片方の重心を下に下げて剣をながすかのように地面に誘導させる。このときに槍から手を離し、すぐさま後ろに五メートルほど飛んで離れる。先輩は舌打ちをして霧のように消えていく槍を見ていた。

「とりあえず槍はクリアね。どうやらあんたは武器を一度消されたら、最低五時間はつかえないようだから」

そんなところまで観察されていた。となると、今日の大会でグング

ニルを使うことは出来ない。残りの武器で如何にかする必要がある。
困った事にあの槍は俺の十八番（おはこ）である。扱いやすいのと、何かと動きやすいからである。まぁ、バランスがいいってことだ。

とりあえず、日常は完璧に崩れたな。こりゃ。

The second It enjoys it.（楽しむ）

伝説上の武器というものはこの世に存在するのか？　それとも神話の中だけの話なのか？　いや、実在するのかもしれない。実在するからこそ、俺の肉体に宿っている。そう思いたい。だが、アイギスしかり、エスカリボールしかり、グングニルしかり、それは予想を遥かに越えた存在だ。この世にある武器の中で最強はなんだ？　刀か？　槍か？　拳銃か？　盾か？　ナイフか？　剣か？　弓か？　トンファーか？　ヌンチャクか？　メリケンサックか？　扇子か？

それは俺達が決める事なのか？

いや。

それは使い手が決める事だ。だからこの世に最強の武器なんてありゃしない。使う人間が強いか弱いかで決まるんだ。なら、伝説上の武器はどうなる？　エスカリボール、エクスカリバーは勝利を絶対に約束するという剣。その剣のおかげでアーサー王は戦争で勝ち残ったようなものだ。なら、伝説上の武器は人は関係ないのか。

いや。

それは違う。伝説上の武器は人を選ぶ。アーサー王は意思に刺さったエクスカリバーを抜いたから、グングニルはロキが作り戦士に能力適したやつだけが使えたから、アイギスは守るものがあり、守る者が強かったから。武器は人を選ぶ。その武器が望む人材が使わないと武器は本来の力を出し切ることができない。

いや。

それは――それは……。俺はどうだ？　伝説上の武器を幾つ扱っている？　幾つだ？　多すぎる。武器が俺を求めたとでも言うのか？

否、それは違うかもしれない。武器が選んだじゃないかもしれない。俺が武器に選ばせたのかもしれない。なら、武器たちは俺に満足しているだろうか？満足と言うよりも力を発揮できているかどうかの表現が正しいかもしれない。

「お兄ちゃん」

兄さん、とは呼ばずに霧雨羅羽（きりさめらう）が俺の事をそう呼んでいた当時、俺は初めて他人にこの魔術を見せた。ラウに見せた。一度だけ見せた。何であの時あいつを助けたのかは分からない。分からないけど俺は満足していた。彼女を助ける事が出来たから。

⇔

「ほらほら！　どうしたのよ。あんたの実力はそんなものなの！」

先輩はグングニルが破壊したのを確認するとすぐに俺の目の前に来て大きな剣を俺に向って振りかぶってきた。それをなんとか後ろに下がって避ける。だが、超人体強化魔術を発動している為か次の攻撃が早い。

「あたしの攻撃を避ける続けるなんてすごいね。ふん、今のは誉めたわけじゃないんだからね！」

「五月蝿いですよ！　こっちたぁ真剣に避けているんですか――って！　かすった！　今、髪をかすった！」

幹穂（みきほ）先輩の猛攻撃。馬鹿でかい剣をぶんぶん振り回してくる。俺はそれを後退しながら避ける。右に左に後ろにと、彼女の剣筋は早い。避けるのが精一杯である。十八番（おはこ）の銀槍のグングニルを破壊されてしまい身動きが取れない。詠唱をするにも避ける事に夢中になって集中できない。くそ！

「もらったぁ！」

「っく！」

先輩が叫んだかと思うと俺の足元目掛けて大剣を横に振り回した。とっさの判断で上へジャンプだがそれを狙っていたように先輩が流れるように体を捻じ曲げて、戻す。つまり空中にいる俺への追撃だった。空中では避ける事は難しい。てか、不可能。

なんて訳がない。

「Ｓｍａｌｌ　ｄｅｆｅｎｓｅ　ｇｏｄ！」

「え？」

先輩の呆気にとられた先輩の声。今のは詠唱だ。そう、少しだけ、少しだけ時間があればよかった。二秒。二秒あれば詠唱ができる。この一番短い詠唱が。

俺の右手に現れたのは小さな盾。そう、アイギスより小さい盾。俺の右手を覆うように五角形の白色の盾。そしてその中心には綺麗な女性の絵画が描かれていた。その盾で先輩の一撃を防ぐ。だが衝撃は殺せずに俺はそのまま吹っ飛んで地面を転がる。だが、ダメージ

は少ない。すぐさま立ち上がると、先ほどの盾は砕けてしまった。

「な、なによ……今の盾。あ、アイギス以外の盾を持っていたの！？」

「あ、はい。小さくてもろいのであまり使いませんが、今の盾はプリトウェンです」

「プリトウェン！？　なら、さっきかかれていた女性は聖マリア！？」

「そうっぽいですね」

プリトウェン――アーサー王が持っていたという盾。その盾には聖マリアが描かれており、魔法の船としても使えるとか。俺は使ったことがないけど。

「……あんた、まさか他にも武器を隠しているんじゃないでしょうね？」

「さー、それはどうでしょう」

「ふん！　とぼけても無駄よ！　すぐにあんたの武器を全部破壊して、あたしが勝つんだから！」

「そりゃ、楽しみにしておきますよ。なら、大剣対決でどうですか？　Ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ　ａｎｄ　ｓｗｏｒｄ　ｔｈａｔ　ｒｕｌｅｓ　ｔｈｅ　ｈｅｒｏ．　Ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ，　ｉｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｓｗｏｒｄ！」

「しまった……詠唱させちゃった」

どうやら俺に詠唱をさせるつもりはなかったらしい。先ほどといっている事が矛盾しているような気がするが、まぁ今はどうでもいい。本当にどうでもいい。

現れたのは黒と赤がデザインの大剣。その剣を右腕だけで支える。

ずっしり来る重さ。ずっしり来る思い。アーサー王の最強といわれたエクスカリバーの名を借りた剣。

「え、エスカリボール」

「名前を知られているから満足に戦えないかもしれませんけど――俺はどうでもいいと思っています」

「あたしの努力がどうでもいい！？」

「いや、先輩はすごいと思いますよ。少ない情報でエクスカリバーではなくこいつをエスカリボールと見抜いて、それで武器の弱点を研究してくる。俺はすばらしいと思います。ただ、それは俺にとってはどうでも良いんです。先輩に有効な情報。でも俺は知っている情報。だからどうでもいい」

「なら、焦った方がいいんじゃない？　あたしは優しくないわよ？『鬼斬り姫』の名前は結構なものよ？　容赦しないわよ？」

「上等。俺は別に気にしません。どうでも良いですから」

「あんたの口癖はどうでも良いなの？」

「さー、それこそどうでもいい。だけど今のこの戦いはどうでも良くない。俺は魔術は落ちこぼれだ。誰もが使える不完全な魔術（マジックディフィシャンシ）も使えない落ちこぼれ。だけど、この魔術は俺の唯一力になる業だ。それの実戦はどうでも言い訳がない。だから――」

エスカリボールをぎゅっと握ってゆっくりと剣の先を先輩に向ける。そして、自分でもはずｙかしいぐらいの笑顔で、

「この勝負、楽しみましょう」

「っ！」

笑う俺にかっと何か熱くなってように肩を強張らせる先輩。その反応を見て思わず笑ってしまいそうになる。仕方がないのかもしれない。だれだって真剣勝負のときに楽しみましょうなんていうバカは

俺ぐらいだろう。でも、この真剣勝負は俺にとって楽しかった。今まで逃げていた俺が立ち向かう。応援してくれる友人、そして義妹。喜びに満ち溢れて楽しむ以外に考えられない。

なら

なら思う存分に楽しもうじゃないかと。

「あんたバカじゃないの！　楽しもうって、これは真剣勝負よ！」
「ええ、分かってますって」
「分かってない！　あたしは真剣なの！　これは遊びじゃないの！」
「ん？　それはおかしいですよ先輩。学校行事ですよ。体育祭しかり、文化祭しかり、学校行事は楽しまないと」
「これは行事と言う名を借りた戦争なの！　日頃の魔術の成果を現す大事な戦争。それを楽しめって？　バッカじゃないの！？」
「確かにバカかもしれませんけど……でも、戦争は俺は先輩とか国塚とかでるのは反対ですよ」
「な、なんでよ！」
「女の子でしょ？」

真っ赤になる先輩。ありゃ？　怒らせるような事を言ったか？　後ろを向いて隈井と国塚に視線を送る。俺って悪い事言った？　と。すると国塚はニコニコしながら「クマクマやるぅ～」とか叫んで、隈井は「この鈍感がぁ」と溜息を吐きながら答えられた。余計に納得いかずに首をかしげた。

「あ、あんたわぁ～！　羞恥心ってものがないの！？」

そう言いつつ突っ込んで来る先輩。そのまま剣を再びぶんぶん振り回す。がむしゃらに振りマシあいている所為か、あまり殺気を感じ

る事が出来ない。顔を真っ赤にして件を振る先輩の姿。確かに鬼斬りの姫だな。

俺はというと、一歩も動かずに先輩の攻撃をエスカリボールで受け止めている。右から来たら左に流すように剣で誘導し、左に来たら同じように受け流す。上から来たら受け止めて弾き飛ばし、下から来たら受け止めて上へながす。それだけの動作。

「先輩、攻撃ががむしゃらすぎます。それじゃ俺には当たりませんよ？」

「うるにゃい！」

「猫？」

なんか知らないけど先輩が猫化した。混乱しているのかどうか分からないが――いや、こりゃ完璧に混乱してるだろ。あまり冷静さを失うと何をしでかすか分からないから逆に怖い。まぁたぶん大丈夫だと思うけど。

「あんたなんか大嫌いよぉぉおおおお！！」

「うわっ！？」

先輩がこれでもか、というような思い一撃を右の上段に繰り出してきた。エスカリボールで何とか受け止めたものの、体が空中に浮き、何度目かの空中浮遊を果たした。左に十メートルほどとんで両足と左手で体を支えながら着地する。少々地面を削ったが、特に問題はない。

「にゃぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああ！！！」

「あぶっ！？」

問題はあった。またすぐに移動した先輩が俺の目の前まで来て剣を縦に振った。ギリギリで避ける事が出来たが今ので少し頬を切った。三メートルほど離れて顔についた傷を指でなぞる。速さが加速している。うーん、暴走というかなんと言うか。

「あらあら、幹穂は何をやっているのかしら？」

後ろから幹奈（みきな）先輩の声が聞こえた。振り向くと頬に右手を当てて困ったようなポーズをとっていた。表情は明るいが。

「あの、どう言うことでしょう先輩」

「うん？　あ、月下君。頑張ってるわね」

「いや、見て分かるでしょ。うんで、幹穂先輩どうしちゃったんですか？」

ちらっと先輩の顔を見て再び幹穂先輩の方に視線を向ける。未だに顔を真っ赤にして目が回っているようにフラフラしている。どうやら本当に暴走しているようだ。

「幹穂は昔から恥ずかしい事があるとすぐああやって暴れるの」

「恥ずかしいんですか？　怒ってないで？」

「もしかして月下君は幹穂が怒っていると思った？」

「違うんですか？　あんなに顔を赤くして」

「はぁー、君は鈍感と言うか何と言うか」

なんか溜息を疲れた。とりあえず、再び俺を見つけた幹穂先輩は猛ダッシュでこちらに駆け寄ってくる。俺は立ち上がって左の方向に逃げる。これ以上後ろに行くと観客席の方に被害が出るかもしれない・こういうときは逃げつつ、中央に行くのが先決だろう。

「ににゃすがぁぁぁぁぁぁあああ！！」（訳、にがすかぁぁぁぁぁあああ！！）

「っつ！　だから何でそんなに速い！？」

再び一瞬にして間合いを取られてしまった。剣を受け止め、剣が交じり合う。お互いに一歩も譲らない。普通なら人体強化を使っている俺が勝つはずだが、それを凌駕する超人体強化を使っている幹穂先輩は俺よりも強かった。実際に俺が剣で押されている。

「くっそ！」

体制を低くして足払いをかける。先輩は体制を崩して後ろに倒れる。その隙に足をばねのようにしてエスカリボールを両手で握る。そのまま先輩の剣を払いあげて手から離させる。もちろん剣は大きさに比例するように大きく回転して地面に刺さった。だが、そんなことを気にせずに先輩は俺に飛び掛ってくる。

「大人しくしてください！」

と飛び込んできた先輩の額にチョップを与える。見事に命中。空中で時間が止まったかのように、その体勢頭場楽続いたような気がした。しばらくして地面に仰向けに倒れて気絶しているようだった。

仰向けに倒れた先輩の首にエスカリボールを当てて、

「チェックメイト」

そう宣言した。

「う、ううう。……あれ？　私の装置は？」

先輩がやっと正気に戻ったが、自分の置かれている状況を把握しきれていない。適当に先輩の剣が刺さっている方角を指差す。目線だけをそちらに向けると再び俺の方へ目線を戻す。そして首に当てられているエスカリボールをみる。

「あたし……負けた？」
「はい、チェックメイトです」
「ああ、もう。……こっからどうあがいても形勢逆転は無理っぽいね。いいわよ。私の負け」

諦めたように先輩は右手を振る。この瞬間、俺は勝った。

『勝負ありです！　接戦のすえ、この勝負を収めたのは来城月下（らいじょうげっか）さん。そしてこの試合に勝ったのは２－Ｄです！』

観客から拍手と歓声が再びあきあがった。こうして、俺達は次の戦いに進む事ができた。そして、次なる相手は生徒会の一人。ランキング二位。生徒会副会長。雲神春之美（くもがみはるのみ）先輩。第二の壁にして、超えなければならない壁。さて、俺の日常はもう後戻りは出来ないようだ。

⇔

「おお、さすが私の義弟。うんうん、やればできる子なのよ」
「古東の弟だったのか？　来城は？」
「うん？　何、狩亜知らなかったっけ？　うーん、従姉弟にあたるんだけど、家で預かっているから義弟よ。あ、あとラウちゃん。中等部のラウちゃんも私の義妹なんだよ」
「へー、知らなかった。ま、僕は別に関係ないかな」
「またまた。ま、確かに月下は私には関係ないかもね」
「どうしてだ？」
「だって、戦いたいのは私じゃないでしょ？　ねぇ、小梨」

選手控え室で大型テレビに注目している選手達。月下たちの試合をじっとみていたのはそれはここにいる全ての生徒だろう。来城月下という謎の魔術師。彼の実力はこの目で見たほうが研究材料になる。なら真剣に見るのも無理はない。そして先ほどの会話をしていたのは轟坂小梨、狩亜純樹、古東宝香の３－Ａの会話だ。

「確かに私は彼と戦ってみたい。だけど、彼と当たる確立は――いや、ゼロに等しいわ」
「うん？　なんで？　私はあの三人の中でもっとも小梨に勝てる確率の高い月下を出してくるんだと思うんだけど？」
「僕もそう考えたよ。だけど、轟坂は何かわかるのか？」

そう言うと黒の床にまでつきそうな黒い髪の毛を指でいじりながら小梨は答える。

「彼はどうやら筋金入りの面倒臭がり屋のようね。それなら必ず最後の試合に出る。でも、純樹と宝香が先にあの二人を倒す。すると私と彼の出番は無しになる。ってことよ」
「ああ、なるほど。確かに月下は筋金入りの面倒臭がり屋だったわねぇ。ふーん、さすが観察力が優れているねぇ。……惚れちゃった

から？」
「んにゃ！？」

初めて小梨が驚きの表情をあらわにする。顔も先ほどの幹穂のように赤く染め、髪の毛をいじっていた指の動きもぴたりと止まる。純樹と宝香はそれをみてくすりと笑った。

「へー、轟坂って分かりやすいんだな」
「ばっ！？　バカ！　な、ななななに言ってるの！　私はその、あれだな。その……惚れているというか、何と言うか……好きって感情がよく分からないというか……」

目線をずらし、せわしく再び指で髪をいじり始める。冷静であまり感情を表に示さない小梨にとっては珍しい表情だった。このようなリアクションは生徒会のメンバー以外はほとんど知らない。知っているのは肉親と七瀬幹奈と幹穂だけだろう。

「と、兎に角！　私と彼は戦う事はない！」

と、小梨は宣言した。だが、宝香と純樹はその宣言に賛成は出来なかった。月下と小梨。最強と最弱。一位と最下位の戦いは何時の日か、必ず実現すると思っていたから。

「……小梨」
「ん？　あ、春之美」

すると、小梨の近くに一人の女子生徒が近寄る。右目が隠れるほどの前髪。セミロングの茶髪。雲神春之美、彼女だった。

「……彼は強い」

「ええ、分かっているわ。春之美は彼と戦えるかしら？」
「……たぶん、戦える」
「そう。なら、頑張ってね。怪我はしないように」
「……分かってる」

彼女は静かに呟くとにっこりと笑ってその場を後にした。

「さて、まずは月下君が生徒会にどの程度通用するか知らなきゃね。僕は隈井君も見なきゃいけないし」
「そうね。ま、お手並み拝見よ」
「義弟の魔術エネルギーは私が言うのもなんだけど、小梨。あんた以上の物を持っているわよ？　もしかしたら、もしかしたらだけど小梨が負けるかもよ」
「私よりも先に春之美よ。彼女の戦闘経験と彼の戦闘経験は別格。春之美は唯一私と対等に渡り合える存在。春之美にまず勝たないと話にならないわ」

そう言いつつも小梨の口元は笑みを浮かべていた。

The second It enjoys it.（楽しむ）（後書き）

はい、夜月猫です。
受験勉強の息抜きということで今日と明日は勉強はお休みになりました。
なので、今日と明日更新する事にしました。
姫君と俺の錯乱日々のほうはちまちま作成中ですのでもう少しお待ちください。
それと受験を応援してくださった読者の皆様には感謝です。
これからも頑張っていこうと思うので応援宜しくお願いします。
感想なども気軽に送ってください。
それでは皆さん、また次回お会いしましょう。

The second The last resort（切り札）（前書き）

予定通り、今日も更新です

The second The last resort（切り札）

「ただいまの勝負、古東宝香さんの勝ちです。よって、３－Ａの勝ちです！」

盛り上がる観客席が、モニター越しで映し出される。先ほどの戦いは優勝候補のチームである３－Ａ、つまり狩亜純樹（かりあじゅんき）先輩、古東宝香（ことうほうかさん）さん、轟坂小梨（とどろきさかこなし）先輩の生徒会チームである。ランキング一位、四位、六位と集まっているチーム。数字では俺のチームの隈井（くまい）と国塚（くにづか）の三位と五位と数字では勝っている。数字では。

このランキングの数字はあまり当てにならないことが分かった。いや、ほとんどあっている。だが、今の三年生は強い。現に先ほどの戦いで三位の隈井が負け、２５位の七瀬幹穂（ななせみきほ）先輩が勝った。そう、二年生より三年生のほうが実力がある。という話。つまり、俺達二年生では三年生に勝つ事は非常に難しいという事だ。

「うーん、狩亜先輩と宝香先輩、やっぱり私たちより強いねぇ」

「確かにランキングはあてにならないかもな。実際、最下位の来城（らいじょう）が十位と２６位に勝っちまってるもんな。俺も２５位に負けちまったし」

「いや、もともと俺は例外だろ？　はっきり言うと俺はゲームで言うチートみたいな存在だ。もっと言うと裏技、もっと悪く言うとセコ技、よく言うと奥義みたいなものだ」

「ライライって体力も魔術エネルギーも高いから元は強いんだよね」

「ああ、来城の魔術エネルギーは小梨先輩も超す大物だ。体力――主に武術関係も備えてるしな」

と、自分の言うように話す隈井。幼馴染と言う事もアリ、俺の事を

良く知っている。と言っても、武術関係については俺の伯父さん、つまり宝香さんのお父さんだ。剣道五段の実力を持っている伯父さんに、昔から良く鍛えられていたものだ。反射神経も剣術も伯父さんのおかげで身に付いたようなものだ。

「さて、そんで次の試合。順番だけど……」
「私が思うにライライを二番目に持ってこようと思うんだよねぇ」
「お、流石国塚。俺が言おうと思ったことを先に言うとは」
「ちょっとまてやゴラ。お前等、俺は楽がしたいんだ。どうでも良いいいように言うんじゃない」
「ライライ風にいうと、それこそどうでも良いんだよ。勝つためなら確実に勝てる作戦がいいんだよ。多分、あっちは二番目に春之美(はるのみ)先輩。勝てる確率が高いのはライライだけ。だからライライは二番」
「なんでそう言いきれるんだよ？」
「裏をかいているんだよ。こっちみたいに最初から順番を決めているんじゃなくてでてきた相手に対して順番を決める。そう言う戦法だと思うんだよ。なら、ライライに勝てる確率が高いのはあっちのチームでは誰？」
「……雲神(くもかみ)春之美先輩」
「正解。だから、わざと裏をかいて二番目。最後に出ると思わせておいての不意打ちなのよぉ！」
「なるほどねぇ～」

国塚は実際は頭が良い。いつも、小学生のような知能しか持っていない動作をするが実際は違う。魔術、勉学、料理、その他の家事。全てをこなせる女子高生だったりする。が、がだ。やっぱりこいつにも欠点がある。羅羽(らう)が料理が作れないように、完璧な人間ではない。

とりあえず、国塚は泳げない。

二十五メートル――二十メートル――十メートル――五メートル――いや、たぶん、一メートルも泳げないだろう。こいつは基本、小さい。それは関係ないかもしれないが、普通にたつと胸の辺りまで水が来る。それも関係ないかもしれない。で、こいつは水に浮く事が出来ない。今までの話は関係ないじゃないかと思った人。全くそのとおりだ。

んで、結論から言うと水に浮く事が出来ない国塚は、手や足をバタバタするだけで沈んでいき、結局は泳げないのだ。高校一年の時、男女混合でクロールの授業の時に国塚だけ沈んでいたのは今でも鮮明に覚えている。どうでもいいけど。

「とりあえず、次は俺達の試合だ。最初に俺。次に来城、最後に国塚だ」

「あー、クマクマ負けたくせに自分が出ようと思ってるぅー」

「いや、さっきは負けたけど、次はそうはいかないよ。俺も来城みたいに秘密をもってんだよ。だから、大丈夫だ」

「「？」」

なんなんだ？　隈井の秘密って？

⇔

『それでは、準決勝！　盛り上がってまいりましょう！　まずは3

一Cから紹介です。まずはランキング七位、得意な魔術は黒魔術！　闇の書道部部長！　暗井狼（くらいじん）選手！　続きましてランキング十四位、ぬいぐるみが大好きな小学生！　朝原美々（あさはらみみ）選手！』

「誰が小学生よ！」

『続きまして――』

「無視するなー！」

あちらの選手、朝原先輩が小さな体をジャンプさせて起こっている。国塚とあまり変わらない幼児体型。どっからどうみても小学生だ。ちらっと隣の国塚に目をやる。……似てるなぁー。顔とかじゃなくて、主に身長が。どうでもいいけどぉ。

『この学校の最強の四人の一人！　生徒会副会長！　ランキング二位！　雲神春之美選手です！』

わぁー！　っといままで以上に大きな歓声があがる。流石生徒会。人気が違う。特にこの春之美先輩はほとんどしゃべらず、何かと謎の多い先輩。新聞部や放送部なども色々調査しているが、彼女のしゃべる時間帯は学校の中で多くて合計して一時間にも満たない。おかしいだろ？　話す時間が一時間を切る。もう、ほとんどしゃべってないだろ。

『次に2―Dの紹介です！　ランキング三位！　水の魔術は学園一！　隈井龍牙（くまいりゅうが）選手！　次に、同じく愛らしい可愛い小学生！　国塚乃愛（くにづかのあ）選手！』

「なんか、私と朝原先輩って同じ扱い？」

「「うん、全く同じ」」

同じ答えを出した隈井と俺。それは仕方がない。百五十センチにも達していない高校生なんて俺や隈井からみたら小学生のようなもの

だ。あまりかわらん。

『最後に、先ほど、見事な勝利を見せてくれた真の魔術師！　または武器の貯蔵庫！　来城月下選手！』

「俺は倉庫か！？」

今回のアナウンサーの先生はどうやら個性豊かな先生のようだ。

『それでは、第一試合、選手の方は前へ出てください！』

アナウンサーの声が聞こえてすぐに隈井が前へ出た。迷いもなく、足を一歩踏み出す。雲神先輩はじっと隈井の目を見てなにやら考えている。たぶん、この二人のどちらを出すのか迷っているのであろう。だが、ここで気になるのは未だに分からない隈井の秘密。幼馴染の俺すら知らない何かがあるって言うことか？

「……美ヶ」

「わかったわ」

どうやら対戦相手は朝原先輩のようだ。どのような判断で彼女を出してきたかは知らないけど、何か自信があるのだろう。前へ出て朝原先輩は隈井を見詰める。二人の表情はやはり緊張と勝つという自身で満ち溢れている。観客も二人の今までにない真剣さにすこし同様を感じていた。

『試合、始め！』

「「魔術、開放（オープン）！」」

服の袖からトンファーを取り出す隈井、そして朝原先輩はポケットから数枚の札を取り出した。二人の体から流れ出る魔術エネルギ

ーはほぼ互角。やはり、技術的な問題がこの勝負の勝敗を決める事になるだろう。だが、隈井の秘密も気になるが、あの札の装置も何かと気になる。

「先輩、貴女の魔術は確か『光』でしたよね」

「あら、よく知ってるじゃない？　まあ、二十五位に負け――っと言っても実際の実力が七位の幹奈に負けるのは仕方ないわね。私の実際の順位も多分十位止まり。二桁にいけないけど、貴女と同等かそれ以上のつもりよ」

「なら、相手にとってお互い不足はないでしょう。それに丁度いい練習になりますしね」

「ふーん、相手にとって不足がないとか言っておきながら、私を練習に使うの。ちょっと見損なったわよ」

「勘違いしないで下さい。俺が言いたいのは――いや、のちのち分かりますから」

自身満々に朝原先輩を挑発しつづける隈井の表情は余裕――でもなく、やはり少しばかりの焦りが見える。どうやら、先ほどの「練習」と言う言葉ははったりなのかもしれない。それなら俺達に言った秘密もはったりになる。敵を騙すならまずは味方から？　いや、隈井はそんなことするような奴じゃない。なら、なら隈井は何がしたいんだ？

「水の災い（フラード）」

トンファーの長い部分を先輩に向け水の塊を作り出す。だが、それと同時に朝原先輩も動き出す。札を五枚、空中に放り出す。するとマジックのように空中で綺麗に五枚が並び始める。そして札を線と線で結ぶように光の糸が札を繋いでいく。そして出来たのは五芒星が空中で描かれた。

「光の粒子（プラクティクスライト）」

五芒星の中心に光が集まりだす。小さな光の粒がビリビリと電気を起こしながら創り出されるエネルギーは隈井の水の災い（フラード）の本気バージョンと同等の力があるかもしれない。だが、少しだけだが朝原先輩のほうがエネルギーを作るのが速い。隈井の水の塊はまだ十分とはいえないほどの大きさだ。今のままじゃ隈井は負ける。

そして朝原先輩の光の塊が五メートル、隈井の水の塊が四メートルほどの大きさになった。

「発射（バースト）！」
「発射（ショット）！」

朝原先輩の方が少し速かった。解き放たれた光の塊は一直線に隈井を目指した。だが、不完全だが対抗する為に水の塊を放った隈井。二つの塊はぶつかり合った。お互いの魔力の塊がぶつかり合い、凄まじい風が中庭を襲った。そして、水の塊が砕け散った。

「！」

光の球は障害物が無くなる事で再び隈井に襲い掛かる。朝原先輩の口元が笑みを作り上げる。勝利を確信した表情だ。隈井も驚きながらも逃げるように右横に移動し始めた。だが、光の塊は先ほどのスピードを遥かに上回る速さで隈井の目の前まで移動した。そう、光の速さで移動した。爆発が起こった。

「隈井！」

俺の叫び声も虚しく爆発音にまぎれてほとんどの人物には聞こえなかっただろう。巻き上がる黒い煙。隈井がいた周辺はまったく見えない。見えるのは黒い煙に包まれたその場所と、えぐられた地面の欠片。辺りに飛び散っていた。

「私の光の魔術はちょっと特殊でね、札には装置のデータをダウンロードさせた代物で普通の魔術とは一味違うわ。一つ目発動させた光の魔術の速さを自在に操る事が出来る。最高速度は光の速さ。真空での速さ、２９９，７９２，４５８　ｍ／ｓ。または　３０万キロメートル毎秒の速さ。この速さでぶつけられた威力は凄まじいわよ。ま、死なない程度にやったから生きてると思うけど、腕の一本、いや両腕と片足は持って行ったはずよ」

先輩はニヤリと笑う。そうか、雲神先輩が隈井の対戦相手に朝原先輩を選んだ理由が分かった。それは魔術のどうのこうのという理由ではない。実力で選んだのと、弱点を確実に攻める込める生徒じゃないといけない。隈井の弱点、それは水の災い（フラード）のリロードの時間。時間がかかる。だが、それはそこまで問題じゃない。後ろから回りこまれそうになっても、リロード中は三百六十度、体の方向移動ができる。もしも、魔術を繰り出されても不完全な水の災い（フラード）を打ち込めばいい。

だが、その水の災い（フラード）を超す速さでリロードできる強力な魔術があるとしたら？

もし、同じタイプの魔術でも威力が全く違ったら？

隈井の勝ち目はない。

「まだ、安心するのは早いですよ」

「……」

煙の中から人影と声が聞こえた。そう、あの中にいる人物は一人しかいない。隈井龍牙。ゆっくりと姿を見せて再び朝原先輩の前に立つ。だが、右腕の肩の部分がおかしいのか、ぷらーんと力が入っていない。トンファーも握られていなかった。だが、右手にはしっかりと片方のトンファーは握られている。戦えると言う意思表示だろう。しかし、誰がどうみても隈井の勝ち目はない。

「奇跡的に助かったみたいね。でも、次はそうはいかないから」

再び五芒星の中心に光が集まる。だが今度は先ほどの大きな塊ではなく、とても小さかった。

「光の槍（ライトスピア）！」

今度は細長い棒状になり、隈井を狙う。スピードも速い。

「……炎の魔女（ファイアーウィッチ）」

光の槍は隈井に届かなかった。そう、とどきそうになったが障害物があった。それは水ではなく、トンファーではなく、まして隈井自身でもなく――

炎の塊だった。

The second The last resort（切り札）（後書き）

さて、予定通り更新ができて一安心の夜月猫です。
誤字報告や感想などもまっております。
気軽に書いてくださると嬉しいです。
それでは、また次回。

The second Witch of flame（炎の魔女）（前書き）

受験が終わりましたので連載開始ですー

The second Witch of flame（炎の魔女）

俺のいる魔術を発展した世界についてもうちょっと詳しく説明する。この世界には約二年から三年前、一人の少女霧雨羅羽（きりさめらう）が開発した魔術のおかげで今の世の中がある。その開発した魔術は二つ。

最初に発明した『完全な魔術（マジック・エンタイアティ）』は開発時、ある条件を満たさないと発動する事が出来ない魔術。その条件と言うもの色々ある。だが、どれにも通用づるのが最低ライン、魔術エネルギーが一定の数値―人並み以上に超えればいい、というもの。普通の人間と平凡以下の人間（俺がこれにはいる）はこの魔術は使えない。魔術を使うのに特化した人間、魔術を使えるために訓練された人間がこの『完全（マジック）・エンタイアティな魔術』をつかえる。ようは、努力してか、才能で使えるようになれというもの。

二つ目の『不完全な魔術（マジック・ディフェシャンシ）』は魔術エネルギーが一定の数値を超えていなくても少ないエネルギーを具現化させることの出来る魔術。これは条件は特になく、誰でも使える。

そして例外なのが俺だ。装置と呼んでいる様々な形のある魔術を出す為の道具。ラウが最初に開発したものはもっと巨大なもので三メートルを超す大きいものだったらしい。形は知らないが、そのデータをいろいろなものにダウンロードさせたのが今使っている装置だそうだ。

その技術も一般化されてしまい、ラウ以外の多くの科学者が魔術を創り出す事に成功。これにより一般化したともいえる。だが、ラウの組んだ数式がなければその科学者達も魔術を創り出す事は不可能だった。それだけラウはすごい事をしたんだ。

話がずれたが、俺の魔術『真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）』は本当は名も無き魔術。実際の名前は知らないし、この名前も勝手に学園内の誰かが噂でながした名前だ。で、『魔術』を広辞苑でひいてみると「魔力を持って行う不思議な術（――にかかる）」と「大仕掛けの手品の称」となっている。『（――にかかる）』となっている部分からみると俺が魔術にかかっているという感覚が生まれる。国塚（くにづか）のような風や、隈井（くまい）のような水、このようなものではなく人体強化魔術と伝説の武器を召喚する。双子の七瀬幹奈（ななせみきな）先輩と七瀬幹穂（ななせみきほ）先輩の魔術、物体の召喚は伝説でも何でもないただの隕石、タライ、槍だ。超人体強化魔術、これはこれだけなんだ。何もない。ただ強化するだけ。

このように俺は変わっているのは一目瞭然だろう。人体強化にあわせて伝説の武器の召喚。一度に二度の魔術を発動させる。これぞ魔術。これぞ人外（じんがい）。異様な人間――どうでもいいけど。

結局この世界には三つの魔術で構成されている。その中でも俺と同様に珍しい人間がたまにいる。その例としては一度に二つ以上の魔術を使う人間。前に説明した数値がバランス良く整っている人間。同じ数値で、なおかつその同じ魔術の数値が一番上の場合だけ二つ以上の魔術が使える。条件としては難しくないように聞こえるだろうが、絶対に同じ数値じゃなければならない。0、1でもずれてはいけない。絶対に平等ではなければならない。だから俺と同様にレアだ。八つの理（エイトルール）からはずれている人物はこれは使えない。だって、同じになる魔術がないのだから。

ま、話が長くなったが言いたいことを言おう。

俺の親友はどうやら『こちらがわ』の人間だったみたいだ。

⇔

目の前に現われたのは、火の巨人といったところか。見たところ召喚魔術のようだ。それが分かった理由はこの魔術を使った隈井の肩に乗っている小さな少女。光の槍は炎の巨人に当たり消えてしまった。その光景を見て笑ったのは、肩に乗っている少女だった。

「あはははは！　そんな攻撃で私の地獄の業火（イフリート）に勝てるわけないでしょう！」

真っ赤な長い髪の毛、黄色い瞳、巫女服にも似た、赤と青の服装。そして手のひらサイズ。なるほど、使い魔か。珍しい魔術を持っていたものだ。ちなみに、使い魔とは、己の魔術エネルギーを無理やり空間にねじ込ませる事により、自分と契約した「魔」の者を呼び出すことができる。科学の限界を超えた儀式。これは俺も良く分からないが、ラウが言うには「数式は時に神様も呼べるんです」だとよ。どうやら俺達人間は踏み入れてはいけない場所に土足で入っているのかも。

「な、何よそいつ!?　聞いてないわよ、貴方が水以外の魔術が使えるなんて……!?」

「まぁ、先輩。そう、かっかしないでください。俺だってこいつを見せたのは初めてなんですから」

そういってトンファーを握っていた右手の力を緩め、武器を地面へ落とす。その人差し指で左肩に乗っている少女の頭をなでる。嬉

しそうな顔で少女は「ふふふ♪」と笑った。よっぽど隈井になついているようだ。それよりも、気になるのが、隈井が八つの理（エイトルール）に属していない召喚魔術を使えているのか。

先ほども言ったが、八つの理（エイトルール）に属していない特殊な魔術。たとえば人体強化。たとえば召喚魔術。などなど。これらを使う魔術師は八つの理（エイトルール）の魔術は使えないし、他の魔術も使えない。八つの理（エイトルール）に比べるとオリジナリティなど、得する事もあるが、その分、損する部分もあるということだ。

だが、隈井は八つの理（エイトルール）に属していながら、八つの理（エイトルール）から外れている召喚魔術を使っている。それは、俺と同じ『こちらがわ』の人間だという事になるが……

「あんた、いったい何者……!?　こんなの常識はずれよ！」

「そこまで言われないと駄目ですかねぇ？　まぁ確かに俺はちょっと特殊な人間でして……」

隈井は右手をゆっくりと自分のカッターシャツへと伸ばし、ボタンをゆっくりとはずしていく。そして、今まで隠れていた十字架のネックレスがあらわとなった。それを見た瞬間、朝原先輩の目が驚いたといわんばかりに開かれた。俺も正直驚いた。

そう、アレが隈井の第二の装置。

「嘘でしょ！？　人が二つも装置を使えるなんて……！？　そんなのありえないわ。だって、普通人間は一つの装置を制御するのに体一つ分の魔術エネルギーが必要なのよ。二つ目を使おうとしても、魔術は発動しないし、下手をしたら装置が壊れる。なのに、なのにどうして貴方は二つ目の装置を使えるの！？　隈井龍雅！？」

「叫ばなくてもちゃんと説明はしますって。……とりあえず、簡単に説明すると、この魔術は俺の魔術じゃないんです」
「貴方の魔術ではない……？」
「そう、俺の魔術じゃない。このネックレスは狩亜純樹先輩からもらったものです」
「っ！？　狩亜君から……」
「ええ、この装置。僕の魔術エネルギーではなく、狩亜先輩の魔術エネルギーを食いながら存在しています」
「……それって」
「まあ、お考えのとおりですよ。今の俺は狩亜先輩と同じ力量で、同じ力で、同じ魔術が使える。それが、俺の切り札」

誰もが驚く真実。それが真実。これは隈井の魔術じゃない。これは狩亜純樹の魔術。全校六位の魔術。いや、召喚魔法ならこの学校一位だろう。狩亜純樹――またの名を「神の召喚士」。魔術が開発されて、たった一ヶ月で上位精霊を呼び出した天才。

それだけじゃない。彼の呼び出す精霊は八つの理を象徴した火、水、氷、雷、土、風、光、闇の精霊を呼び出す。つまり、この八つの理とまったく同じ能力を持つ精霊を呼び出せるということ。そして、その一体、火の精霊があの地獄の業火なのだろう。

「この装置は元は一つの大きなペンダントなんですけど、狩亜先輩が俺のためにくれたんです」
「なんで、その精霊は貴方になついているのかしらね？　普通、契約者以外にはなつかないはずなんだけど……」

不振に思った朝倉先輩が隈井の肩に乗っている精霊の女の子を指差す。すると、隈井よりも先に精霊の少女が立ち上がって、口を開いた。

「私の今のご主人はこのリュウガサマって決めているんだよ！　あの時、ご主人が私を――」
「ウィッチ」

少女――ウィッチが何か言おうとしたところで名前を呼んでやめさせた。どうやら、わけありらしいが、そこんところは後日隈井から直接聞くしかないようだ。

「さて、先輩。狩亜先輩の精霊一体と、俺の水の魔術。この二つを相手に貴方は戦えますか？」
「常識的に考えて無理よね……。でも、ここで諦めたら先輩らしくないでしょ？」
「そうですね。確かにそうです。だけど、人間諦めが肝心。勝負はもう分かってる。無駄な魔術エネルギーは使いたくないし、怪我もしたくない。人を殺しかねない魔術でこれ以上争うのは不毛な争いです。ここはギブアップしてください」
「……。貴方は優しい？」
「さぁ？　優しいと思う人もいれば残酷と思う人もいる。人それぞれですよ」
「……わかったわ。この勝負、私の負けよ」

ここで朝原先輩のギブアップ。それが分かったとたんに、巨大な炎の塊、地獄の業火（イフリート）が消えた。しかし、まだ隈井の肩にはウィッチと呼ばれる精霊は姿を現したままである。隈井は静かに膝を地面につき、荒い息を吐いていた。

「ご主人！」
「はぁ……、いや、うん、大丈夫だ。ウィッチ、戻っていいぞ」
「でも……。いや、いやです。しばらく私は外に居ます」

「狩亜先輩が泣くぞ？　てか、迷惑かけてるだろうって」
「マスターは、大丈夫です。私一体ぐらいの魔術エネルギーなら、一週間は出し続けれれますから」
「……なら、お言葉に甘えようかな」

隈井はそのばですぐに保健室の女医さんによって治療がかけられた。説明をしていなかったが、この清流学園には数人の治療魔術を会得した先生達が居る。この治療魔術というのは、魔術であって魔術ではないのだ。

説明をすると、魔術によって受け傷には、魔術エネルギーが残り少なからず傷口に付着している。その魔術エネルギーを使い、細胞同士を急激に成長させ、傷口をふさいだりする技術はある。これは魔術ではなく技術だ。会得しようと思えば誰でも出来るようになる。だが、完全には回復しきれない。なので、その道のプロフェッショナルを育成する事になった。とある学校なのだが、そこを卒業した人たちは魔術学校へ派遣される。つまり、魔術による傷は、このプロが居れば必ず直るという事だ。

以前、俺が友枝先輩の氷の魔術で腹部を貫通したときもすぐにこの技術で直してもらった。いやー、ホント感謝です。あのままだったら本当に大量出血で死んじゃうっぽかったからねぇ。

『勝負ありです！　まずは隈井選手の勝ちですね。私も隈井君の秘密は知りませんでした。これは次の試合が楽しみです！』

とまぁ、こうして俺たちは三年生チームから一ポイントを奪い取る事が出来た。さて次は――

「俺か……」

さぁって、ここからが踏ん張りところ。しっかりしろよ来城月下。

……どうでもいいけど

The second Gramary person of God Of

たいへん遅くなりました！

親切にも、隈井は朝倉先輩から勝利を勝ち取った。これで1勝0敗。次、俺が勝てばこの試合は進む事が出来る。だが、次の対戦相手は全校生徒のランキング二位。雲神春之美先輩。得意魔術――雷。装置は皮製の黒い手袋。中指と薬指の部分かが切り取られ、右手だけに装備される。俺がここまで知っているのは、先輩の試合を何度か見たことがあるからだ。二位という地位に居る彼女は流石というぐらいに強い。雷を手足のように操る。そのことから彼女は『雷神の魔術士』と呼ばれる。

「さて、いきますか」

一言だけ呟くと、俺は中庭の中央へ歩き出した。後ろでは国塚が何度も応援してくれている。会場の生徒達も俺が次出てくると分かった瞬間に歓喜にも似た黄色い声援を発した。俺はゆっくりと歩き、中央につくと、静かに春之美先輩の目を見た。

先輩はすこし驚いたような表情だった。以外だったのかもしれない。切り札である俺を二回戦目に出してくるのが予想を超えていたのだろう。いや、そうでないと困る。それが国塚の作戦なのだから。

ここで、春之美先輩ではなく、ランキング14位の狼先輩を俺と戦わせたら100%の確立で俺が勝つ自信がある。暗井狼先輩……どんな魔術を使うかは知らないが、七位なら勝てる自信が俺にはあった。ジョーカー、ワイルドカードの俺がエースカードである生徒達に負けるはずがない。

必然的に俺に勝てる可能性のある春之美先輩が俺と戦うことにな

るのだ。もし、俺が負けたとしても、国塚なら狼先輩に勝てるであろう。俺はそう思っている。

「……なるほど。考えたわね」

無表情のまま呟くと、こちらに歩きながらスカートのポケットに手を突っ込んで、中から黒い皮の手袋を取り出し、右手にはめた。どうやら、俺と決闘してくれるらしい。

『おおっと！　なんやかんやしているうちに次の対戦が決まったようだ。それでは行ってみましょう！　ランキング二位、雷の魔術遣い、雲神春之美さんとランキング最下位、真実の魔術遣い、来城月(らいじょうげ)下(つか)さんの試合です。用意はいいですかぁ？　それでは……開始！！』

「魔術開放(オープン)！」

「Ｔｈｅ　ａｘ　ｂｙ　ｗｈｉｃｈ　ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ　ａｎｄ　ｐｅａｃｅ　ａｒｅ　ｒｅｑｕｅｓｔｅｄ　ｂｅｃｏｍｅｓ　ｔｈｅ　ｌａｃｑｕｅｒ　ｂｌａｃｋ　ｔｈａｔ　ｅａｔｓ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ」

春之美先輩からは言葉では説明不可能な魔術エネルギーが溢れ出していた。俺も詠唱を早口で済ませ、体から出てきた霧のような物体を手でつかみ、真っ黒な斧を作っていく。二丁版斧(ニチョウハンブ)……斧の名前である。

「……最初は斧か」

「ええ、十八番の槍――グングニルは幹穂先輩に壊されちゃったんで、今日は使えないんです」

「ふむ……まぁいい」

先輩は特に気にもせずに右手を静かに開いて俺に向かって何か投げる動作をした。その手の中は何もない。何もなかったはず。だが、振り下げた瞬間に黄色い塊…雷の塊が俺に向かって一直線に飛んできた。これが先輩の魔術。雷である。

俺は冷静に二丁版斧（ニチョウハンブ）で受け止めるとあたりに、黒い煙が立ち込めた。すぐさま体制を整えて後ろに跳び下がった。しかし――

「避雷針！」

先輩の叫び声が聞こえたかと思うと、何かが頭上で光った。見上げると雷がこちらに向かって落ちてくる。舌打ちをしてまた転がるようにその場から離れた。ズドンっ！　っと大きな音を立てて落ちてきた場所には半径三メートルほどの穴がぽっかりと開いていた。

「……洒落にならないだろう」
「ボーっとしている暇はない」
「っ！？」

跪いて穴を見ていると、耳元から彼女の呟きが聞こえた。ぞっと汗が吹き出る。体が硬直して動く事が出来ない。すぐ後ろに先輩がいる。

「…どのくらい強いと思ったらその程度なの？」
「……っく」

斧を振り上げて、先輩の肩を狙った。だが、先輩は俺を蹴飛ばして後ろへとさがる。もちろん斧は空振り、バカみたいに前へ倒れこんだ。急いで立ち上がり、後ろを振り向いたがすでに先輩の姿がなく、俺は焦りながらもキョロキョロあたりを見渡す。

「……君の力。伝説の武器の召喚。人体強化。この二つを同時に発動し、それを保ち続ける。……確かに化物じみた能力だな」

声は聞こえるが姿が聞こえない。この状況だけにはなりたくなかった。何時の日か、彼女の戦闘を目の当たりにしたときにも同じ現象が起こった。姿を消し、そして倒す。

「……君、その能力はそれだけじゃないのだろう？　たとえばグングニル。銀色の投げ槍。あれは、一度投げると、命令が終わるまで貫き続けるらしい。その斧も、何かしらの能力があるのでは？」

「……」

声はあまりにも冷静で、答えに戸惑った。俺の答えがないと分かると、先輩はすっと俺の後ろに再び現れた。そして、顔を俺の耳元までもって行き、小さく呟く。

「君がそこまで能力を使わない理由はわかる。死人が出る可能性がある。それほど、危険な能力なのだろう。どうだ？　当たっているだろう」

「……」

「グングニルは絶対に敵を死ぬまで貫き、アイギスは絶対の守りを誇り、エスカリボールは絶対の勝利を掴み取る…他の武器も何かしらの『絶対』がある。」

「……」

「そんな、武器の力を使いたくないのは分かる。が」

すっと、俺から離れたのが分かると――

「私達には勝てない！」

先輩の右手から始めに打ち込まれた雷の塊が生まれる。俺はすぐさま斧を再び振り上げて先輩から離れようとする。だが、間に合わない。

「ぐはっ！？」

雷の塊は俺の右肩に命中し、自然と握られていた二丁版斧（ニチョウハンプ）が地面にこつんと落ちる。膝を地面につく。左手で右肩を抑える。じゅーっと、真っ黒にこげた右腕。痛さよりも雷の威力に違和感を覚えた。

「手加減してあげた。そこは感謝して」

「…そ、れは、わかりましたよ。普通…、雷を打たれた人間は、丸焦げになって、死にますって…。でも、あなたは普通は、それじゃ、危険だからと、体の中に電気を流して、脳を麻痺さして、倒す。それがあなたのやり方、でしょう…」

「……そうね」

「なの、に……」

「なのに、態々電気を流さず、直接雷を当ててきた。それはなぜか？　そういう疑問だろう？」

そうなのだ。春之美先輩はこのように敵を雷で焦がしたりしない。魔術というもは戦争でも使われたものだ。そんなもを科目として取り入れた理由は、そのような危険なものではなく、世の為人のために使えるように子供の頃から教育する。それが、魔術学校というものなのだ。春之美先輩の魔術も制限を教えられたはず。だが、そのリミッターすらもはずして俺と戦う。

それだけ、先輩は俺との戦闘を恐れている。もしかしたら殺される。もしかしたら死ぬ。その可能性が１％でもある限り――先輩は

俺を殺す気で戦ってくる。そういうことだ。っち……今回ばかりはどうでも良くない。

俺の能力は人殺しの業（わざ）。魔術事態も人殺しの技（わざ）。この二つがぶつかり合えば、学校の催し物だと言っても殺し合いになる事は少しばかり分かっていた。

もしも、俺がここで棄権したとしようとしても先輩は止められない。

「その疑問は簡単だ……」

本当に…簡単ですね。

「「これは魔術決闘を羽織った、殺し合いだから」」

なんと、簡単な答えだろうか。

「……分かってるならいい。私は全力で来城月下、お前を殺す」

春之美先輩は初めて無表情を崩して、笑みを浮かべた。静かに立ち上がり、右肩を抑えていた右手をぷらーんっと外す。まだ痛む。だが、これぐらいでは問題はない。魔術を発動するには何の害もない。これなら、まだいける。

「Ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ　ｉｓ　ａ　ｓｗｏｒｄ　ｏｆ　ｈｏｐｅ　ｔｈａｔ　ｔｅａｒｓ　ｕｐ　ｔｈｅ　ｄａｒｋ」

短剣は暗闇を滅ぼす希望の短剣――カルンウェンハン――キルッフとオルウェンと言う出典にでてくる名剣――短剣。あまり活躍は

していないがブロトンの長、アーサーが所有していたといわれる短剣。その名は小さな白い柄手を意味する。それを、左手で握ると、静かに構えた。

「そんな、短剣でどうする？　出来る事といったら、抵抗ぐらい」

「まぁ――この短剣、他の武器と違って能力なんて何もないんですよ」

やっと、普通に話せるようになったかと思うと出てきた言葉は武器の説明だった。その言葉に春之美先輩の表情が険しくなる。それもそうだ、何かしら能力があると思っていたものが能力なしといわれたら、誰だって不審に思う。

「そんなことを、信じろと」

「信じる信じないは勝手ですが、俺の武器の中で唯一、能力なしのカルンウェンハン。この短剣は本当に何もないんですよ」

いっそう表情が濁る。それでも状況は変わらない。だが、この短剣。能力がないだけ、使い道はある。その使い道――雷の魔術を使う人間だけに適用できる。

「君へはすこし残念な気分だ。チャンスを与えたのに、出した武器はそんな小さな短剣。本当に残念だと思うよ」

先輩はそれだけ言うと、右腕を天高く上げて、俺のほうをじっと見た。その目は見下したような、本当に残念そうだった。それでも、俺には大きなチャンスだった。一か八かだったが、この賭けには勝った。そう、先輩が次に出す技、それが落雷ではなくてはならなかった。

「かかった」

それだけ呟くと、俺はカルンウェンハンを上へ投げつけ、観客席よりも高い位置にきた。先輩は不思議そうに思ったらしいが、予定通りに俺へ落雷を落としてきた。

だが、その雷は真っ直ぐ俺に落ちずに、面白いぐらいに曲がり、カルンウェンハンの方へ飛んでいった。そして、雷はカルンウェンハンに直撃。カルンウェンハンは粉々に砕け散った。その様子をポカーンっと、春之美先輩は口をあけた。俺はすぐさま、先輩のほうへ走った。

「二丁版斧（ニチョウハンブ）！」

斧の名前を叫ぶと、今まで死んだような呪われし武器が息を吹き返したように柄の部分がそれの方向へ向いて、俺は左手でそれをつかむ。逆手もちになった斧は扱いにくい。だが、先輩を倒すには十分！

「っつ、考えたわね！」

そう、避雷針である。カルンウェンハンを避雷針と使い、雷をよけて、一度だけの隙を作る。これが、最後のチャンスかもしれない。左手で握られた二丁版斧（ニチョウハンブ）は勢い良く先輩の胴へと打ち込まれた。手加減なんていらない。ここで手加減すれば負ける。

確実に勝ちを予想した。いや、確信していた。

だが、その予想と確信は砕ける。

「……今のはいい判断。作戦的には八十点。でも、相手の手の内をもっと探るべきだったわね」
「……そりゃ、ないでしょうよ」

本当に、それはないだろう……。俺が言いたい事は、先輩はまだ俺に見せていない魔術があったという事だ。いや、魔術は雷一つであっている。その魔術の使い道であった。今まで見た事もない使い方。先輩の右手から雷で象られている槍が手元にあった。その槍は二丁版斧（ニチョウハンブ）を砕いていた。

また、すぐに後ろに下がった。目の前では二丁版斧（ニチョウハンブ）は粉々に砕け、春之美先輩が握っている黄色い槍が目に映る。この光景は見たくはなかった。自分の武器が砕ける瞬間はあまり気持ちの良いものではない。

これで、俺の使えなくなった武器は槍のグングニル、小さな盾のプリトウェン、短剣のカルンウェンハン、斧の二丁版斧（ニチョウハンブ）。すでに四つの相棒をなくした。今日中に使う事は無理。おれが使える武器は……。

いや、数は関係ない。一つ一つの武器を壊さないようにすればいい。ただ、それだけのことだ。

「Ｅｓｃｕｔｃｈｅｏｎ　ｏｆ　ｉｍｐｒｅｇｎａｂｌｅ　ｄｅｆｅｎｓｅｓ　ｗｈｅｒｅ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ｉｓ　ｄｅｆｅｎｄｅｄ」

詠唱の後に出てきたのは左半分が黒で、右半分が白。そして中央に二本の剣でバツ印を作ってあるマークがある。俺の体を守る大きな盾、アイギス。

「盾……、私の愛刀は一言で言うと何でも斬れるの。１００万ボルトの電流を流し、焼き切る。それが、私の雷刀（らいとう）の力」

「それは……面白いですね」

すべてを焼き切る春之美先輩の雷刀。すべてを守りきる俺のアイギス。

こんなに、どうでもいい戦いは――楽しかった。

The second Gramary person of God Of

ブログのほうでブログ限定の小説始めました。
ぜひ、見に来てください。

The second Absolute crushing（絶対粉砕）（前書き）

二ヶ月も時間が経ったことをお詫びします。
高校生活が忙しく、更新が遅れることをお知らせしておきます大変申し訳ありません。これからも頑張っていきますので、よろしくお願いします。

The second Absolute crushing（絶対粉砕）

アイギス――ギリシャ神話にでてくる神、ゼウスが娘の女神アテーナー（後にアテナ）に与えた防具。全ての邪悪と災厄から守るといわれている盾。アテナに与えられた後に英雄のペルセウスが倒したとされる魔物、メデューサの首をアイギスにはめたといわれている。それから、このアイギスは見たものを石にするという鉄壁の防御を誇ったという。

「確かに、私の知識では、アイギスは鉄壁の盾。絶対防御にして、絶対勝利。でも、それはメデューサの首がはめられていたからよ。何もない、アイギスなんて、ただの大きな盾」

春之美（はるのみ）先輩はアイギスを細い目で見てそう答えた。確かにそうだろう、ただの盾である。能力も何もない今はただの盾である。先輩の右手には、雷刀とよばれる雷の刀。俺の右手には全てを守りきるアイギス。

全てを焼き切る雷刀と全てを守るアイギス。正直、この勝負どちらが負けて、どちらが勝つかは分からない。勝率５０％。敗率５０％。五分五分だ。いや、隠す事が出来ない事実。俺はこの先輩に勝てるかどうか分からない。いや、勝てないかもしれない。見栄を張ることは出来ない。追い詰められた状況、絶体絶命。

「それにしても、君のアイギス――メデューサは何処に行ったんだ？　七瀬幹穂（ななせみきほ）も君との試合に言っていた。アイギスはどうしたのかと……」

「それは先輩には関係ありませんよ。アイギスはアイギス、メデューサはメデューサで別物として存在しているんです。メデューサが

ないアイギスは、アイギスじゃない。この定義は大いに間違いだ」
「ほう……、じゃあ聞こう。――アイギスはそれだけでもアイギスなんだな？」
「はい」

力強く俺は答えた。別に躊躇することなんてない。アイギスはアイギス。メデューサの首がなくてもこいつは、もともと絶対防御なのだから――いや、訂正しよう。ここだけは間違ってほしくない。伝説の鉄壁の盾は、伝説の防具――絶対粉砕。

「なら、いくぞ。来城月下！」

雷刀を握り締めなおすと、人間とは思えない速さでこちらに突っ込んできた。とっさの判断力で横に転がる。アイギスが大きすぎて上手く避けきるか不安になったが、なんとか、アイギスに体を押し付けて横に転がるような形で先輩を避ける事が出来た。

すぐさま、膝を突いて先輩の位置を確認する。姿はない。

「こっちだ」

後ろから先輩の声が聞こえた。急いで振り向いた。だが、そこには先輩の姿は何処にもなく、ちょうど観客席にいるラウと目が合った。彼女の目線は俺をじっと見ている。そしてすぐさま口を動かした。何を言っているのか、声が聞こえないので分かるはずもなかった。しかし、不思議と分かってしまうのが不思議だった。

上です。

「ちィ！！」

アイギスを両手で抱えるようにして、自分の頭上に持ってくる。
その瞬間、何かと何かがぶつかったような衝撃を俺自身が受けた。
頭上からの衝撃。そして、衝動。見事に先輩の攻撃は俺のアイギスによって防ぐ事が出来た。本当に――危なかった。先輩の気配はまず、感じることは不可能だろう。隈井（くまい）が戦った朝原美々（あさはらみみ）先輩の魔術――光の魔術。世界最速の魔術――光。それに劣るとはいえ、音速を超える雲神春之美先輩の――雷の魔術。人間がその速さを感じることは不可能。

絶対無感触の魔術。

絶対に感触を無に感じる魔術。

それに対抗する手段は第三者の存在が必要となる。音速を超えようとも攻撃するには、一時停止をしなくてはならない。その一瞬の瞬間を教えてもらわない限り、勝ち目はない。

「お前……！？」

なんとかそのチャンスを掴む事が出来た。ラウが俺に教えてくれた。助かった。もしかしたら、先ほどの攻撃を受けたら死んでいたかもしれない。そう思うとぞっとするものがある。生きるか死ぬかが、一人の少女によって救われた。奇跡――偶然――運命だったのかもしれない。

目の前で火花を浴びながらぶつかり合うアイギスと雷刀を見て、口元が自然とつりあがった。俺の表情をみて、春之美先輩の顔色が青くなる。いや、真っ青だ。そろそろ、異変に気づくだろう。

「先輩――先輩の敗因は簡単。アイギスは絶対防御じゃない。アイギスの能力――絶対粉砕」

「絶対……ふんさい？」

「文字通り――アイギスに触れた全てのものは――」

雷刀にひびが入り、バキバキといやな音が鳴り響く。音もだんだんと大きくなっていき、先輩の表情も歪んでいく。崩れる雷刀。

「粉砕される」

バキンっ！

鈍いその音は中庭全体に鳴り響いた。それと同時に小さな爆発が起きた。アイギスと崩れた雷刀との間で起こった。その衝撃で俺と先輩は逆方に吹っ飛んでいき、地面にお互い転がるように倒れた。爆風が会場内を包んでいく。生徒達は目を開けることが出来ず、腕で顔を隠すようにして、爆風がやむのを待った。

爆風がとまると、生徒達はゆっくりと目を開けて、中庭を見つめた。倒れている雲神春之美。そして――アイギスを使って、なんとか立とうとする俺の姿があった。この時、生徒達はすぐに理解した。この勝負は終わった――来城月下の勝利に終わった……と。

『な、なんという戦いだったでしょうか！　レベル高すぎる！　これは歴史に残る戦いだったんじゃないでしょうか!?　盾と剣の対決！　勝ったのは盾！　予想を超える魔術の決闘。私はこのような戦いを望んでいました！　よって、この勝負、来城月下選手の勝利！　そして、決勝へとこまを進めたのは２－Ｄ!!』

おおおお！！

歓喜――俺を称えるように、浴びせるように、拍手を送る。ちがう、違うんだ。この勝負、俺の勝ちじゃないんだ。いんな気がついてくれ。

いつの間にか元気になった隈井と国塚は俺の気持ちを他所によろこんで、俺に駆け寄ってきて体を抱きしめてくれた。嬉しかった。ここまで喜んでもらえるとは思わなかった。いや、俺が負けても国塚が勝てたかもしれない。だから、俺の勝利はそこまで重要ではないんだ。

それに、この勝負は引き分けだった。

運の問題だった。爆風により吹っ飛ばされた俺と春之美先輩。吹き飛ばされた後、俺は運が良かったのか、アイギスのおかげで爆風の影響は減少することができ、ただ転がるだけだった。

だが、春之美先輩は何も無い状態で吹っ飛ばされた。地面に体を叩きつけられ、頭を打って気絶――その瞬間を俺は目で確認した。目の前で先輩が地面に逆さまに頭を向けて、落ちていくのを。首の骨は折れてはいないだろう。脳震盪で済んでいるはずだ。

ほんとうに運だ。爆発が起きなければ、先輩が頭を打たなければ、俺がアイギスを離しておけば、先輩が雷刀など使わずに、本来の戦い方で来ておけば――俺は負けていたであろう。

「どうした、来城？　勝ったんだぜ、お前。あの春之美先輩に」

「そうだよ、ライライ！　もっと喜ぼうよ！」

勝利とは裏腹にあまり、喜んでいない俺を不思議と思った二人が顔をしかめる。分かってる。俺だって二人と一緒に喜びたい。でも、何かがいけないんだ。こんなことでいいのか。真実の魔術がこんあ勝ち方でいいのか。運なんてもので勝っていいのか……？

「おめでとう」

不意にそういわれた。顔を上げると、春之美先輩のチームの人だった。名前は暗井狼（くらいじん）先輩だったと思う。目は半開きで、黒の髪の毛が男の中では長い分類に入る。背中には春之美先輩を背負っていた。

「来城君……嬉しくないのは分かる。俺も見ていたから。運が勝負だって事も」

「……はい。喜べないんです。運で勝って、俺の魔術は納得しちゃいけないって」

俺の言葉に隈井と国塚が眉間に皺をよせた。どうやら、俺が運で勝ったという事に疑問を抱いたらしい。いや、不思議に思われても仕方がない……か。狼先輩は続ける。

「納得いかないなら、納得できるようになればいい」

「……どういうことですか？」

「俺の背中にいる春之美よりも轟坂の方が強いのは知ってるだろ？なら、話しは早い。お前が轟坂に圧倒的な差で完全勝利を収めればいい」

「完全勝利……」

「ああ、完全勝利だ。だが、それは難しいと思う。小剣、小盾、斧、槍を失い、そしてそのアイギスまでも失う――」

狼先輩が言葉を発した瞬間に、アイギスにひびが入り木っ端微塵に砕けた。俺も含めて三人は驚いて口がふさがらなかった。絶対防御――改め絶対粉砕のアイギスが壊れた……。いや、そうか。俺は甘く見ていた。ランキング二位――雲神春之美――雷神の魔術士。予想を超える破壊力、それにアイギスが耐え切れなかったのだ。絶対防御――絶対破壊だが、絶対に壊れないとは限らない。それだけの話し、どうでもいい――結論。

「そういうことだ。まあ頑張れよ、俺はお前の事気に入ってるんだ。行けるところまで行ってくれ」

狼先輩はそれだけ言うと、「朝原」と名前を呼んだ。呼ばれた美々はすこし急ぎ気味でこちらに駆け寄ってくる。狼先輩の隣までいくと、じっと春之美先輩を見て、そして俺を見た。

「正直、負けたのは悔しいけれど、でもくいはないわ。たぶんハルも同じだと思う」

ハルというのは春之美先輩の事だろう。このような呼び合いをするということは普段でも仲がいいことが読み取れた。そして、美々先輩は目線を隈井の方へ向けた。にっこりと笑うと、右手を差し出してこういった。

「色々あって、握手していなかったわね。いい勝負だったわよ」

「……こちらこそ！」

隈井は力強く先輩の手を握り返して、お互いに笑みを見せた。

「それじゃあ、また機会があったら会おう。俺は来城、お前と一度魔術決闘（マジックバトル）をしてみたいんだ」

「またまた……、へたしたら死にますよ？」
「それもまたいいさ、俺はそういうの嫌いじゃない」
最後に、俺ににっこりと笑って――
「俺は暗井狼。書道部部長、ランキング七位。得意魔術は闇。次会うときは俺の魔術が見れたらいいな――楽しみにしてる」
後ろを向いて先輩達は歩き出す。暗井狼――闇魔術、朝原美々――光魔術、そして雲神春之美――雷魔術。この三人の後姿を見つめて、どうでもいいなんて呟けるはずがなかった。それだけ、あの三人からは連帯性というものを感じる。
いつか、この三人もあの三人のようになれるといい――いや、なろうと後々三人で約束する事となる。
⇔
先に決勝を決めていた轟坂小梨（とどろきざかこなし）と、狩亜純樹（かりあじゅんき）、古東宝香（ことうほうか）はモニターに映る来城月下の姿を見て、そして目に焼けつけていた。月下の恐るべき成長スピード、未知の魔術、未知の武器――すべてがこの三人にとって強敵である。今見ていないと――殺される。そう思わないと苦しいだけだった。
「強い……ってレベルじゃないわね」
「古東の言うとおり、彼はもう化物だ。僕も勝てる自信がない」
二人の弱気な発言――それは仕方がないとしか言いようがなかっ

た。強い相手にぶち当たれば、その相手の力量を超えて成長する。それが来城月下。まだ、隠し持っている武器があるかもしれない。いや、ある。彼は何かまだ重要な事を隠している。確信していた。

「あら、弱気になっても仕方がないじゃない？　なら私達は彼に全力で――殺すつもりでぶつかるのよ」

「よく轟坂は惚れた相手に殺すなんていえるな」

「純樹、そろそろ私も怒るわよ？」

「はいはい、ごめんごめん」

まったく謝る気のない純樹を横目に睨む小梨をみて、宝香はふきだしそうになるのをぐっとこらえた。見ているだけで十分い面白い。もう、いじりたくてたまらないと宝香は考えて、すぐさま思考を切り替えなおす。

「そんで？　私の義弟くんはどうやって倒す？　倒せるのは小梨、あんただけよ」

「ええ、分かってる。でも――先にあの二人を潰せば終わり。純樹も決闘（バトル）したいでしょ？　隈井君と」

「あははは、わかっちゃう？　僕はどちらかというと隈井君の成長が見たいんだよね」

意味深とも思える笑みを狩亜純樹は浮かべた。

The second First rank and the low r

またまた大変遅くなりました。
もっと更新スピードを早くできるように頑張ろうと思うので、見放さないでください！

The second First rank and the low r

昔、おかしな夢を見たのを今でも覚えている。いや、記憶に刻まれている。真っ暗な、上も下も右も左も分からないような無の空間。そこに俺は呆然と立ち尽くしていた。当時――中学生一年生の俺。まだ魔術も普及していない世界だった。だが……俺は魔術を使うことが出来ていた。生まれつきなのかどうか定かではないが、自分が魔術を使えると意識し始めたのは小学二年生のとき。突然、頭の中に知らない言葉が流れ込んできた。俺はそれをなんとなく口にしてみた――それが始まりだった。

話を戻すが、その無の空間で俺は無数の影を見つける。その影は様々な形をしていた。そして、その影たちが口々に自分の名前を俺に教える。その数――十体。姿が見えない影十体は俺に名前を告げ、そして俺の中へと消えていった。

それから俺は――自分の能力について――自分の武器達の名前を知ることが出来た。グングニルから始まり、カルンウェンハン、アイギス、ニチョウハンブ、プリトウェン、そしてエスカリボール。あと、俺には四つの武器が眠っている。それがなんなのかはまだ、ラウにも伯父さんにも、先輩達にも、クラスメイトにも誰にも話していない。

もしかしたら、一生使わないかもしれない。もしかしたら、この魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りで使うかもしれない。それは誰もわからないことだ。誰も知る好も無い事だ。

いや――俺は予告をしておく。

この魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りでこの四つのうち、必ず一つを使うことになる。
そして、なぜ俺がこの四つの武器を態と使わない理由が――分かる事だろう。これが俺の予言であり――魔術師の予言である。

⇔

『さてさて、皆様お待たせしました。これより、魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りの決勝（ファイナル）ステージを始めたいと思います！』

会場内に響き渡る声は入場口付近で待機している俺たち三人にも――向こう側で待機している三人にも聞こえている事だろう。もともと、この戦いに俺は出る予定ではなかった。俺の魔術がばれてしまった事により、俺はこの場にいて、この時を過ごしている。

あの時、友枝先輩との魔術決闘（マジックバトル）でラウが俺に向かって叫ばなければ、俺に向かって願わなければ、起こりえなかった時間で――未来である。これは、何かしらの縁なのかもしれない。なら、無駄にならないように、全力を尽くすまでだと、心の中で呟く。

「いよいよだねえ。ライライ、クマクマ。」
「ああ、いよいよだな」
「なんだ、来城。緊張してるのか？」
「ははは、ごめん。嘘付けないや。正直、すげぇ緊張している」
「奇遇だな、俺も緊張してる」
「ライライとクマクマはダメだねえ。私なんか全然緊張してないよお。どっちかというと、わくわくしてるんだよ」

「わくわく……ねえ」

俺は国塚の言葉をまともに受け止める。いや、楽しまなければならない。俺は魔術決闘と言うものをそういう風に見ている。だが、先ほどの雲神春之美先輩との決闘で――殺し合いという認識を覚えてしまった。いや、あの時はそういう風に感じたが、医療魔術によってどんな怪我でも体は元に戻る。それが頭だけになっても……だ。だが、細胞も残らないぐらいに粉砕すると、それは再復旧不可能である。春之美先輩の雷の魔術はやろうと思えば、細胞まで消す事も出来る。俺の魔術も――やろうと思えばできる。

だから、殺し合いだった。だから、戦争だった。

今回の戦いもそうなる可能性は十分にある。だから、今回も娯楽で、学校行事で済ましていいものなのか……悩む点もある。だが、これはどんな事が起きようと、学校行事として扱われる。今まで死者は出た事の無い魔術決闘（マジックバトル）。

安全で、安心で、安易できるはずだ。しかし、それを保障できない。俺の魔術――そして、完全な魔術である轟坂小梨（とどろきざかこなし）先輩との魔術（マジッ）決闘（クバトル）。異常で――異様で――異形で――異能で――異質であるこの戦い。全てが『異』である俺たち二人がそんな普通の決闘なんて行えるはずもない。

『それでは、選手の方は入場してください』

「いくか」

「うん！　行こう！」

「おうよ」

俺の言葉の後に二人が答える。さて、どうでもいいけど、頑張ってきますか。

⇔

霧雨羅羽（きりさめらう）は、入場してくる兄を目を輝かして見つめていた。自分の憧れであり、好意を寄せている人がこのような大舞台に立つと言うのがこんなに嬉しいものなのか、実感していた。隣に座っている親友の隈井玲虎（くまいれいこ）も同じように頬を赤くして「ツキ兄ィー！」と叫んでいる。そして、またその隣にいるクラトイト・ホクトームはぼーっとしているが月下から目を離さない。

「兄さん……かっこいいですう」
「ツキ兄ィ素敵……」
「かっこいい……」

三人とも同じ目線で月下を見ている。と言うのも恋する少女達は月下しか見れていなかった。確かに、月下はまあまあ顔立ちも良く、かっこいい方には入る。しかし、それだけではない。優しさ、厳しさ——そして強さ。この三つは本人は自覚はしていないが、この三人にとって重要なことである。

「それにしても、ラウ。ツキ兄ィって、いくつの武器を持ってるの？」
「それが、私にも分からないです。実際に見たことがあったのは銀槍——グングニルだけ。それ以外の武器は私もはじめて見ましたし」
「……謎が多い」

「クラムちゃん、兄さんは謎は確かに多いですけど、にやけながら言う発言じゃありませんよ？」
「……にやけて、ない」
「いまさら無表情にしても無駄だと思うんだけど……。まあ、でもツキ兄ィは昔から謎は多かったわねえ。それに、兄貴と知り合いになる前のことは話さないし」

腕組をして、思案するレイコ。ラウも思い返してみれば、二年近く一緒に住んでいるのに、彼の過去をあまり知らない。いや、知ろうとしたことがなかった。それは、月下と出会えた事が嬉しくて、彼の過去のことなんてどうでも良かったのだ。

「私も思い返せば、兄さんのことはあまり知りませんね」
「そうなの？　ラウのことだから知ってると思った」
「……私も」
「そんなことはありませんよ。私は兄さんと出会えた事が嬉しくて、はっきり言ってしまえば聞くのを忘れていました」
「へえ……。でも、ツキ兄ィってほんと、何者なんだろう？」
「……」
「……」
「……」

「「「ま、いっか」」」

今三人にとって月下の晴れ姿を見ることのほうが重要であった。

⇔

場所は変わり、清流学園のとある一室に移る。完全に密封された窓、電気も消してあり、やけに静かである。だが、人影がないわけでもない。大きな机をはさんで、四人ほどの大人が座っている。目線は、壁にかかってあるモニターだった。映し出されているのは学園最高位の轟坂小梨。そして、学園最下位の来城月下。中庭に入場する二人が映っていた。

「実に興味深いな……」

そう呟いたのは年齢は五十代ほどの男性。少々肥満気味で、紺のスーツを着ていた。興味深いと言うには二人の事だろう。目線を二人から離さない。

「でしょうね。私もこの二人にはちょっとした――異常があるようですね」

こんどは、黒ぶちメガネをかけた女性が呟く。こちらも、びしっとスーツを着こなし、眼鏡越しに鋭い視線でモニターを睨んでいた。

「でも、男のこの方は異常ってレベルじゃないですよお～。どちらかと言うと、特別ですねえ～。まさに、特別人体（スペシャリスト）～」

次にそう答えたのは白衣を着た、にやにやした女性。だらしない着方をしているが、どことなく、彼女の雰囲気に合っている。

「ウチの最高位（エース）と最下位（スペシャリスト）を見てもらったところで、答えを出してもらおうかな」

最後に、この場に似合わない着物を着た女性が口元を吊り上げながら各々に告げる。年齢的には二十代の後半。肩で揃えられた黒い

髪が特徴的だ。桜色の着物も彼女の美しさを引き出している。そんな彼女は机に肘をついて両手を絡めている。落ち着いた雰囲気。

「だが、ワシらに何の利益がある？」

先ほどの五十代ほどの男性がモニターから、着物の女性へ目線を移した。それにあわせて、残りのメンバーも目線をそちらへと向ける。四人は女性の口から出る言葉を待ち、彼女を見続けた。

「もちろん、優勝した学校は有名になるだろう？　あの魔術を開発した張本人がいる学園、霧雨羅羽がいる学園に勝つんだぞ？　それに、この企画は世界をゆるがすぞ？　全世界からあつまる有名な魔術学園。そうだろ？　学園長諸君」

五十代の男性――パラサイルスクール学園長――ヘルト・マトルノ。

メガネの女性――サイレント・トライ学校長――ジュリー・エネラル。

白衣の女性――浩亜遜（こうあそん）高等部学園長――燕泊（えんはく）。

ヘルトはヨーロッパ代表、ジュリーは欧米代表、燕泊は東アジア代表である。日本――着物を着た女性の名は猿鳶杏（さるとびあんず）。魔術開発部代表にして、この清流学園学園長。またの名を――「カムイの化身」。魔術をラウの次に開発した人物。ラウの元で働いていた研究員でもある。

「今回の祭りをみて、私の開催する魔術世界大会――そうだな魔術（マジック）乱戦（サバイバル）とでも名づけようかしら」

猿鳶は面白そうににっこりとわらった。残りの三人は息苦しい感

じに黙り込む。迷っていた。正直、これは猿鳶の罠である。この大会をつかって何かをたくらんでいる事は、三人にはお見通しだ。だが、この学園を倒すチャンス、自分の学園の名を挙げるチャンスである。それを潰すわけにもいかなかった。

「答えは？」

最後に、追い討ちをかけるように三人に言い放った。その一言で三人の意思は固まり、結論は決まった。いや、最初から決まっていたも同然なのだが、決め切れなかった。怖いのだ、猿鳶が。この女性の考える事はいつも拍子抜けで、魔術のことになると人が変わる。それだけ、魔術を愛していると言ってもいい。魔術に感情を入れすぎた研究員――猿鳶杏。

「でわ、解散としよう。決勝はみていくか？」
「ワシはいい。帰って、最高のメンバーを揃えなくてはならないからな」
「私も同じだ」
「左に同じィ～」
「そうか、残念だな。それでは、最後にルールでも説明しよう」
「解散ではなかったのか？」

ジュリーが不機嫌そうに聞く。

「そう、かっかするな。自国に帰ったお前らとは、なかなか連絡が取れないのでね。先に、ルールだけでも説明する」
「手短にお願いよぉ～」
「この乱戦はわが清流学園対そちらの三大魔術政令学園の対決とする。各、学園からは三名ずつ。ウチからは九人選抜させる。期間はまだ決めていないが、メンバーが決まり次第会戦としよう。場所は

ここ、清流学園。約、三週間にわたる長期戦。一週間の間に三回の魔術決闘（マシックバトル）。この乱戦に勝敗はない。目的はアピールだ。どちらが多く勝とうと、賞品などは何もない。あるのは名誉だけだ。勝てば勝つほど名誉は上がる。そういう、乱戦だ」

ルール説明が終わると、三人は部屋を退室し、姿を消していた。部屋にいるのは猿鳶と長髪の女性。女性は事務の仕事をしていて、いわば学園長の補佐を勤めている。猿鳶は面白そうに、モニターに移る二人を見つめる。

「ほんとうに、良かったのですか？」

補佐の女性が控えめの声で猿鳶に話しかける。その質問に少々面白さを感じたらしく、にっこりと笑う。モニターから目を離さず、女性の質問に答える。

「この乱戦の目的は最下位の観察実験だ。別に名誉なんてどうでもいい。彼の潜在能力――魔術を研究したいだけだ。別に、どうってことはないだろ」

「しかし、この乱戦はこの学園の評判を落とし、貴方の学園長の地位をなくす可能性も……」

「私は大丈夫だと思っている。この学園にいる生徒は全員優秀だ。中等部も高等部も。彼らが負ける事なんて、そうそうないさ。ま、負けるとしたらあちらの三人の最高位（エース）が本気を出したときぐらいだろう。轟坂小梨もふくめ、最高位（エース）たちは異常だ。通常が異常に勝てるわけがないだろ」「そうですが……」

「それに、異常に勝てる最下位（スペシャリスト）もいるんだ。気長にいこう」

「は、はー……」

それでも補佐の女性は心配らしくておどおどとしている。本当に、

心配性だなと猿鳶は思っていた。実のところ、猿鳶も少々の不安はある。異常である最高位（エース）たちは、要するにその学園の最高位（キング）である。最強といっても過言ではない。無敗をほこる最高位（エース）。しかも、今年の最高位（エース）達は最悪とも言える。

たとえば、轟坂小梨。彼女の別名は「無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）」。彼女がこう呼ばれている理由はちゃんとある。それは今語るべきではないが、彼女の「異常」によって、彼女はいま最高位（エース）という地位にいる。

「まあ、心配しても何も変わらないよ。最高位（エース）に勝つには最下位（スペシャリスト）であり、最下位（ラスト）である彼にしか出来ない仕事だよ。最下位（ラスト）であるが故に最下位（スペシャリスト）。最下位（ラスト）であるが故に最下位（ジョーカー）なんだ。別名――最下位（ワイルドカード）。そんな彼だから私は興味を持った」

「たしかに、彼は通常でも、異常でもない特別です。しかし、そこまで評価して宜しいのかと……」

「ははははは――、確かに不思議に思われても仕方がないな。いや、本当は違う理由がある」

猿鳶は目を伏せて、静かに語る。

「彼が――私の尊敬する霧雨羅羽の兄だからだよ……」

The second Apollon and Amoine（アポロンとラ

緊張を通り過ぎて、感動を覚えるほどに今の感覚におぼれていた。歓声、歓声、歓声。この言葉しか今の状態を説明できる事がない。中庭の中央へ足を進めるたびに、周りから浴びせられる声は大きく、感動できるものである。いままで、このような声を感じたことはほとんどなかった。なおさら、今の感情を大きく膨れさせている。

ある程度中央まで来ると、目の前にいる三人がこちらに笑みを浮かべて見つめてきた。こちらもつられて口元がつりあがる。もちろん、隣にいる二人とも同様である。

「やあ、隈井（くまい）君」
「どうも、狩亜（かりあ）先輩……」

隈井と狩亜先輩は六人の中で誰よりも早く口を開けた。なにかしら因縁があったのは知っている。だが、試合――もとい、死合が始まる前からここまで殺気立たなくてもいいだろうと、俺は思った。でも、仕方がないことも分かっている。

それだけ言うと、二人は無言を通して、睨み続ける。俺はその様子をちらちらと横目で伺いながら残りの二人――自分の義姉と、ランキング一位を見つめた。見慣れている義姉が、いつもより遠い存在に、いつもより怖い存在に、いつもより楽しい存在に感じる。そして、轟坂小梨（とどろきざかこなし）先輩。この学園の一番の実力者にして天才で天災。

「こんにちわ、宝香（ほうか）先輩♪」
「こんにちわ、乃愛（のあ）ちゃん。いつも愚弟がお世話になってるわね」
「いえいえー♪　ライライにお世話になっているのは私の方ですよ

ー」

今度は国塚（くにづか）が宝香さんに話しかけた。まえまえから知っていたが、二人は友人のようだ。と言っても、いつも話の内容は大体、俺である。まあ、簡単に言うならば俺の日常生活についてお互いに情報交換らしい事をしている。何故かって聞かれても、俺が理由を聞きたいぐらいだ。

さて、俺は改めてランキング一位――小梨先輩を見てみた。地面につきそうな長い黒髪。大きな二重に、小さな唇。スタイルも良くて、非の打ち所もないような少女。見ているだけで分かる――完璧すぎる人間だと。俺も、改めて彼女のすごさを実感した。

ふと、彼女と目が合った。するとどうしたことか、すぐにそっぽを向かれてしまった。はてー？　俺は嫌われるような事をしただろうか？　よくよく見れば顔も赤い。そこまで怒らなくてもいいと思うのは俺だけだろうか……？

『それでは、最終試合――決勝ステージを始めようと思います！』

実況の先生の声が会場に響く。さーて、どうでもいいけど、テンションがあがってきた。

「どうする？　しょっぱな俺が行くのはまずいだろう？」

隈井にそう呟くと「あたりまえ」という答えが返ってきた。やはりここは初めに隈井だろうか？　隈井なら、狩亜先輩に勝って、今の三位という順位にいる。だが、その順位が何かしらの不具合だと言う事も分かっている。実際に、どちらが勝てるかわからない。

と、考えているうちに国塚が前へ出た。

「国塚？」と、俺の呼びかけに笑顔で振り向いた。

「さっきの試合、私は活躍してないからね♪　ここは活躍させてよ♪」

それだけ言うと、てくてくと、前へ出て行った。それを見た宝香さんは、やれやれと言う気持ちで国塚と同じように自ら前へでた。その様子をやはり、チームメイトの二人は不振に思ったらしい。眉間に二人はしわを寄せて、宝香さんを見つめていた。

「宝香？」

「まったく、狩亜は龍牙としたいって言うし、義弟には小梨しか勝てないし、結局は乃愛ちゃんがでてきたらあたしが出るしかないじゃない」

やれやれと言った感じでそういった。確かに、宝香さんの言う通り、この試合は初めから対戦相手が決まっているようなものである。因縁のある狩亜先輩と隈井の組み合わせ、最高位と最下位の俺と小梨先輩、そして余った国塚と宝香さん。たしかに、決まっている。

「さてと、乃愛ちゃん。容赦はしないわよ？」

「望むところですよー。私をなめないでください」

国塚はスカートのポケットから扇子を、宝香さんは二丁の拳銃を取り出した。

「「魔術、開放（オープン）！」」

二人の叫び声と同時に、いつものように言葉では説明不可能なエネルギーがあたりを包み込み、二人の体の中へ吸い込まれていく。それが終わると、宝香さんはすばやく拳銃の先を国塚へと向ける。

「速攻！　補充（リロード）！」

宝香さんの叫びにあわせて、拳銃に何かしらのエネルギーが溜め込まれる。目でも確認できる魔術エネルギーの塊が拳銃に吸い込まれる。そう、宝香さんの魔術――俺がもっとも見てきた魔術。

「乃愛ちゃん、手加減ナシよ！」

宝香さんは吼えるように叫び、獲物を捕らえるような目で国塚をみていた。ありゃ、下手したら一撃で決めるきだ。一撃で、たった一撃で国塚をしとめるきである。だが、国塚も完全な魔術（マジック・エンタイアティ）の使い手である。そう、簡単に負けるはずが――……

「炎の銃弾（ファイアーバレット）！　灼熱（フレア・サタン）の魔王！」

銃弾から放たれたのは、直系十メートルほどの巨大な火の玉。もちろん、誰もが目を疑い、誰もが口を大きく開けた。火の玉には口の目らしきものが確認できる。目は、国塚をじっと捉えていることが分かる。十メートルの炎の玉……。

訂正しよう。

もしかしたら、国塚は負けるかもしれない。

「あたしの魔術は知っての通り炎よ。ま、コレがあたしの得意魔術。灼熱（フレア・サタン）の魔王。龍牙の水（フラード）の災いよりも、早いし大きい。そして何より

――破壊力は最大。ま、小さな太陽と思ってかまわないわ」

たまったものではない。まさか、しょっぱな灼熱の魔王（フレア・サタン）が出てくるとは思いもしなかった。いや、最大級の魔術、太陽の神（アポロン）が出ないだけでもましだった。いや、状況は結局最悪だ。

「おおー、大きいですねえ♪」

「のんきなこと言ってる場合じゃねえぞ！」

隈井の言うとおりである。そんな馬鹿なことはどうでもいいから、すぐさまアレをどうにかしないと焼き殺されてしまう。いや、殺しはしないと思うが、相当痛いと思う。たぶん、体の半分も残らないだろう。ああ、最悪だ。

「さて、どうする乃愛ちゃん？　今すぐ焼き殺すこともできるのよ？」

やっぱり殺す気でいるらしい……。

「ふふふふ、私をなめてもらっちゃあ、困りますよお♪」

桜の絵が描かれた扇子で口元を隠して笑う国塚。何かしら策があるのか？　あるとしたら、それはまだ俺達に見せていない魔術。新しい風の魔術だろう。風の魔術は使い道によっては無限である。初めの試合に使ったときのように、風で攻撃をさえぎる風の城壁（ウィンド・ウォール）や、風をナイフのように飛ばす踊る風神（ダンシングウィンディー）など、色々ある。それ以外の使いようは、良く知らないが……。

「なら、見せてもらおうかしら！」

その言葉と同時に、灼熱の魔王（フレア・サタン）が大きな口をあけて国塚に迫りよる。その速さはあまり早くないが大きさでカバーできている。つまり、今から逃げても、逃げ切る事は不可能である。それが、あの魔王の恐ろしいところだ。

だが、国塚は動かない。

まずい！

「国塚！」

叫びと同時に魔王は地面と国塚をサンドイッチにするようにしてのしかかった。地面は業火でやかれ、アレに潰されたとなれば、国塚はただではすまないだろう。その姿を俺達二人はただ呆然と見つめていた。何もしないで終わる、なんて悲しいことだろうか。てか、本当にしゃれになってない。

「国塚！」

もう一度叫んだが、魔王の下から返事が来るわけがない。それを確認すると宝香さんは不敵な笑みを浮かべて勝利を確信した。いや、何か喜んでいる。

「そうこなくっちゃ、乃愛ちゃん」

宝香さんがそう呟く。そしてほぼ同時に魔王に変化が現れた。憎たらしい表情だったのがいっぺん、苦しむようにもがき始めた。だが、先ほどのところからは動くことなく。ただただ、大きな体が左右上下に揺れるだけである。

それがしばらく続いたかと思うと、今度はぴたっと動きが止まった。そして――

ドッカーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！

と、派手な音を鳴らして爆発した。砂煙が立ち込めて、あたりが何も見えなくなる。俺も隈井も自らの腕で顔を覆うように守り、砂が目に入らないようにした。ある程度砂煙が収まったかと思い、ゆっくりと目線を魔王がいた場所へと移すと――

そこには無傷の国塚が立っていて――

手には緑色の巨大な扇子が握られていた。

「ほほう――」

爆風なんて気にもせずに、宝香さんはじっくりと国塚を睨み続ける。その目は敵意と期待に満ち溢れていた。国塚の方も静かに、そしていつもどおりの笑顔で宝香さんを見ていた。両手には例の巨大な扇子が握られている。

「そういう使い方もあるか……」

そういう使い方、というのはその巨大な扇子は、もともとは国塚の持っている通称ウッチーと呼ばれる扇子である。その扇子に風をまとい、巨大化させたものがアレらしい。見た目も少々変わっているが、大きさがまったく違う。普通の扇子から、両手で持たなければならないほど大きくなっている。だが、重さは変わらないはずだ。むしろ軽くなっているはず。それが、風の無重力という特性だ。

「なるほどねえ。考えたわね、乃愛ちゃん」
「はい♪　瞬時に風をウッチーに集めてこの大きさまでにして、魔王の攻撃に耐えてましたあ。それで、大体演出的にもいいと思ったので、そのまま扇子でまっ二つです」
「まっ二つ、ね。簡単に言うけど、至難の業なのよ？　アレを倒すのは」
「はい、ちょっと魔術エネルギーを使いすぎたと自分でも自覚しますう。でも、まあ、それはお互い様でしょう？」
「確かにね。魔王はなんだかんだ言って、魔術エネルギーを大量に使うわ。ま、燃料切れになるまでは、まだ程遠いけど」
「それも、お互い様です♪」

笑顔で話す二人の間には、殺気とまじった魔術エネルギーがぶつかり合っている。赤いエネルギーと緑色のエネルギー。目で確認ができるほど濃いエネルギー。コレほどまでの魔術エネルギーは俺も始めてみるかもしれない。それだけ、二人が本気だと言う事だ。

「それじゃあ、行きますよおー！」

扇子を空高く投げると、国塚は両手を天高くあげて、叫んだ。

「風よ！　嵐となりて、我の剣とならん！」

詠唱と同時に扇子はひとりでに回転を始めて、竜巻と変わっていく。大きさは、先ほどの灼熱の魔王（フレア・サタン）をしのいでいる。小さな台風が中庭に現れたような感覚である。砂煙や、いろいろなものを風で巻き込み、観客や、俺達も吸い込まれないように踏ん張るほどだ。その台風の隣に、何もないように立っている国塚。それを同じようにみている宝香さん。

「なるほどねえ。その魔術、名づけるならなんと言うの？」
「そうですねえー、まあ、巨大な嵐と言うことで大いなる嵐（ランドスパウンド）とでも名づけましょうか♪」

大いなる嵐――ランドスパウンド。確かに、その名にふさわしい魔術だ。大きな竜巻は、その場で今は留まっているが、あれが動き出すとしたら、そうとうの被害が出るはずだ。それだけ、強力で、完成された魔術――大いなる嵐（ランドスパウンド）ということだろう。

「なるほど、確かに陸上でできる竜巻は移動距離が短く、寿命が短いと言われるが、その破壊力はすさまじいって聞くわ。たしかにこれは風の魔術の最終形態ね」
「褒めても何も出てきませんよおー♪　その代わり、ふっ飛ばしてあげますよ！」

いっけー！　という叫び声に反応して、竜巻はもう突進で宝香さんに突っ込んでいく。地面をえぐり、石を巻き込みながら、竜巻は進んでいく。その光景はアメリカなどでよく見るハリケーンを目の当たりしている気分だ。じつに――恐ろしい。

「あら、意外に早いわねえ」

宝香さんが、のんきにそういった。焦った様子はまったくない。そう、まったく恐れと言うものを感じていないのである。目の前にある竜巻に恐れを感じず、死と言う恐怖にも恐れず、なお、俺達全員に余裕と言うものを見せる。

これでは――

先ほどの国塚と同じじゃないか……――。

「国塚！　今すぐ逃げろ！」
「へ？」

俺が叫んだときには、もう遅かった。宝香さんは二丁の拳銃を竜巻にむけて、口元を吊り上げる。この自信、アレ――太陽の神（アポロン）を出すつもりだ。

「もう遅い！」

宝香さんの拳銃に赤いエネルギーがどんどん吸い込まれていく。その量は魔王を出したときよりも、比にならないほどの量だ。本当に――アポロンを出すつもりである。

「炎の銃弾（ファイアーバレット）！　太陽の神（アポロン）！」

叫び、吼えて、二つの銃口から放たれた炎の塊は一つに合わさって、竜巻を真ん中から貫通した。その光景を国塚は唖然と、そして呆然と見つめていた。あたりまえだ。自分の新作の魔術、しかも最大級ともなれば、そのショックは大きいだろう。

竜巻が煙のように消えて、ひらひらと扇子が中をまう。そのまま、国塚の足元まで飛んでくると、音も立てずに地面に落ちた。だが、国塚の目線はただ、まっすぐに、宝香さんを見ていた。そして――

「どう？　コレが私の最終魔術、太陽の神――アポロンよ」

炎の塊は竜巻を貫いたあと、ブーメランのように宝香さんの隣まで戻ってきた。そう……生きているかのように。宝香さんの隣にいるアレ――体全体が炎で包まれ、人の形をしている。身長は三メー

トルほどで、火の巨人と言った方が、イメージがわくだろう。

アポロン――ギリシャ神話に登場する主要の神。オリュンポス十二神の1柱とされている。太陽をつかさどる神とも言われる。しかし、本来は予言、牧畜、音楽、弓矢の神である。太陽の神と言われる理由は光明神の性格を持っていた為、太陽神のヘリオスと混同された。だが、ヘリオスの後任としてアポロンが太陽神とされている為、太陽の神はアポロンでも間違いではない。

「どう？　私の太陽の神は？　素晴らしいでしょ？」

宝香さんの言葉に何も答える事ができない国塚。

「さて、乃愛ちゃん。もう、私に勝てる手段はないわよ。さっさと降参しちゃいなさい」

「……」

その言葉には何も返事をせずに、足元にある扇子を拾い上げた。その様子をみて、宝香さんは肩をすくめた。もう、国塚は戦う気力がないのだろうと判断したらしい。返事ができないほど、ショックだったのか。

「先生、この勝負もう私の勝ちでいいんじゃ――」

「なーーーんてね♪」

突然、国塚は笑顔で顔を上げた。その笑みは先ほどの落ち込みようとはまったく別のものである。誰もが国塚の様子を不審に思った。いや、俺も思うが……。

「なるほど、アポロンねえ。なら、仕方がありませんね♪」

「仕方が……ない？」
「ええ、だって神様だもん。そんなものに勝てる魔術なんて、同じ神様と学園の最高位と最下位ぐらいしか倒せませんもんねえ♪」
「……何が言いたい？」
「私がこうやって、自信満々に話しているんですもの。気づいてくださいよ♪」

国塚は扇子を開き、右手で握ると、ばっと、後ろへ煽った。そして――国塚の隣に風が小さな竜巻をつくる。その様子を観客、俺達、そして宝香さんは見守るように見つめている。

「まず、宝香さんは勘違いしています。確かに大いなる嵐（ランドスパウンド）は新作の魔術で、いとも簡単に破られたのはショックでしたよお」

国塚は続ける。

「でも、誰もアレが私の最強の魔術なんていってませんよね？」
「……まさか」
「そのまさかですよ♪　言いましたよね？　神様に勝てるのは――神様だけだと……」

小さな竜巻が一気に大きくなり、すぐに破裂するように周りへ飛び散っていった。代わりに、先ほどの場所には、羽の生えた黄緑色に発光する一メートルほどの人が四人立っていた。そう、宝香さんの太陽の神（アポロン）と同じように。

「コレが私の最強で、最終で、最後の魔術！　最高傑作！　その名も、風の神（アネモイ）！」

アネモイ――ギリシャ神話に出てくる風の神達。東西南北をそれ

ぞれ司る、４柱の神達である。ボレアースは冷たい冬の空気を運ぶ北風とされ、ノトスは晩夏と秋の嵐を運ぶ南風であり、ゼピュロスは春と初夏のそよ風を運ぶ西風である。東風のエウロスはどの季節とも決め付けられていないが、４柱の中では一番上位に立つアネモイとされている。

「さあ！　宝香さん！　４対１ですよ！　絶対に負けませんからね！」

「……ふふふふ、ははははは！　面白い！　一気に四対も作り出せるか！　コレは傑作だね。なるほど、と言う事はコレは私のアポロンと同じつくりかたか」

「はい。自分の魔術エネルギーを１００％の成分として象る。だけど、その威力は絶大」

「あたしだけかと思ったんだけど、さすがね。まあ、月下の魔術と似てるから、そこからとったのかな？」

「いいえ、大分前から考えてましたよお」

「なら、あたしと同じね。なおさら――面白い！」

五体の神と、二人の上位ランカーの戦いはまだ続くようだ。

The second Pantheon of truth and fal

二ヶ月以上待たせることになってまことに申し訳ありません。
このたび、改名をして、夜月猫から猫之宮　夜へと変更しました。
これからもよろしくお願いします。

The second Pantheon of truth and fal

過去を振り返り、魔術の歴史を学ぼうと思ったら、それは旧石器時代までさかのぼらなければならない。この時代における魔術言うのは雨乞いや治療、祈祷などを魔術と呼ばれていた。それらは占術、呪術ともよばれ、人々の悩みを解決するもとして使われていた。この呪術的行為が魔術の原点とも言えるだろう。卑弥呼も占という魔術を使い、人々の悩みを解決していたそうだ。

過去の偉大な魔術師といえば卑弥呼もその一人だが、もっとも雄大で――盛大で――強大な魔術といえば、『アレイスター・クロウリー』その人だ。この学校でも魔術の基本知識として彼のことを習う。教科書にも書いてある彼の有名な言葉――「魔術とは意志に応じて変化を生ぜしめる学にして術である」（Ｍａｇｉｃｋ ｉｓ ｔｈｅ Ｓｃｉｅｎｃｅ ａｎｄ Ａｒｔ ｏｆ ｃａｕｓｉｎｇ Ｃｈａｎｇｅ ｔｏ ｏｃｃｕｒ ｉｎ ｃｏｎｆｏｒｍｉｔｙ ｗｉｔｈ Ｗｉｌｌ）と彼は定義し、言ったそうだ。

クロウリーは自信の魔術と旧来の魔術の区別をつけるためにＭａｇｉｃｋ（マジック）と呼ばせたらしい。これが俺の使う旧来の魔術――グレメリーと、今全世界で使われている魔術――マジックとの違いである。

ここで分かれた。

簡単に言うなら俺が古い魔術を使い、世界が新しい魔術を使っている。だが、新しいものよりも原点である俺の魔術の方が特殊――いや、癖があるといった方がいいだろう。

それが俺と――クロウリーの違いだ。

それが真実と虚実の違いだ。

だが、クロウリーが存在したか存在してないかというと、答えはＮＯでもＹＥＳでもない。誰も見たことがないからだ。誰も見ることの出来ない過去のことだからだ。魔術がこの世にあったかなかったか、なんて誰も知るよしもなかった。

しかし、この現代にある少女――の頭脳により魔術が復元された。当時、クロウリーが使ってたとされる魔術だ。道具を使い、超常現象を発生させる。それをマジックと呼び、魔術と書いた。虚実の魔術で完成された魔術。不完全でもある。だからこの世に二つの魔術――完全な魔術と一不完全な魔術が生まれた。

そのときに使用された公式があるらしい。その公式はクロウリーが開発した公式に、少し数字を足したものだという。その公式は世界を揺るがし、世界を導いたともいえるだろう。

話しは変わるが、クロウリーは何かしらの生き物を練成することも出来たらしい。フラスコ内でしか生きられない生物――ホムンクルス。吸う引きの動物を合成して作る獣――キマイラ。これらも魔術といえるものだろう。まさにお入れが使う召喚魔術のようだ。

そして、この目の前にいる二人が従える神々。太陽の神――アポロン。風の神――アネモイ。この神々も魔術エネルギーによって練成され、合成された生き物なのだ。生きているのだ。魔術は生物までも生み出せる神を侮辱した存在。

⇔

「ふふーん♪　宝香さん、アモイネは北風のボレアース、南風のノトス、西風のゼピュロス、東風のエウロス。この四柱でアネモイ一つなのですよぉ！　特に東風のエウロスは四柱の中でも一番上位に立つ神！　そう簡単には負けませんよ！」

叫ぶ国塚の後ろには白い羽を生やした黄緑色の神が四体いる。大きさは国塚とさほど変わらない。大きくはない。だが、一体だけ羽が左右あわせて四枚ついている奴がいた。あれがエウロスなのだろう。

一方、宝香さんは面白そうに口元をゆがませる。彼女もまた、後ろに炎に包まれた三メートルほどの巨人。アポロンである。人型であり、体から吹きあふれる炎は太陽の神を思わせる。アポロンは青年の神なのでコレといって特徴がないと言われるが、太陽の神と言うことで炎に包まれているのだろう。大きさも三メートルと大きめ。これが宝香さんの最終魔術。

「たしかに、四対一は普通は厳しいかもしれないけど、あたしにゃあ関係ないわ。アポロンは太陽だよ。この太陽神は巣で手の命の源だ。風なんかに負ける気はないね」

「言ってくれますねえ。でも、その太陽の神をもってしてもライライに勝てる自信はないんですねえー」

「まあな。アポロンはどの道、魔術（マジック・エンタイアティ）だ。完全な魔術であったとしても、真実（トゥルー）には勝てないさ」

そうである。結局はこのアポロンもフェイクであり創造でしかないのだ。本物の神ではない。神と言う名を借りて存在している魔術エネルギーなのだ。虚実である。嘘を真実であると偽っているのだ。俺の魔術は本物を召喚し、魔術エネルギーを器にしている。中身は真実であり、本物だ。

「なら、完全な嘘つき同士、盛大にやろうじゃないか！」

宝香さんは吼えて、アポロンへ命令を下す。自分が神だというように。

「じゃあ、私もおもいっきりやっちゃうよ！」

国塚は叫んで、アネモイへ命令を下す。自分が神だというように。

「アポロン、限界熱気（オーバーヒート）！！」
「アネモイ、最大風力（モメントリー）！！」

審判を下すように二人が言った後、アポロンは体中の炎の激しさが増し、右腕から炎の渦を発生させ、一直線にアネモイと国塚を狙った。アネモイも四体が四角形になるように陣をとり、四角形から大量のエネルギーを放出させた。それはまさに渦巻く風のようだ。

ぶつかる。そう思ったときは二つのエネルギーは繋がり、世界を揺るがしながら攻撃を続けていた。そう、一つの橋のように風と炎は繋がっていたのだ。中央に壮大なエネルギーが生み出されているに違いない。壮絶なエネルギーが。

「アネモイ！」
「アポロン！」

二人が叫んだ次の瞬間、爆発が起きた。

その爆発は俺と春之美先輩との試合に起きたあの爆発と同じ威力だった。アイギスと雷刀との衝突。衝撃。衝動だった。全てが何も

かも――破壊されていく。なにもかも。あとかたも残らないように。それが強大なエネルギーのぶつかかった結果だ。

爆風は前回と同様、中庭全体を包み込んだ。コレもまたどちらかが気絶してどちらかが運良く助かる。そんな結果で終わってしまうのか。あまりにも悲しすぎる。俺達はそんな戦いは望んではいないのではないか。俺はただ楽しみたい。だが、殺し合いである。難しいところだ。上手くはいかない。

爆風が収まりかけたとき、目の前には二人の少女が立っていた。自分が従える神々に守られながら……。

アポロンの炎はほとんど消えかかっていて、体は墨のように黒くなっている。膝を突いて腕をブラーんっと下ろしている。もう、今は神としての役割を果たせることは出来ないだろう。アネモイたちも羽をもがれ、腕や足もなくなっているものもいる。

そんな神に守られた二人は力尽きたようにその場に倒れこんでいた。結果は分かっている。魔力切れだ。魔力が足りなかった。二人が出した大技。それを防ぐ為の魔術エネルギー。魔力切れになるには十分な理由である。いや、この二人の戦いだからこそ、魔力切れが起きた。

そういうことだ。

『おおっと！　ここで二人とも魔力切れのようだ！　ということは、決勝ステージ第一試合はドローだ！』

実況の教師が叫ぶ。ああ、叫びたい気持ちも分かる。第一試合がドロー。これはものすごく面白いことになっているから。さてはて、

残りは俺と隈井。対戦相手はランキング一位と六位だ。

⇔

イギリスのとある学園。その事務室で一本の電話が鳴った。それを男性教師が何気ない気持ちでとる。声の主を聞いて眉をひそめた。

「学園長、何処へ行ってたのですか？　……ええ、ええ。はい……、分かりました」

それだけ言うと、相手が電話を切ったことを確認して、自分も受話器を置く。ふうと溜息をつくと通りかかった女性教師を呼び止めた。

「すみません、クルー君とアルエル君、トーマラさんを至急ここへ呼んでください」

⇔

アメリカの会議室。そこには学園長であるジュリー・エネラルが座っていた。その周りを数十人の教師が囲んでいた。彼らはわずかながら緊張していた。緊迫した雰囲気が漂う。ジュリーは一通り教師達の顔を見た後に口元を緩めた。

「この試合は戦争と思ってもらってかまわないわ。この学園からは上位三名を出そうと思う。意見があるものは？」

そうたずねられたが、誰も口を開かない。それもそうである。学園長の意見に反すればクビは決定だ。

「では、今すぐグレイ、サラ、トレンスに日本へ行く支度をしろと伝えろ」

⇔

「というわけでねぇー、君たち三人には日本へ言ってほしいのー」

白衣の女性、浩亜遜（こうあそん）高等部学園長――燕泊。彼女は学園長室にある三人の生徒を呼んだ。常イランカー。一位から三位までだ。赤色のチャイナ服の女子生徒と青色の学ランを着た少年。これまた胸元を大きく開けた白いチャイナ服を着た女子生徒がならんでいた。

「オウケイですよ！　私に任せるアル！　この爛々（ランラン）に期待アルよ！」

と赤いチャイナ服の女子生徒。

「分かりました。僕達が何とかしましょう。浪煉（ロウレン）がどうにかします」

と青い学ランの男子生徒。

「承知しました。この恋花（コウファ）にお任せあれ」

と白いチャイナ服の女子生徒。

こうして、次への戦いは着々と進んでいるのだ。俺の知らないところで。この清流学園のしらないところで。そして全てが可笑しな、不思議な、似非的な方面へと進む。それが魔術であり――マジックだ。

The second Eight spirits of the dead

とってもとっても遅くなりました！
自分を殴りたい……

The second Eight spirits of the dead

今から約一年前。学園始まって以来の大事件が起きる。生徒会会計――狩亜純樹（かりあじゅんき）。またの名を神の召喚士（ゴッド・サモン）。魔術が開発されて、たった一ヶ月で上位精霊を呼び出した天才。そんな彼がこの日本有数の魔術学園のなかでもトップレベルである（実際、日本一なのだが）清流学園に入学することは必然的なものであった。

一年生のときから生徒会に入り（実際は今のメンバー全員一年生から生徒会である）、ランキング三位というものを勝ち取った人物である。その順位は誰もが卒業するまで換わらないものだと思っていた。

だが、その法則（ルール）を破ろうとする人物が現れた。

それが、現三位の人物。隈井龍牙（くまいりゅうが）その人だ。隈井の魔術エネルギーは生まれつきのもので、こちらも天才と呼ぶにふさわしい人物だ。俺の幼馴染であり、親友。彼との接点は誰よりも俺が多いだろう。そんな隈井がこの清流学園に入学して、わずか三ヶ月という化物じみた速さで六位の座まで上り詰めたときは流石の俺も驚いた。

魔術が一般化されたのは俺達が中学二年生のとき。中学三年生の時に初めて科目に「魔術」というものが追加された。もともとこの清流学園は進学校だったのだが、国が魔術校に指定したため、三年前から魔術という科目とランキングを設置した。初代生徒会長はランキングが相当下だったらしい。それもそうだ。魔術が追加されて。初めてその人の魔術エネルギーを知ることが出来るのだから。次の年から、生徒会選挙でよく見られるようになったのはランキングである。

そのため、次の年からランキングの高かった――いや、純粋に天才だった四人が選ばれた。それが現生徒会である。と言うことは、この四人は学園が選んだ最強なのだ。

はなしは戻るが、その最強の一人を倒そうとした隈井が選んだのは狩亜先輩なのだ。理由は――勝算があったわけではない。ただ、彼に勝ちたいと入学当初から言っていた。魔術を初めて扱ったのは入学してからである。中学三年生では、知識を覚えるだけで使ったことはなかった。

入学して装置は自分達で用意しなくてはならない。前にも言ったが、装置を揃える為に、それなりの金と地位が必要なのだ。隈井の場合は、俺の義妹の羅羽（ラウ）という存在がいたので、彼女から作ってもらったのだ。中には、自ら作ったと言うものもいる。

また横道にずれたが、最終的に言いたいことは、その一年前に隈井が狩亜先輩を倒し、それが八百長である可能性がある、という情報がある。そのため、次の試合は隈井の負ける確率が高い。そして――一年前の過去を語る必要があるということだ。

⇔

『さて、決勝戦も盛り上がってまいりました！　それでは第二試合を開始します！』

アナウンスが聞こえると、隈井は肩をすくめてやれやれと言った具合で、足を踏み出した。無言で俺の顔を見た。俺は何も言わずに

肯く。それっをみて一瞬微笑、再び歩み始める。向こう側も、狩亜先輩が中庭の中心へと向かう。

「やあ、隈井君」

「どうも、狩亜先輩」

「無愛想だね。まあ、うん。僕は結構楽しみにしていたんだけど、君はどう？」

「俺も結構楽しみにしていましたよ。今度こそ完全勝利を収めれる為にね」

「なかなか言うねえー。あ、それとウィッチは元気そうでなによりだよ」

「もと相棒が敵に回るのは辛くないですかね？」

「辛いと言うよりも、変な感じがする。苦しいやら嬉しいやら悲しいやら……。まあ、結局のところ、僕は君の実力を計りたい。七瀬姉に負けたときはアレだったけど、上手くウィッチを使えば勝てたんじゃないかな？　と言うよりも、ウィッチと君はきちんとシンクロできている。たぶん、三位という順位に恥じない強さだ」

「お褒めの言葉、嬉しいです。でも、ウィッチを使ったとしても、貴方に勝てるかどうか…。偽りの三位を捨てるべきか……。でも、勝てばいいんですから、今度こそ本当に勝って、三位という数字を証明します」

「うん、その勢いだ」

ある程度の会話をやめると、隈井は無言でトンファーを取り出し、構える。狩亜先輩は首にかけていたネックレスを露にし、笑みを浮かべる。

『さて、それでは――試合始め！』

「「魔術、開放（オープン）」」

二人の叫び声と共に魔術エネルギーが爆発する。隈井の魔術エネルギーは今までの試合の中でも極端にでかい。今まで温存していたことを感じ取らせる。隈井と同様に、狩亜先輩も巨大なエネルギーを体から発する。エネルギーだけで見ると、結果はドローだ。

「炎の魔女（ファイアーウィッチ）！」

第二声とともに現れたのは青と赤を主張した巫女服を着た手のひらサイズの少女。赤髪が良く目立つ。彼女は空中で一回転すると、隈井の頭の上へと着地した。

「ここに姿を現せ――風の妖精（ウィンドフェアリー）、水の女神（ウォーターガイア）、土の戦士（アースソルジャー）、氷の帝（アイスエンペラー）、雷の将軍（ダージェネラル）、光の天使（ライトエンジェル）、闇の混沌（ダークカオス）」

祈るように呟くと、何処からともなく七人の精霊が何処からともなく現れた。七人はそれぞれ特徴的なので、すこし解説を入れようと思う。

「あらあらー？　あらー？　ウィッチじゃん久しぶりんご～」

と、のんきに手を振る緑色のウエーブのかかった髪で踊り子のような姿をしている少女。彼女が風の妖精である。名前はフェアリー。

「ほんとだわ。あんな下衆な男とにっしょにいるなんて、どうかしているわ」

と、冷たい言葉を投げかけるのは、青色の髪が特徴的で青い着物を着た少女。彼女が水の精霊である。名前はガイア。

「ひゃっほう！　ひっさびさの戦闘だぜぇ！！」

と、一人で無駄にはしゃいでいるのは、茶髪で迷彩柄のバンダナを額につけて、軍人のような服を着ている少年。彼が土の精霊である。名前をソルジャー。

「なんだか、楽しそうですわねえー。あ、魔女さんお久しぶりですわね」

と、おしとやかに言うのは、水色の髪の毛が特徴的でドレスを身にまとった少女。彼女が氷の精霊である。名前をエンペラー。

「我、汝、破壊」

と、よく分からないことを口走っているのは、全身黄色に輝く鎧を身にまとい、顔も見えない少年。彼が雷の精霊。名前をジェネラル。

「皆さん！　ハッピイーですか！　私はハッピーです！　って、あれ？　ウィッチさんじゃないですか」

と、一人ではしゃいでいるのは、白髪が特徴的で、天子の真っ白の服を身にまとった羽を生やした少女。彼女が光の精霊。名前をエンジェル。

「……殺」

と、恐ろしいことを言っているのは、頭を包帯でグルグル巻きにして顔を隠し、黒いローブをまとった少年。彼が闇の精霊。名前をカオス。

この七人――いや、八人が狩亜純樹の最高傑作。最高位の精霊たち。そして、神の召喚士――ゴッド・サモンとよばれる理由である。精霊一体一体の魔力はランキング上位に食い込むレベルである。よって、隈井はこれから八人と同時に戦闘することになる。

「うるさいわよガイア！　リュウガ様を馬鹿にするのはゆるさないんだからね！」

「あらあら、そんなに熱くならなくてよろしくてよ？　これだから暑苦しい炎は嫌いなのよ」

「なによお！？」

ウィッチとガイアが喧嘩を始めた。さすが炎と水というか、相性が悪いらしい。隈井の頭の上でドタバタと怒りの表情を浮かべるウィッチにたいして、ガイアは狩亜先輩の右肩で平然とした様子で立っていた。その様子を見て、狩亜先輩がくすっと笑う。

「君たちは相変わらずだね。味方でも敵でも変わらないのは流石だよ」

「……ジュンキ様。このガイアはあんな裏切り者とはちがいますからね」

「ははははー。ガイアちゃん必死だねえ」

ガイアを馬鹿にするようにフェアリーは名前の通り、妖精のような小さな羽でパタパタと飛び回る。ガイアはうっとうしそうにソレを見つめて、そっぽを向いた。

「まあまあ、喧嘩するのはそこまでにして、そろそろ始めようか」

「よっしゃきた！　俺に任せろ！」

狩亜先輩の声にすぐさま反応したのはソルジャーだった。彼が小

さな体で自分の体と同じ大きさの剣をどこからともなく空中から取り出すと、ソレと隈井とウィッチに向かって振りかざした。

「ウィッチくるよ！」

「はいです！」

すぐに二人も戦闘の体制をとる。同時に、振りかざされた大剣からは巨大な岩の塊が出てきた。直径、およそ二メートル。それも結構な速度で発射された。当たったらひとたまりもないだろう。この距離から移動して避けるのはなかなか難しい。

「地獄の業火（イフリート）！」

ウィッチの叫び声に反応して、岩と隈井たちの間に巨大な炎の巨人が現れた。炎の塊――イフリート。宝香さんの最高傑作魔術、太陽（ポロン）の神と同等の強さを誇る巨人。もちろん、二メートルほどの岩などふれる前に灰にしてしまった。

「水の波（ウエーブ）！」

すぐさま、イフリートの背後から奇襲とも呼べる隈井の水の魔術が発動した。水の災い（フラード）とは違い、小さな水の球体がいくつも狩亜先輩めがけて飛んでいく。連射に特化した魔術だろう。

「ジェネラル」

「御衣」

静かに雷の精霊の名を呼ぶと、ジェネラルは一歩も動くことなく、ただ呟いた。

「……封」

声と共に現れた透明なガラスのようなもの。狩亜先輩を守るようにして現れたのだ。もちろん、それによって水の波（ウエーブ）は防がれた。さすが狩亜先輩、奇襲にもあわてることなく、防御に特化したジェネラルを使ってまもるなんて。だが――隈井も負けてはいない。

「甘い！」

いつの間にか水の災い（フラード）のチャージが１００％完成した隈井の姿がイフリートの体が右へ移動した瞬間現れた。そう、イフリートを壁に、水の災い（フラード）のチャージをしていたのだ。威力の高いこの攻撃の弱点はリロードまでの時間。相手に隙を作ってしまう。だが、イフリートという巨人に目線をいかせ、尚且つ、先ほど撃った水の波（ウエーブ）で気をそらしたのだ。

今日まで、どの魔術決闘（マジックバトル）で１００％の水の災害（フラード）を放ったことはない。いままで手を抜いてきたのだ。それは弱点の所為である。だが、今回はソレを克服した。その結果、チャージできた水の塊の大きさ。――実に十メートル。

その大きさに気づいたのはイフリートの大きさを超えたからだ。一瞬、狩亜先輩も目を見開いてしまった。七瀬幹奈（ななせみきな）先輩と朝原美々（あさはらみみ）先輩の時は三メートルほどだったが、あのときの約三倍。俺の記憶上、八メートルの大きさが記録だったが、これは新記録の大きさだ。

「発射（バースト）！！」

放たれた巨大な水の固まりはさすがにジェネラルも防ぎ切れない

と判断したのか後ろに下がる。その代わり、エンジェルとカオスが前に出た。そして、二人は水の塊に恐れを見せずに、エンジェルは大きな声で、カオスは呟くように、言った。

「ふっふふふーん♪　ホーリーゲート！」

「……ダークゲート」

すると今度は黒い門と白い門が左右に現れ、扉がひらく。黒い扉からは真っ黒い炭のような無数の手が伸びてくる。白い門からは、光り輝く白いテープのようなものが黒い門と同じように無数に出てきた。そして、手とテープは互いに絡み合い、巨大な盾をつくる。

水の災い（フラード）がその盾にぶつかると、大きくはじけて爆発を起こした。爆風の所為で、狩亜先輩と七人の精霊たちは宙を舞った。その様子を隈井は睨みつけるように見て、再びトンファーの先を彼らに向ける。

「ウィッチ！」

「分かってます！　イフリート！」

隈井はすぐさま魔術エネルギーをトンファーの先へと集める。ウィッチの掛け声によって、イフリートも全身から炎を沸きただせる。イフリートの体から発せられる炎は近付いただけで灰になりそうなほどすさまじいものだ。その横で水の球体を作り出している隈井はすこし変な感じにとらえてしまう。

「水の波（ウェーブ）！」

「イフリート！」

再び水の波（ウエーブ）が放たれる。同時に、イフリートから炎の塊が全身から放たれた。二つの攻撃は一直線に狩亜先輩達の方へと向かっていく。水の無数の塊と炎の塊。二つの攻撃を防ぐのは普通の生徒では難しいことだろう。いや、ランキング十位以下にとっては不可能なことだともいえる。それだけ、難易度が高い技だ。

「ダメだよ。そんな攻撃じゃ。エンペラー、ガイア、フェアリー」

呼ばれた三人はすぐさま魔術を全身にためる。そしてガイアからは水の災害（フラード）の二倍もの大きさの水の塊を瞬時に作り出した。ソレをすぐにエンペラーが息をそれに吹きかける。すると、みるみる水の固まりは氷へと姿を変えていく。そして、最後にフェアリーが風の力によって氷の塊を前方へと発射させた。結果、狩亜先輩の放った攻撃により隈井の攻撃は粉砕され、逆に飛び散った氷のつぶてが襲う。

「っ！？」

体を転がしながらやっとの思いで避けきる。

「甘いわよ下衆男。私達精霊のコンビネーションをなめるんじゃないわよ」

「あらあら、ガイアさん。口が悪いですよ」

「ふっふーん♪　まあ、楽しいよ～。こんなのひさしぶりんご～」

ガイア、エンペラー、フェアリーはそんな会話をのんきに始める。先ほどの攻撃は確かに予想以上に息の合ったコンビネーションだった。あの二つの攻撃を流石に瞬時に受け止めるのは不可能に近い。だから、フラードほどの水を簡単に出現できるガイアの能力を使い、

そして、エンペラーが水を利用していつも以上に早く氷を作りだことが出来るようになり、その巨大な塊をフェアリーの風の能力で動かした。それぞれの特徴を活かした技。先ほどのエンジェルとカオスの盾も同じようなものだ。

水を瞬時に出現させることの出来るガイア。

すべてを氷漬けにすることの出来るエンペラー。

風を操り、どんなものでも動かせるフェアリー。

鉄壁の雷の守りを誇るジェネラル。

土を自由に操ることの出来るソルジャー。

闇の門を唯一開くことできる精霊のカオス。

光りの門を唯一開くことの出来る精霊のエンジェル。

この七体がそろえば、もう無敵である。八つの理（エイトルール）を全て使えることに等しい。唯一、炎の巨人を操る少女――ウィッチが欠けていることが彼にとっておきな穴だ。だが、ソレをも感じさせない強さ。狩亜純樹――神の召喚士――ゴッド・サモン。彼の呼び出した七体の精霊はそれぞれの分野でもトップレベルの強さを誇る。相簡単に倒せる相手ではない。

「成長したね、隈井君」

風のベールにより、浮かぶようにすっと地面に降り立った狩亜先輩。その様子をただ無言で、トンファーを構えたまま見守っていた。

警戒を怠らない。いや、やめられない。やめた瞬間に――負ける。

「僕も嬉しいよ。君がここまで強くなってくれて。うん、お世辞じゃないよ。純粋に――僕は嬉しい」

「なに言ってるんですか。俺なんてまだまだ。ウィッチだって、まだ狩亜先輩といたときの方が強かった……。俺はウィッチと上手くシンクロできてません」

「いやいや、契約者じゃない君とそれだけの戦いが出来れば、もうそれは天才だよ。僕だって彼らと最初から上手くいっていたわけじゃない。まあ、例で言えば闇の精霊――カオスなんか、僕を地獄の冥界に落とそうとしたぐらいだ。なのに、君とウィッチはなかなかいい関係じゃないか」

「それは……」

「確かに、君がウィッチの命を救ったからだ。だから、彼女は君に従うのかもしれない。でも、それだけじゃない」

「……でも」

「でも、じゃない。君の才能があったからウィッチを救えたし、君の下にいるんだ。そして、僕が育てて戦いたいと唯一おもった人物だ。それだけ、僕は君を評価している」

それも過大評価だ、と付け足した。その言葉に、ただただ隈井は眉をひそめて不愉快そうに聞いていた。ウィッチも何故か申し訳なさそうな表情で隈井の右肩に立っている。イフリートもウィッチとリンクしているかのように、炎も弱弱しく、大人しい。

「……狩亜先輩。俺の才能とゆうよりも、ただ、やってみただけなんです。偶然なんです。すべて――奇跡だったんです。貴方に勝てたのも、ウィッチを救えたのも」

「それが、才能なんだ」

「いや、俺はそれを才能と決めるなんて出来ません。アレは本当に

――奇跡なんです」

「奇跡だとしても、ソレを呼び寄せたのも君の実力だ。運も実力のうち。よくいうじゃない？　だから僕は君を過大評価して、そして満足している」

「……」

「君と僕は似ているんだ。奇跡を呼び寄せるところとか」

狩亜先輩は続ける。

「僕が魔術を使えたのも――奇跡なんだ」

狩亜純樹。彼の日常は約三年前――崩れた。

The second Eight spirits of the dead

ああ、なんかまた遅くなるかもしれません…

The second Present and the past（現在と過

大変遅くなったのに、しかも短くなって、あんかグダグダになって
しまい、誠に申し訳ありません！！

The second Present and the past（現在と過

狩亜純樹と隈井龍牙の――約一年前の魔術決闘（マジックバトル）の試合を見たものは、実は誰もいないのだ。ひっそりと行われた決闘。隈井が放課後、自分のクラスである１－Ｄに来てほしいと挑戦状が下駄箱に入っていた。その手紙を見たとき、当時の狩亜先輩は特に気にもせずにその決闘を受け入れただろう。

ソレが始まりでもある。

「はあ……はあ…」
「もう終わりかな？　隈井君？」

当時、一年生最強と言われたランキング六位の隈井は手も足も出せなかった。決闘の場所となった教室は、今は『箱』と言う空間になっており、常に中庭と同じ状況となる。つまり、壊れたものや場所はプログラムが終了すれば元に戻るということだ。出ないと――教室は跡形もなくなってしまっている。

隈井の目に映るのは腕組をする狩亜純樹。そしてその周りを飛び回ったり、座ったりしている八対の精霊。そして何よりも厄介だったのが、目の前に立ちふさがる炎の巨人。イフリートだった。この戦いの中で一番戦いにくかった精霊として地獄の業火（イフリート）を従える炎の魔女（ウィッチ）が厄介だった。ウィッチの炎により水が全て蒸発してしまうからである。案の定、先ほどからイフリートばかりが襲ってきて、残りの七体の精霊はこちらをずっと見ているだけだ。狩亜先輩も特に動かない。

「ははははは！　私のイフリートは最強なのだ！」

「ちょっとウィッチ。遊んでないでさっさと焼いてしまいなさい。そのでかいのがいると、水である私まで蒸発しそうなのよ」
「ガイアなんてさっさと蒸発してしまえばいいのよ」
「なによ！」
「やるの！」
「こらこら、二人とも」

喧嘩を始めたウィッチとガイアをなだめるように狩亜先輩が言う。その間にもイフリートは炎を噴出しながら隈井の体力を削っていった。魔術エネルギーもほとんど使い果たし、さらにはこの灼熱地獄のような部屋の中にいては体力もなくなる。狩亜先輩にいたってはけろっとしている。ソレも他の精霊の能力か何かだと隈井は推測していた。

「まあ、いいや。隈井だっけ？」
「……」
「君は結構いいところまでは来ている。たぶん、僕らが卒業した後の生徒会は君に任せられそうだ。でも、まだまだ甘いところがある。相手の性質などをちゃんと考えて勝負を挑むことだ」
「……」

すでに膝を突いている隈井は負けていることに等しかった。一度も攻撃を当てられない。むしろ、相手に遊ばれているような感覚。屈辱的だった。どうも、腑に落ちない。納得できなかった。そして、その考えが暴走した結果――

「くそぉぉ！」

考えなしに突っ込む形となった。トンファー構えて、真っ直ぐ狩亜先輩を狙う。狩亜先輩に近付くたびに熱で体を焼けれそうになる。

先輩に近付くということは、イフリートにも近付くことにもなり、死に行くようなものである。先輩はやれやれとでも言うようにウィッチの方を見る。

「ウィッチ」
「お任せ……」
「……ウィッチ？」

ドクンっ

突如、ウィッチとイフリートの動きが止まる。その異変に隈井も気がつき、足が止まる。狩亜先輩は眉をひそめて何がおきたのかすぐさま理解しようと頭をフル回転させた。だが、その前に答えが出される。

「い、いやあああああああああああああああああああああああああ！！」
『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

ウィッチとイフリートがシンクロしたように叫んだ。ウィッチの方は頭を抱えて泣き出している。イフリートの体から炎を通常の三倍噴出している。それは地獄絵図。それは地獄の炎。ソレはまさに――地獄（イフリート）の業火にしか見えなかった。

「な、なんですか、これ！？」
「まずい！　魔術エネルギーの暴走だ！　全員強制転移！　魔術解除（ウト）！」

魔術を解除すると同時に七体の精霊は塵のように消えた。だが、

ウィッチとイフリートだけはまだそこに存在していた。狩亜先輩もすこし混乱してぐっと二体をにらんだ。

「狩亜先輩、何が起きているんですか……！」

「おそらく魔術エネルギーの暴走だろう。ウィッチばかりに魔術エネルギーを流していた結果、魔術が消化しきれなくなったウィッチは暴走。たまった魔術エネルギーを消化し終えるまで、彼女の暴走は止まらない。だが、使い切るということは消滅を意味する。ある程度魔術エネルギーがないと精霊は存在がなくなってしまうということだ」

「とうことは、このままほっとくとウィッチは……」

「……死ぬ」

「っ！？」

隈井はなにか、このとき思ったのだろう。敵だが、それは結局この学校のお遊びのようなものだ。結局は同じ学校に通う同じ生徒。同じ仲間である。その仲間の相棒が死ぬ。ソレは、断じていいことではない。それは許されることではない。なにか、なにか自分に出来ることはないのか……。

「くそ！」

思ったときにはすでに体が動いていた。隈井はイフリートを両手で触ったのだ。何も考えず何も感じず、ただイフリートに触れた。いや、考えはあるのだが――。

「ぐあああああああ！？」

「く、隈井君！？　何をやっているんだ！」

「い、ううぐっ！？」

このときの隈井の考えはこうだ。魔術エネルギーが溜まっているなら、ある程度吸い取ってあげればウィッチの暴走は止まり、どうにかなるのではないかと考えた。その結果、魔術エネルギーがほぼ零の今の自分なら吸い取れるのではないかとイフリートを通じて魔術エネルギーを吸収してみたのだ。だが、イフリートは言わば火山そのもの。ソレを生身でさわるのは隈井自信もキケンだった。

「くそがあああああ！！」

ただ無心に。そして――

結果――無事に終わった。もちろん、隈井は気絶してしまい、ウィッチも無事に消滅することなく事が済んだ。あのあとウィッチは精霊が済むという精霊界へと転移され、隈井は学校の教室で朝を迎える。自分のランキングを確認すると三位と変わっており、狩亜先輩のランキングが六位となっていた。

目が覚めた時、首にペンダントがかけてあり、それが装置だと分かりとりあえず発動させるとウィッチが出てきた。詳しい事情はあまり聞けなかったらしいが、ウィッチから聞かされたことは、隈井が勝利したこと。これからウィッチがパート―ナーであること。そして、狩亜純樹との決闘が再びいつかあること。

それが約、一年前の出来事である。

俺もこれは隈井から聞いた話なのでよくは知らない。だが、今こうやって目の前で隈井と狩亜先輩が再び戦っているのだから、それはどうしようもない事実として受け取っていいだろう。隈井の無茶な行動が、こうやって未来に繋がった。「今」という事実があるのだ。

だから、俺は見守ろう。

幼馴染の――隈井龍牙の魔術決闘（マジックバトル）を。

⇔

放たれる水の固まりは勢い良く狩亜先輩へと向かっていく。だが、先輩は余裕の表情だ。いや、余裕なのだから仕方がない。目の前にジェネラルが立ち、結界を出現させる。水の塊はソレにぶつかって飛び散る。ソレと同時にカオスとエンジェルがゲートを出現させる。そこから伸びる黒い手と光りの帯。まっすぐ隈井の心臓を狙ったものだ。

「させない！」

ウィッチの叫び声と一緒に炎の業火（イフリート）が体から炎を発してゲートに向けて火炎放射をする。ゲートとそこから出てきたものたちはすぐさま灰になり、カオスとエンジェルもすぐさまその場から離れる。でないと、自らも黒コゲになってしまうからだ。

「なるほど、隈井君。予想以上だ。命令をしなくてもウィッチ本人の考えでシンクロできるようにまでなったか」

「別に、ただ自然とやっているだけなんですけどねえ……」

お互いに疲れが見えてきている。隈井はともかく、狩亜先輩は八体もの精霊に魔術エネルギーを送り込んでいるのだ。エネルギー切れはもうすぐそこまで来ているだろう。隈井も水の災い（フラード）の１００％を出した時点で半分の魔術エネルギーを失っているはず。これでは先ほどの試合と同じ結果になってしまう。

「ちぃ！」

舌打ちと共にトンファーの先にエネルギーをためる。一瞬にしてピンポン球ほどの球体が出来る。それを何個も打ち込む。ウィッチもイフリートに指示をして、狩亜先輩に突っ込まさせる。イフリートが打撃に徹すると強力なものだ。その攻撃を避けながら隈井の連射を避けるのは難しい。

「ソルジャーはイフリートへ！　それ以外は水を！」

すぐさま指示を出して、対策を練る。ソルジャーは一人でイフリートを受け止める。ソルジャーの大きな大剣でイフリートに攻撃する。その好きにフェアリーの風、ガイアの水、ジェネラルの結界、エンペラーの氷、カオスとエンジェルのゲートが水の球体を打ち落としていく。あまりにも的確すぎて――漏れがない。

「ねえねえ、ライライ。クマクマ負けるかな？」
「んた！？　びっくりした……」

試合に夢中になっていた所為で、国塚が横に立っていることに気がつかなかった。てか、本当に何時ごろから居たんだか……。様子を見てみる限り、先ほどの試合での怪我はなく、普通に元気そうだ。特に異常なし。

「もう、大丈夫なのか？　大分魔術エネルギーを消費していたみたいだけど」
「うん、先生達のおかげでもう大丈夫。魔術エネルギーも満タンなのだ♪」
「そうか」

笑顔の彼女はとても嬉しそうである。何が嬉しいのか知らないが、まあ、いいだろう。溜息をついて、隈井の方へと視線を向ける。その様子を見て、もう決着がつくことを予想させた。

「ありゃりゃ。またこの試合も引き分けかあ」

「そうだな。隈井ももう少し考えれば、この試合勝てたかもな」

そうだ。この試合は引き分けである。

諦めずに水の塊を発射し続ける隈井。だが、魔術エネルギーが切れたのか、ぴたりと連射が止む。表情が曇り焦りの色が見えた。普通なら、ここで先に魔術エネルギーの切れた隈井が負けとなるのだが、ウィッチと言う存在がいるのでまだ負けではない。

「隈井くん！　残念だけど、勝たせてもらうよ！」

「っち……」

舌打ちをして、間の前でガイアがフラードほどの水の塊を出現させる。アレが直撃すれば隈井の負けは確実である。思わず目を瞑ってしまう。

「リュウガ様！」

「させねえよ！」

すぐさまイフリートを向かわせようとしたが、ソルジャーが邪魔をし、隈井を助け出すことが出来ない。ウィッチも諦めてしまった。そして、ガイアのにやりと笑みを浮かべて、ゆっくりと水の塊を隈井へ――

シュンっ

「え？」

疑問の声を出したのは狩亜先輩だった。その理由は水の塊と一緒にガイアの姿が消えたからである。そして、フェアリー、ジェネラル、エンペラー、カオス、エンジェル、ソルジャー、ウィッチの順で姿を消していく。狩亜純樹の魔術エネルギーもそこをついてしまった。

「……」

「……」

静まる会場。誰も声を出そうとせず、ただただむなしく終わってしまった結果を目に焼き付けていた。

『おおっと！　ここで両者魔術エネルギーが切れてしまった！　よってこの試合は引き分け！』

司会の先生の声で止まっていた時間が動き出したかのように歓声が沸き起こる。止まっていた二人も立ち上がり、中央へ集まった。

「……なかなかいい試合だったよ。ちょっと僕も熱くなりすぎて、自分の魔術エネルギーをなくしちゃったけど」

「いや、あのまま続いていたら俺の負けでした」

「そうでもないかもよ。君がもっと魔術エネルギーを節約していれば勝てた。ほら、君達のような魔術は発動するたびにエネルギーが削られるけど、僕の場合は精霊たちを存在し続けなければならないからエネルギーは垂れ流し。通常の人より魔術の発動時間が短いんだ」

「ソレって、弱点ですよね？　言っても良かったんですか？」
「別にソレがばれても僕は負けないからね」

皮肉っぽく狩亜先輩は笑顔を見せた。隈井は肩を落とし、こちらもうっすらと笑みを浮かべる。なにをこの時思ったのかは分からない。隈井が何を考え、何を感じ取ったのかを。そして、隈井はゆっくりと右手を差し出した。その手を見て、狩亜先輩はその手と隈井の顔を交互に見る。

「いい試合でした。狩亜先輩」
「……ああ、いい試合だった」

握手をする。ぐっと、力強く。

こうして、俺達の決勝戦――第二試合も引き分けで終わった。こうして残った最終試合だが、こればっかりは引き分けというわけにも行かないだろう。なんせ、次の決闘は最下位の俺と最高位の轟坂（とどろき）小梨（ざかこなし）先輩の試合である。決して、交わることのない決闘。それが実現するのだから。

すると、ちょんちょんと俺の袖を引く感覚があった。見てみると満面の笑みの国塚が俺の袖をひっぱていた。話はそれるが、やっぱりどっからどう見てもこいつは高校生に見えない。むしろ、小学生にしか見えない。いや、ギリギリ中学生か？

「ライライ」
「ん？　どうした？」
「絶対に勝ってね？」

国塚が笑う。……はあ、わかったよ。

「全力で勝ってくるよ」

こうして、一つの戦いが終わり、最終決戦が始まった。

The second Killing one another of nanoha

気合で書いた結果、あまり話が進まない！　魔術決闘祭りはいつになれば終わることやら……。

The second Killing one another of Life

この世界に存在する「英雄」というのは、どれほどいるのだろうか？　例えばそう――俺の使っている武器。銀槍――グングニルなんかは神話に登場するオーディンが使っていたとされる。そのグングニルそのものは、イヴァルディの子供達によって作られた。または、とある怪物と牙から作り出されたとか。そしてもっとも俺が信用している説――いたずらの悪魔、ロキによって作られたということだ。武器を扱うオーディンが英雄なのか。それとも武器を生み出したロキが英雄なのか。それは、誰が決めるわけではない。――武器が決めるのである。

話は変わるが、今から行われる試合はこの学園の英雄と、この学園の愚者。もちろん英雄はランキング一位の轟坂小梨（とどろきざかこなし）先輩である。そして、愚者というのが俺、ランキング最下位の来城月下（らいじょうげっか）だ。絶対に交わることのない二人が今こうして殺しあおうとしている。

それはあまりにも偶然で――

それはあまりにも必然で――

それはあまりにも運命で――

それはあまりにも決め付けられていることだった。

それはそうと、彼女――轟坂小梨先輩について何も話していなかったと思う。そこで、少し解説を入れよう。だがまあ、俺が知っていることなので、そこまで当てにならないかもしれない。いや、それでも何も知らないよりかはマシだろう。

轟坂小梨――この学園の頂点にして最強。ランキング一位。一年生の時に彼女は初めての魔術決闘で前生徒会長に圧勝した。それも全校生徒の目の前で。その瞬間、彼女はランキング一位として君臨したのだ。彼女の魔術――通称「無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）」。以前話したが――まあ、今回も彼女の魔術については、実際その目で確かめてもらった方がいいだろう。俺は話しても理解不能だと思うし。

とりあえずまあ、今から行われるのが――殺し合いだ。

⇔

『さてさて、この魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りも最終試合！　誰もが予想できなかった試合が始まります！　ランキング最高位とランキング最下位！　皆さん！　盛り上がってくださいね！』

アナウンスと同時に観客が沸きあがる。まあ、確かにそうだろう。誰もが予想できそうで、出来なさそうな不可解な試合。そして、理解不能な決闘。それが今始まろうとしているのだ。ボルテージが上がっても仕方がないだろう。さては、どうでもいいや。

「こんにちは、来城くん」
「ども、小梨先輩先輩」
「ふふふ、久しぶりだね。何ヶ月ぶりかしら？」
「さあ？　ざっと八ヶ月ぶりじゃありませんかね。夏休みの終わりごろでしたし」
「そうね、あの時ね」

なんて会話をする。目の前に立っている人物。地面にまでつきそ

うな黒い髪。整った顔立ち。誰もが認める美しさ。正直、俺も惚れそうになる。まあ、うん、ラウに殺されそうだが……。まあ、とりあえず彼女は美人である。この学園一の美貌だ。告白した男も、振られた男も星の数。その中にランキング十位の友枝先輩も含まれているのは言うまでもない。

「まあ、なんだ。私の魔術と君の魔術は結構異質だよ。私達のそういうところは少し似ているわね」

「そうですけど……でも、俺の真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）と先輩方の魔術は別物だと俺は思うんですけど」

「たしかに。でも、私の魔術――無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）は同じ完全な魔術達（マジック・エンタイアティ）とは違うことぐらい、分かるでしょ？」

「ええ、まあ」

一応肯定はしておく。確かに、小梨先輩の魔術は俺が見てきた魔術の中でもあまりにも違いすぎた。その特性とか、その能力とか。なぜ彼女だけ、そういう力が備わったのかは知らない。俺がなぜ、真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）が使えるのか分からないように。

「まあ、無駄話もこのぐらいにして――そろそろ始めましょうか」

小梨先輩はそういうと、視線をアナウンスの方へと向ける。今すぐ試合を始めろということなのだろう。

『それでは！　ランキング一位の轟坂小梨選手とランキング最下位の来城月下選手のラスト魔術決闘（マジックバトル）を始めようと思います！　それでは――試合初め！』

「魔術、開放（オープン）！」

「Ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ　ａｎｄ　ｓｗｏｒｄ　ｔｈａｔ　ｒｕｌｅ

s hero. Therefore, it is the strongest sword」

小梨先輩は何も持たない状態で魔術の開放をした。俺はというと、今日の間に五つの武器を破壊されてしまった。残るは――絶対勝利の大剣――エスカリボールだけである。

言葉では表現できない魔術エネルギーが当たり一面に広がる。それすっと小梨先輩と俺の中へ吸い込まれた。そして、俺の周りには霧がたちこめる。その霧に向かって手を伸ばす。その瞬間、手には硬くて思い感触。ゆっくりとソレを引き抜くと、霧がだんだん象っていく。そしてすぐさま赤と黒のデザインの大剣が姿を現した。その名もエスカリボール。

小梨先輩はというと――

「何時見ても綺麗ですね……」

「そう？　ありがとう」

彼女の手には刃が水色の刀が握られていた。これが彼女の魔術――無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）である。

「そんなに見つめられると――困るぞ」

「あ、いや、すみません」

何故か、顔を背けられてしまった。だって、見つめたくなるほどの美しい刀なのだから仕方がない。というのは冗談で、この水色の刀を持っている小梨先輩が美しいのだ。それはもう、見とれるほどに。

「まあ、君も知っての通り、私の装置はこの制服だ。制服の糸、全てが装置だ。そしてこの装置を使ってこの刀――名刀『雹月』を呼び出す。呼び出すといっても服の中――つまりこの装置の中に吸収していたのを吐き出しただけなのだが」

「ええ、知っています。そして、その装置というか――貴女の魔術の『吸収』が、あまりにも厄介だ」

「ははは、そこまで知ってもらっているのか」

「何度も見ましたからね……」

「何度も……ね。それじゃあ、遠慮なく行かせてもらうぞ！」

彼女は叫び、俺に斬りかかって来た。それをエスカリボールで受け止めると力任せに振り払った。先輩は空中で一回点をして着地。すぐさま体制を整えて刀を振り上げてくる。何度も降りかかってくる刀を何とか防ぐ、だが、このままでは負けてしまう。体力切れで。

「来城くん、反撃しないのか？　私は君に期待していたのに」

「こっちだって色々苦労しているんですよ！」

その瞬間、エスカリボールがまばゆい光りを出し始めた。それに気づいた小梨先輩は急いで俺から距離をとる。未知の魔術ほど怖いものがない。何が起こるかわからないなら、離れることは正解だ。俺だって草する。

「小梨先輩、俺はさっきの雲神春之美（くもがみはるのみ）先輩の時に決めたんです。能力を使うことを躊躇しないって」

「ソレは嬉しいことだわ。私も、そうでなくては面白くない！」

構えを取る先輩。俺も、エスカリボールを大きく振り上げて、そのまま輝きを増した剣をそのまま振り下ろす。

「絶対勝利の剣（エスカリボール）！！」

振り下ろされた剣からは黄金色に輝く光の塊が小梨先輩に向けて放てられた。エスカリボールの能力――絶対勝利の剣は攻撃力に特化した能力だ。この魔術で一つの国を滅ぼすことも可能だったという。それだけ勝利を約束された剣。それが――エスカリボールだ。

「なるほど、確かにこの魔術エネルギーは確かに強力だな。まさに、絶対勝利」

小梨先輩は自分に向かってくる光の塊を見てもけろっとしていた。それが彼女の恐ろしいところ。それが彼女の異質なところだ。ゆっくりと、構えをやめて、刀を前へむける。ソレと同時に刀は光りの塊とぶつかった。普通なら、ここで大爆発だろう。そして、俺の勝ちだ。でも、なかなか上手くいかないのが――最下位と最高位との魔術決闘である。

光り塊は突然、何かに吸い込まれるように――刀に吸い込まれるように姿を消した。これが彼女の魔術――無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）だ。彼女の魔術は俺達、いや、この全校生徒の天敵である。彼女の存在自体が、ランキング一位を諦めさせる。無効無力――名前の通り――

「私の魔術は――全ての魔術を無効化する。君の真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）にも通用することがわかって、安心したよ。」

安心されても困るんだが……。

これで分かってもらえたと思うが、これが彼女が最強だと言われる理由。全ての魔術を、すべて無効にする能力。それが無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）だ。詳しく説明すると、彼女の装置――制服そのものが器となっており、

そこには何万という物質を保存することが出来る。そのため、先ほどの刀――雹月も保管されていたのをただ単に取り出しただけなのである。あの刀は本当にただの刀で、何の能力もない。だが、何かを吸収するとき、あの刀を媒体として、吸収をする。つまり、あの刀は保管場所へと通じる通路のようなものと考えてもらえればけっこうだ。

先ほども言ったが吸収されたものはもちろん取り出すことも可能である。

「それでは、来城くん。問題だ。君の魔術――絶対勝利の剣（エスカリボール）の威力はどれほどだろうか？」

「っ！？」

まずいと思ったときは遅かった。小梨先輩が刀を大きく振り上げる。そして、当然のように、当たり前のように叫んだ。俺に向かって――吐き捨てるかのように。

「絶対勝利の剣（エスカリボール）！！」

刀からは、エスカリボールが放った同じ光りの塊が飛び出してきた。これが彼女の魔術の怖いところである。遠距離攻撃の魔術ならば吸収した後、吐き出すことによりカウンター攻撃が出来る。それも全く同じ威力で。全く同じ――破壊力で。

「くそ！？」

アイギスがない今は無理やりにでも光りの塊を消すしかない。考えた結果、光りの塊にエスカリボールを無理やりねじ込ませた。爆発すると思いきや、光りの塊は塵のように消えて、何事もなかった

かのように、静けさが訪れる。

絶対勝利の剣同士なら、お互いの力で消滅してくれるのだ。絶対勝利と絶対勝利がぶつかれば、絶対の引き分けが生じる。安心したのもつかの間で、小梨先輩が再びこちらに飛び掛ってくる。すぐさま剣を横に振る。当たると思った。だが、空振りだった。振り切った剣の上に、凛とした姿で立っている先輩。冷や汗が止まらない。

「……先輩、人間ですか？」

「しつれいな。これでも恋する乙女だぞ。化物扱いをするな」

またまたそっぽを向かれてしまった。そして何故か恥ずかしがっている。これも結構シュールな光景だが、男子高校生が巨大な剣を振りかざして、その剣の上で恥ずかしがっている女子高生。うわあ、考えるだけですごい光景。

「それはそうと、来城くん」

「はい？」

「君に今、彼女はいるのか？」

「は？」

突然、唐突にそんな事を言われてしまった。これはなんというか、いや、俺も非常に恥ずかしい質問だ。自然と体温が上がるのが分かってしまう。質問した張本人も顔を赤らめて、視線をいろいろなところへと向ける。えっと……。

「いや、そのだな。やましい気持ちはないのだぞ。うん、全然ない。生徒会長として、そのだな、生徒の恋愛事情というものも知っておかなければと思ってな……」

「そ、そうですか……」

なんというか、ちょっと苦しいいいわけだが、期待をするのもアレだから特に意識しないでおこう。期待しすぎると痛い目にあうことが今まであった。そのことを踏まえて、今回は落ち着いて対処するべきだ。別に小梨先輩が俺のことが好きだなんてことに期待しているわけじゃないからな！？

「い、いませんけど」
「そ、そうなのか」
「……」
「……」

やめてー！？　だまりこまないでー！　なんかシュールな光景に、余計訳の分からないことになっているから！？　そして観客の方からドス黒いオーラが漂っているのはなぜですか！？

「ツキ兄ィ……何デレデレしてるのよ」
「……つまんない」
「兄さん、帰ってお説教ですよ？」

何か聞こえちゃいけない会話が聞こえたような気がする。

「と、とにかく！」
「はい？」
「お、お、お――！」
「お？」
「お、お命頂戴いたします！」
「え、えええ！？」

⇔

轟坂小梨は緊張していた。試合の前から緊張しすぎて、良く分からないことをぶつぶつと呟いている。というのも、今目の前にたっている来城月下という人物が、自分の初恋の相手であり、自分の愛しい人だからである。

（どどどどどど、どうしよう！？　やばいよ！　わ、私、落ち着くんだ！　気合でどうにかしろ！）

と、ずっと心に言い続けていた。緊張していた所為で、言葉遣いも少々変わっていたが、あまり気にされなかったことは彼女にとっては幸運だった。あまり、素の自分を見せるのは気持ちがよくない。信頼できる人物にだけ見せると決めていた。今のところその範囲に入っているのは家族と生徒会だけだ、残念ながらまだ、月下は入っていない。

しかしながら、何時の日かは、そう思える人になってほしいと小梨自身願っていた。自分の大切な人なのだ、自分の全てを知ってほしい。偽りの姿なんてみてほしくない。そういう考えだった。

（まてまて、それでは私が彼に好意を寄せているようじゃないか！？　わ、私は別に……）

言い聞かせるように心の中で呟くが、本心は彼のことが大好きなのである。来城月下という一人の男が好きでたまらないのだ。というのも、去年の夏休み。生徒会であり、親友でもある古東宝香（ことうほうか）の家にお邪魔したときのことだった。

家に上がると、日本人の誰もが知っている人物、霧雨羅羽（きりさめらう）が出迎えてくれた。当時の彼女は中学二年生で、夏休みを謳歌していた。

満面の笑みで出迎えてくれた彼女の後ろからのろのろと頭をかきながらこちらにやってくる人物がいた。

面倒くさそうに歩いてくる姿は、なんとなくだが猫を連想させた。そして、ある程度の距離――ラウの隣まで来ると、先ほどと変わらず頭をかきながら頭を下げた。ラウは「兄さん、しっかり」といって、彼の腕に抱きつく。ソレも面倒くさそうにみて、溜息を彼はついた。

私はじっと彼の目を見ていた。面倒くさそうな瞳――ではなく、彼の目には確かに強さを感じた。何かを守ろうとする力。ソレが彼――来城月下の瞳には宿っていた。不思議と彼の目を見ていると、小梨は胸がどきどきして、体の体温が上がる。

あの後は確か、小梨本人も「よろしく」と柄に似合わない無愛想な挨拶で済ませたことを覚えている。いつもならきちんと名前を名乗り、お辞儀までするのに……。彼の前では全てを忘れてしまっていた。瞳を見ることに夢中になっていて。

それからというもの、小梨の本心は月下が好きと言っているのだが、外側がそれを隠そうつるのだ。あまりにももどかしすぎて、あまりにも寂しくて……。来城月下という人物を調べてみれば、自分と浜逆のような人間。性別――性格――学力――そしてランキング。最下位の彼。最高位の彼女。あまりにも交われない二人。

それが実現したこの試合。とりあえず、集中しようとしたのだが、あまりにも緊張しすぎてほとんど無意識にはなし、ほとんど無意識に攻撃をし、ほとんど無意識に本気を出そうとしていた。はっと気がついたときには、何故か月下が召喚したエスカリボールの上に立っていた。

「……先輩、人間ですか？」

ショックなことを言われた。

「しつれいな。これでも恋する乙女だぞ。化物扱いをするな」

即答して否定しようとするが、この発言を思い返してみると、今現在自分には好きな人がいますよと、アピールをしているようなことになる。もし、彼が勘違いして、悦の男がすきなのだと思われたくない。すぐさま、話を切り替えようとした。

「それはそうと、来城くん」

「はい？」

「君に今、彼女はいるのか？」

「は？」

緊張のしすぎだ。

「い、いませんけど」

「そ、そうなのか」

「……」

「……」

真面目に答えてもらって、そして沈黙。ああ、なんとなくだが全校生徒の目の前でこれは痛いのではないのか？　いや、絶対にこれは羞恥心だ。恥ずかしい。と考えていると、何をトチ狂ったのか、変な答えに到達する。

いっそのこと、ここで告白をしてしまおう。

そうだ。ここで「お付き合いしてください」といえば解決だ。そして、彼を倒して私達のクラスは優勝。そして彼と結ばれてハッピーエンド。何も問題はない。何も間違えはない。何も、狂ったことはない。彼女はそう信じているらしいが、その考え自体が大きな間違いで――狂った答えだ。

「と、とにかく！」
「はい？」
「お、お、お――！」
「お？」

お付き合いしてください、そういえば全てが解決すると小梨は勘違いをしていた。まず、小梨の間違いは自分が緊張をしているということを忘れていること。次に、緊張しているときは無意識に色々な行動をしてしまうこと。この二つのことを組み合わせると答えは――

「お、お命頂戴いたします！」
「え、えええ！？」

最悪になるのだ。

The second Killing one another of nanoha

次回予告？（したこともねえのにでじゃばんな！）
月下と小梨の決闘は激しさを増して観客を唖然とさせるものに。しかし、月下に最大のピンチが訪れる！　次回に期待してください！

月下「不安だあ」

The second Invalidity, powerlessness

さて、あとがきでちょっとした発表。

The second Invalidity, powerlessness

魔術の開発者――霧雨羅羽（きりさめらう）にとって目の前で行われている試合は、あまりにも悲しすぎるものだった。自分の開発した魔術という名の芸術を１００％発揮できる少女――轟坂小梨（とどろきざかこなし）。それよりも自分の義兄であり、愛している少年――来城月下（らいじょうげっか）が目の前で戦っているのである。小梨という先輩は自分にとって、存在証明ができる人物でもある。完成した魔術を究極に扱ってくれるのだから。そして、外道とも、邪道とも、王道とも言える真実の魔術（グレメリー・オブザ・トゥルー）。これは、自分を否定する代物でもある。その二つが目の前で、戦っているのだ。意味もなく。何もなく。それが、ラウにとってどれだけ悲しいことか――。

しかし――まあ、暗いことばかり考えてもしかたがないと言い聞かせる。これは戦争ではないのだ。あくまで、学校の行事なのだ。なにも恐れることはない。そう、なにも怖がることはないのだ。

なのにどうしてか――胸騒ぎが止まらない。

理由を考えても分からない。分かりたくもない。それは小梨から感じ取れることではなく――月下から感じ取れる感覚だった。彼から感じる恐怖。彼の中に眠る、自分を否定する魔術。それが――答えなのか。結局のところ分からない。

「それにしてもねえ。轟坂先輩ってちょっと反則だよねえ」

ふと、右隣にいる隈井玲虎（くまいれいこ）の言葉ではっと我に返る。先ほどの質問に答えるように、「確かにそうですね」と答えた。左隣にいるクラトイト・ホクトームも静かに肯いた。

「無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）って、もうほとんどチートじゃん」
「仕方ないですよ。そもそも、八つの理（エイトルール）に属していない人は魔術を選べないんですから。ある意味、それはハンデですよ」
「そうなの？」
「ええ、実際に私もそうですし……」

こうして話してはいるが目線は先ほどから目の前に二人に釘付けである。月下のエスカリボールの上に凛として立つ小梨。二人の攻防戦から言うと、ほぼ互角だ。しかし、魔術がからんでくるとどうしても流れは小梨に向いてしまう。どうしても「魔術を無効にする魔術」というのが影響するのだ。

「……どうにか、できない？」
「クラムの気持ちも分かりますが、『吸収』というワードがある限り、兄さんには勝ち目はないでしょう」
「ううう……。でも！　私はツキ兄ィを最後まで応援するよ！」
「……もち」

月下を一生懸命応援する二人をみて、思わず笑みがこぼれる。こんなにも自分の義兄は愛されているのだと認識すると、嫉妬と嬉しさが湧き出てくる。でも、今だけは喜んでいたい。月下から放たれる恐怖に二人は気づいていないのだから。

でも――

この試合で恐怖はかならず現れる。

そう、確信できるのである。理由はどうしようもないもので、月下が今まで出してきた武器はエスカリボール以外全て全滅。そして何よりも、そのエスカリボールでさえ無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）の前では歯が立たな

かったのである。それならば、まだ隠してあるだろう自分自身を否定する魔術を使うしかないのだ。

だから、確信できていた。魔術開発者――霧雨羅羽は……。

⇔

なんといいますか、俺はたった今、生徒会長から死刑宣言をされてしまった。「お命頂戴する」なんて生きているうちに言われるなど想像も出来ない。てか、できたら嫌だよ。そもそも言った張本人が刀を持っていない左手で口元を押さえて目を見開いている。あきらかに動揺しているのは丸分かりだ。

「い、いや、その、なんというか……今のは間違いだ！」

間違いで命を奪うなんて言われたあかつきには、俺は全力で泣く。てか、なぜか目頭が現在進行形で熱いのですが……。お、俺は泣いてなんかいないぞ！　決して先輩から死刑宣言されたからといって泣いたりはしないぞ！　これは汗だ！　目から汗が出ているんだ！

「……なんで、君は突然上を向くんだ？」

「気にしないでください」

兎にも角にも、状況は最悪である。エスカリボールは小梨先輩の魔術の前では文字通り無力。剣術で挑もうとしても、やはり、獲物がこちらが大きい分、動きが少々遅れている。真剣である先輩の愛刀「雹月」もそれなりに重いはずなのだが、そんなことを感じさせない先輩の身のこなし。先輩はもしかしたら人体強化魔術を使っているのではないかと疑いたくなる。

「それよりも、来城君。私の個人的な意見ではあるが、君には降参してほしい。君に勝ち目はない。どんなに足掻いても、結果は同じだ」

「いやいや、諦めるのは早いです……てね！」

不意打ちとも思える攻撃。エスカリボールを持ち上げて、後ろに振り上げたのだ。その上に乗っていた先輩はバットで打たれたボールのように空中に放り出された。こうでもしないと小梨先輩は倒せないだろう。男女平等社会なんだ、これぐらい許してもらわないとな。

なんて暢気に先輩が飛んでいった方を見ていた。一瞬だけ、空中で止まったかと思うと、そのままま逆さまに落ちる。普通の人間では回避不可能。まあ、何かしらの魔術を使えばこの程度、どうにかなるものだ。今回の場合は四階のビルから飛び降りたとでも考えてもらえればよい。それほどの高さから、小梨先輩は落ちている。

頭から落ちている。それをただじっと見ていた。助けたい衝動にもかられたが――無駄だと知っているからやめた。予想どおり、小梨先輩は地面から二メートルほどの場所で突然落ちる速度が遅くなり、そこからゆっくりと地面へと着地した。

「ふむ、君は私の『吸収』という能力をわすれたのか？」

「いえいえ……。ただ、どのぐらいなのかと図っただけですよ。それが予想をはるかに上回ったから、びっくりしただけです」

「そうか。なら――いい」

なにがいいのかはさっぱり分からないが、さきほど起こった現象の解説をすると、小梨先輩の無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）は通称であり、正式能力は前回話したとおり『吸収』である。この吸収というのはこの世のもの

全てを吸収できるのだ。それが重力だろうが――引力だろうが――磁力だろうが――。

ここで到達することは、小梨先輩は正真正銘の無敵である。落とされても落ちない。攻撃しても無効化される。さすがランキング一位だ。その数字は伊達じゃない。というより、その「一」と言う数字以外、認めることが出来ない。そんなところだ。どうでもいいけど。

「私の無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）はどうしようもないぐらい――無敵だ。でも君には怪我をしてほしくない。だから、もう一度言う。降参してくれないか？」

「死刑宣言されたのに、やすやすとこちらも身が引けるわけないでしょう？　そもそも、俺のエスカリボールは壊れてもいなければ、まだ何も――」

「そのことなんだが」

十メートルほど離れた場所に立っている先輩の右手、つまり刀を握られている腕が俺へと向けられる。その意図があまり理解できなかった。俺の台詞を途中で中断させた先輩の目的が理解できていない。

「君のエスカリボールはもう、だめだよ」

「え？」

返事ともいえない俺の声と同時に、エスカリボールへヒビがはいる。その瞬間を――、見たくもない光景を俺は――見た。じっと、静かに、目を見開いて。

「だから、言ったじゃないか。無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）は吸収だと。来城君の伝説

の武器達は、能力をそのまま引き継いだ形ある『魔術エネルギー』なんだ。とうぜん、無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）は対魔術用魔術。魔術エネルギーで構成されている物質を吸収することに優れている。早い話、君の魔術エネルギーの塊と、私の無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）がぶつかると、自然と君の塊から少しずつだが吸収を行ってしまう。望んでいなくとも。その所為で、エスカリボールは脆くなり、先ほどの一振りでヒビが入ってしまったのだ」

「っ……」

それがどんなことなのか、俺にとってそれがどんなに脱力させる事実なのか、先輩は分かっているのだろうか。これは――絶望的である。つまり、今まで使ってきた武器達はすべて無意味なのだ。先輩の前では、すべてが無効で無力なのだ……。

「……三度目だ。これで最後だ、来城君。降参してくれ、じゃないと私は君を殺してしまうかもしれない。無力な君を殺したくはない」

「……」

先輩は悲しそうな瞳で、俺を見つめる。無力で――無気力な俺を。ただじっと、その冷たい瞳で。いや、まだ、まだ終わってはいない。エスカリボールが果てようとも、まだ勝機はある。それは同時に、完璧な殺し合いへと発展する。雲神春之美（くもがみはるのみ）先輩の時のように……。正直、あんな思いはもうこりごりだ。だが、勝つためには、仕方がないのかもしれない。

だから俺は言う。

力なく手の力を弱めると、するりとエスカリボールが地面へ落ちる。普段ならちょっとのことでは刃毀れしない伝説の大剣が、落ちた反動で粉々に砕ける。その後は、今までの武器と同じように霧と

化して、消えてしまった。うなだれる俺を見て先輩は肩を一度すくめると、微笑んで溜息をついた。

「やっと降参してくれ――」

「先輩」

先ほどとは逆の立場。先輩の言葉を俺を遮って、言葉発した。もちろん、すぐさま先輩は不愉快そうに眉間にしわを寄せていた。冷たかった瞳は、俺の目を見つめると、はっとしたような表情へと変わる。先輩もそうだが、俺の表情が自然と変わっていた。

「申し訳ないですけど、先輩に言いたいことが二つあります」

「……それは何かしら？」

また逆だ。俺は右手を先輩を突き出して、ピースを作る。その後、ゆっくりと中指を折る。

「一つ。流石はランキング一位。一位だからこそ、俺のいままでの魔術を全て無効にするなんて、予想外でした。無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）の名は伊達じゃない。吸収という能力がここまで逆境を作り出してくれるなんて、困ったものですね」

「……なにを突然いいだすんだ？」

困惑したように先輩は話した。

「この状況をみて君はまだそんなことがいえるのか？　君の魔術――全ての魔術は私の前では無効で無力なんだ。逆境も何も、この場面では何も変化しないと思うんだが？」

「まさにその通りです。この勝負は何も変わりない。だが、いつかは決着がつく」

「私の勝利でな」
「俺の勝利で、ですよ」
「……戯言もここまでだ。君の虚言には飽き飽きだ。いくら私が優しくとも、そ、その、君が大切でも……い、いや！　そ、その生徒としてであって、そんなやましい心があるわけじゃあ！」
「……？」

突然だが、先輩がおかしくなった。

「と、とにかく！　私もそろそろ怒るってことよ。無駄な傷は負わせたくないの」
「……無駄ねえ」

無駄な傷なんて、人間が生きていくうえで負う傷はすべて無意味で無駄なものだろう。わけも泣く理由もなく傷ができる。体にも、心にも。だから俺はその言葉を全力で否定するように――全力で無視するように言い放った。

「言い忘れてました。先ほどの続きで二つ目」

突き出されている人差し指をゆっくりと折り曲げる。

「先輩、降参してください」

この言葉は、今までの会話の中でもっとも無力な言葉だった。

「……本気？」
「ええ、本気ですよ」
「分かってない。君の魔術は本当に無力なんだ。わたしが知っている武器は今日のうちに全ては解された。まだ何か隠しているとして

も、それは無駄なことだと――」
「無駄じゃあ、ないんですよ」

突き出していた右手を下げて、不意的に笑みを浮かべる。先輩は逆にますます表情が曇る。俺の言っている言葉が理解できていない――、いや、事実上、この場所にいる誰もが理解できていないであろう。俺の魔術――真実の魔術（グレメリー・オブザ・トゥルー）には以前も話したが十個の武器達を召喚することが出来る。そして今までの六は分類としてはまだ「ノーマル」な方なのだ。だが、残りの四つ。これはあまりにも危険で、「デンジャラス」とでも分類しようか。

だから――先輩の降参を願う。

「もう一度言います。降参してください」
「……、君が何かを隠していることは分かった。だが、それを使ったとしても私には勝てるとは思わない。だが、いくら言っても君は聞いてくれそうにもないな。いいだろう、君の最後の悪あがきを私が粉砕してあげる」

先輩はきりっと俺をにらんで刀を構える。そうだ、そうでないとダメなんだ。再び右腕をゆっくりと上げて目を瞑る。頭の中で自然と詠唱する言葉が流れ込んできる。数年封印してきた武器。やむおえない。たぶん、先輩ほどの魔術エネルギーでは死にはしないだろう。だから、使えるのだ。この魔術を。

「Ｄｅｒ　Ｇｏｔｔ　ｄｅｓ　Ｔｏｄｅｓ　ｖｏｍ　ｐｕｒｐｕｒｒｏｔｅｎ，　ｄｅｒ　ｅｉｎｅ　Ｓｅｅｌｅ　ａｕｆｎａｈｍ」
「……ドイツ語？」

詠唱の言葉に違和感を覚えた先輩。だが、いまはそんなことどう

でもいい。体の周りから霧が再びたちこめる。そして、右手に集まり、ゆっくりと確実にその形をあらわにしていく。そこに現れたのは一本の紅色の刀。ずっしりとくる重さと、刀本体から流れ出してくる大量の魔術エネルギー。その量に先輩の顔色が悪くなる。

「なんだ、その刀は……！」

俺は刀を両手で掴み、その名を口にした。

「吸血の死神。妖刀――村正」

ま、名前なんてどうでもいいけど。

The second Invalidity, powerlessness

魔術詠唱の翻訳

Der Gott des Todes vom purpurroten, der eine Seele aufnahm

（魂を吸い取る紅色の死神）

⇔

ここでちょっと発表しますが、この作品は「姫君と俺の錯乱日々」と平行で投稿している作品ですが、あまりにも投稿スピードが遅いということで、人気のアルこちらの作品を今度から優先して書かせていただこうかと思います。錯乱日々に関しましてはこれからと同様、一ヶ月に一話更新となります。

この作品は目標としては二週間に一話書ければよいと思っております。また、文字数も少々、少なくなると思います。

勝手な判断ですが、ご了承ください。

な、なんと、皆様のおかげで３／２９にＰＶアクセス数２５５７１アクセス、ユニーク１６２８アクセス、３／３０にＰＶアクセス数２６６３６アクセス、ユニーク１４２３アクセスと、初めてこのような多くのアクセスを頂きました！　誠にありがとうございます！

総合評価も１００７ポイント、お気に入り数も３８０件と最高記録をもらいました！　そして只今の合計ＰＶアクセス数３１６５１７アクセス、ユニークアクセス数４９０３４アクセスです！　まずは目指せ五十万アクセス！　これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします！

清流学園学園長――猿鳶杏（さるとびあんず）は白衣をきて、学園の地下にある研究室で、モニターをみながら笑みを浮かべていた。補佐である女性がたまたま資料を運ぶ途中で、学園長の不敵な笑みを目撃した。自然と、話しかけた。「なにか、面白いものでもありましたか？」と。その質問に対して猿鳶は「爆笑モノだよ」と答えた。

「あら？　来城くんはまた新しい魔術を？」

「そうらしい。しかも今度は他のとは比べ物にならないほどの大物だ」

「……村正、ですか」

「まったく、来城月下という男子生徒はとことん私を楽しませてくれる」

ふふふ、と声を殺して笑う猿鳶は補佐の女性から見ても本当に楽しそうだった。来城月下が初めて魔術を見せてからというもの、この学園長は今までの研究を全て後回しにして、真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）を研究し続けている。映像のみで研究してきたが、今回の魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りにおいて、多くの実戦研究データをとることが出来た。

「また別の器を用意する必要が出てきましたね」

「まあ、仕方ないさ。『英雄人柱計画（レジェンドサクリファイスプロジェクト）』が完成するためにも、彼の魔術データが必要となるんだ。今回だけではなく、次回の魔術乱戦（マジック・サバイバル）でも、多くのデータが取れる。そうすれば、私の――彼女との夢が叶うんだ。器ぐらい、すぐにでも作るさ」

「……そうですね」

補佐の女性はそれだけ言うと、何も言わずその場を後にした。猿

鳶は補佐の女性を見つめて不敵に笑った。自分の考えが理解してもらえていないというのは分かっている。馬鹿げているのも、くだらないというのも。でも、これだけはやり遂げておきたいのだ。自分の理解者であり、上司であった霧雨羅羽（きりさめらう）の夢の為である。

「ラウ――君の夢は私が実現させる」

当時、ラウの元で研究していた猿鳶はわずか十代の少女の言葉に感動を覚えた。科学者である自分を否定し、肯定し、そして認めた少女。彼女を助けられなかったときの自分はあまりにも無力だった。だが、今は力がある。少女の夢だけでも――叶えてあげたいのだ。

「さて、そろそろ研究に戻るか」

猿鳶はそう呟くと、モニターとは反対の方向を向いて、再び笑みを浮かべる。彼女の目に入ったのは六体のカプセル。透明の液体が入ったカプセルだ。そして、そのカプセルの中には猿鳶達が言う器と言われる物も入っている。大きさはそれぞれだが、共通して言える事があった。

全て人の形をしている。

性別も年齢もばらばらである。鎖でつながれた器達は目を閉じて、まるで死んでいるかのように液体の中で浮いていた。猿鳶はゆっくりとカプセルの一つに近付き、右手を添えた。ガラスに映る自分の顔を見ると、吐き気がするほど口元がにやけている。それほど歓喜していた。

「さあ、お前達。また新しい兄弟が増えるぞ。どうだろうな？　今度はどんな器ができるんだろうね？」

猿鳶は声を上げて笑った。

⇔

「村正――！？」

「ええ、あの村正ですよ。呪われた妖刀――村正。人の生血を吸うといわれることから、吸血の死神なんて外国の方々は呼んでいるらしんですけどね」

村正――もとは伊勢国桑名で活躍した刀鍛冶である千子村正（せんじむらまさ）の事である。彼が作った刀の名称はすべて「村正」と呼ばれている。そして、その一本、俺の手に握られている村正だ。徳川家康は村正のコレクターであり、多くの村正を所有していたといわれる。家康の祖父清康と父広忠は、ともに家臣である人物によって殺害された。そのときに使用された凶器が村正だったと言われている。村正は刀だけではなく、槍も存在し、家康の足の指を落ちてきた槍――村正によって切断。その槍を家康は刀――村正でへし折ったという。このように村正というのは一本だけではなく、多くの村正が存在する。そして、そのどれもかれもが呪われており、狂っており、とりつかれているのだ。それゆえに――妖刀。

俺の村正は千子村正の最高傑作と言われ、将軍が持っていた刀である。そのため、多くの血を吸ってきて、多くの魂を食い続けてきた村正。それは、どの村正よりも残酷で、斬新で、残念な刀だということだ。

「来城くん……、君はそれをどこで！？」

「だから、俺の魔術は生まれつきなんですって。でも、こいつは、本当に危ないから使うことを躊躇しましたよ。でも、先輩の『吸収』

という能力があるから、俺はこいつを出そうと決心したんです」

「……」

先輩は完全に混乱していた。俺の言っている意味も、持っている品物も。だが、先輩はすぐさま頭を振って、考えをまとめる。刀を構えて、すっと睨む姿は現代の英雄だ。古風な感じがにじみ出て美しいとしか言いようがない、少しだけ見とれてしまう。

「来城くん、では、決着をすぐさま付けよう。その刀も私の無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）で叩き折ってやる！」

先輩は本気だ。俺も同じように刀を構えて、集中する。ただ、勝つことを考える。それだけを考えれば、なにも問題はない。心配はいらない、先輩だからこそこの村正を扱える。だから、問題ない。

「はあああ！」

先輩の叫び声が引き金となり、二人同時に動いた。一回――刀が触れ合う。金属音が鳴り響き、全身に相手の一撃の重さが伝わってくる。すぐさま刀は離れて、手がしびれる。二回――先輩は体を回転し、横から刀を俺の左腕に切り込んできた。俺は左手を離し、右手に掴んだ村正を無理やり左腕の位置まで持ってくる。再び鳴り響く金属音。三回――再び離れ、先輩は流れるように頭から振り下ろした。それと同時に村正は先輩と同じ動作をした。三度交わる刀。

「っ！？　そんな！？」

「気がつきましたか先輩？」

焦る先輩。余裕の俺。立場が逆転した瞬間だった。焦りの表情と、冷や汗が先輩の顔に現れている。先輩からは涼しい顔をした、面白

くもない顔の男子生徒が目に映っているだろう。まあ、何がこうも先輩を焦らせて、惑わせて、泣かせているものなんなのか。そんなの――決まっているじゃないか。

村正を弾き返し、忍者もびっくりの速さで俺から距離をとる。体の緊張をとって、先輩を見た。雹月をぎゅっと構え、親の敵のように俺を睨む。その目は、この試合の中で一番殺意に満ちた目だった。それだけ、警戒されて、恐怖されて、敬遠されている。

「なんで――」

先輩は、叫ぶ。

「なんで、無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）が通用しない！？」

先輩が叫んだ理由――無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）が通用していないのだ。村正はもちろん俺の魔術エネルギーから作り出された品物である。無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）の能力で魔術エネルギーの塊である村正はエスカリボール同様、吸収されるはずだった。それが、適用されていない――機能していないとなると、先輩もそりゃ焦るだろう。何故かって？

「そりゃあ、村正の能力自体も『吸収』だからですよ」

「……っ！？」

「まあ、そりゃあ、先輩の無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）よりは優秀じゃありませんよ。なんたって――」

と、言葉を発するはずの口から、大量の血液が流れてきた。思わず全て吐き出し、左手で口元を隠す。突然のことで、先輩も会場の人達も、もちろんラウも驚いているだろう。荒れる息を整えて、すこし虚ろな瞳で正面を向いた。

「ら、来城くん！？」
「はァ……はァ…大丈夫、ですよ。これは、村正の……召喚…代償です……」

召喚代償――これがある故に、残りの四つは「デンジャラス」と言う分類に入るのだ。等価交換とは違い、召喚を続けている間に、払い続けなければならない対象のことである。これまた不思議と、召喚をやめると同時に払った対象は元に戻るのだ。

「村正の能力――『吸収』はたちが悪く……五分間に1個…体の一部を……失うんです」
「っ！？　つまり、それは――」
「へたしたら――死にます……ね」

力なく、笑ってしまった。

「笑い事じゃないぞ！　そこまで、して――私に勝ちたいというのか！？」
「仕方ないでしょう……、俺は負けないってあいつらと約束しましたからね」

親との約束を破っておきながら、こんな約束を守るなんて。俺は、もしかしたらどうしようもない底辺人間なのかもしれない。それでも、隈井、国塚、そしてラウと約束した。負けないと――。それは、どうしても、守りたい……！

「さきほどの……続きですが、『吸収』という名の通り、俺の体の一部を吸収します……。だけど、それと同時に、この村正は吸収の能力を上げる……！」

ゴフっと、再び口から血液が漏れる。先輩は衝動的に俺の下へ駆け寄ろうとした。だが、先輩は一歩を踏み出したと同時に、体の力が抜けるように――魂を刈られたように足を崩した。うつぶせに倒れる。まだ意識がある先輩は、何が起こったのか分からず、目を白黒させている。

「足に……力が！？」

「『吸収』する村正は……もちろん、『吸収』はされない。……だから、無効無力の能力も…適応されま…せん。そして、生贄を奉げるごとに……『吸収』は半径十五メートルの人間の体力、精神力、意識、気力――魔術エネルギーを奪う」

「っ！　つまり、君の体のなくなればなくなるほど――」

「先輩の体も動かなくなります」

とまあ、かっこよく言ってみたものの、最初の吐血で胃の一部を、二回目の吐血で腎臓の一部を奉げてしまったらしい。状況は――最悪。先輩の状況も――最悪。さすが妖刀というか、諸刃の剣というか、どのみち、呪われているのには違いない。

「そんな呪い……私が打ち払う！」

雹月を杖代わりに這い上がり、俺に向かって言った。流石だ、一般人だと二回の生贄で気絶するはずなのに、気絶しない脅威の集中力と生命力。正直な感想。……人じゃねえー。いやいや、呪われた刀の力を使って倒れないって、どんな精神力をもっているんですか？　もう、人じゃないよ……ね？

「それは……俺も、困るんですよねえ」

村正を構え、笑みを浮かべながら言った。さて、そろそろヤバイね。魔術エネルギーの使いすぎ、大量出血による貧血。この二つの所為で、心身ともにボロボロだ。たまったもんじゃない。

「……来城くん、私は次の一撃で決めようかと思う」

「奇遇ですねえ……。俺も内臓と相談した結果、次の一撃で、ぐぶっ！？」

また吐血した。今回は肝臓をやられたようだ。そもそも、内臓がなくなると吐血するのかどうかが俺は知りたいよ。思わず膝を着く俺と、先輩も崩れた。だが、互いに相棒を地面に突き刺し、耐える。荒い息と、流れる嫌な汗。お互いにこうして意識を保つことが奇跡に近い。

「っ！　また……俺の内臓がなくなる前に……、さっさと片付けましょう」

「それには同意だ……！　私も、早く終わらせたい」

それだけ言うと、俺は村正を――先輩は雹月を構えた。流れる沈黙。聞こえるのは自分の心臓の音だけ。そして何より頬を流れる汗の感触が気持ち悪い。瞬きをすることさえ――呼吸をすることさえ――自分達が命がけで戦っていることさえ――忘れてしまいそうな感じだ。

「……」

「……」

観客の全員は、固唾を呑んで見守っていた。誰が予想できたか――最下位と最高位が同じフィールドにたって戦うことを。誰が予想できたか――互角に戦っている最下位と最高位を。観客がに聞こえ

るのは、二人の小さな吐息。その静けさを物語っている。

「……」
「……」

そして――一瞬にして二人は同時に動いた。

「はあああああああああああああああああ！」
「せりゃあああああああああああああああ！」

ジャキンっ！　と鳴り響く刃物同士がぶつかり合った音。

交差した二人。

振り切り、互いに背を向けた状態で静止した。

「……勝負あり――ね」

ふらっと、先輩の膝が崩れる。今度はそのまま、ゆっくりと、自然と、倒れる。前のめりに。バタンっと言う音が背中から聞こえる。そして何も聞こえない。先輩が立ち上がる音も、地面を這う音も、なにも、聞こえてこなかった。

「俺の……勝ち、ですね……」

それだけ呟いて、俺の意識は暗闇へと消えていった。

The second Cursed sword―conclusion(中)

さて、次回で魔術決闘祭りも終了となります。それからのお話ですが、五話か三話ほどはほのぼのとした学園生活のお話をお届けしようかと思います。いちおう、ジャンルはコメディですのでw
それでは次回にご期待ください。
感想・評価お待ちしております

The second Festival end（祭りの終了）（前書き）

今回でChapter 2 Magic duel festiv
alは終了です。今回はメチャクチャグダグダな話です。

The second Festival end（祭りの終了）

ラウが立ち上がったときには、月下はすでに地面に倒れていた。来城月下――七つ目の武器『村正』。それの能力により、轟坂小梨と対等な条件で斬りあうこととなった。それからの展開が、速かった。交わるように振り下ろされた二本の刀は、相手を静かに斬ったのだ。よって、轟坂小梨と来場月下は相打ちという形に終わった。

「せ、先生方！　すぐに治療の用意を！」

本の一瞬、時間が止まったかと思われたが隈井の一言で会場がざわめきだす。白衣を着た先生達数名は、担架に二人を乗せてそのまま中庭を去った。ラウは一目散にその場を離れようと走り出した。

「ら、ラウ！？」

玲虎が驚いたように名前を呼んだが、そんなことはお構いなしに足を進めた。目的は義兄――来城月下の安否を確認すること。あんな大怪我、治療魔術で間に合うかどうか。いや、論理上、魔術で受けた傷はどんなものでも治療魔術なら再生可能なのだ。だから、月下に命の別状は無い。でも、今回は例外だ。小梨の魔術は『吸収』である。刀自体は魔術ではないのだ。吸収して排出された刀は、結局は刀。魔術ではないダメージは治療魔術では癒すことは出来ない。あの出血の量では命に別状が出る。ラウの心配は積もっていた。

中庭を出て、校舎へ入ると、そのまま保健室へ向かった。この学園の保健室はベッドが四つ。医療器具も様々なものがそろっており、さすが魔術学校と思わせるほど少し広いのである。なんて、保健室の説明をしても仕方が無い。話を進めると、ラウは保健室の前まで

来ていた。勢い良く扉を開けると、そこにはベッドに横たわる血まみれの月下。隣のベッドには小梨が寝ていた。月下は上半身が裸になっており、斬られた傷が生々しい。そして、不自然に陥没した部分がある腹部。村正への召喚代償の結果だった。村正はまだ、月下の左手に握られている。

「兄さん！」

月下の看病をしている三人の先生達の間に割り込み、涙を流しながら月下の右手を両手で掴んだ。そして、祈るように叫ぶ。

「なんであんな無茶したのですか！？　なんでそこまでしたのですか！？　なんで、どうして……！」

月下は答えない。

「兄さあああああァァァん！！」

ラウは泣き叫ぶ。

⇔

俺が目が覚めたときには、可笑しなことになっていた。小梨先輩との試合は結局のところドロー。「俺の勝ち」なんて恥ずかしい台詞を言っておきながら、気絶してしまった俺は泣きたい気分だった。ドローになったことは後々隈井に聞いた話である。話を戻すと、可笑しなことになっていたのはもう一つある。目が覚めたとき、右手に違和感を覚えて目線をそっちに向けると、右手を両手で握って涙を流しているラウがいた。椅子に座って、俺の瞳をじっと見ていた。その後ろでは小梨先輩が寝ていた。ジャージに着替えているのは、

多分俺が村正で斬ってしまったからであろう。俺も、いつの間にかジャージに着替えている。

「に、兄さん……！」

目が覚めたことを確認すると、ぎゅっと俺を抱きしめてくれた。暖かに感触。冷たい雫。静かに俺の胸で涙を流すラウはあまりにも儚く見えた。頭の中で、雪の日のラウと重なる。涙を流す幼い少女。そして今も、俺の中に居るのは儚くてどうしようもないぐらい大切な少女だ。

「ごめんな、負けちゃったよ」

静かに呟くと顔を上げて睨みつけるようにラウは表情を変えた。

「なにが『ごめん』よ！　兄さんは無茶ばっかりして！　なんで、なんであそこまで……」

そこまで言うと、再び糸が切れたように顔を胸に押し当てる。心から心配しているのだ。決して血が繋がっていなくとも、俺のことを本気で心配してくれる。まあ、理由は分からんことも無い。魔術ではない刀に斬られたとなったら治療魔術は効果が出ない。俺もそう思っていた。しかし、小梨先輩の刀は『吸収』されたときに、魔術エネルギーを自然とまとっていたのだ。よって、奇跡的に刀での斬撃は『魔術』での攻撃と判定されたのだ。

「なんでって、約束したじゃねえか」

「……約束、ですか？」

「覚えてない？」

まあ、無理も無いか。

「あの時、俺がこの学園で初めて魔術を使ったとき、言ったじゃないか。『勝ってください』って」

「……え？」

「覚えてないか？　俺は覚えているけど」

「……覚えているもなにも、その約束って継続するものなんですか？」

「継続しないのか？」

「……」

「どうした？」

唖然とした表情で固まるラウ。いや、別に驚くところは何も無いだろ。約束をただ守っただけ。それだけの話だ。まあ、ラウだけじゃなく、隈井や国塚とも約束したからどのみち勝たないと後々怖いからな。とまあ、別にラウが固まるようなことを言った覚えは無いが……。

「……ば」

「ば？」

「馬鹿野郎ぅぅぅぅうううううううううう！！」

鼓膜が破れると思うほど耳元で叫ばれた。

「耳痛ェ……」

「兄さんは馬鹿ですか！？　約束って、だれも死ぬまで勝ってなんて言っていません！」

「……ちょ」

「そもそもなんですか！？　体の一部が消える？　そんな代償初めて聞きました！　私が開発した魔術ではないかもしれませんが、魔

術なら私はすべて知るべきなんです！！　兄さんの真実の魔術に関しては、すべて話してもらいますからね！」

「いや、その――」

「全部ですよ！　ぜ・ん・ぶ！！　まだ何か隠しているでしょう！？　絶対に隠しています！　だから、私にちゃんと教えてください！」

話が全然違う方向へ一人歩きしている……。ラウが一人で暴走しているって言った方が妥当だな。少し呆れながら――というより困りながらラウのマシンガントークを聞いていた。息継ぎは何時しているのだろうか？　そんな疑問が出てくるぐらいずっと話している。

「そ、そういやー」

これでは埒があかないと、目線を少しずらしてわざとらしく少し大きな声でラウに話しかけた。ぴたっと、ラウのトークが止まる。それが分かった瞬間、俺は再びラウのほうへ視線を戻した。涙で潤んだ瞳が、俺をじっと見ている。正直、目線をそらしたくなるようなか弱い視線だった。何か話さなくてはと考え、ほとんど無意識に口が動いた。

「お、俺ってどのぐらい寝てた？」

「……三十分」

「そうか……」

俺の質問に対して、答えだけしか返さなかった。少し拗ねている様にも感じられる。いや、これは確実に機嫌が悪い。理由は良く分からないが、ここでまた会話をやめてしまうと再びマシンガントークが発動してしまいそうなので、無理やりにでも話をつなげることに。

「いま、あっちはどんな状況なんだ？」
「……表彰式があってます。兄さん達は怪我の為、不参加という先生達の判断です。今頃は両チームとも表彰されていると想います」
「優勝は今回はなしってことか？」
「そういうことになりますね。兄さんと轟坂先輩が引き分け、これによって決勝戦はすべてドロー。祭り始まって以来、初めてのことだそうですよ？」
「そりゃあ……よかった。いや、いいのかどうか分からないけど」
「ですね」

クスっと笑って見せたラウ。少し安心した。このまま不機嫌でいられると、家に帰ってからが気まずいからな。なんて、考えているとふと、ラウの後ろに寝ている小梨先輩が目に入った。先輩を見て思い出すことは先程まで戦っていた自分と先輩だ。刀を振り回し、人間とは思えない身体能力。

まるで、人間じゃないかのように……。

……何を考えているんだか。ほんとうに、どうでもいい。人間じゃなかったらなんだという話になる。そもそも、小梨先輩の『吸収』というのは彼女に周りにあるもの全てを吸収できる。一部を除いては。条件というのはその物質自体が存在しているということだ。重力しかり、空気しかり、一応あれも物質と呼べるものである。身体能力も重力などの、邪魔な物質を吸収しただけ。それだけだ。

「結局、勝てなかったんだな」

静かに呟くと、ラウはもう一度俺から視線をそらし、後ろの小梨先輩を見つめた。静かに見つめると、顔はこちらに向けず、口を開

いた。

「引き分けだったじゃないですか」
「俺の中では引き分けも負けだよ」
「兄さんは昔から負けず嫌いでしたもんね」
「負けず嫌いなら最下位なんかになってねえよ。それより、昔って俺達出会ってまだ二年だし」
「気持ちの問題ですよ」
「そんなもんか？」
「そんなものです」

ラウの顔を覗き込むと、すこし口元を上げて微笑む顔がそこにはあった。どうやら機嫌は完全によくなったらしい。まあ、うん、良かった良かった。なんて、安心していると、小梨先輩がゆっくりと目を開けた。上半身を起こして目をこすると、こちらを向いた。

「……なっ！？」
「あ、ども、小梨先輩」
「お久しぶりです、轟坂先輩」

目覚めた先輩に軽くあいさつすると、何故か驚いたような表情をされてぴくぴくしている。俺とラウはほぼ同時に首を横へまげる。なんとなく傾けてしまうほど疑問だった。

「な、なんでキミがここに居るんだァァァァァァあああああああああ！？」

今日何度目か、耳が痛くなった。

⇔

こうして、無事に魔術決闘祭り――マジックフェスティバルは終了となった。あの後はなんとか試合が終わった後のことをラウに説明して、落ち着いてもらった。何に驚いたのか聞いたが、答えてはくれず、ぶつぶつと何か呟いているばかりだった。良く分からなかったが、その後すぐに隈井と国塚、狩亜先輩と宝香さんがお見舞いに来てくれた。そしてそれから数分後にクラスメイト達がやってきた。

良く分からないがクラスで打ち上げということ。ラウや玲虎ちゃん、クラムちゃん達も連れて焼肉を下のだが、まあ、無駄に盛り上がったとだけいっておこう。

それにしても、なぜ魔術決闘祭り（マジックバトルフェスティバル）という行事があるのか、俺は不思議でたまらない。怪我をするなんてレベルではない。一歩間違えれば死人が出るのだ。そんなキケンなことを生徒にさせるこの行事。

なにか、別の目的があるような……

しかも、とても危険で――異見で――異質なにか。

胸騒ぎがする。

まあ、うん。

――どうでもいいけどね。

The second Festival end（祭りの終了）（後書き）

次回からはしばらくほのぼのとしたＣｈａｐｔｅｒ３　Ｃａｍｐｕｓ　ｌｉｆｅ（学園生活）が始まります。予定では五話ほど。ほよんどコメディ回。いや、もともとジャンルはコメディなんですけどねえ。

それではみなさん、また次回にご期待ください！

感想、評価お待ちしております。

The three Cup and ball and calligraphy club

Capture3 Experience joining a club（体験入部）はじまりですー

さてはて、魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りから大体一瞬間が経った。この祭りの影響で『生徒会』と魔術決闘（マジックバトル）をするという行事が中止となった。理由は良く知らされていないが、別の行事が入るらしい。まあ、気になるところだ。

そういえば、この学園は学園としての機能を果たしているのか不安になるときが多々ある。だが、『部活』という分野の機能は立派に果たしているといえるだろう。国塚の所属しているテニス部は毎年インターハイに出場する常連校だ。他にもラウの所属している『剣玉部』、小梨先輩の『剣道部』、隈井の『サッカー部』などは強豪チームとして全国では知られている。

そしてこの俺であるが、もちろん（？）帰宅部である。最下位と面倒臭がりやのレッテルがある俺にとって部活動というものがどうにも合わない。それは身体的にも心身的にも。基本、ラウの護衛を目的にこの学校に入学した。当初はやはり、ラウを狙う連中は少なくはなかったが、この頃は全く見ない。それは、ラウという存在―魔術という存在が珍しくなくなったからだろう。もちろん、魔術は一般化したとはいえ、銃刀などと同様の扱いになる為、魔術学校に通う生徒、または教師、そして魔術を使って良い特殊な職業の人物のみが扱えるのだ。

魔術を学問としてとりえている学校は多くはない。もともと俺が通うはずだった高校も魔術は扱っていなかった。それだけ、この学校が変わっていて、優秀であることが分かってもらえただろう。

それよりも問題なのは今の現状だ。

さきほど言ったとおり俺は部活動には入ってはいない。そして、当初の目的であったラウの護衛が今現在、必要ではないこと。このことを踏まえて、俺は放課後からラウに振り回されているのだ。

体験入部に。

⇔

「なあ、ラウ」
「なんですか、兄さん？」
「お前の入っている剣玉部ってなにをするの？」
「剣玉です」
「……質問の仕方が悪かった。剣玉部って部活動なのか？」
「もちろんです。これでも、私、全国七位の実力を持つんですよ」

そんな会話をしながら、。俺とラウはせっせと剣玉をしていた。今回の目的は俺の脱帰宅部ということらしい。ラウ曰く、部活動は学校生活でとても充実できることだといわれた。自分の護衛が必要でないとわかったことから、俺を部活へ入れようという考えだ。

そして、今はラウの所属している剣玉部に来ている。たたみ六畳ほどの部屋で、俺とラウ、そして残り二人の女子生徒でせっせと剣玉をしている。ちなみにというか、中等部と高等部とでの部活動は一括のため、中学生であるラウと一緒にこの剣玉部に入る事だってできる。

「剣玉って案外難しいな」
「私は小さい頃からやっていましたしね。このぐらいお手の物です」

と、赤い球体を棒へ刺した。見事だ。残りの二人も続くように赤い球体を棒へ刺した。俺はその光景を見て溜息をつくことしか出来ない。なかなかに、恥ずかしい。

「先輩、もっと腰を入れてやってくださいよ！」

急かす女子生徒――名前を森秋千歳（もりあきちとせ）。中等部三学年、剣玉部所属。中等部ランキング８５位。俺の二つ下で、ラウの先輩に当たる人物だ。くりっとした大きな目に、肩の辺りまで伸ばした栗色の髪の毛がかわいい顔に似合っている。

「そうですよぉー。もっと、こおぅー」

おっとりとしゃべる少女――古牧眠（ふるまきねむる）。こちらは高等部一学年、剣玉部所属。高等部ランキング１０１３位。おっとりとした口調に眠たそうな目。ボブショートの黒髪。こちらは俺の一つ下の後輩になる。剣玉部では最年長だ。

「あー、兄さんもっと肩の力を抜いて」

「なかなか難しい要求をしてくるな。肩の力なんて勝手に入っちまうもんなんだよ」

「そうですかね？」

「そうなんだよ。大体、装置が剣玉なんだから、そりゃ上手いに決まってるだろ」

愚痴をいっていると、うーんと唸るラウ。残りの二人は黙々と大技を披露してみせる。絶対に人間業じゃないだろうと思えるような技ばかりだ。すると、ぽんと両手を叩いてラウが何か思いついたような表情を浮かべる。

「それじゃあ、次はテニス部にいきますか」
「なんでやん」

ふつうに突っ込みをした。

「兄さん運動は得意ですし、大丈夫ですよ」
「そういう問題じゃ――」
「ええー、先輩入らないの？」
「来城先輩入らないのですかぁー？」

こういう話になったとたんに三人の少女に迫られた。もちろん男としては嬉しいが、なかなかに困る状況だ。顔を背け、苦笑いしかできない。まあまあ、落ち着けというように両手を前に出してみるが全く効果は出ない。

「と、とりあえず……」

ここから一日の地獄が始まるのだ。

「……書道部に行こうか」

今思えば、なんで俺はあんなことをいったのだろうと後悔している。帰ろうといえばうまく事は終わっていたはずだった。なのに焦っていたのか――いや、焦っていたが、まさか自分の口から書道部なんて言葉が出てくるとは思わなかった。

「あの……」
「どうした来城？」

何故か床に正座をして、右手で筆を持ち、黙々と『魔術』という

字を書く暗井狼先輩（くらいじん）。書道部部長。ランキング七位。得意な魔術『闇』。そんな人物の目の前で俺とラウはじっと立っていた。なにもせず、ただじっと。

「体験入部に来たといったはずですが……」
「来城、お前書道したことないだろ？」
「したことないというか、小学生の時にちょっと」
「あんなのただのお遊びだ。書道というのは、字のごとく『書く道』だ。『書く』ことによって『道』になる」
「……まったく分からないのですが」
「だろうな。結局、そういうことだ」
「……」
「俺が言いたいのは筆を握る前にお前はもっと『道』を選んで来い。お前に書道は今のところあわない。それでも『道』が見つからないなら『書く道』にくればいい」
「……いや、その――」
「兄さん」

ラウが俺の袖をひっぱり言葉をさえぎる。顔を見てみると、何故か無言で首を横に振った。……それはつまり、俺は字が下手だからとりあえず、練習しようということではないか。てか、絶対そうである。溜息をつくと狼先輩は筆を置いて、俺の顔をじっと見た。

「魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りは残念だったな」
「はい。でも、狼先輩のおかげであそこまで――村正を出せることが出来ました」
「いやいや、それについては申し訳ないと思っている。まさか、『あんなもの』が出てくるとは思わなかったし。命にかかわるところだったからな」

狼先輩は申し訳なさそうに目を伏せた。すると、ラウがにっこりと笑った。

「大丈夫ですよ、狼先輩。兄さんは私の兄なんですもの。それくらいのことじゃあ死にませんから」

「俺は化物か。内臓がなくなったら死ぬって」

「そのときは私がどうにかします」

なんて兄妹で話していると、狼先輩は静かに笑った。

言い忘れていたが、ここは部室棟と言って、主に文化部の部室が集まっている棟だ。ちなみに書道部は剣玉部の一つ上の階にある。他にも文化部、美術部、吹奏楽部、理科研究部、マイコン部など色々ある。運動部は女子ソフト部と女子テニス部、女子陸上部、女子バスケ部と、女子の更衣室が一回にあるだけだ。特に深い意味はないが、まあ、とりあえず紹介はしておく。

「心強い妹だな。流石というべきか、それともあたりまえというべきか」

面白そうに言う先輩は本当に、面白そうだった。この状況が。

「とまあ、散々言っておいてアレだが、入部は待っている。部員は多いほうが良いからな」

「さっきと言っている事が真逆じゃないですか……」

「俺はただ単に、来城にあわないって言っただけだ。あわないならしても仕方ない。　おまえ風にいうとどうでもいいだろ？」

「……それを言われるとなんとも言いかえせませんよ」

「だろうな」

本当にこの人は困ったものだ。雰囲気的には無口で名前のように暗い感じがするのだが、実際は良く話しかけてくれるし、面倒見がいい。頼れる先輩なのは間違いない。ただ、このように少々人で遊んでしまう悪い癖があるようだ。

ガラっと部室の扉が開いた。堂々と入ってくる人物――雲神春乃（くもがみはる）美（のみ）先輩だった。俺とこの間、殺し合いをした雷の魔術遣い。ランキング2位。別名『雷神の魔術師』。グローブ型の装置から放たれる雷は、想像を絶するものである。その本人が俺の顔を見ると、近寄ってきてぺこりと頭を下げた。

「……久しぶり」
「久しぶりですね、春乃美先輩」
「……うん」

こちらは見た目どおりというか、口数が少なく、大人しい人だ。だが、魔術決闘（マジックバトル）のときは良く話していたことを思い出す。小梨先輩とおなじで、戦うときは周りが見えなくなる人なのだろうか？　そうでないと、なんか怖いな。

「おう、春乃美。どうだった？」
「……先生達は会議中」
「そっか。じゃあ、また次回でいいや」

そう言って、狼先輩はゆっくりと立ち上がった。

「雲神先輩も書道部なんですか？」

ラウが質問をする。その質問に対して先輩は静かに肯いた。ということは生徒会との掛け持ちなのだろう。まあ、運動部と違って書

道部はそこまで忙しそうではないから別に大丈夫なのかもしれないと、一人で解釈し、一人で納得していた。常々思うが、俺はどうしてこうも自分勝手なのだろう……と。

「春乃美には悪いと思ってる。こいつがいなくなると三年生が俺一人になるから大変なんだよ」

「そういえば、他の部員の人たちは」

「ああ、今日は元々休部でね。俺はどのみち春乃美と帰るから、こいつが生徒会の仕事が終わるまでここで待っているんだ」

「へー……、お二人って仲がいいんですね」

ラウがニヤニヤしながら言葉を発する。まあ、俺もそれについてはうすうす気がついている。魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りの時なんか、態々狼先輩が春乃美先輩を背負って退場したのである。大体、あのときから二人の関係は怪しいと思っていたのだ。

もちろんというか、二人は顔を赤くして、照れるようにごまかす。それでは『お付き合いしています』と言っているのと変わらない。というか、言っている。まあ、二人の色恋沙汰に首を突っ込むようなことはあまりにも失礼なのでこのあたりでお暇させてもらう。

「それじゃ、先輩。俺達もそろそろ行きます」

「お、そうか。んじゃ、とりあえず行く場所なかったらウチに来い。歓迎するぞ」

「ありがとうございます」

「失礼しましたー」

ラウと一緒に書道部を後にする。とりあえず、そこから少し離れて立ち止まる。俺は帰る気満々だったのだが、ラウは少々唸ってから、そして手をぽんと叩いてこう言ったのだ。

「兄さん、次はテニス部に行きましょう」

マジデすか。

The three Speculation and envy（思惑と嫉妬）

更新遅くなって申し訳ありません。
今回は跡付け設定みたいなことになってしまいましたが、あとあと重要になってくるので、今回は少々スルーしていただけると幸いです。

ふと、思ったのだが、俺の魔術がこうやって明るみに出たのに大騒ぎしないのはなぜだろうと疑問に思った方がいるかもしれない。いや、必ずしもいるはずだ。なんたって、俺自身が不思議に思い、考え、思い悩み、答えに行きつけなかたことである。真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）はたぶん、今のところ、世界中で俺一人なのではないかと思う。珍しい――なんて、一言で済ませれるレヴェルではないのだ。それこそ、俺を巡っての『戦争』が起こりゆる可能性だってあるのだ。

しかし、だ。現実は学園内でしか、俺の魔術はばれていない。世間には、出ていないのである。何故そういうことになっているのか、ラウに聞いてみたことがあった。それはたしか、俺が初めて魔術を使った日から四日たった日だ。色々なことを覚悟していたのに、大騒ぎになっているのは学園内だけ。その真相をラウはこう言った。

「ああ、それは、丹河（にかべ）辺先生の『破られない約束（コンプリート・プロミス）』のおかげです」

「こんぷりーと……なんだって？」

「コンプリート・プロミス――破られない約束ってことですよ。この魔術は私が開発したもので、魔術を使っていない丹河辺先生に頼んだんです」

「頼んだって……どういうことだ？」

「この魔術はちょと変わっていまして、人工的に作られた能力を持つ装置なんです。普通は、魔術というものはその人の内なる力――魔術エネルギーの八つの理（エイトルール）からなっています。例外として、八つの理（エイトル）から外れているバグもあります」

「そんな基礎的なことじゃなくて、俺が聞きたいのは、なんで丹河辺先生なんだ？」

ちなみに、丹河辺先生とは俺達高等部の先生で二年生のクラスの担任をしている。教科は英語。独身の若い女性だ。年齢は聞いたことあるが毎回促される。とまあ、話がずれたがこの丹河辺先生はただ英語を教えに来る、以外の俺との――ラウとの共通点がないのだ。

「理由は――魔術エネルギーがすべて一定なんです」

「……は？」

言っている意味が理解できていない。

「魔術を使う人間としては不合格ですが、魔術を持つ人間としては百点花丸合格なんです」

「ちょっとまて。いやいや、どういうことだ？」

「最初、私達生徒は体の中にある魔術エネルギーの数値を測ります。その時にどの属性が高いのか――どの魔術が使いやすいのか測りましたよね」

「ああ、そうだったな。一年生の最初にした記憶がある」

「そこから、高い魔術属性を育てるのも良し、好きな魔術属性を伸ばすも良し。大体の人はそのときに高かった魔術属性を伸ばしますが」

「それで、なんで丹河辺先生は魔術を持つ人間として合格なんだ？」

「数値的には学園内でも最下位にちかい４０なんです。しかし、その４０がきっちりこっきり八つの理（エイト・ルール）の八属性に５ずつ振り分けられているんです」

「……てことはなんだ？　魔術の威力は全くないが、八つの魔術が全て使えるってことか？」

「そうなりますね。世界でも多分、一人居るか居ないかと思っていましたけど、こうして実在すると不可能だった第三の魔術――いや、正確には兄さんの真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）が第三なので、第四の魔術が完成することが出来ました。まだ試作品の段階で名前は決めていませんが、

実験で『破られない約束（コンプリート・プロミス）』という魔術を作ったんです。第四の魔術の特徴としては好きな能力を開発できるってことです。ですが、条件としては八つの理（エイトルール）が全て等しいである」

「つまり、今のところは第四の魔術ってのは、丹河辺先生だけが扱えるってことなんだな？」

「そうですね」

たしかに、便利な魔術だ。能力が決められる魔術なんて最強でしかない。だが、条件が無理に等しい――いや、６０億／１と言う確立で使えるのだ。今の現状では使い物にならないのは確かだが、今後のラウの研究によってまたどうにかなるのだろう。心配なのはその第四の魔術によって、世界が再び彼女を狙わないか、殺さないか、死なせないかということだけだ。

「『破られない約束（コンプリート・プロミス）』として一度でも顔を見た人物に約束事をきめることが出来るって魔術です」

「……なるほど。だからなのか」

「はい。丹河辺先生には申し訳ないと思いますが、中高全生徒の顔写真を見てもらい、『兄さんの魔術について学園内以外で話さない』ということを約束したんです」

「へえ……。いや、それって活用の仕方によっては無力無効（ゼロ・オア・ゼロ）を超えるぞ」

「ええ、それを防ぐために丹河辺先生には自分の顔写真を見てもらい、兄さんのことと、『破られない約束（コンプリート・プロミス）』を霧雨ラウ以外のお願いで使用しない』と約束してもらいました」

「流石だな。抜けなし、谷なし、落ちなしだ」

「……良く分かりませんが、褒め言葉として受け取っておきます」

「しっかし、良くこの短期間で作れたよな」

「そんなの当たり前ですよ」

ラウは短い言葉で理由をこう話した。

「だって、兄さんのためですもの」

⇔

ひとまず書道部を後にしてテニスコートにやってきた。どうしてもテニス部にいきたいらしく……ではなく、俺をそこに行かせたいらしい。なぜそう思ったのかというと、テニスコートに着いてから待ち伏せていたように国塚が待っていた。テニスウェア姿は似合ってはいるが、相変わらず小学生にしかみえない。

「国塚先輩！　つれてきました！」

「ありがとラウちゃんー♪　いやー、ぜひライライにはテニス部に！」

「断る」

「「えー」」

完璧な確信犯だった。こういう話になったのは――こういう話を持ち出したのは国塚なのだろう。俺に部活動をさせるという話を。国塚の目的は俺を部活動に入れるではなく、このテニス部に入れるということらしい。推測だが、このところ男子テニス部の成績はよろしくない。そこで、運動が出来そうな俺を部に入れてどうにかこうにかしようと考えているのではないか。

「どうせ、お前のことだ。俺をテニス部に入れて、部を活性化させようて考えだろ」

「ありゃりゃ。ばれてたかー。まあ、ね。この頃男子のほうがあま

りいい成績じゃないの」
「だからって、俺じゃなくてもよかったんじゃないか？　ど素人の俺なんかより経験者のほうがいいだろ？　せめて似ているバドミントンとか……」

　すると、国塚は言いずらそうに笑って、頭をかいた。俺とラウは首をかしげて国塚の反応を見ていた。しばらく「その……ねえ」とか「えっと……」とじれったい行動を見せる。だんだん、国塚は汗が流れてきて限界が出ていた。

「なんだよ、言いたことがあるなら言えよ」
「……ごめんね、ライライ。なんか、女子のみんながライライが好いって聞かなくて……」
「……は？」
「つまりね、ライライが入らないと女子テニス部のみんなが怒るの」

　……意味が分からないのですが。

「それって強制ってことなのか？」
「そういうことだねえ♪」
「音符をつけて話すな！　いやだよ！　俺に拒否権はある！」
「えー。いいじゃんー。入ろうよ、テニス部♪」

　なんか、もう、駄目な気がしてきた。

「あ、来城先輩！」
「へ？」

　うしろから呼ばれたので振り向くと見たこともない女子生徒がこちらに駆け寄ってきた。茶髪にポニーテール。大きな黒い瞳に健康

そうな小麦色の肌。国塚と似たようなテニスウェアを着ている。右手にラケットをもええて、何故か笑顔で走ってくる少女はどこか嬉しそうである。

「先輩！　昨日はおつかれさまでした！」
「は、いや、うん、ありがとう……」

突然のことなので少々言葉に迷いが出てしまった。隣にいるラウが少しむっとしたような表情になる。良く分からないが黒いオーラを感じる……。どうした、ラウよ……。

「こらこら、マッキー落ち着いて。ライライこまってるよ」
「あ……、失礼しました！」
「えっと……ちょっと驚いただけだから大丈夫だよ」

そういってやると、「そうですか？」とはにかむ。悪い子ではなさそうだが、このテンションは俺の周りに居なかった新しいタイプの子である。いかにもスポーツできます！　って感じだが、実際のところはわからない。というか、この子は本当に誰だ？

「っと、紹介するね。この子は後輩の倉田枕（くらたまくら）ちゃん。通称マッキー。高校一年生で、私の後輩なの♪　期待の新人で、私が面倒見てるの」
「へー、国塚がそういうなら、なかなかの腕前だな」
「いえいえ、国塚先輩に教えてもらったおかげですよー」

照れたように頭をかく。見た目どおりというか、やはりスポーツは得意らしい。国塚は全国レベルの持ち主だ。その国塚のお墨付きともなれば彼女もインターハイ出場は間違いないだろう。

「こっちも一応紹介しておくね。こっちが来城月下。通称ライライ。

それで隣に居るのが妹の霧雨羅羽ちゃん。二人は兄妹で、知ってのとおりライライは真実の魔術の使い手で、ラウちゃんは魔術開発者の張本人。すごい兄妹でしょ！」

「そうだったんですか……」

目を大きく開く倉田は心底驚いているようだ。たぶん、俺達が兄妹ってことに驚いているのだろう。以外や以外で、周りの人間は俺とラウが兄妹だと知らない人が多い。それは俺達がそのことについてあまり話さない所為かもしれない。別に秘密にしているわけではない。しかし、あまり進んで話そうとする話題でもないからである。

「え、でも名字が来城と霧雨って……」

「ああ、俺とラウは血は繋がっていないから。一応遠い親戚ではあるんだよ」

「へえ、義理の兄妹ですか……」

すっと目を細める倉田。その目線は俺ではなく隣に居るラウに向けられている。倉田の目はどこか嫉妬に燃えるような目だった。とりあえず感想は怖い目をしている。口元は笑っているのに目は笑っていない。一方ラウの方を見ると、やはりラウも同じように目を細めて倉田を見ていた。互いに何か気に食わないところでもあったのだろうか？

「倉田先輩、兄さんは渡しませんからね」

突然口を開いたと思ったらそんな事を言った。思わず口が開いてしまった俺。国塚はニヤニヤと笑っている。倉田もそれに反論するかのように口を開いた。

「あら、霧雨ちゃんから奪い取るつもりでいくけど」

「私の目が黒いうちは許しません」
「なら白くしてあげる」
「……」
「……」

火花が飛びちりそうなほどにらみ合う二人。近寄り互い空気をかもし出している。後ずさりしそうになるが体が動かないのはこの二人から出ている禍々しいほどのオーラに体が恐怖しているからだろうか？　てか、お前ら出会ってから五分で喧嘩ってどういうことですか？

「……いいでしょう、それなら倉田先輩」
「枕でいいよ」
「なら、マクラ先輩。今度決着をつけましょう。それと、私もラウでいいです」
「ラウちゃん、本気で行くからね」
「望むところです」
「……」
「……」
「はーい、そこまでえー♪」

国塚のレフリーストップがかかった。二人の間にまり込むようにして二人を止める。止めるといってもただ睨みあいをやめさせただけだが。国塚は笑顔で「二人ともほどほどにね」といった。その言葉を聞いた二人はぷいっとそっぽを向く。何がどう気に食わなかったのか不思議に思う。

「それで本題に戻るけどライライは結局入るの？」
「さて、帰るか」
「あ、ちょっとライライ！」

俺は陸上部顔負けのフォームで全速力で走った。逃げるが勝ち。逃げないとなんか怖いから。ただそれだけの理由。ただそれだけの言い訳。まあ、どうでもいいけど。

「あ、兄さん待ってください！」

後ろからラウの声が聞こえた。俺に追いつこうと走ってきている。少々スピードを落としてラウと合流することにした。後ろを確認したが国塚は呆れて追いかけてくる様子もない。倉田は普通に立っているだけだ。どんな表情をしているのかはここからは見えない。

「に、兄さん、突然走るなんて……！」

「わりわり。なんか、危険を感じたから」

そんな会話をしながら走るのをやめてとぼとぼと歩く。時間的にはまだ大丈夫だが、今日は疲れた。とりあえず帰って寝たい気分だ。ラウにそのことを話すをしぶしぶ了解してくれた。一息ついて、とりあえず校門へむかうことに。

「そういや、なんで倉田とあんなに睨んでたんだよ」

「それは……その、大事なものをとられそうだったので」

「大事なものってなんだ？」

「……秘密です」

「？」

頬を赤く染めて言うラウ。なにか言えない恥ずかしいものなんだろうか？　首をかしげていると校門をくぐった。あとは真っ直ぐ家に帰るだけだ。肩を並べて歩くラウはいまだに頬が赤いように感じる。チラチラと俺の顔をうかがっているようだ。ますます謎である。

「兄さん」

何を思ったのかすっとラウは自分の左手を俺の右手をつないだ。少し戸惑ったが、ラウはぎゅっと俺の手を掴む。気のせいかもしれないが、ラウの体がすこしよってきているような気もする。

「どうした？」

「すこし、こうしていたいです……ダメですか？」

「……別にいいけど」

この時間帯は他の生徒はほとんど下校していない。部活をしていない人は大分前に下校しているし、部活動生はもちろんまだ学校に居る。こんなところを見られたら恥ずかしくて死ねるが、ラウのお願いとなったら仕方がない。義妹には無意識に優しくなってしまうようだ。

「さ、帰ろう」

「はい」

返事をしたラウはどこか安心したようだった。そんな彼女の表情を見てほっとする。始めてであった頃とは比べ物にならないぐらい『生きる』ことに希望を持った瞳。それを見れるだけで俺は幸せだった。いつか、ラウと離れてしまう日が来るかもしれない。それまでに今の幸せを精一杯かみ締めようと、静かに心に決めた。本当に変わったと感じる。ラウも――俺自身も。

「兄さん、明日はサッカー部です」

「勘弁してください」

こうして、日常は流れていく。

生徒名簿表―その1―（前書き）

キャラクター紹介です。
ランキング上位の人が多いなあ…という自分での感想。
まあ、魔術決闘祭りはランキング上位の人しか出ませんからね。

生徒名簿表―その1―

生徒名簿
及び魔術の掲載

来城月下（らいじょうげっか）
魔術：真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）
魔術効果：伝説の武器召喚・人体強化
装置：なし
ランキング：高等部１４２６位（最下位）
説明：清流学園高校二学年。生まれつきという真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）を使う世界で唯一（今のところ）の少年。口癖は『どうでもいい』。何かとどうでもいいを連呼するが、義妹のラウと友人からの頼みごとは大体聞いてしまう。両親は幼い頃に亡くしており、現在は義姉の古東（ことう）宝香（ほうか）の家に住んでいる。彼の魔術はまだまだ謎が多い。いまだに召喚していない武器もあるらしい。今後の活躍に期待。

霧雨羅羽（きりさめらう）
魔術：完全な魔術（マジック・エンタイアティ）
魔術効果：？？？
装置：剣玉
ランキング：中等部１位
説明：清流学園中等部二学年。魔術を開発した張本人。十二歳ほどで作った魔術は戦争などに使われ、ラウ本人の命も狙われることになった。そんな中で月下に助けられ、今の平和な日常を手に入れることが出来た。その頃から月下を『義兄』ではく『運命の人』としてみてきている。そんなラウの気持ちも知らずに月下は妹扱いばかりする。それがあまり気に食わないらしい。今後、彼女の魔術につ

いても調べて生きたいところだ。

国塚乃愛（くにづかのあ）
魔術：完全な魔術（マジック・エンタイアティ）
魔術効果：風
装置：扇子
ランキング：高等部５位
説明：清流学園高等部二学年。高校生とは思えないほどの幼児体型。見た目は小学生にしか見えないが、ノアの扱う風の魔術は学園内では最高位のレベルに達している。扇子型の装置、通称『ウッチー』を使って見事な風の魔術を見せてくれる。なんでもできるらしいが水泳が大の苦手。一メートルも泳げないだろう。友人や後輩には妙なあだ名をつけるのが大好きでいままで犠牲（？）になったものは後を絶たない。初対面の相手でも平気であだ名をつけるのは悪い癖である。

隈井龍牙（くまいりゅうが）
魔術：完全な魔術（マジック・エンタイアティ）
魔術効果：水
装置：トンファー
ランキング：高等部３位
説明：清流学園高等部二学年。月下の幼馴染で小学生の頃から仲がいい。妹を一人持っており、良く喧嘩をする。生徒会である狩亜純（かりあじゅ）樹（んき）の装置を使い炎の精霊であるウィッチを召喚可能。負けず嫌いで、その性格と才能で三位という数字を勝ち取った。だが、本人はあまり納得していない。国塚のクマククマというあだ名は少しばかり気に入っている。

古東宝香（ことうほうか）
魔術：完全な魔術（マジック・エンタイアティ）
魔術効果：火
装置：二丁拳銃
ランキング：高等部４位
説明：清流学園高等部三学年。月下の義姉であり、生徒会役員。家族の中では一番頼りになる存在。宝香の装置である二丁拳銃はラウが作った品物で使い勝手は最高に素晴らしいという。得意な火の魔術は一年生の二学期のときに開花した。一学期のときは、一般の生徒と変わりなかったが努力の結果、火の魔術値が大幅に上昇。夏休みの後半から太陽の神（アポロン）を開発。努力の天才といえるだろう。

雲神春之美（くもがみはるのみ）
魔術：完全な魔術（マジック・エンタイアティ）
魔術効果：雷
装置：グローブ
ランキング：高等部2位
説明：清流学園高等部三学年。『雷神の魔術士』の異名を持つ少女。ホトンド無口だが、魔術決闘の時は良くしゃべるようになる不思議な癖がある。暗井狼（くらいじん）の恋人であり、生徒会と書道部を掛け持ちしている。彼女の作る雷は本気でぶつければ死者がでるほど。ある程度コントロールしているが、重症になるのは間違いない。雷刀と呼ばれる槍を作り出すことを得意とし、武術に関しても群を抜いている。意外と恥ずかしがりや。

狩亜純樹（かりあじゅんき）
魔術：完全な魔術（マジック・エンタイアティ）

魔術効果：精霊召喚
装置：ペンダント
ランキング：高等部６位
説明：清流学園高等部三学年。『神の召喚士（ゴッド・サモン）』の異名を持つ少年。八体の精霊を同時に召喚できるという異例を残す。八つの理（エイト・ルール）に属する精霊を召喚したのは約三年前。この召喚により、彼の日常は崩れた。ある意味、死と隣り合わせである。今後、その理由についても述べていきたい。龍牙のことを気に入っており、時期生徒会に入れようとも考えているらしい。

轟坂小梨（とどろきざかこなし）
魔術：完全な魔術（マジック・エンタイアティ）
魔術効果：吸収
装置：制服
ランキング：高等部１位
説明：清流学園高等部三学年。学園最強を誇る少女。『吸収』という魔術は物質であればなんでも吸い取れるという異形の魔術を持つ。通称『無効無力（セロ・オア・ゼロ）』。型破りな魔術だが、月下の村正とは違い魔術エネルギーや体力、気力、精神力などは吸い取れない。重力を吸収するという離れ業もできるが、謎の多い魔術である。月下には恋心を抱いており、彼の前になると言葉遣いが少々おかしくなる。乙女チックな心を持っている。

七瀬幹奈（ななせみきな）
魔術：不完全な魔術（マジック・ディフィシャンシ）
魔術効果：音声再生
装置：マイク
ランキング：高等部２５位

説明：清流学園高等部三学年。放送部部長で七瀬幹穂（ななせみきほ）の双子の姉。音声再生（リアルリピート）という言葉を現実化させる魔術を持つ少女。限度はあるが、簡単な物質なら出現させることが出来る。妹の幹穂との違いは御しとやかな性格。青いリボンで右横だけを結んでいる。『美声の尻尾』『放送部の魔性』などと呼ばれている。妹と同様に月下を意識している。

七瀬幹穂（ななせみきほ）
魔術：不完全な魔術（マジック・ディフィシャンシ）
魔術効果：超人体強化
装置：大剣
ランキング：高等部２６位
説明：清流学園高等部三学年。新聞部部長で七瀬幹奈の双子の妹。月下の人体強化魔術を凌ぐ、超人体強化魔術を扱う少女。その魔術のおかげで、自分の身長を超える装置（大剣）を軽々と振り回す。姉の幹奈との違いはおおざっぱな性格でツンデレ。赤いリボンでツインテールを作っている。月下のことを意識しすぎると暴走して猫化する。周りが見えなくなり、大きな大剣を無造作に振り回す。『魔剣の貴女』『戦場の光』などと呼ばれているが、一番のお気に入りは『鬼斬りの姫』。

隈井玲虎（くまいれいこ）
魔術：完全な魔術（マジック・エンタイアティ）
魔術効果：？？？
装置：？？？
ランキング：中等部２位
説明：清流学園中等部二学年。隈井龍牙の妹。兄の龍牙とは良く喧嘩をするが、頼れる兄だということは実感している。月下を憧れの

目でいつも見てきていた。今後、活躍する場面も出てくると思うのでそのときに彼女の魔術については調べようと思う。

クラトイト・ホクトーム
魔術：完全な魔術（マジック・エンタイアティ）
魔術効果：？？？
装置：？？？
ランキング：中等部３位
説明：清流学園中等部二学年。イギリスからの留学生。ラウとは留学してきた時に初めて出来た友達で、絶対の信用を置いている。月下にたいしてはまだ良く知らないがかっこいいという認識はあるようだ。ほとんど無口で必要最低限の事しかはなさない。今後、彼女の魔術についても調べる必要がある。

朝倉美々（あさくらみみ）
魔術：不完全な魔術（マジック・ディフィシャンシ）
魔術効果：光
装置：札
ランキング：高等部１４位
説明：清流学園高等部三学園。光の魔術の使い手。見た目は国塚同様、小学生にしか見えない。ぬいぐるみが良く似合いそうだと周りから言われている。暗井狼と雲神春乃美とは親友で昔ながらの幼馴染である。あの二人が付き合うように手伝ったのも彼女である。美々本人にも想い人が居るらしい（？）

暗井狼（くらいじん）
魔術：不完全な魔術（マジック・ディフィシャンシ）

魔術効果：闇
装置：？？？
ランキング：高等部７位
説明：清流学園高等部三学年。書道部の部長である。学園内でも一番謎に包まれた人物で、何を考えているのか良く分からない。雲神春乃美とは恋人同士である。外見と違い、明るい性格で大切な人を一番に守ろうと考えている。彼の魔術はもっと検証するべきである。

友枝浅木（ともえだあさぎ）
魔術：不完全な魔術（マジック・ディフィシャンシ）
魔術効果：氷
装置：メリケンサック
ランキング：高等部１０位
説明・清流学園高等部三学年。ナルシストであまり周りからの評価はこの頃よくない。だが、実力はあり、ただ回りが強すぎるだけという残念な人。これ以上、あまり説明することがないので終了する。

The four Meeting is proven.（出会いは証明）

学校の行事としてよく思いつくものといえば体育祭や文化祭が主だろう。清流学園も学園祭や文化祭は当たり前のようにする。実は、今日から数えて二週間後に体育祭が行われる。それに向けての練習が今日からチマチマ始まるのだ。正直、だるい。やる気が起きないのだ。魔術決闘祭（マジック・バトル・フェスティバル）りほどの盛り上がりがあるかどうか……。正直微妙だ。高等部と中等部は別々の月に行われる。高等部は六月。中等部は二学期の九月だ。

練習といっても午後にちょろっと競技の入場、整列などをするぐらい。いわばリハーサルをするだけだ。種目の仲には魔術を使ったものも含まれている。残念ながら俺はそれには出場できない。理由として、体育祭は一般客が見に来るということ。学園としてはあまり俺のことを表に出したくないようだ。俺という存在が学園全体での秘密なのである。

そんなこんなでちょっと今日は鬱な気分だ。只今の時刻は８：１５分。あと十五分でＨＲが始まる。今通っている場所から学校まで十分もかからない。遅刻にはならないはずだ。ラウはこんなのんびりした時刻ではなく、余裕を持った時間に登校したいと、朝は大抵置いて行かれる。真面目すぎだと毎回思うが、感心もしているのは事実。変なことは言わないでおこうとしている。

進む早さも変わらず、憂鬱な気分も変わらず前進。

「ちょっと、よろしいアルカ？」

「はえ？」

どこの似非中国人ですか？　と疑問がもてるぐらいの口調で後ろから話しかけられた。振り向くと、当たり前のように赤いチャイナ服に身を包んだ少女が紙切れを片手に困った表情で立っていた。身長は俺より小さく、推定１５０弱。茶色い髪を左右に結んでお団子を作っている。チャイナ服に似合っていて、ちょっぴり可愛いと感じた。

「このアタりに、セイリュウがクえんっていうガッコウはドこアル？」

「あー、えっと……」

なんともいえない日本語にたじたじ。負けそうになる（精神的ないみで）。いや、負けてはならないのだろうけど、絵に描いたような片言チャイナ娘をみるとなんだか現実逃避をしたくなるものだ。というのは冗談で、俺も高校二年生。現実はきちんと受け止めよう。

「まず、警察だ」

「まつアル！？」

誰が待つか。すぐさま携帯を取り出して１１０をプッシュする。しかしだ、目を疑う速さでチャイナ娘は携帯を掻っ攫うと、通話終了のボタンを押した。いや、まだ通話ボタン押してないからかかってすらいないんだけどね。本当に焦っていたのかチャイナ娘の目がマジである。いやいや、そんな目で俺を見るなって。

「ヒドいアル！」

「お前の格好の方が酷いわボケ」

チャイナ娘に歩み寄り携帯を奪え返す。とりあえず、携帯も取り返せたことだしそろそろ本題に戻ろうかと思う。目の前に立ってい

るチャイナ娘は先程言ったように不審者の何者でもない。てか、不審者。それも目をそらして現実逃避したくなるような。ガッツり足が見えてるし。

「……とりあえず、清流学園だな？」

「しってるアル？」

「知ってるも何も俺の通っている高校だ。あと、その流暢な日本語と語尾の『アル』はやめろ」

「え？　でも、センセイはニホンゴにはゴビに『アル』があったほうがチュウゴクジンらしいって」

「どう頑張っても似非中国人にしかれないよ、お前」

「それはコマったアルな」

「だからやめろって」

何を言っても無駄だろうと察してしまった、残念なことに。そもそもなんで中国人は『アル』と語尾につけるという妄想が日本人を侵食しているのだろうか？　国の陰謀か宇宙人の影響か狂乱者の夢物語が広まったのかどうかは知らないが、どうにもこうにも理不尽な知識が俺達には多すぎる気がする。常識のような非常識。常識と思ったことは実は非常識で世間から邪険されていることが多々ある。子供も大人も――俺達も。

「ま、いっか」

一人で納得する。

「とりあえず案内するからついて来い」

「おお！　サスガニホンジン！　シンセツアルね！」

「だから語尾やめれ」

やっぱり今日はあまりいい日ではなさそうだ。こんなチャイナ娘に捕まるとは誰も予想できない。朝の占いだってこんな出来事が起きるとは予想できるわけがない。ちらっと横を見据える。肩をならべて歩くとチャイナ娘との身長差が分かる。国塚ほどではないが小さいことに変わりない。ラウよりも小さく感じる。じっと見ているのに気がついたのかぱっちりと目が合う。

「そういやニイチャン、ナマエなんていうアルか？」

「俺？　ああ、えっと来城だ。」

「来場？」

「とつぜん発音良い日本語で話すな。字が違う」

けっこうびっくりした。もしかしてコイツ普通に日本語ペラペラなんじゃないか？　なんて疑問も生まれたがあえて突っ込まない。やたら話が長引きそうだから。

「てか、『兄ちゃん』って、お前より俺は年上か？」

「どうだろ？　爛々（ランラン）は17サイのコウコウニネンセイなんだけど」

「同学年じゃねえか」

てか、コイツ爛々っていうのか……。パンダみたいな名前だな。確か、どこかの動物園――といっても大抵の動物園にいるようなパンダは『ランラン』か『テンテン』、『リンリン』とかそういうのばかりだ。まあ、確かに見た目かも「ランラン」って言う名前です！　と自己主張しているようなものだ。パンダのような名前だけど。

「イマ、パンダのナマエみたいてオモったアルね？」

「イイエ、ソンナコトハアリマセン」

結構勘が鋭いな、こいつ。

そんなことは後回しにして今まで疑問にしていたことを聞いてみる。

「清流学園になにか用があるのか？」

「うん、マジュツについてイロイロベンキョウするアル」

「へー……ていうことは留学生か？」

「そうなるアル」

留学生が来るなんて話は全然なかったけどな……。と、校門が見えてきた。後五分でチャイムがなる。教室まではダッシュすれば間に合うだろう。爛々の方を向いて「職員室は真っ直ぐ行ったら建物の中にあるから」と、簡単に伝えて俺は走った。振り向くと、爛々は手を力強く振っていた。「またねえー」と叫んでいるのも聞こえる。こうして、朝の奇妙な出会いは終わった。

⇔

本来ならば午前中の授業が終わったら昼休みに着替えて、それから体育祭の練習が始まるのだが、何故か担任に呼び止められて学園長室に行けといわれた。そして何故か国塚も一緒に。二人で首をかしげながら学園長室を目指す。

「何の話だろうねえ？」

「さあな。学園長なんてあったことないからな。見ることが出来てもあったことはない――ってな」

「そうだねえ。でも、ライライ、そんな簡単な話じゃなさそうだよ」

「どうしてだ？」

疑問を口にしてみたが、それがすぐに解消した。学園長室と書かれた札がある扉があった。ちょうど、そこに入ろうとする轟坂小梨（とどろきざかこなし）先輩がいた。ランキング1位に用がある――または生徒会長に用がある。そこに同席する最下位とランキング5位。ただ事ではないだろう。それは、この面子を見ればすぐに分かる。

国塚の後ろに続くように学園室に足を踏み入れる。入った瞬間、事の重大さが分かったような気がした。ただの思い違いかもしれない。そう、想いたかった。目の前には口元を吊り上げて笑う学園長――猿鳶杏（さるとびあんず）が立っていた。それを囲むように左右に立つ面々。

「……兄さん」

ラウがその中にいるのだ。いや、ラウだけではない。隈井玲虎――クラトイト・ホクトーム――暗井狼――雲神春乃美――古東宝香――そして、轟坂小梨。俺と国塚をあわせて合計九人。共通点といえば――俺と狼先輩を抜いては完全な魔術（マジック・エンタイアティ）を使うということだけ。あとは――ただ単に強いということ。ただそれだけ――ただそれだけの集まりなのだ。

「さて」

学園長――猿鳶学園長が口をあける。

「ここに集まってもらったのは他でもない、君達には出てもらい大会があるのだ」

「お言葉ですが学園長」

割って入るように小梨先輩が口を挟む。表情は険しいもので、今

の状況を全く理解できていないようで少々焦りが見える。それは決して先輩だけではない。俺達全員が今の状況に不信を持ち、警戒をしているのだ。『大会』といわれるものは魔術関連なのは間違いない。だからこそ――警戒する。

「大会……とは、聞くまでもなく、この面子を見れば魔術決闘（マジックバトル）が絡んでいることは予想できます。しかし、なぜ中等部である霧雨とホムトーク、隈井妹がいるのかが聞きたい。そして隈井妹の兄と純樹がこの場にいないのですか？」

そうだ。確かに小梨先輩の話している内容はここにいる誰もが疑問に思っていたに違いない。現二位と六位がいないのだ。二学年の最高位と三学年の神の召喚士が――。そして、二人の代わりだという様に暗井狼先輩が立っている。七位だが、この場で唯一……いや、実際には俺がいるがそれをカウントせずに、一般人として数えたら不完全な魔術（マジック・ディフィシャンシ）を一人だけ使うのだ。

「学園長……不完全な魔術（マジック・ディフィシャンシ）である俺がその大会にでるのはどうかと思います」

「……私も心配だから狼はだしたくない」

狼先輩の言葉に続いて春乃美先輩が寄り添いながらいう。恋人として、あまり怪我をさせたくないのだろう。そのときふと、ラウと目が合った。不安に満ちた瞳。怯えているようにも見えた。そうだ、俺もここで反論しなくてはならない。義妹を守るためにもいわなければならない。そんな使命感が川の流れのように俺の中に押し寄せてきた。口を開こうとした瞬間――学園長が声を発した。

「まあ、落ち着いてくれ。私は別に損をする話を持ってきたわけじゃない」

要はビジネスだ。俺達に商品を買ってもらうためにメリットを押し付けて自らも利益を得る。よくある商売方法。いや、損をさせては商売ではない。詐欺師である。

「今回の魔術決闘（マジックバトル）はこの前の学校行事という規模では収まりきれない。俗に言う、世界大会だ」

「世界……大会ですか？」

思わず聞き返してしまった。世界大会――確かに日本以外にも魔術はちゃんとある。日本で開発されて、戦争で使われ、戦争が終わり、魔術は一般化した。だが、外国ではいまだに隠れて兵器として開発している国も少なくはないだろう。約束なんて――破るためにあるような物なのだから。つまらないことを考えていたと思う。すぐさま考えを切り替える。脳みそを入れ替えるようにして。

「ああ、場所はもちろんこの清流学園。準備が出来次第、開催する予定だったが、私の研究がすごし長引いている。よって、大会は夏休み明けにと考えている」

「あの、学園長」

今まで黙っていたラウが口を開く。学園長の表情が一瞬だけ暗くなる。しかし、すぐにいつもの無表情に戻ると「なんだ？」と聞き返した。昔――といっても一年前ほどに、この猿鳶杏はラウの元で研究員をしていたと聞いた。魔術を開発したときも立ち会ったらしい。学園長なりに、なにかラウに対して思うことがあるのだろうか。

「どこの国が参加しているのですか？」

「……ああ、国というか地域だな。アジア、欧米、ヨーロッパ。国は中国、イギリス、アメリカだ」

「……イギリス」

クラトイト・ホクトーム――通称クラム。彼女がイギリスの名前を聞いてぴくっと反応した。イギリスといえばクラムの出身国でもある。ヨーロッパ代表ということはそれなりに有名な学校が出場してくるはずだ。そして、この場合は、クラムの出身校が出場していると考えた方が良い。

「さて、まずはなぜ隈井龍牙と狩亜純樹が出場しないかというと、今回の世界大会は完璧なルールに基づいての大会だ」

ルールなんて初耳だ。

「そのルールに基づいて、１００％己の魔術で戦うこと。この時、この基準に引っかかるのが隈井龍牙と狩亜純樹だ。隈井龍牙は狩亜純樹の神の召喚士（ゴッド・サモン）を使ってウィッチを使い、狩亜純樹はこの時点で１００％ではなく８８％だ。隈井龍牙にいたっては己の魔術だけじゃない。よって、二人には悪いが今回は欠席してもらう」

そして最後にこう伝えた。

「この大会名前を魔術乱戦（マジックサバイバル）となずけた」

俺は思った。

どうでもいい。

The four The thought is determined.

言葉遊びが多いです。
良く分からないと思いますが、深く考えないでスラスラとお読みください。

The four The thought is determined.

どうでもいい名前を発表されてから、とりあえず俺達には拒否権はないらしく、その場で一時的な解散となった。それからは午後から体育祭の練習を適当に流し、その最中、隈井に今回のことを話した。世界大会という大きな行事に、やはり隈井は参加したいらしく「うらやましいねえ」と言っていた。俺と――いや、ラウ達と代わってほしいぐらいだ。

頭の中ではそのことがグルグル回って、帰ってからというものあまり集中できない。と言っても、まだ帰宅してから十分程度。ラウも宝香さんも部活や生徒会がありまだ帰ってきていない。今のところ自室で畳に寝そべっている。この家は日本昔の屋敷なので全ての部屋が和室だ。ベットなんてものはない。全員この家の住人は布団に寝ている。

なんて情報もどうでもいい。今しなければならないことは、今の俺になにができるかということだ。やろうと思えばこの世界大会をもぶっ壊すことは出来る。だが、それはキケンまでをも引き寄せる。ラウのためと思えば安かもしれないが、その後のことを考えるとやはり良い案とはいえない。なにか、別の方法はないだろうか……？

「月下くんー、いるー？」
「あ、いますよー」

返事を返した後、襖が開けられる。そこに立っていたのは宝香さん――ではなく、顔がそっくりだが、宝香さんではなく、その人の母親である。つまるところ俺の伯母さんで伯父さんの奥さんだ。名前は伊美香（いみか）伯母さん。ちなみに、伯父さんは宝真（ほうま）という。伯母さん

は若々しく、宝香さんをもっと大人にしたバージョン（？）見たいな感じ。なかなかの美人で、伯父さんも良く俺に自慢してくる。

「この頃難しい顔してるからちょっと様子見にきちゃった」
「あぁ……、心配かけてすみません」
「いいのいいの、別に私は気にしていないわ。様子見に来たといっても特にしてあげられることもないし」
「そんな気を使わなくても大丈夫ですよ。……えっと、そんな気難しい顔をしてました？」

疑問に感じたことを聞いてみた。

「ええ、この頃ね。特に今日はとても苦しそうな顔をしてたわよ」
「自覚ないんですけどねえ」
「自覚がないからこそ、心配しているのよ。月下くんはもっと鏡を見るべきね」

にっこりと微笑む伯母さんは襖を閉めて、俺の目の前に座った。俺も体を起こして、伯母さんと向かい合う。胡坐（あぐら）をかいて行儀が悪いと思うが伯母さんは気を使われるのを嫌う人なので、本当の家族のように対応するようにしている。これがこの古東家のルールのようなものだ。ラウも、もちろんそのルールに従って生活している。

「それで？　何を悩んでいるのかしら？」
「……実は、と言ってもあまり大事にしたくないので詳しくはいえませんが――」
「あら、私に隠し事？　月下くんもなかなか偉くなったじゃない」
「え、いや、そういう訳じゃ……！？」
「わかっているわよ」

右手を手巻き猫のようにクイクイと動かし、冗談だと言うことをアピールする。あまり冗談にも聞こえないし、伯母さんを怒らせたくないという純粋な恐怖心である。なんたって、この家では伯母さんが全ての権利を握っているようなものだ。伯父さんも口喧嘩ではいつも負け、宝香さんはいつも叱られ、俺とラウは頭が上がらない。おそるべし、カカ天下。

「まあまあ、とりあえず、私の話を聞きなされ」

昔話に出てくる通行人Aのような話し方をする。すると、またにっこりと微笑んで、俺の両手を、自らの両手で包んだ。首を傾げてみると、伯母さんも同じ方向に首をかしげる。人間、目を見て話すことはなれないので、口元をずっと見ていた。伯母さんは笑ったままだ。逆の方向に首を傾けると、それまた伯母さんの首もそう曲がる。

「……なにをしているんですか？」

「んー？　月下くんの心を読んでるの。人の心を理解するには、その人の本質を理解することが大切なのよ。だから、私はいま、月下くんになりきろうとしているわけ」

「は、はあ……」

「身構えなくても大丈夫よ。変なことをはしないから」

されても困るのですが。

それから、きっちり三十秒ほど俺の手を握って微笑み続ける伯母さん。その間に「ふむふむ、へー、なるほどなるほどー、ほっほほー」と、良く分からないことを口走っていたので、俺の中で不安要素はたっぷり積もっている。積もりすぎて雪崩がきそうなほどにねえ。

すっと、伯母さんの手が離れる。微笑みは崩れないまま、俺にそっと話しかけた。

「月下くん、キミは自分だけが異物だなんて考えていないよね？」

「……」

その質問にはなんとも答えがたいものだ。この来城月下と言う存在はどんなに考慮しても『異物』であり、『排除するべき物』で『排除するべき者』になっているからである。ラウの魔術を全て否定し、そして尚且つ、その魔術の最強というカンバンまでぶち壊したようなものだ。それは故にラウを否定し、ラウを壊していることと――変わらない。

「そんな考え、今すぐ捨てなさい」

「っ……」

言葉が詰まる。

伯母さんが――俺を否定する。

それと同時に――受け入れる。

「貴方は何を感じて、何を見てきたの？」

「俺は、その……」

「あ、言わなくても大丈夫。不安なのはわかっているわ。どれだけ闇の中に貴方がいようとも、どれだけ深い黒に溺れていようとも、私達古東家は貴方を見捨てはしないわ。もちろんラウちゃんもね」

そのまますっと俺を引き寄せて抱きしめた。震える体を慰めるよ

うに、あるいは安心させるように、もしくは――俺と言う存在を受け止めるように。何もかもを任せてしまう……そんな気持ちになるような気もした。伯母さんはぎゅっと俺を抱きしめて耳元で静かに呟いた。

「××××××」

「っ！？」

その言葉は素直で――斬新で――暖かくて――優しくて――そして何よりも涙が出た。

「ほら、泣かないの。別に意地悪を言っているわけじゃないんだから」

「すみません……」

ゆっくりと流れる雫を俺は伯母さんの肩に垂らした。体を固定されているため動くことが出来ない――そもそも動こうなんて思っていない。こうしてもらえると心が落ち着く。分が全て浄化させられる、そして何より、母親というぬくもりが俺を包んでいた。

「貴方の本当の母親じゃないけれど、すこしは頼っていいのよ？」

「……はい」

「ラウちゃんのことが心配なんでしょ？」

「……なんでそれを？」

「月下くんが悩むことと言ったらラウちゃんのことが大半を占めているからね。それに顔に面白いぐらい書いてあるから」

「……」

今度から気をつけよう。

「それで、もう大丈夫？　涙は流しきった？」
「はい、おかげですっきりしましたし、自分が何をやるべきなのかわかりました」
「そう、なら十分ね。後は前に進みなさい。後ろを振り向いちゃダメ。後ろを振り向くときは、忘れたものを本当に忘れたときだけよ」
それだけ――本当にそれだけ言うと静かに立ち上がって「それじゃ、夕飯できたら教えるね」と言って部屋を出て行った。その後姿を見つめて、決心したことと考えていたことを頭の中で地球儀のようにグルグルと回転させる。その速さは――まあ、良く分からないが光りの速さぐらいだと思ってくれ。
まず、考えていたこと。
この世界大会に自分が出場していいか。それとラウを出場させていいのか。
結論から、俺は逃げないし、ラウも守る。俺はもちろん、こんなところで逃げしまっては真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）を使う人間として恥となる。世界で唯一の存在なのだから、それにはそれらしい背中を見せようと思ったのだ。どれだけ死が怖かろうとも、どれだけくだらないことでも全力で、全部を、全てをさらけ出そうと決心した。
次にラウのことだ。実のところ、一番悩んでいたのは彼女のことだった。キケンなことにはあわせたくない。つまり、今回の世界大会は反対だった。だがそれは、ラウを束縛することになり、本人の意思ではないのだ。ラウが出たくないと言えばそれでいいだろう。だが、ラウは嫌でも出るという。魔術の開発者として、今の現実を――世界の魔術をこの目で確かめるチャンスなのだから。無理に俺が介入する理由も権利も、本当はない。しかし、それを壊してラウ

を守ると決めたのだ。

今。

たったー―今。

「まあ、解決したようなしていないような微妙な回答になちゃったけどね……」

独り言を一人で呟く男子高校生。寂しいとは思わない。なんたって、俺は今一人だ。状況も、魔術に関しても。恐れも何もいらない。『真実』というフィールドには俺しか立っていないのだ。学園最強といわれた轟坂小梨先輩を引き分けにし、最強というレッテルをはがしたのだ。一人になった。あの瞬間、俺は一人になった。最強という孤独だった小梨先輩を引き摺り下ろし、俺がその場に立った。結果は引き分けであろうと――一人になったのは違いない。

「ま、一人になろうと、すぐに誰かが集まるからな……嬉しいんだか、悲しんだか」

人に好かれて、集まり、一人ではなくなる。小梨先輩も、俺もそのジャンルに属する人間だ。人に好かれる人間。それが時として不幸を呼び、幸福を追い出す。それを幸せと感じ、刺激になり、それを求め、俺達は堕ちて行き、やがてそれは――絶望の連鎖の始まりとなる。

……なーちゃんって。

暗い話もここまでだ。何が楽しくてそんな考えを持たなければならない。何を求めてそんな感情を探さなければならない。俺は――

魔術師だ。そしてそれは――心のそこからどうでも良い。だから、俺自身が滅んでも、天変地異が起きても、人生の終わりが訪れても、世界の破滅が来ても、現実が崩れ去っても――何が起きても俺は魔術師であり、人間の世界で一番どうでも良い知識であり――ラウを死んでも守る。

ほんと、俺はくだらない人間だ。

The four Abnormality is a signal.（異常は信号である。）

四日前に投稿するといいながら出来なかった自分を殴ってやりたい

…

The four Abnormality is a signal.（異常は四つの兆し）

魔術決闘祭り（マジックバトルフェスティバル）三日前。

学園長室の椅子に堂々と座る女性――猿鳶杏はパソコンの画面に映る三人の顔を目を細めながら見つめていた。そこに映るのは年齢も性別もばらばら（人数は三人だが）共通点が見られない人間が移っている。とても深刻そうに見つめる。

そこへ、ノックの音が聞こえると遅れて「失礼します」と声が聞こえた。ガチャリと音を立てて入ってきた女性は黒のスーツを着こなし、メガネが良く似合っている。猿鳶杏が助手として、一番自分のそばに置いている丹河辺波耶（にかべはや）である。英語を担当して、猿鳶杏の補佐もしている。

「学園長、御用とはなんでしょうか？」

「ああ、まあ、三日後にある魔術決闘祭り（マジックバトルフェティバル）にこの三人の客人が来る」

ノートパソコンをくるりと回し、画面を見せると丹河辺波耶の表情が曇った。それもそのはず、この三人、共通点と言えば世界に名だたる魔術学校の学園長達である。五十代の男性――パラサイルスクール学園長――ヘルト・マトルノ。メガネの女性――サイレント・トライ学校長――ジュリー・エネラル。白衣の女性――浩亜遜（こうあそん）高等部学園長――燕泊（えんはく）。その写真を見せられて思いつくことなど何もない。

「丹河辺先生には悪いが――いや、三人には悪いが君の『破られな（コンプリート）い約束（プロミス）』というやつで、約束事をしてほしい」

「お言葉ですが理事長、私の魔術は霧雨羅羽さんによって制限され

ています。理事長の頼みでしても、むりがあるかと」
「ふむ、とりあえずまあ、試しにやってみなさい」
「はあ……」

困ったように呟くに河辺先生はとりあえずと言った感じで右手をパソコンの画面に添える。すうっと空気を吸い込んで静かに呟いた。
「魔術開放（オープン）」と。右手首にはめられているシルバーのブレスレッドが淡い光りを放つと、すっとパソコンの画面へ吸い込まれる。しかし、その後は何も変化が起こらない。丹河辺先生はやっぱりといった表情で手を下げる。

「やはり、ダメのようです。……学園長？」
「……あ、いや、なるほど、確かに制限がかかっているな。しかもものすごく複雑な回路だ。なるほどね……、ちょっと装置をみせて」
「えっと……どうぞ」

おそるおそる右手を出して猿鳶杏に装置を見せる。シルバーのブレスレッドには幾何学模様が刻まれており、機械などに入っている基盤を思わせるような線と線だった。絡み合う模様たちは、魔術を構成するためのルーンのようにも見える。まじまじと見て、猿鳶杏は一人で納得して左の人差指でブレスレッドをなぞる。ピンク色のマニキュアを塗られた指は一つの美術作品のように美しい。そんな指でなぞられたブレスレッドは、一瞬だけバチッと音をたてる。

よし、といったようにブレスレッドから離れると「もう一度やってみて」と了解を求めた。首をかしげながら――いや、丹河辺先生は気づきながらもう一度魔術を開放する。先程と同じように淡い光りが生まれて、画面の中に吸い込まれる。その瞬間パソコンの画面から三枚の紙がひらひらと現れる。その後にご丁寧に鉛筆が一本。

消しゴムが頭の部分についており、修正が可能だと言うことだろうか。

「理事長……！？」

「安心しろ、壊してはいない。バグを発生させただけだ」

バグ――システムに以上を起こせばよい。ただそれだけだと、考えただけで――考慮して――結論を出して――実行しただけだった。丹河辺先生は唖然としながらも、紙を三枚、鉛筆を一本手にとって理事長の顔色を伺う。今の理事長の顔はおもちゃを与えられたような少女のように生き生きとしていた。

「相変わらず、魔術殺しは健全ですか」

「魔術殺しとは物騒な言い方だな。そういわれても仕方ないが――『粒子微生物緊急事態（ゲノム・バクテリア・バグ）』という長々しい名前が付いているのだから、そっちで呼んでもらえないか？」

「誰が考えたのですか？　その名前は」

「もちろん――魔術第一開発者だ」

「……なるほど。確かに彼女らしいと言うか、夢が詰まっていると言うか」

魔術第一開発者――その少女が二番目に発見した魔術。それが粒子微生物緊急事態（ゲノム・バクテリア・バグ）である。かつての助手である猿鳶杏は世界で二番目に魔術を使った人間である。皮肉にも――最初に開発された魔術――初めの五つは八つの理（エイトルール）に属さなかった。魔術第一開発者――ラウもその一人だが、当時研究者達の間でその五人を『危険番号（シグナルナンバー）』と呼んだ。

話を戻すが、粒子微生物緊急事態（ゲノム・バクテリア・バグ）の魔術効果は機械という全ての機械に自分の望んだバグを発生させることが出来る。それがセキュ

リティ解除というバグでもだ。

「兎にも角にも、その紙に約束事を書けばいいんだろう？」

「あ、はいそうです。ですが？」

猿鳶杏は静かにニヒルな笑みを浮かべながらこう言った。

「この学園で見た魔術は、この学園を出た瞬間に忘れることを約束しなさい」

⇔

現在

全校朝礼と言うものはどの時代の学生にとっても憂鬱なものに変わりはないだろう。あの、校長の長々とした話が好きな奴なんて、見たことも聞いたこともない。俺にいたってはいつものように校長の話を『どうでもいい』で聞き流す。全校朝礼なんて教師にとってもあまり嬉しいものではないだろう。特に新任の教師や若い先生方は暇で暇でしかたないだろう。

前振りはここまでにして、ただいま絶賛全校朝礼中なのだ。中等部と高等部の全生徒が入る場所といえば中庭しかないので朝から大名行列を作ってそこに行った。欠伸をかみしめながらつまらない校長の話を聞き流す。ただじっと座っているなんて、「寝てくださいな」と罠にかけているのも同然だ。

中庭の温度はいつも人間が快適に暮らせる状態に設定されている。

今日は暖かくて眠気を誘うよう快適さだ。てか、教頭がここから寝ているように見える……。俺も寝ようかな？　なんて想いふけていると、それを察したかのように校長の話が終わった。

さてさて、この後は生徒会からや、生徒指導部からのお知らせがあるのだが――今回ばかしは違うようだ。校長は逃げるようにして（何故か）退場すると、会場の空気がぴりっとなる。生徒達のざわめきも止まって、何かが一体化するように固まった。

魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りの際に、俺達が入場して来た場所から、彼女は現れた。猿鳶杏――着物を着こなす学園長。美人で年齢は二十代後半ほど。魔術開発に携わった人物。その威圧感、オーラ、雰囲気が一般人とは全く違う。それもう、別次元の話だ。生徒会達も自然と背筋がぴんっとはる。

『続きまして、学園長からのお話』

起立、礼の掛け声とともに生徒達は行動をする。学園長も生徒達に向かって礼をした。マイクを少々いじって、高さを調整した。校長より身長が低いためだろう。「あー」と声を出した後に表情を明るくするとマイクに向かって話し始めた。

「生徒諸君、先日は魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）り、改めてご苦労と言おう。私も少々戸惑っている部分があるのでね」

俺のことだ。

「今後の君達には期待をしている。頑張って色々な事に取り組んでほしい」

校長の話とあまり変わらないな、という感想で話を聞いていた。教師達がよく言う『奇麗事』をならべて、俺達を束縛する。別に束縛することは悪いとは思わない。束縛されないと何も出来ない俺達自身が悪いのだ。特に俺達の年代は。誰かに守られ続けないとダメなのだ。俺は――守る側の人間だから、なんとなくだが、抵抗したくなる。どうでもいい性格だが。

「――閑話休題だ」

再び、緩み始めていた空気が引き締まる。

「とりあえず、入ってくれ」

言葉どおり、先程学園長が入ってきた入り口からぞろぞろと人が入ってきた。生徒達は驚きを隠せずにざわめき始める。一言で言えば多種多様な人間が集まっていた。良く見れば機能であったチャイナ娘もあの場に立っている。合計九人の人物が入ってくると、横に整列をする。

この九人を大まかに一人一人説明していこうかと思う。まず一人目だが、昨日であったチャイナ娘だ。相変わらず赤いチャイナドレスを着ている。二人目、チャイナ娘と同様に、こちらもチャイナドレスをきた大人びた女性。ただし、色は白。大きく開かれた谷胸は何人もの男子生徒の注目を浴びている。

「ライライとクマクマ目が泳いでるよ?」

ごほん……。続きいて三人目、こちらは男子生徒で美少年という感じだ。右耳にピアス。青色の……服の名前を知らないがカンフー映画などでよく男が着ているヤツ。チャイナドレスにズボンをはい

たような。まあ、とりあえずこのぐらいにして。この三人は見るからに中国出身だろう。てか、全員チャイナドレス（？）じゃなくて制服着てこい……。

さて、次だが四人目。金髪の男子。アレだね。目が逝っちゃってるね。完璧薬していますよ見たいな顔をしている。良く見れば鼻にも唇にもピアスをしていた。怖いよ…。まあ、次だ。五人目は先程のチャイナボーイと同じように美少年で茶色の髪が良く似合っている。目を瞑って静かに黙っていた。隣のヤツとは正反対である。続いて六人目、こちらは女子生徒で右手に本を持っている。メガネもかけて知的だということが嫌でもわかる。髪の毛もブラウンのロングとおとなしめだ。ここの三人は青色の共通の制服を着ている。こちらの三人はうんー……なんとなくヨローッパあたりの国に出身に見える。まあ、ぶっちゃけわからないけど。

続いて七人目。サングラスをかけたアフロの男。とりあえず、言っておく。こいつは絶対に学生じゃない。どっからどうみてもただのおっさんじゃねえか！？　何歳だよ！？　これで俺と同級生だったらなくよ！　全校生徒の前で泣いてやるよ！？　……落ち着いて八人目。今度は赤髪の女子生徒。身長はとても低く、これまた国塚とどっこいどっこい。幼すぎて小学生だな。うん。肩まで伸びた赤髪は目を引く。そして、最後の九人目……よし、まずいっておくと俺が今から言うことは本当だ。それでは説明を開始する。まず、顔だが――小さなダンボールを頭からすっぽりかぶっているので全然顔がわからない。性別の判断の仕様がないのだ。そして服装だが私服と思われる黒のロングコートを羽織り、黒のブーツを履いている。極め付きは、体をチェーンでぐるぐる巻きにしているのだ。グルグルといっても腰の辺りから十回巻いたか、巻いていないかだ。そして背中には巨大な棺桶。……怪しすぎる！？　…自由ってことでアメリカかな？

「ここの九人は今日からしばらくのあいだ日本に留学してもらい、この清流学園に通ってもらうこととなった。名門中の名門校ばかりだ。もちろん魔術学校としてだ。九人も魔術は扱えるから安心しろ。別に魔術決闘は行っても良い。むしろ行って世界の魔術レベルを知るいいチャンスだろう」

なるほど、と納得した矢先に追い討ちをかけられる。

「ああ、怪我をしても学校は一切責任を取らないがね」

「今日カラ、オ世話ニナル爛々（ランラン）アル！　ヨロシクオ願イアル！」
「なんでやねん」

朝の全校朝礼が終了した後に留学しにきた九人はそれぞれ学園長に指示されたクラスに配属されることとなった。そしてこれは何かの陰謀ではないかと思える。状況を説明すると、この間会ったチャイナ娘が我がクラスにやってきた。説明終了……。

「ア！？　アナタはアノ時の！」
「なんでベタなラブコメ的展開を繰り広げようとするんだよ！？」

チャイナ娘は態と驚いたように俺を指差した。頭痛がする。クラスメイト達も呆気にとられてしまって何も言い出すことが出来ない。そんな中唯一冷静を保てている人物がいた。それが茶髪のイケメンボーイだ。チャイナ娘の隣に立って両目を朝礼のときのように瞑っている。教室に入ってくるときも瞑っていたが前は見えているのだろうか？

「日本語もきちんと発音できないなんて、キミは本当に浩亜遜（こうあそん）学園の生徒だとは思えないね」

こちらはすらすらと日本語を話す。びっくりするぐらい自然なしゃべり方だった。会話の内容からこの二人は別々の学校のようだ。茶髪イケメンに対してチャイナ娘はむっとした表情を作った。馬鹿にされたことが癪に障ったのだろう。目がとても怖いね…。

「爛々ハ、学問ハダメダケド魔術ニ関シテハ超一流なんダから！」

「ほう……たかが中国の魔術。魔術を日本の次に取り入れたイギリスに勝てるとでも？　僕達は君達――中国にも負けるつもりもないし、米国にも負けるつもりはない。もちろん――この国にもね」

すっと、左目だけが開き、彼の目線が俺へと向いた。目線が交わる。それは敵意か。それとも別のものなのか。今の俺には全く分からないが、なぜ彼が俺を見たのかは大体の想像がつく。理由――魔術乱戦（マジックサバイバル）が関連しているだろう。このネーミングセンスの欠片もない乱戦。対戦相手の名前と顔ぐらいはあちら側は知っているだろう。その資料の中に俺の顔もあったはずだ。もちろんこのクラスにいる国塚のも。

「と、とりあえず、自己紹介してくれるかな？」

担任が困ったように茶髪イケメンに話しかける。開いていた左目が再び閉じて、微笑を作る。

「そうでした。まだ自己紹介がまだでしたね。僕の名前はクルー・フェレントス。気軽にクルーと呼んで下さい。イギリスのパラサイルスクール学園の出身です。短い間ですがよろしくお願いします」

丁寧に頭を下げる。その姿は鮮やかな紫陽花を思わせるぐらい寂しいものだった。謎の威圧感と、可憐さ。彼には俺に似た何かを感じ取れる。孤独なのか強さなのかなんなのかは分からないが、感じあうものは何かある。

「まだ爛々の自己紹介ノ途中デアル！」

「なら、さっさとしてしまえばいいじゃないか」

「むー……デハ、改メマシテ爛々デス！　中国ノ浩亜遜（こうあそん）学園出身デス！　皆サンよろしクアル！」

自己紹介が終わると自然と拍手が起こった。俺も適当に拍手をすると爛々とクルーはゆっくりと自分達に用意された席へと座った。爛々は一番後ろの右側。クルーはその左隣に座る。隣にいた国塚がツンツンと俺の腕を突っついた。

「ライライ、あの二人が対戦相手だよね」
「らしいな。どうだ？　お前から見て二人は？」
「んー、ランランちゃんの方は猪突猛進みたいな感じでクルー君はちょっとわかんないかな」
「その前にあの二人のランキングが気になるな……」
「そうだよね、片方でもいいから実力が分かるといいんだけど……」

小声で話す国塚のささやかな願望は意図も簡単に叶えられた。

「魔術決闘だ！」
「……」

デジャヴを感じた。というのも朝のホームルームが終わったとたんにクラスに友枝先輩が入ってきた。誰だかわからない人は頑張って思い出してあげてください。ヒントは氷の魔術を使うナルシストな先輩です。ずかずかと入ってきてまた俺かと思いきや、爛々の方へと行く。そして、きりっとした顔を爛々に向けて大きな声で叫んだ。

「魔術決闘で俺があったら付き合ってくれ！」

「馬鹿じゃねえのアンタ」

思わず声に出してしまった。

「誰が馬鹿だって！？」

「アンタですよ先輩。ラウの次は留学生ですか？　そろそろ程ほどにしないと警察に通報しますよ？」

「失敬な！　これはちゃんとした告白だ」

「……どうだか」

俺が呆れていると、爛々はしばらくのい間考えるような表情をみせる。そししてすぐににっと笑って友枝先輩に向かってこうこう質問した。

「アナタは強いアル？」

「ああ！　これでも十位のランキングを持つ男だ！」

「雑魚が」

「へ？」

「ナンデモナイアルよー」

先程の会話で途中聞き取れない部分があったが何を言ったのかは分からないかった。ただ一瞬だけ爛々の目が冷たくなったことはすぐに分かった。それに対して首をかしげていると爛々は立ち上がって自己紹介と同じようににっこりと笑ってこういった。

「なら、今カラ勝負スルアルよ」

「そうこなくっちゃ」

「……おいおい。爛々、嫌なら別に断ってもいいんだぞ？」

「心配アリガトウアルと。ライライは優シイアルね」

「だから、その呼び方と片言はやめろって」

てか、何でコイツは俺をライライと呼ぶのだろうか……。

「これは君達にとってチャンスだねえ」

クルーが面白そうに呟いた。確かにそうだ。先程国塚が言っていた様に相手の力量がわかるいい機会だ。クルーは俺の隣に立つと左目だけまた開いてにっこりとした表情を見せた。それに対して俺は眉をひそめた。彼の言っている言葉の意味が理解できなかったわけではないが、不信感を抱いてしまった。警戒していることが彼に伝わったようでクルーは肩をすくめた。

「警戒しなくても大丈夫だよ。改めて僕はクルー。キミが噂の最下位だね。来城月下くん」

「そりゃどうも。こっちはそっちの資料も何も知らないんだけど」

「僕達だって同じさ。君達の魔術も知らない。知っているのは名前とランキングだけ」

「へー。ま、平等にってことかな」

「だろうね。どれだけ開催される期間の間に敵の情報を手に入れるかってのが鍵だ」

「それで？　情報は集まった？」

「馬鹿を言わないでくれ。こっちに着てからまだ一週間も経っていないんだ。そう簡単にいかないよ」

「考えてみればそうだよな」

「ああ。まあ、前振りはここまでにして――」

彼は――クルーは静かに呟いた。

「ある一部を除いて一番警戒している人物は轟坂小梨とキミだ」

「へえ、なんで？　という質問をするよ」

「轟坂小梨は言わずと知れるランキング1位。もちろん危険人物だってことは百も承知だ。そしてキミは最下位にもかかわらずこの乱戦に参加する。それはもう、なにか秘密があることを言っているようなものだよ」

「さあね。俺は何も話さないよ」

「期待はしていないさ」

クルーはくるりと後ろを向いて自分の席へと戻る。気づいたときには爛々と友枝先輩はいなかった。クラスメイト達も殆どどこかへ言ってしまっている。どこかへといっても二人の試合を見に行ったのだろうけど。国塚と隈井もすでにいない。すとんっと座るクルーに対して質問をした。

「見に行かないのか？」

「別に興味はないよ。ランキング十位だなんて、彼には不釣合いの数字だよ」

「まあ、確かに」

「あの中国娘一号は今回は僕達の見方なんで、研究する必要もないってことさ。敵は選ばれた君達十人だけ。このクラスの国塚乃愛が戦うってのなら別だけど」

「一理あるな……」

「無駄話もここまでにしてはやく行ってきな。試合が見れなくなるぞ」

確かにずいぶんと話し込んでしまった。急いでいかなくては。

「それじゃ、また後で」

教室を出て行くときにクルーの笑い声が聞こえたのは気のせいだったのかどうかはわからなかった。

「ライライこっち！」
「来城、そろそろ始まるぞ」

廊下に集まる人ごみ。一つの教室を囲むようにして人はあふれかえっている。その最前列にいた国塚と隈井に無理やり引っ張り込まれて一番教室の中が見渡せる場所にこれた。机と椅子が並べられている普通の教室。だがここは魔術決闘をする特殊な場所である。魔術決闘で壊れたものは修正される、いわば『中庭』の教室バージョンと思ってくれていい。

そこに立っているチャイナ服を着た少女と学園の制服をまとった少年。爛々と友枝先輩はお互いに笑顔だった。友枝先輩の方はすでにメリケンサックを装備しておりやる気満々である。一方爛々はブルースリーのように構えを取ってぴょンぴょン飛んでいる。

「カンフーかな？」
「んー、分からないけど、アノ構えは素人同然だぞ？」

二人は爛々の今年か見ていない。そういう俺も友枝先輩よりも爛々を見ていた。爛々を観察してみると武器と言うものは見当たらず、変わったと言えば靴が真っ黒のスニーカーに変わっていることぐらいだ。

「それじゃあ、初メルアル！」
「恨みっこなしだぜ」

言葉ではいい表せる事のできないエネルギーが二人の体からにじみ出る。

「「魔術、開放（オープン）！！」」

にじみ出たエネルギーはすっと二人の体に再び戻ると莫大な量の威圧感が教室を包んだ。自分でも顔色が悪くなっていくのを感じた。友枝先輩にいたってはすでに顔面蒼白である。重力とは別の重みが教室――いや、廊下にいる俺たちまでをも包み込む。クラスメイト達も目を見開いていた。

その中でけろっと軽やかなジャンプをしているのは――もちろん爛々だった。にこやかに笑って何も感じないように――この重力とは違う重さも――ましてや重力さえも感じないほど軽やかに見えた。友枝先輩は威圧感に耐えられずに膝をつく、息苦しそうで息も荒々しい。

「あれレー？　ドウシチャッタアルかー？」

「っ……キミは一体……！？」

「先輩ニハ名乗ル必要ないと思うアルけど、一応しておくアルよ」

あの時と同じ――冷たい目線を友枝先輩に見せて静かに呟いた。

「名前ヲ爛々と言ウアル。浩亜遜（こうあそん）学園高等部ランキング2位。得意な魔術は『終焉の両角（エンドレス・ダブルランス）』。ドウゾ、宜しくアル」

そして、爛々は問答無用で友枝先輩の頭を右足で蹴り上げた。

The four Provocation is dangerous.（挑

間が空いてしまい、誠に申し訳ありません

The four Provocation is dangerous. (挑発は危険)

中国代表三人の一人――爛々（ランラン）の魔術ぼ名前は『終焉の両角（エンドレス・ダブルランス）』。それは終わりを告げる二つの槍を示している。それが分かったのはあの理不尽ともいえる友枝先輩との魔術決闘（マジックバトル）のその日の夜のことだった。相手の情報を知ることが大事だとクルーがって言っていたように意地でも探さないといけないため、ここはパソコンを家で唯一もっている宝香さんに頼んでみた。

内容はもちろん爛々とクルー、そして対戦する三校の魔術学校についてだ。結果としては惨敗。有力な情報というものは得られず、わかったことと言えばそれぞれの魔術の名前だ。それぞれと言っても爛々とクルーの魔術だけだ。残りの生徒は名前すらもわからない状態だ。どうにかこうにか調べてもらったが、駄目だったらしい。

話をもどそう。クルーと爛々の魔術の名前と意味的なことはわかった。しかし、意味がわかったところで、その特性、属性、性質が分からない限り意味がないのだ。炎なのか水なのか氷なのか風なのか土なのか雷なのか光なのか闇なのか。はたまた八つの理（エイト・ルール）に属さない可能性も。

それはひとまず置いておいて二人の魔術について説明してみよう。

爛々――魔術「終焉の両角（エンドレス・ダブルランス）」。魔術の特性は不明。意味的には終わりを告げる二つの槍。その意味すらもさっぱりとは分からない。

クルー――魔術「神獣の鎖（フェンリル・アトラクション）」。魔術特性は不明。意味的には神の鎖によって放たれる獣。こちらもさっぱりだ。

ということで、この二人について作戦会議を開くこととなった。
夕食も食べ終わった後に、俺の部屋に宝香とラウが来た。二人ともいつにも増して神妙な趣である。こちらはそんな雰囲気を作り出すつもりはないのだが、二人があんな感じなので自然とこちらもつられてしまう。

俺の部屋は畳なので三人で円を作るようにいて座った。俺はもちろん手ぶらなのだが、宝香さんはノートパソコン、ラウは何やら資料らしき封筒を持ってきている。

「それでは、作戦会議と行こうじゃないか」

宝香さんは案外ノリノリらしい。声が少し上がっている。

「月下のクラスに来た二人のことはあれ以降はよく分らなかった」
「ええ、俺も友人なのどに調べてもらいましたが、同じような情報ばかりでしたね」
「兄さんのクラスには誰が来たんですか？」
「俺のクラスにはあの赤いチャイナ娘と両目をつむっていた茶髪のイケメンだよ。名前は爛々とクルー。そっち――ラウは？」
「私のほうには三人――中国から来た女子生徒の恋花（こうふぁ）ちゃん、イギリスから来た同じく女子生徒のトーマラちゃん、最後にアメリカからきたまたまた女子生徒のサラちゃん。恋花ちゃんは白のチャイナ服着ていた子でトーマラちゃんはメガネかけて本を持っていた子ね。サラちゃんは赤髪で小学生みたいな子」
「……全員特徴がありすぎてわかりやすいな」
「最後に私だが――一人はチャイナ服の美男子。名前は浪煉（ロウレン）。彼はなかなかの使い手と見れるかな。……で、二人目なんだけど、あの最後の方に立っていた頭からダンボールかぶった奴」
「ああ、あの人宝香さんのクラスにいったんですね……」

「小梨も頭を抱えていたしね。まあ、顔も見てないし声も聞いていないから性別は不明。名前はトレンス。まあ、男っぽい名前だしたぶん男だろう」

「残りの二人――アフロと目が逝っている二人はたぶん春乃美先輩達のクラスでしょうね」

「たぶんね。ま、私の情報力で全員の魔術名だけは大体分かったことだし、一歩前進かしら」

その言葉に対して俺とラウは表情をしかめた。何時の間に調べたのか不思議だ。というより、全員の魔術名を何処で調べてきたということが疑問だが……。まあ、宝香さんだからという理由で片付けておこう。でないと知ってはいけない事を知ってしまいそうで怖い……。

「ほら、この紙に書いてあるから見てみて」

そういって渡されたA4用紙にはずらっと九人分の顔写真と魔術の名前が記されていた。ラウと顔を近づけて紙をみていると、不意にラウがぴくっと動きが止まった。それに気づいた俺は少々不思議に思って顔を紙からそちらへ向ける。ラウの目が泳いで顔が少し赤い。

「どうした？　なんか、赤いぞ？」

「い、いえ、ただちょっと近いなあって……」

「ん？」

いっている意味があまりよく出来ないが、本人が大丈夫だといっているのでそれを信じよう。さて、気をとりなおして再び紙のほうへ顔を向ける。そこに書いてある文字一つ一つを眺めてみる。どれもこれも聞いたこともないようなものばかりで八つの理（エィト・ルール）に属してい

るのか、そうでもないのかすらわからない。結局は八方塞だ。だが、何かヒントがあるかもしれない、そんな期待を望んで俺は頭の中に魔術名を叩き込んだ。

中国代表
爛々
１６歳
魔術『終焉の両角（エンドレス・ダブルランス）』

浪煉
１８歳
魔術『迷宮の記憶（ラビリンスタイム）』

恋花
１４歳
魔術『白い毒花（ポイズン・ホワイト）』

イギリス代表
クルー
１６歳
魔術『神獣の鎖（フェンリル・アトラクション）』

アルエル
１７歳
魔術『奈落（デス・シーソー）への通信者』

トーマラ
１３歳
魔術『魔法の絵本（マジックブック）』

アメリカ代表
トレンス
１８歳
魔術『異端の埋葬者（アブノーマル・ファクトリー）』

グレイ
１８歳
魔術『警告の曲（エラーソング）』

サラ
１４歳
魔術『繋がれた人形（シンクロベイビー）』

とまあ、こんな感じだ。率直な感想。全く分からん。どんな魔術を使ってきて、どんなランキングでどんな強さなんかなんて。そもそも少々無理のある話である。お互いのことをまったく知らない状況で、何も与えられていない環境で相手に勝つなんて。俺は今、この間の魔術決闘祭（マジックバトルフェスティバル）りの対戦者の気持ちが分かったような気がする。得体の知れないものと戦う恐怖。それはなんて――恐ろしいんだ。

「んー、兄さん。兄さんから見てランキングが一番高そうな三人は誰ですか？」

不意とも言える質問をラウが隣からしてきた。それにつられて「そうだな、月下の意見も聞きたい」と宝香さんが尋ねてきた。すこし困る内容だ。紙だけを見てそれを判断する。なかなか難しいことだったり。とりあえず、自分の思った人物を三人上げた。

「俺は、中国はこの浪煉ってヤツとイギリスはクルー、アメリカはグレイかな。正直、得体の知れない奴らばかりで自信はないけど」
「いや、大丈夫だ。私だって月下にそんな能力があるとは思っちゃいないさ。だいたい、そんなものがあるなら苦労しないって」
「それもそうですね……」

俺と宝香さんがそんな会話をしている中でもラウは真剣に紙とにらめっこを続けていた。そこは流石というべきか、当然と言うべきか、魔術開発者としての意地があるのだろう。そんな姿を二人で微笑みながら見ていたのは言うまでもない。

⇔

それから数日。事件という名の魔術決闘が始まっていた。

「国塚!?　それは本当なんだな!?」
「うん!　いま、クマクマからメールが来て確実だって!」

朝の八時ごろ。清流学園は大騒ぎになっていた。本来ならば魔術（マジック）乱戦（サバイバル）でた戦うはずである暗井狼（くらいじん）先輩とアルエルが教室で決闘をはじめそうだというメールがやってきた。メールの送信者は隈井だった。

国塚と俺は大急ぎで教室を飛び出し、隈井にメールを送って状況の報告を現在形でしてもらった。話をまとめると、朝やってきた狼先輩にアルエルがちょうっかいを出してきたらしい。そこで春乃美先輩が止めようとしたが、アルエルが魔術を発動して狼先輩以外の生徒を教室から追い出してしまったらしい。

気になるのは「追い出した」ということだ。

どうやってどのようにと、詳しくは書かれてない。だが、それらは何かしらの能力が働いたということだ。そんなことを考えながら、学校の廊下をイノシシの気分でつっぱしる。

教室についたときには窓も扉も開かれた状態で生徒たちが中をのぞいていた。だが、友枝先輩と爛々の時のように身を乗り出して見るのではなく、なぜかある一定の距離を置いて観察をしているのだ。外から見たら不意義な光景だった。

「……来城月下！」
「……春乃美先輩」

春乃美先輩が俺と国塚に気付くとこちらに近づいてきた。すると後ろから隈井とアフロの外国人もやってくる。俺が自然と目をそちらへ向けると、アフロはにこっと笑った。

「お～、君がライジョウゲッカね？　初めましテ～。アメリカ代表のグレイ・レンジャーだヨ！　ヨ・ロ・シ・ク・な！」
「あ、ああ。こちらこそ」

なぜかラップ交じりなのが気になるがまあ、気にしないでおこう。それよりも中の状況が気になる目線をアフロ――もといグレイから教室に目線を向けるが見えるのは狼先輩がじっと立っているだけだ。

「それで、クマクマ、中の状況はどうなの？」
「簡単に言うとあのアルエルってやつが魔術を開放して、それかあにらみ合いが続いているってところだ。狼先輩はまだ魔術を発動してないし……。なんか、アルエルも長々と話してるから先生が来る

ころには終わっていると思うけど……」

そうは言ったものの、隈井は春乃美先輩の不安げな表情をみると言い切れなくなてしまった。恋人を心配する彼女はまさしく儚いのだ。一言でその花が隈井が散ってしまうことを恐れている。だから、下手になにもいえないのだ。

「またくヨ～、オレッチもだけどほかの生徒にも迷惑ダ・ヨ！」
「確かにそうだな……ちょっくら近づいてみるか」

グレイに同意して生徒達を押し切って、誰もいない謎の距離感がある場所へ来た。生徒たちは教室の中をじっと見るだけで、俺が前に来たことなんてほとんど気が付いていない。ドアが邪魔でアルエルの姿が見えない。それよりも止めなければならない。そんな衝動へ駆られて一歩を踏み出した。

「っ！　ダメだ！　来城月下！！」

春乃美先輩の叫びもむなしく、俺は地面へと足をついた。

その瞬間――今まで感じたこともない寒気と――恐怖が体の中に入ってきた。

「っ！？」

一瞬にして腰が抜けてしりもちをつく。ほかの生徒たちがやっと俺に気が付いて、急いで謎の距離感から引きずり出してくれた。全身から冷や汗が流れ、廊下で横になる。天井を見ると蛍光灯の光がいつも以上に眩しく感じた。

「ライライ、大丈夫!?」
「……ああ、なんとかってところだ」

上半身を起こして汗をぬぐう。状況が判断できない。今、あの場所で、俺はどのように、どんな風に恐怖を植え付けられたのだ？疑問――自問自答――そして答えの消滅。あれは結局なんだったんだ？

「さーって！　オラオラ、イケメン君よぉ～。その余裕の表情もいつまでできるかなあ～？　さっさと魔術開放しちゃったら！」

教室の中でアルエルの叫び声が聞こえた。そしてゆっくりと狼先輩へと近づく足音。それと同時に見えてくるアルエルの姿。金髪に狂ったような目。耳と鼻、唇にはピアス。どこからどう見ても異端者にしか見えない少年。そんな彼の後ろから生えている黒いアレを俺は目にとらえてしまった。国塚も視界に入ったようで表情が固まる。

「な、なに……あれ？」

思わず口に出してしまった国塚の疑問。いや、俺だって口に出していいたいさ「なんだあれは」と。俺達が目に目撃したもの。それはたとえるなら地獄。また、たとえるなら奈落。それはあまりにも人が触れてはいけない領域にいる生き物だった。

「俺の『奈落（デス・シーソー）への通信者』のお味はどうだ!?　イケメン君よお!!?」

アルエルの後ろに生えているもの。

それは闇という名の物質で構成された――鎌を持った死神だった。

姿を説明するなら、闇色に染まったマントをまとい。闇色に染まった鎌を肩に担ぎ。闇色に染まった人の形をした者だった。闇ゆえに目も口も耳も確認できない。黒いマネキンのようなものだと思ってもらっていい。だが、シンプルにみえてデスだ。シンプル・イズ・デス。例えるならそれだ。

「『奈落への通信者（デス・シーソー）』は見た目通り闇に属する魔術！　俺の負の感情と、この半径五キロ以内の人間の怒りや悲しみを餌にして成長するタイプの魔術だ！　こいつに近づくと負の感情がそいつに流れ込んできて、大体は死にたくなるか気絶するんだが――お前はどっちでもないよなァ、イケメン君よぉ～」

「……」

ここからでも狼先輩の苦しそうな表情は確認できる。俺と同じように顔色を悪くし、汗を流している。精神的に限界だろう。立っているのもやっとのはずだ。だが、狼先輩は魔術を使おうとしない――それは、なぜだ？　いや、理由はわかる。この争いは無意味である。アルエルのことだ、早く戦いたい、早く嬲りたい、対戦者は早めに消すべき。そんなおとを思って狼先輩につっかかったのだろう。

「……狼！？」

春乃美先輩は祈るように、願うように叫んだ。ちらっと狼先輩が声に気付いたこっちをみた。そして表情をはっとさせる。だが、すぐに元に戻ると、小さな小さなため息を静かにもらした。

「アルエル、やっぱりここで俺をつぶしておくって考えか？」

「あったりめえだよ！　お前を殺したくて『奈落への通信者（デス・シーソー）』もう

ずうずしてんだよ！　今更、変更は聞かねえよぉ！！」

その返事だけを聞くと、今度は大きくため息をはいた。目までつぶって何か悩んでいるようだ。一秒後、目を開いてアルエルをにらむ。その目を見たアルエルは満足そうに「やっとやる気になったか」とつぶやいた。それは狼先輩とただ、戦いたかっただけだといったようなものだった。

狼先輩はポケットから指輪を取り出してそれを右手の薬指へはめる。指輪――髑髏でデザインされたシルバーリング。それをアルエルへと向けて――冷たく――静かにつぶやいた。

「魔術、開放（オープン）」

言い放たれた言葉によって指は鈍く光った。そして、狼先輩の周りには言葉では言い表せれないエネルギーがあふれだしそれは狼先輩自身の体の中へ入っていった。そして、黒い靄のようなものが現れて狼先輩の後ろからその姿を現す。

俺はその黒い靄から出てくる「ソレ」を見て頭の中に狼先輩の噂を思い出した。

『魔術を扱う魔術』それが『暗井狼の魔術――闇の魔術だと』

黒い靄の中から初めに目をしたのは黒色のハット帽だった。そして、執事などが来ていそうな服。狼先輩と同じ髑髏のデザインが頭にくっついているステッキ。そして、咳をしながら出てくる青い瞳の美青年。

「ゴホゴホ、ジン。あれほどボクはこの煙が出ないようにお願いし

ているんだけど」
「わるい、今はそれどころじゃない」

靄の中から出てきた美少年は『奈落（デス・シーソー）への通信者』をみるなり口笛を吹いてうれしそうだった。

「へー、あれが今回の獲物かあー」
「ああ、悪いが俺もなかなかやばい状況なんでな、さっさとやってくれ」
「りょーか～い」

美少年は前へ出てアルエルと『奈落（デス・シーソー）への通信者』を見据えて、礼儀正しく――執事のように――頭を下げた。かぶっていたハット帽も脱いで深々と、紳士的に。

そして――彼は名前を名乗った。

「皆様、初めまして。ボクの名前は『狂った可笑（マッド・ハッター）しな帽子屋』。不思議の国から――ではなく『赤い闇の国』から参りました。……さあ、みなさん。狂ったお茶会をはじめましょうか」

The four The plot is the dark.（陰謀は闇の四つ）

気が付いたら五十万アクセス突破しておりました！
ユニークアクセスは７５０００人といったところでしょうか？
これからも猫之宮　折紙をよろしくお願いします！

俺たちは現れた「ソレ」にたいして、目を白黒させることしかできなかった。一部の人間は「ソレ」の存在を知っているようで驚きというよりも、期待の表情を「ソレ」に向けていた。「ソレ」は主人である狼先輩は限界がやってきたらしく、力なく膝をつく。顔は血が抜けたように青く、今にも倒れそうだ。狼先輩の顔を見て「ソレ」は溜息を吐いた。

「のんびりとはしていられそうにもありませんねえ」

「だからハッター、急いでくれと頼んでいるんだ……」

今にも消えそうな声で「ソレ」に――『狂った可笑しな帽子屋（マッド・ハッター）』に言った。

マッドハッターといえば「いかれた帽子屋」という意味で有名だ。英語の慣用句、ｍａｄ　ａｓ　ａ　ｈａｔｔｅｒが由来だ。童話の中にも出てくる。確か作者はルイス・キャロルだ。作品名は「不思議の国のアリス」。有名な有名なアニメ会社がこの話をアニメ化したりと、誰もが一度は聞いたことあるお話だと思う。その中に出てくるマッド・ハッターなのか。それとも……。そして疑問を持つといえば狼先輩の魔術は闇魔術だ。召喚魔術ではない。

「面白いもんだしてくるじゃないか、ええ？　もっと早く出しておけばそんなに苦しまなくてもよかっただろうに」

「あいにく俺は平和主義なもんでね。できればすべて平和に終わらせたい。――だけど、君の場合はそういうわけにはいかないみたいだしね。それに、君の闇の魔術は得体がしれない。下手に突っ込むよりか、状況を見て判断するべきだと思ったからだよ」

「その状況判断根せいで苦しむのはお前だけどなあ！」

アルエルは下品な笑いをすると、狼先輩はゆっくりと立ち上がる。俺の目から見てもわかるほどに彼の足は震えていた。それは、恐怖からの震えだ。俺の隣から「……もう、やめて！」と悲痛な願いが聞こえる。そう、もうここまでにしないと。

誰かが止めないと

俺が止めないと

立ち上がろうとした。すぐに二人の間に入ろうとした。だが――膝が震えて立ち上がることすらできない全身に力が入らない。軽いトラウマだ。また、死神の領域へと入ると思うと、何かが死ぬ。そうだ――あそこに立つと俺の中の何かが死ぬ。

頭では考えても行動へと移せない。

どんなに願っても何も起こらない。

俺はこの時理解した。

魔術乱戦（マジック・サバイバル）は甘くはないのだと。

「そこまでだ！」

刹那、誰かが叫んだ。声と同時に謎の光が死神とマッド・ハッターにぶつかると、二つのそれはゆっくりとチリへとなっていく。死神は驚きの表現なのか、天に向かって、まるで化け物のような声で叫んだ。一方マッド・ハッターは落ち着いた様子で「あーあー」と

つぶやいた。

「はあ、こっちの世界は余裕がないね。呼び出されたと思ったらこれだよまったく――」

そこまで言うと彼の姿も完全に消えて、残ったのは野次馬の生徒達と教室に立つ二人、そして静寂。俺たちはとっさに何が起きたのかが理解できなかった。だが、思いだしたように顔を先ほど叫び声がいこえたほうへ向けると――そこには彼女が立っていた。

「君たちの決闘はまだ禁止だと説明したはずだが、アルエル？」

この学園の頂点にして原点。学園長――猿飛杏がいつもの着物姿で立っていた。猿飛杏は不愉快そうに教室の中を覗き込んだ。狼先輩は下をうつむいて何も言わない。アルエルは舌打ちをして教室から出て行こうとする。

「わかったよ、お前らの規則には従ってやるよ」

猿飛杏にそれだけ言うと、アルエルは後ろから見ても不機嫌だとわかるぐらいの雰囲気を醸し出しながらその場を去った。狼先輩はゆっくりと座り込んで静かに息を吐いた。春乃美先輩が急いで駆け寄る。目にいっぱい涙をためながら、彼のそばに近づいた。猿飛杏はそんな二人を見て薄く笑った後、こちらに歩んできた。

「お疲れ、と言おうか？　来城月下君」

「……いえ」

「おや？　なんとなく沈んでいるね。アルエルの奈落（デス・シーソー）への通信者にでもやられたかい？」

その質問に対して黙っていると「図星か」と笑われてしまった。
ラウは俺の手をぎゅっと握ってとても心配そうだ。猿飛杏はラウを目を細めてみた。その時は彼女は何を思ったのか、そして何を感じたのかはわからない。この彼女というのは――猿飛杏のことだ。ラウはたぶんというか、俺のことで必至だっただろう。それに握られている手の強さでわかる。

「来城月下君、夏休み明けに魔術乱戦（マジック・サバイバル）を開催するといったが予定変わった」

突然、何を思ったのか、俺にそんな話を持ちかけてきた。予定が変わった？　なにが、どう変わったのか。今の俺には想像もできなかったが、すぐにその答えは聞かされる。

最悪の状態で。

「明日の体育祭。そのときに、第一試合を始める」

「は？」

言葉というのは時に人を混乱させるものだ。

「予定が大きく変更された。この世界大会は明日をもって開催する」

そしてその言葉は無意味に発せられ

「第一試合は誰が出るとは決まっていない。だが、今の状況を見て私が判断すると――」

何かを傷つける

「暗井狼、君に出てもらう」

その名前を聞いた瞬間、春乃美先輩のなかの何かが崩れ去った。

「貴様っ！？」

春乃美先輩は立ち上って猿飛杏に走り寄る右手に力を込めてこぶしを作り、勢いに任せて右手を放った。猿飛杏の顔に直撃すると思いきや、右腕は空振り。あっけなくかわされる。だが、本能のままに空振りした体制から体を回転させて、野放しになった右腕がラリアットへと変わった。だが、その攻撃すらも猿飛杏は自らの右手で受け止める。

「雲神春乃美君、君が感情的になるなんてらしくない」

「黙れ！　狼は……！　狼の今の状態を見てそんなことを言える貴様は人間か！？」

「ちょっと！　春乃美先輩！」

すぐそばに立っていた隈井が止めようとするが気迫に負けてしまいしかよることができない。ほかの生徒達も動かない。俺とラウは唖然とその光景を見ていた。あの、書道部で出会った彼女とは思えない発言と行動力。そして覇気。すべてにおいて別人だった。

「いいか、雲神春乃美君。私は彼が１００％勝てる見込みがあるから彼を推薦したんだ」

「そんなのでたらめで――！」

「出鱈目とは失礼。私が勝てると思った理由は二つ。一つ、彼の言動。彼の言葉を思い出してみなさい」

そういわれても、いつの言葉を思い出せばいいのかわからない。

というか、狼先輩が話しているのを聞いていたというのなら、この場所にもっと早くいたはずだ。そしてもっと早く止めることが気で来たはずだ。そのことには春乃美先輩は気づいていない。

「彼はこう言った。『下手に突っ込むよりか、状況を見て判断するべきだと思ったからだよ』とね。この言葉の意味が分かるか、雲神春乃美君」

「……」

質問対してだんまりの春乃美先輩。隈井は右手で顎のあたりをなぞっていると何かひらめいたように口を開いた。

「下手に突っ込むよりか、状況を見て判断するべきだと思ったからだよってことは、状況を判断したうえで魔術を開放し、マッド・ハッターを使ったと？」

「ご名答だよ、隈井龍牙君。そのとおり、彼は勝てる自信があったから魔術を開放したのだ」

「でも……！？」

春乃美先輩の腕の力が緩くなった。それを見て、猿飛杏は手を放した。ぶらんっと落ちる春乃美先輩の腕は誰が見ても力がこもっていないことは明らかだった。周りにいた生徒たちは困惑した表情を浮かべ、小さな声で話し始めるものも出てきた。

「答えが知りたいのなら本人に聞くのが一番いいんじゃないか？」

その言葉は――狼先輩への質問だった。全員の視線が一点へと集まる。狼先輩は視線へと気付くと顔を上げた。顔はまだ青く、万全ではないことを語っている。つらそうだ。いや、そのつらさを俺は体感しているので人一倍わかる。そして何よりも――春乃美先輩が

一番つらい。

「……」

「……狼」

春乃美先輩のつぶやきが聞こえると狼先輩はひどく悲しそうな顔をした。それは一瞬のことですぐに表情を変えた。自身に満ち溢れた表情だった。

「勝てます」

その言葉は――まさに勇気そのものだった。

「俺は勝てる見込みがあります。１００％勝てる見込みが」

⇔

「本当に、よろしかったのですか？」

猿飛杏の助手でもあり英語教師でもある丹河辺波耶（にかべはや）は白衣を着て、タンタンと歩く猿飛杏の後ろをついて行った。

「ん？　なにがだ？」

「魔術乱戦の日程ですよ。夏休み明けといいながら明日に変更、なんていちゃって」

「ああ、そのことについていてか」

猿飛杏は相変わらずの速度で歩いている。目的の場所は研究室だ。

何よりの日課の研究をしようとさっさと歩いているのだが、さきほど丹河辺につかまり、こうやって質問攻めされるばかりである。そろそろはぶらかすのもやめて真実を明かそうと、立ち止まった。そして後ろを振り返る。

「最初、生徒たちに言った『夏休み明け』というのは嘘だ」

「……はあ!?」

わけのわからないリアクションをしたので再び歩き出す。それに合わせて丹河辺も歩きだし、猿飛の横についた。

「嘘って、なんでそんなウソついたのですか!?」

「そう、かっかするな。理由というか、狙いは一つ。彼らにプレッシャーをかけること」

「……プレッシャーですか?」

「ああ、プレッシャーだ」

丹河辺は理解ができなかったらしく首を横に傾げた。猿飛は溜息をはくと、ちょうど研究室の自動ドアを通過した。入口付近には不気味なほど液体の詰まった巨大なカプセルが並べてある。そんな場所を普通に歩く彼女たちの姿は異様だった。

「私は来城月下が何かしらの壁にぶつかる——いや、参加する全員が何かしらの邪魔が入ると予想していた。その壁を乗り越えるためにはプレッシャーが必要だ。人間追いつめられると、予想もつかない行動をする。越えられなかった壁も越えられるということだ」

「ですが、あまりにもむちゃくちゃだと……」

「それは百も承知だ。だが、ある面では理にかなっている。大体、あちらとこちらの契約では『準備ができ次第始める』ったたからな。準備は万全。もう、開始するしか道はないのだよ」

猿飛杏はたまに理解不能なことを口走る。それは丹河辺も承知だ。それが今回の場合ではないだろうかと丹河辺は思った。言っていることがあまりにも理解に苦しむ。理にかなっているが筋が通っていない。そんなところだろうか。兎にも角にも、今の現状があまり良くないことはわかった。

「それに、アルエルの魔術が人の感情を操作するマイナス系の闇魔術だということはわかっていた」

「へ？」

「私の狙い通りに来城月下の壁となった。この壁によって、彼は新たな進化を遂げる」

二人は足を止めると、目の前に並ぶ例のカプセルに目をやった。

「そして、英雄人柱計画（レジェンドサクリファイスプロジェクト）は新たな一歩を踏み出す…！」

The four Carelessness is a taboo.（油断大敵）

遅くなって申し訳ありません。
しかも、長いです！

The four Carelessness is a taboo.（油断大敵）

体育祭と言えば、学校行事では定番の定番である。去年の俺は「かったるい」なんて言って真面目に参加しなかったが、今年は異常なほどの緊張感を持っている。理由は言わなくても分かっている。そして俺よりも――誰よりも緊張しているであろう暗井狼先輩は静かに自分たちの色のテントの中で座っていた。

俺とは違う組なので姿しか確認できなかったが、表情は硬いことが分かった。今、何を感じて何を思っているのかは本人しかわからない。だが、俺もラウもｓのほかの選ばれた生徒も経験することだ。今無理に探ろうとしなくてもそのうちわかること。

つまらない、の一言に限る。

開会式から始まった体育祭も着々と時間が過ぎていき、気が付けば最終種目の組対抗リレーだった。そして、赤組アンカー代表として、なぜか俺がいる。俺って確か、綱引きだったよな……。

ちなみに、今回の体育祭は高等部だけで行われているため、授業が終わった中等部の生徒達もわざわざ中庭に来て見に来ている。もちろん、その中にはラウも含まれている。もちろんというか、レイコちゃんとクラムちゃんもいる。俺の姿を発見するなり大きく手を振ってくるのですぐにこちらからでも見つかった。

話を変えよう。

この清流学園は生徒の人数が多いため、四つの組に分かれている。色は赤、青、黄、白といったところだ。そして最後のこのリレー。

面白いことに一位には３０００点である。ちなみにただいまの各それぞれの組の得点は……

赤５７０

青４６０

黄５９０

白４７０

ということで、ここで一位を取れば逆転である。そして今までの種目は無意味じゃね？　なんて意見も出る種目だ。まあ、お決まりなのパターンなのでそこはスルーしていただこう。

「浮かない顔してんぞ、来城」

「ん？　ああ、いや、考え事というかなんというか……」

隈井が話しかけてきた。俺と同じ赤色の鉢巻を額に巻きつけ、体操服を見事に着こなしている。さすがサッカー部というか、さすが隈井というべきか。体操服をここまで着こなすのは隈井ぐらいだろうと感心してぼーっとしていると、頭をたたかれた。

「集中よ！　来城月下！」

後ろを振り向くと、頭をたたいた張本人が機嫌が悪そうに立っていた。同じく赤い鉢巻。おなじみのツインテールに赤いリボン。七瀬幹穂（ななせみきほ）先輩――新聞部部長にして鬼斬りの姫と言われる七瀬姉妹の妹。その本人がいた。

「アンカーのあんたがそれじゃ勝てないでしょ！　こっちは真剣勝負なのよ！　わかってるわね！？」
「は、はい」

よくわからないが気合が入っていらっしゃる。ここは素直に返事をしたほうがよさそうだ。なんて、なんやかんやしている間に第一走者が並び始めた。俺も急いで自分のスタートする地点へ急ぐ。頭の中には狼先輩のことが大半を占めていた。だが、まあ、目の前のことに集中しないと、鬼斬りの姫様に切られるかもしれない。

寒気が走り、目の前の勝負に集中する。とりあえず、走るのみ！

「位置について、よーい……」

バンっ！　っとピストルの音が空に響いた。同時に走り出す生徒達。合計で八人。一つの組から十人をだし、それをまた二つに分けるという方式だ。紅組の第一走者は剣玉部部長、一年生――古牧眠（ふるまきねむる）だ。忘れている人は俺が体験入部をした時のことを思い出してもらえばいい。おっとりとした子だということは覚えている。だが、外見とは全くちがい、見事な陸上選手のフォームで走っている。見事に現在一位。その後ろに黄、白、青の順で並んでいる。後の後ろは……どうでもいいので省略。

「先輩！」
「ほいきた！」

第二走者は先ほど見事な説教をしてくれた幹穂先輩だ。身軽な走りで二位との差を広めていく。と、思いきやまさかのここで白組の選手が追い抜いてきた。見たことあるような、内容な生徒。たしか、彼女は――テニス部の倉田枕（くらたまくら）だ。ラウとにらみ合いをしていたので

よく覚えている。一年生にしてはなかなかいい運動神経をしている。流石、国塚のお墨付き。

「っく！　やるわね一年生！」

「先輩こそ新聞部いしておくにはもったいない瞬発力ですよ！」

二人並びながら走り、何やら会話をしている。そんなに話していると酸素なくなって苦しくなりますよ？　と、思っている矢先にだんだん二人の速度が遅くなって黄に追い抜かれてしまう。

「く、隈井君……ぱ、、パスぅ」

「言わんこちゃないですか……」

苦笑しながらもバトンを受け取るのは我らの隈井だ。バトンを受け取ると見事な瞬発力で同時にスタートした白を追い抜いた。「おお！」と、歓声が起きる。そのまま青も抜いてほしかったのだが、距離が変わらない。話を聞けば今走っている青のやつは陸上部らしい。仕方ないといえば仕方ないが、距離が開かないだけすごいことだ。

「里中！」

「あいさー！」

さて、第四走者は我がクラス一番の元気な女子生徒、里中千菜（さとなかせんな）である。彼女はランキング５９８位。得意魔術は氷。短く切られた髪と引き締まった体。こいつは陸上部で短距離を得意とする。バトンを受け取るとすぐさま青と並んだ。だが、それ以降差は生まれず、横に並んだ状態。

「さて、と。俺が最後か」

「これまた奇遇だね、月下君」
「……まさか、ね」

と思い、後ろを振り向くとそのまさかだった。そこにはランキング一位の生徒会長、轟坂小梨先輩が堂々となっていた。青色の鉢巻を頭に巻いていることから青組だろう。ということは、最後のアンカー対決は魔術決闘祭（マジック・フェスティバル）りの決勝戦と同じになるわけだ……。

「王道だ……」

心底そう思った。

なんてしているとすぐに青と赤の鉢巻をまいた二人がやってきた。俺と小梨先輩はスタート位置につくと右手を差し伸べた。それを見た瞬間、青が速度を上げて里中を追い抜く。この人、うまく体力を温存していたらしい。小梨先輩がすこし前へ出て、バトンを受け取る。それから二秒後ぐらい遅れて俺の手元にバトンが渡された。

「あー、どうでもいい」

とか言いつつ走る。面倒くさいが周りの歓声と視線が俺を走らせる。全力で。仕方がないと思ってほしい。期待と希望の目線で見られたらそりゃあ、頑張るしかないでしょ。そういうことで全力疾走で小梨先輩を追い抜く。もともと、運動神経には自信があるほうだ。いくら人間業じゃないことができる小梨先輩でも俺の加速には目を見開いていた。このままゴール……なんて甘い話だ。

「ちょっとびっくりしたな」
「そうですか……って、ちょ！？」

気がつけば追い抜いたばかりの小梨先輩が俺と並んで走っていた。軽やかな足並みと平然とした表情。俺は今どれだけ馬鹿な顔をしているのだろうか。いや、たぶんアホ顔だ。馬鹿もアホも変わらないかもしれないが、とりあえず間抜けな表情というのは変わりないだろう。というか、なんでやねん。

「これでも剣道をしているからな。鍛えているのは当然だ」

「……だからといってアレほど引き離したのに追いつくのはおかしいでしょ」

まさに人間離れ。

まさに神業。

まさに生徒会長だ。

会話をしながらなのでアレだが、もう目の前にはゴールテープが見えている。このまま突っ切ればどうにか1位にはなれそうだ。だが、俺が加速すると、小梨先輩も同じ速度になる。足並みを揃えていらっしゃる…。馬鹿にされているような気分だ。

「こんちくしょう!!」

力を振り絞って、足を前に出す。ゴールテープ直前で俺が前へ出た。この短距離で、加速しても間に合わない。俺の1位は確定されたものだと思っていた。ゴールテープに体が触れるその一秒前。先輩は俺の数歩後ろ。追いつくわけがない。追いつけるわけがないのだ。その一秒の中で俺はそう思ってしまった。決まった出来事だと思った。

それを壊すのが我等が生徒会長である。

ゴール０．５秒前。一瞬にして小梨先輩は俺と並んだ。

焦った。

驚いた。

戸惑った。

混乱した。

そのまま、流れるように同着ゴール。引き分けだ。また、引き分けだ。ゴールした後速度を落として肺で大きく呼吸する。乱れる呼吸を戻すためにゆっくりと深呼吸を試したがうまくいかなかった。小梨先輩の方を見ると、汗もかいておらず、呼吸も普段どおりで走った後とは思えない冷静っぷりを見せてくれた。

心の中で思わず呟いてしまった。

化物、だなと。

得点的には同着なので赤にも青にも点数が加算された。もともと青より点数の高かった赤組が優勝し、この時点で全てのプログラムは終了した。普段の体育祭なら。

退場すると、中庭にアナウンスが響き渡った。

『それでは只今よりプログラム２５番。魔術乱戦第一試合（マジック・サバイバル）を行います』

アナウンスが終わると何も知らない生徒達は騒ぎ出し、前日に配られたプログラムを確認する。何度見てもプログラムは『２４番』までである。そりゃそうだ。なんせサプラズ企画のようなものなのだから。俺達にとっては嬉しくはないがな。

観客席に戻るとラウと隈井、国塚と小梨先輩。そして春乃美先輩がいた。隈井と国塚、ラウは俺の顔を見ると「おつかれさま」と各々に言ってくれた。

「さっきはお疲れだな。月下くん」
「小梨先輩お疲れ様です。ナンやかんやで引き分けですけど、手を抜きましたよね？」
「さあね。そんなことより、今はこっちじゃないか？」

指を刺した方にはすでに狼先輩とアルエルが睨み合いをしながら中庭の中央に立っていた。春乃美先輩は両手を絡めて、祈るように狼先輩を見つめている。心配なのは俺も分かっている。俺も心配だ。だが、学園長が言った言葉を信じようと思う。「１００％勝てる」と言う言葉に。

「さてと、あの時は殺し損ねたが、今回は確実に殺す」
「物騒なことを言うなよ。あくまでこれは競技だ。どちらかが死ぬのはそれはただの殺し合いだぜ？」

二人の会話が場内に流れる。アルエルは相変わらずだ。一方、狼先輩は前回と違い自信に満ち溢れている表情。どうにもこうにも自信がありすぎる狼先輩に対して首をかしげる。あの自信は何処から来るのだろうか？　そもそも、本当に１００％勝てるのだろうか？

「それじゃあ、始めますかあ！！」

普段なら先生がアナウンスで試合開始を報告するのだが、アルエルが勝手に魔術を開放させる。腕につけたブレスレットから魔術エネルギーを感じた。

「魔術、開放（オープン）ゥ！！」

魔術エネルギーが一旦解放されると、再びブレスレッドに吸い込まれていく。そしてそのままアルエルは不敵な笑みを浮かべながら腕を横に振るう。

「奈落（デス・シーソー）への通信者ォ！！」

叫びと同時にアルエルの足元にぽっかりと黒い円が生まれた。そこからゆっくりと頭を見せて、鎌が姿を現し、その後全身が露になった。その姿を目で捉えた瞬間に感じたものはあの時と同じ寒気と恐怖である。

死神が姿を現すと騒いでいた生徒達がいっせいに黙り込む。声を出すことに対して緊張感が生まれたのだ。いや、死神を目にしたことによって恐怖が全身を覆う。蛇に睨まれた蛙とはこういうことだろう。足元が震えてまともに応援なんて出来そうにない。

「今回はこいつの領域にまだ入っていないみたいだなあ……。そうじゃないと楽しくないもんなあ！」

先日とは違い、死神を見ても余裕の表情の狼先輩。アルエルは本当に楽しそうである。狼先輩は溜息をはいて頭をかいた。

「アルエル、お前もっと警戒すべきだろ？」
「何を言ってるんだよ？　てめえは昨日と同じように震えながら死ぬんだよ、馬鹿が」
「……まあ、いいや」
それだけ呟いて、にっと微笑を見せた。
「魔術、開放（オープン）」
言い放たれた言葉と同時に黒い霧が現れ、そこから青年の姿が浮かび上がる。ハット帽、執事などが来ていそうな服。狼先輩と同じ髑髏のデザインが頭にくっついているステッキ。そして、咳をしながら出てくる青い瞳の美青年。
「またコイツなのか？　もう、面倒なんだけど」
狂った可笑（マッド・ハッター）しな帽子屋が姿を見せた。
「でやがったな？　帽子屋！」
吼えるアルエルを横目にマッド・ハッターは溜息をはいた。
「……なんで人間ってこんなにも馬鹿ばっかりなんだろうね？」
「それは主人である俺のことか？」
「違うにきっまってるじゃん～。あの死神のヤツだよ。芸がないね。全然、つまらない」
マッド・ハッターはそれだけ言うとまた溜息をついた。アルエルはハッターの様子を見て心底嬉しそうである。自分の魔術を馬鹿にされたはずなんだが……もしかしてこいつってMなのだろうか？

気分が悪そうなのでそういう考えはシャフトダウン。

「帽子屋ァ、テメエは奈落（デス・シーソー）への通信者と同じ種類の闇魔術だ。まともに張り合えそうで俺は嬉しいよ！」

「それはどうも、だね」

マッド・ハッターは面白くなさそうに言った。狼先輩は死神をじっとみてまだ何もしてこないことを確認する。たぶん、アルエルはじわじわと狼先輩を追い込むつもりである。卑怯と言うかなんというかだ。マッド・ハッターに奈落（デス・シーソー）への通信者を倒す能力がなければ勝てないだろう。

「ああ、ねえ、ジン。もう、倒しちゃっていいかな？」

「別に構わない。むしろ早い方が好都合」

「りょーかーい」

マッド・ハッターがハット帽を脱ぐ。アルエルはなぜか期待の目でそちらを向いた。いや、この二人が何をしてくるのかが気になるのだ。楽しむための待機だ。

「さてさて皆さん。お茶会の始まりですよ」

マッド・ハッターは笑顔でそういった。

「まず初めはこちらの帽子。中には何も入っていません」

俺達観客にも、アルエルにも見えるように帽子の中身を見せる。そしてその帽子を一度かぶりなおした。俺もそうだが、ラウも隈井も国塚も食い入るように見つめている。

「指を一度鳴らします。そして、帽子を再び取って、中に手を突っ込むと……」

帽子の中でモノを探る動作を見せる。すると、何かを掴んだようににっと笑った。ゆっくりと手を抜き出し、掴んだものが出てきた。

「あら不思議、ショットガンが出てきました」

出てきた銃を右手で構えて、左手に持っていた帽子を頭にかぶりなおす。相変わらずの笑顔で、その銃口を死神へと向ける。銃口はもちろんアルエルにも向いていることになっているのだが、だがアルエルは不気味なほど笑顔だった。

「死ね♪」

バンっ！　銃から音が聞こえた。放たれた弾9は見事に死神の頭に命中。貫通したかと思うと、そのまま首ごと吹っ飛んでいった。残ったのは首から下だけだ。マッド・ハッターはそれだけ確認すると、再び笑顔になった。

「さてと、無事に死神も殺しましたし、これで一安し――」

「ハハハハハハハハ！」

マッド・ハッターの台詞の途中でアルエルが大声で笑った。狼先輩は無表情で、マッド・ハッターはとても不愉快そうに顔をしかめた。アルエルは右手で顔の半分を隠し、大声で笑い続ける。

「なるほどなあ！　これが魔術を使う魔術か！　話には聞いていたが傑作だな！　奈落（デス・シーソー）への通信者の首を吹っ飛ばしたのもお前が始めてた！」

「……笑うのはいいけど、君の死神は負けたんだよ？」

マッド・ハッターは眉をハの字にして言った。アルエルはそんなこともお構いなしに興奮したままの状態で話し続けた。

「死神がこのぐらいで死ぬかよ！」

自信満々にアルエルが叫ぶと、死神の頭は胴体から生えてくるように再生した。そう、再生したのだ。今思えば奈落（デス・シーソー）への通信者は人の負の感情によって作り出された魔術。これだけの人間がいるので負の感情を簡単にチャージできる。よっていくらでも再生可能だということだ。

「残念だったな帽子屋！　お前の魔術は奈落（デス・シーソー）への通信者には無意味！　どれだけ努力しようが勝てやしない！　お前の主人が殺されるのを指をくわえてみておけ！　ははははははははははは！！」

「……」

マッド・ハッターは黙り込み何も言わない。なにも。アルエルの笑い声だけが中庭に響く。春乃美先輩は体を振るわせる。俺達は下唇をかんだ。万事休すか？　絶望的である。

だが、そう思ったのは勘違いだったらしい。

「ハッター」

いままで黙っていた狼先輩が口を開いた。そして、静かにこういう。

「本気、出していいぞ」
「え？　そうなの？　じゃあ、りょーかい」

その言葉を聴いた瞬間、アルエルの笑い声が止まった。マッド・ハッターはもう一度指をパチンとならす。一瞬だけ、大量の魔術エネルギーが銃にこめられた。俺はそれを目で確認した。

「アルエル、お前の敗因は二つ」

狼先輩は静かに呟く。

「一つ、お前はもっと敵を観察しろ。敵の力量を見極めてから勝負を挑め」

マッド・ハッターが再び銃口を死神へと向ける。

「二つ、お前は馬鹿だ」

銃口を弾くと先程とは比べほどにならない大きな銃声が鳴り響き、今度は頭だけではなく、死神の姿が消えた。そう、丸ごと全てふっとんだ。

アルエルは目を見開き、口を大きくあけた。

「さて、お茶会は楽しかっただろ？」

狼先輩はとても愉快そうに笑った。

The four The result is a table.（結果は以下の通りです）

更新遅くなって、すみません！
しかも短くて…申し訳ないです

The four The result is a table.（結果は日

消えた死神。その姿をアルエルは目を見開いてただじっと、その一点だけを見ていた。だが、すぐさま表情を元に戻し、口を大きく開けて笑う。豪快に、高らかに、下品に。狂った可笑しな帽子屋（マッド・ハッター）と狼先輩も笑みを崩さず、ただじっとしていた。

「ギャハハハハハ！　やりやがったよこいつ!?　完璧に奈落（デス・シーソー）への通信者をけしやがった！　傑作だああ！　傑作！　クルー以来、久々だ！」

クルー同じくイギリス代表の少年。魔術――『神獣の鎖（フェンリル・アトラクション）』。彼はアルエルの魔術を封じ込める力想っているということ。ということはアルエルよりランキングは上。クルーという人間の情報が少しわかった。

ちらっと横を向いてクルー本人の顔を確認する。無表情で何を考えているかはわからない。自分の情報がすこし洩らされたことに対して苛立っているのか、それとも冷静でいられているのか全く分からない。うんー、動揺してくれたっていいものだと思うんだけど。

「だがなあ！　クライジン！　お前のほうが馬鹿だ！　いっただろ！　奈落（デス・シーソー）への通信者は何度でも再生できるって！」

そうだ、そういうことだ。どれだけ細胞レベルで破壊しても、この世界に人間の欲や怨念などがあれば奈落（デス・シーソー）への通信者は何度でも蘇る。それが奈落（デス・シーソー）への通信者のアビリティでもあるのだ。この勝負、狼先輩には不利すぎる。

「さあ、蘇るんだ！　奈落（デス・シーソー）への通信者！！」

大きな声で、叫ぶ。野獣のように叫ぶ。その声に反応するように、死神のいた場所が禍々しいほど黒いオーラに包まれて、そこから魔術エネルギーを感じる。風がそこへ流れ込み、まるで竜巻のように「悪いもの」を吸い取っていく。

「こい！　奈落（デス・シーソー）への通信者！！」

そして、再び死神が舞い戻って――

来なかった。

「あれ？」

間抜けな声と、静寂。死神の代わりに現れたものは、手のひらサイズに小さくなった死神。しかもデフォルトされて可愛くなってい

る。その死神ミニはちょこんと、アルエルの肩につかまって、つぶらな瞳で狂った可笑しな帽子屋と狼先輩を見ていた。

「あはははははは！」

「いひひひひ！ちっちゃい！　ちっちゃいよ！」

狼先輩と狂った可笑しな帽子屋は腹を抱えて大笑いしている。アルエル本人は自分の肩に乗っているソレを唖然とした表情で見ていた。何がどうなっているのかが全く理解できていない。観客の俺達でさえも混乱しているのだから。

「な、なにがどうなってやがんだ！？」

「ははは！　君の死神はどこの国のやつか知っているのか？」

狂った可笑しな帽子屋はとても愉快そうにアルエルに問う。アルエルはとても不愉快そうに首をかしげる。どこの国かっときかれても意味が分からない。そもそも、召喚された魔術に国なんてあるのだろうか？

「アルエル、俺の魔術は闇魔術だが、正式名は『闇の入場門』。お前と同じ能力だよ。お前は奈落への通信者とよんでいるが、それは呼ばれた者の名前だ。魔術効果は闇の入場門。赤い闇の国の住人を呼べる魔術だ」

「ダーク…ぱーく？　ちょっとまて！　俺は知らねえぞ、そんなこと！？」

「だって、しゃべれないだろ？　そいつ」

狼先輩は死神ミニを指さして、にっと笑う。アルエルは苦虫を噛んだような表情を作る。確かに、こいつはしゃべれそうにないな。それに比べて狂った可笑しな帽子屋は人間型の魔術で会話もできる。

狼先輩はそれで教えてもらったのだろう。

「そして、赤い闇の国で僕――狂った可笑しな帽子屋（マッド・ハッター）は住人の案内役。もちろん、その死神である『シーソー』とも面識はあるさ」

「だから、それがどうしてこいつがこんなに小さくなるんだよ……！？」

「赤い闇の住人はどいつもこいつも凶暴でね。女王様から僕は住人を制御するように命令されているのさ。つまり――そういうこと。僕の前では赤い闇の住人は力を制限されるってこと。ちなみに、そのシーソーは危険ランクＡＡに認定されているから通常の一万分の一で構成されてるよ」

「……」

アルエルは理解できないように、いや、理解したくないように顔を曇らせる。俺はこの時やっと理解できた。何故、狼先輩はアルエルに百パーセント勝てる自信があったのかを。闇魔術は本で呼んだが種類が限られている。その中で種類が自分と同じ『闇の入場門（ダーク・パーク）』と見抜き、その住人である者封じることができる。だから、言えたのだ。

絶対に勝つ、と。

「そ、そんなの認められるかあ！？」

「認めろよ」

狼先輩は静かに言った。

「負けを認めろ。俺はおまえよりも強い。」

「っく……。俺は、俺は強くなきゃいけないんだよ！？」

アルエルは拳を固めて、狼先輩に突っ込んでいった。死神ミニは必死に肩にしがみついている。狂った可笑しな帽子屋（マッド・ハッター）はそんなアルエルを止めようと前へ出たが、狼先輩に止められる。狂った可笑しな帽子屋（マッド・ハッター）は戸惑ったがすぐに身を引いた。そして、狼先輩は無言でアルエルを睨む。

「こんにゃろうううううううううううう！！」

アルエルの拳は大きくひりあげられて、スピードに身を任せて狼先輩の顔を狙う。体重を乗せて顔を狙う。よけると思ったが、そこから動く気配は全くない。アルエルは本能のままに拳を狼先輩の顔にぶつけようとしたが――

拳を片手で止まられた。

「っ！？」

「俺だって強くなきゃいけないんだよ」

そのまま、狼先輩は空いている右手でアルエルの腹部を殴り、鈍い音を出す。そのまま、ゆっくりとアルエルは倒れる。そして、肩に乗っていた死神ミニは同時にゆっくりと塵と化して、はかなく消えていた。その瞬間、俺は声を上げて叫んだ。

「よっしゃあああああああああああああ！」

湧き上がる拍手と歓喜の声。狼先輩はそのままゆっくりと座り込んで、溜息を吐いた。狂った可笑しな帽子屋（マッド・ハッター）は笑みをこぼして何も言わず、死神と同じように霧となった。これで――、俺達は一つ勝利を手にすることができたのだ。春乃美先輩もほっとしたように肩の力を抜いた。その様子を見て、ラウが静かに話しかける。

「先輩、よかったですね」
「……本当に、よかった」

心からそういっていた。安心した春乃美先輩は勢いよく立ちあがって狼先輩に手を振る。おとなしい先輩には珍しい行動だとちょっとだけ驚いたが、無理もないかと思った。すると、狼先輩も気が付いたようでこちらに向かって微笑みながら小さく手を振りかえした。

⇔

「理事長、どうやら一勝できたようですね」
「あたりまえだろ。私はアルエルの能力と狼の能力をバグらせたんだ。性質は狼の方が有利と分っているんだから、勝てるのは当たり前だ」

理事長室では、理事長である猿飛杏がモニターをみがら楽しそうにつぶやく。隣にはもちろん助手である丹河辺がついていた。二人はモニターに映る狼とアルエルの試合を見ていた。今回の試合は、面白い内容だったかもしれないが、満足はできない。

「次の試合は誰と誰を戦わせるつもりなんですか？」
「次ばっかり私は何もしない予定だ」
「あら、そうなんですか？」

意外そうに丹河辺は言う。杏のことだから、すべて自分が考えた対戦表で戦わせるのかと思っていた。その斜め上をいく回答に首をかしげていた。丹河辺の反応に杏は笑みを浮かべる。

「私だって勝負はフェアプレイが好きだ。だが、最初はお互いに戦いたそうにしていたから、手伝っただけだ」
「狼君が絶対に勝てると知っていて？」
「当然だ」

やっぱりこの人は――すごいと丹河辺は実感した。魔術を知り尽くした人間というのはこの世に片手ほどしかいない。真実の魔術――グレメリー・オブ・ザ・トゥルーをのぞいて。その片手の人数のなかにもちろん杏も入っている。丹河辺はこの人についていって間違いはなかったと再び実感した。

「と、言っても大体の対戦する人物は大方予測はできるけど」
「……さすがというか、なんといいますか」
「褒めてるのかよくわからないが、何日か人間関係を観察してみての判断だからな。確実ではない」
「それが確実だったら怖いですよ……」
「だろうな。……さて、とりあえず、今回の戦いのデータをまとめるか」

そういって杏は着物の袖からノートパソコンを取り出して開く。ぱちぱちとキーボードを打って画面に文字を映し出す。黙々と打ち込んで、丹河辺はその後姿をじっと見ていた。そして、画面に映し出されたものをちらっと確認すると少しだけ首をかしげたが特にきにしないようにした。

第一回　魔術（マジック・サバイバル）乱戦対戦データ

暗井　狼
魔術　闇の入場門（ダーク・パーク）
学年　高等部三学年
ランキング　七位
不完全な魔術（マジック・ディフィシャンシ）

アルエル・ディスト
魔術　闇の入場門（ダーク・パーク）
学年　高等部三学年
ランキング　三位
完全な魔術（マジック・エンタイアティ）

結果　暗井　狼の勝利。

魔術データ獲得成功。

カプセルα（アルファ）にダウンロード

コードα検体覚醒までのこり２３％。

のこりのコードβ（ベータ）　γ（ガンマ）　δ（デルタ）　ε（エプシオン）　ζ（ゼータ）　η（エータ）　θ（シータ）　ι（イオタ）　κ（カッパ）の検体はいまだ作成中。

計画進行率――１８％

The four The surprise attack is sudden

無事に体育祭と魔術乱戦（マジック・サバイバル）も終了し、ちょっぴり平和が戻ってきた気がした。だが、まだあと八戦も残っている状況から安心するのはまだ早い。アルエルとの魔術決闘（マジックバトル）をほとんど無傷で勝てたのは狼先輩だからこそできたことである。まあ、無効無力（ゼロ・オア・ゼロ）の小梨先輩を除いてだ。

アルエルの魔術を五段階評価でつけるなら間違いなく「4」をつける。もちろん「5」が一番大きい数字として。不完全な魔術（マジック・ディフィシャンシ）である狼先輩が勝てたのはまさに実力だろう。実力があれば完全が不完全に負けた例なら、ついこの間目の当たりにしたばかりだ。そう考えると、狼先輩の優秀さがわかる。

ひとまずこの話は置いといて、体育祭から三日後。いつも通りの授業に戻ったわけだが、もうすぐ夏休みということで期末テストが行われる。中間テストは『魔術』という教科を除いては、平均点ぐらいだった。いわば普通なのだ。もちろんというか、天才の中の天才、ラウは全教科オール九十点以上である。義兄としては鼻が高い。

天才もいれば、落ちこぼれもいるわけで、俺の周りの代表としてこの子がいる。

「……平方完成って何を完成させるの？　平和な方法？」

「とりあえず、玲虎ちゃん落ち着こうか？」

隈井家の長女にして、俺の親友の妹である——隈井玲虎ちゃんである。彼女はスポーツと魔術は天下一品なのだが、勉強に対してはまったくできない。本来ならばラウがこの時期に教えてあげるのだ

が「気になることがある」といって部屋にこもってしまっている。兄である親友は今頃部活に励んでいるだろう。そういうことで、俺が居間で勉強を教えているところだ。

「うんー、数学は得意な方って隈井から聞いてたんだけど…」
「……まあ、月兄ぃは気にせず教えてよ」

話をそらされた。どうやらその言葉はその場しのぎにつかったものだろう。ちょっと色々とやばいかなーって思い始めたとき、居間の入り口が開いてひょっこりと宝香さんが顔をのぞかせた。にやーっとにやけてゆっくりと近づいてくる。

「やってるねえー。どうだい？　月下の勉強は分かりやすい？」
「あ、はい。分かりやすいです！」
「お世辞はいいから、とりあえず平方完成をできるようになろうね」

ちょっと意地悪を言うと「むう」といって再び問題とにらめっこを始めた。宝香さんはその姿を見て、ちょっとだけ何かを考えて玲虎ちゃんの隣に座った。俺とは向き合う形である。

「ここはね、ここをこうやってこうしちゃってこうすると……」
「……おお！　本当だ！　解けたあ！」

どうやら家庭教師は俺より宝香さんの方が向いているようだ。勉強が得意わけでもない俺が教えるよりか成績優秀な宝香さんが教えた方が全然いいのかもしれない。むしろ良い。結論としてそういう答えが出たので俺は立ち上がって「そんじゃ。宝香に任せますね」と言った。

二人とも俺の言葉に戸惑ってしまい表情が固まる。そんなことも

気にせずにせっせと襖をあけて外へ出ようとした。

「ちょ！　月兄ぃってば！？」

「月下！　私も忙しいんだけど！？」

二人の叫び声が聞こえたが、あえて無視することにした。いやー、人に勉強を教えるって難しいよね。うん、一つ勉強になった。居間をでて、すぐさま自分の部屋に戻ろうとしたがその時ちょうど玄関を叩く音が聞こえた。二回、ノックされた。

「ん？　客かな？」

すぐさま方向転換して玄関へ向かった。何も考えずに、何も油断せず扉を開く。そして、目を少し疑ってしまった。これはびっくりした。まさかなあ、と思ったぐらいだ。

「初めまして、来城くん」

「ヤッホー、ライライ遊ビニ来タアルよ！」

「お邪魔するわ」

中国代表の三人がそこには立っていた。当然のことで俺は固まってしまい、口を大きく開けた。

「そんなに驚かなくてもいい。ただちょっと聞きたことがあって訪ねただけだ」

中国人とは思えないほどスラスラと日本語をしゃべる。もちろんそれは中国代表で俺が一番危険人物だと認識している人――浪煉である。彼の口元はわずかに微笑み、何とも言えない不気味さを感じさせる。浪煉の後ろに並ぶようにして立つ爛々と恋花も同じように

微笑んでいた。

「……悪いが今は客人が来てるんでな。出直してきてもらえるか？」

「それなら俺たちだって客人だ。なーに、簡単な質問に答えてもらうだけさ」

「それは学校でも別にいいだろう？　ご苦労なことだな、お前ら」

「フフフ、ライライどうしてソンナに焦ってテイルアルか？　ランランにはわからないアルなー」

「私も同感です。来城さん、顔色が悪いですよ？」

そんなことを言ってきやがった。こいつらは何を馬鹿なことを言っているのだろうか？　そんなこともわからないのか。大体、青色が悪いなんて当の昔に通り過ぎて逆にすがすがしいくらいだ。部屋にいる玲虎ちゃんよりこいつらの方がよっぽど馬鹿だ。根本的な…ね。

だってよ――

目があった瞬間から、人を殺す目をしているんだから、そりゃ顔色も悪くなるさ。

「とぼけるのもいい加減にしろよ、チャイナ野郎。何が質問だ。完璧に俺たちに喧嘩持ちかけてきてるだろ？」

「誤解ダヨー。ライライは用心ブカイねえ。ランラン達は喧嘩をシニキタんじゃないアルよ？　ね？　恋花チャン？」

「ええ、ランラン先輩の言うとおり私たちは喧嘩をしに来たのではありません」

「へえー……。それじゃあ、全力前回の殺気と魔術エネルギーに対して答えられるか？」

冷や汗がたらりと流れ落ちる。もう夏が近いため、汗もよくかくようになったが、今自分の体が冷え切っていること実感した。流れる汗が気持ち悪い。そんな汗をかきながら俺はどんな顔をしてこいつらの前に立っているのだろうか？

「もちろん、答えられるよ」

そして三人は同時に答えた。

『君の魔術、見せてほしいな』

「がはっ！？」

突然の腹痛。よく見るとい、自分の腹に浪煉の右手がめり込んでいる。鳩尾にジャストミートだ。呼吸が止まり、力も入いらない。思わず膝をついて腹部を両手で押さえた。今の攻撃――まったく気づくことができなかった。呼吸を整えようとすると、ガシっと髪をつかまれ無理やり上を向かされ、手の主である浪煉と目が合う。

「あらあら、君は有能だと思っていたけど手違いだったかな？　人を深く探ろうとするから悪いんだよ？」

「ちょっと、ロウレンさん！？　話ガ違ウアル！　ただ質問スルダケダッテ……！」

「甘いね、爛々。だから君はバカだって言われるんだよ？　これは勝負だ。相手に勝つためなら何でもする。それが俺のポリシー。恋花はまあ、まだ中学生だし考えなくてもいいけど、次期に君は学校の頂点に立つんだ。これぐらいのことには慣れてもらはないと」

「……」

爛々耐えるように唇をかんで、しゃべらなくなってしまった。恋

花も黙ってこちらをじっと見ていた。なるほどね、あの二人は本当に質問しに来ただけだが、浪煉の突然の行動に困っているのか。というか、さっきの会話で確定した。この三人のランキング。

一位　浪煉

二位　爛々

三位　恋花

まあ、恋花はまだ中学生なので中等部「一位」だろうな。そんな考えをしながら浪煉の目をじっと見ていた。なんとなくだが、性格が見えてきた。負けず嫌いで、努力家で、天才で、誰よりも強さを求めて、誰よりも愛を求めて――誰よりも人間が嫌いな人間の目だ。俺はこの目を知っている。この目を射たことがある……。それはもう、昔の話だけど。

「さて、来城くん。あまり騒いでほしくないらおとなしく俺に君の魔術のすべてを教えろ」

「……へえ。俺のランキング知ってるよな？　最下位の魔術が怖いのか？」

「ああ、俺は怖いんですよ。君のその『最下位の魔術』ってのが」

その時俺は悟った。ああ、こいつが一番危ないのかもって。クルーも俺のことを警戒していたが、ここまではしなかった。だが、浪煉の場合はすぐさま俺を消そうとしている。アルエルとは少しわけが違う。ピンポイントに俺を狙ってきた。なんて――なんて性質の悪い人間だろう。

「魔術を見せれば――すべて教えてくれれば何もしませんから」

「もし、断れば？」
「その時ってことであすか？　ああ、そうですね。まあ、考えるほどのことじゃないでしょう」
微笑みが不気味なほどに怖くなる。
「殺すだけです」
バンっ！　という銃声が突然聞こえたかと思うと浪煉は俺からすぐに離れた。爛々と恋花も同じように離れる。俺の視界にはいいたのは後ろに下がる三人と、炎の銃弾が一発。ああ、そうだ。忘れていた。ここには頼れる人がちゃんといる。
「全く、他人の弟に何のようですか浪煉くん？　お姉ちゃんも流石に怒るぞ？」
後ろを見れば右手に装置である拳銃を構えた宝香さんが凛として立っていた。って、学校以外で魔術を使うのはまずいでしょう……。そんなことを思っていると宝香さんのうしろから玲虎ちゃんが出てきて俺の安否を確認するために近づいてくる。
「大丈夫！　月兄ぃ！？」
「ああ、大丈夫だけど……今回はちょっとヤバいかもね」
立ち上がって玄関の先を見ると三人はまだそこにはいた。爛々は不安そうな表情。恋花は眉間にしわを寄せて不可解といわんばかりの表情。そして浪煉は――
「いいねえ。そうじゃないと楽しくないでしょ」

いまだに笑っていた。

「面白いですねえ。いい炎だ」

「褒めてくれるのは有難いが、弟に手を出した罪。きっちり払ってもらうからな！」

突然宝香さんは走りだし、俺と玲虎ちゃんを素通りしていく。まっすぐ浪煉をめざし、銃口をそっちへ向けた。爛々と恋花はとっさに浪煉を庇おうと前へでようとするが、浪煉本人によって止められる。

「迷宮の記憶（ラビリングタイムズ）！」

「炎の銃弾（ファイヤーパレット）！　炎天の火炎放射（オーバーフレイム）！」

二人の叫び声と同時に魔術がぶつかり合った。

A formula is magic.（公式は奇術）（前書き）

投稿が遅れてもうしわけありません。
合宿や大会などでなかなか執筆ができませんでしたが、これから大分落ち着くので執筆スピードを上げようかと思います。

A formula is magic.（公式は奇術）

宝香さんの二丁拳銃から放たれた火柱は真っ直ぐ浪煉を狙っていた。対して、浪煉はすかさず懐から取り出した拳銃からは大量の土砂が放出されている。二つはぶつかり合って、しばらくしてお互いに攻撃するのをやめた。俺は静かに目を細めて、浪煉の拳銃を見る。

迷宮の記憶（ラビリンスタイムズ）――浪煉の魔術名である。見るからに先程の魔術は『土』だ。いままで俺は一度も「土」属性を持った魔術師の戦闘を目にしたことがない。理由は使う人が少ないのだ。攻撃性や防御性に優れていると思われがちだが、やはりどうしても「人気がない」のだ。

魔術の醍醐味といえばもちろん『火』である。それに加えて「土」はぱっとせず、かっこいいとも思える人がいないからだ。言わば、需要が少ないのだ。学園のほうでも「土」の魔術を使う人が少ない。使うのは大体入学時に検査した「八つの理（エイトルール）」の数値が「土」に向いていた人だけである。そのため、人数は圧倒的に少ない。

「へえ、土の魔術か。実は私は一回も土の属性とは戦ったことないんだよね」

「僕はいやと言うほど火の魔術とは戦ったからね。正直そろそろうんざりだ」

それだけ言うと互いに睨み合って、しばらく動かなかった。それはほんの十秒ぐらいだが、なぜだか長く感じた。理由はない。ただ？？感じただけ。

しかし、すぐに二人はまた戦い出すだろうと思い、すぐさま小声

で詠唱を始める。

口を動かして一秒後と言っていいほど二人は速くも動いた。宝香さんの二丁拳銃からは先ほど同じように炎の弾丸が、浪煉は手の平から岩の塊を、互いにぶつけ合った。二人の魔術が発動した瞬間、前へ俺は出ていた。

詠唱はまだ終わっていない。だが、体は動いている。それに、詠唱をやめたわけではない。どうにか？？なる。

いや、どうにか？？する。

体は完全に二人の間に入り、右手を浪煉に、左手を宝香さんへ向けた。二人の驚く表情。いや、二人だけじゃない。俺のそばにいた怜虎ちゃんも、爛々も、恋花も理解不能と言った感じで佇んでいた。

「月下？？！？」

宝香さんの声が聞こえた瞬間に。岩と炎が俺をサンドウィッチにした。凄まじい爆発音と突風。家が吹き飛ばされるのでないかと不安になるぐらい――重い一撃だった。体が吹っ飛ぶのをしっかりと足で耐えて、両手に集まる魔術エネルギーを具現化させる。それは――きちんと成功できた。

砂煙が視界が眩む。五秒ほどの沈黙でようやく視界が開けてきた。俺を除いた全員はそれはもう、驚くしかなかった。二つの魔術を『素手で止めたように』見えているのだから。

俺の手元には何もない。いや、あるのだが……姿が見えない。それだけの魔術――村正に続く二つ目のデンジャラスグレメリー。

「君はっ！？　それは魔術なのか！？」

浪煉は少々興奮気味に俺に尋ねてきた。そこまで興奮してほしくないね。なんか、変態みたいだし。一応、答えなくてもいいかなと思ったけど、また争いごとになるのはどうにもこうにもごめんだからな。仕方なく、答えるしかない……。

「まあ、そうですねえ。これが俺の魔術――の一部ですね」

「……一部ということはまだ何かソレにはなにかあるのかな？」

「さあー？　それは流石に教えれませんねえ」

「なら……無理やりにでも知るまで――！」

早かった。眼で追いつくのがやっとの速さで浪煉は俺との距離を詰めて右手で殴りかかってきた。その拳には岩でコーティングされており、当たったら速ゲームオーバーの雰囲気だ。右腕を前へ持ってきて拳を受け止める。岩の拳は腕とぶつかることなく、見えない何かとぶつかる。ギッキンっと奇妙な音をならせ、そのあともギチギチと音を立てながら互いを睨んだ。

「眼に見えない魔術……おもしろい！」

「五月蝿いですよ……！？　こっちは必死なんですけどね！」

皆さんも御察しの通り、村正とおなじ『デンジャラス』のカテゴリーに所属する魔術ならばなにかしらの対価を払わなければならない。村正は体の一部を――今回の場合は『体力』を奪う。そのため、今はなんともいえない疲労感を抱えている。村正とちがって払う回数は一括なので、今後これ以上吸収されることはないが……。

体力の対価が予想以上に大きく、徐々に押されている。あんまり

能力を使いたくはないけど……

「っち……！　ごたごた言ってる暇はないか……。カフヴァール！！」

「っ！？　これは……」

叫びと同時に見えないソレは輝きを増して浪煉の目暗ましには十分だった。あまりの眩しさに目を積む言った浪煉を蹴っ飛ばして距離を広げた。光も収まり、浪煉も立ち上がって何が起こったのか理解しようとした。そして、目の前にあるソレを凝視する。

両腕に付けられた赤色に輝く篭手。西洋のデザインであり、光り輝き、そして太陽を思わせる防具。アイギス、プリトウェンに続く武器ではない伝説の武具。名前は――

「鉄兜カフヴァール」

鉄兜カフヴァール――ケルト魔術関連の魔具。長腕のルーグ（ルグ）の装備している鉄兜の名前も挙げている。このカフヴァールについては「トゥレンの子たちの運命」という書に書かれている。それは『カフヴァールと呼ばれる鉄兜も着けた。太陽の光で目も眩むようにきらきら輝いた』と書かれている。この説明の通り、カフヴァールは太陽のような輝きを発揮することが出来る。そして、どんな魔力も通さない絶対の防御を持つ。これが――アイギスが持つと思われていた能力。『絶対防御』だ。

全ての魔術を防ぐことの出来る『絶対防御』。それがカフヴァール。

ちなみに、先ほど出てきたルーグとは、かの有名なケルト神話の

英雄、クーフーリンの父親のことである。彼の持つ魔剣フラガラッハは有名だろう。そして、彼は剣も槍も目に見えないほどの速さで扱うことが出来た。そこから『長腕のルーグ』と呼ばれるようになった。

「カフヴァール……。なるほど、伝説の防具か」
「へえ、さすが浪煉といったところか？　名前を聞いただけで大体把握できたらしいな」
「ああ、だが、そうじゃないと楽しくない……！」

まだ戦うつもりらしい。そろそろやめにしないと、倒れそうなんだけど。宝香さんは俺を助けようとしているが、うかつに動けそうにもない。浪煉の他にも爛々と恋花がいる。戦う気はなくとも、宝香さんを止めようとはするだろう。怜虎ちゃんはもうパニックになってその場に座り込んでしまっている。少々、悪い気もした。

「浪煉……そろそろやめにしよう。俺は疲れた」
「嫌だね。俺はとてもたのしい」

勘弁してくれ。

「約束は守ったと思うぞ。『魔術を見せる』。きちんとこうやって見せた」
「気が変わったよ。俺は君の最高の実力が知りたい。最後まで――最後の君がみたい」
「知るかよ、そろそろ終わりにしないと色々とヤバイんだって」
「それこそ俺の知ったことじゃないよ。君を殺す。今はソレだけを考えたい」

頭が狂っているとしか思えないが、魔術ランク上位の奴らはこう

いう奴が多いのかね、外国は。浪煉しかり、アルエルしかり。だがまあ、このまま戦いを続行するのは危なすぎる。誰かに助けてもらわないといけないが……この状況で誰かが助けに来るとは――

「さて、そろそろお終いにしましょうか、浪煉さん」

はっとして顔を二人してそちらに向けた。いつの間にか家の中から出てきたラウが少々不機嫌そうにその場に立っていた。そういえば、ラウは部屋にこもっていたんだっけか。それなら最初からラウに頼めば正解だったのかもしれない。

「ラウ！」

「レイコちゃん、大丈夫？」

ラウに抱きつくレイコちゃんは泣きながら「怖かった」と叫んでいる。ラウは数秒だけ怜虎ちゃんをあやすと、今度はキリっと浪煉を睨む。しばらく二人のにらみ合いが続いたと思うと、仕方がないと言わんばかりに浪煉の方から離れた。俺に背を向けて立ち去ろうとする。

「今回の件は目を瞑りますけど、次にこういうことがあったら覚悟してくださいね」

「中学生に何が出来るの？　魔術の開発者？　ただのガキだね。俺もお前も――俺を止めるのは無理だよ」

「あまり馬鹿にしないでくださいね。私の魔術も、私の義兄も」

「……期待してるよ」

それだけ――たったソレだけ言ってこの場から去ろうとする。その後をあわてるように爛々と恋花が付いて行く。後姿が見えなくなると緊張が解けて、腕のカフヴァールも霧のように消えた。疲労感

に耐え切れず、その場に座り込む。

「月下！？」

宝香さんが急いで駆け寄ってきた。表情は申し訳ないと言い、行動は不甲斐ないと表していた。宝香さんは両膝を突いて座り込んでいる俺に抱きついてきた。

「ごめん……！　私がこんなんだから！？」

「宝香さんは謝らなくていいですよ。俺の無茶が暴走しただけです」

「それでも、私は月下を守れなかった……」

義姉としての愛情が大きい。それはどうしようもないぐらい。宝香さんの背中を二度ほどさすって、安心させた。「大丈夫」と何度も言う。それしか、今の俺にはできそうにもない。

「兄さん」

今度はラウがこちらにやって来た。レイコちゃんと一緒に手を繋いで。表情は先ほどとは違ってとても心配そうだ。レイコちゃんの表情も不安げで、二人の目線は俺に向けられている。二人にも「大丈夫だから」とだけ伝えて、俺はそのまま微笑むことしか出来なかった。

しばらくして、宝香さんが落ち着いてやっとの思いで立ち上がる。体は先程より軽い。やはりカフヴァールを消したからであろう。辺りを見ると、先ほどまで行われていた戦闘が思いだせる。爆風でメチャクチャになった庭。まあ、仕方がない。

「ところで、ラウはなんの研究を今までしていたんだ？」

ふと、その場で疑問に想ったので聞いてみた。宝香さんもレイコちゃんも興味があると分かりやすいぐらいラウへ期待のまなざしを向けていた。ラウは「ああ」といって、スカートのポケットに手を突っ込んだ。中から取り出したのは卵ほどカプセル。

「……なに、これ？」

「これは空気中にちらばった魔術エネルギーを集める道具で、持っているだけで魔術エネルギーを採取できるんだす。研究者の人は大体の人が持っていますよ」

「へえ……ラウはすごいね。私にはさっぱりだ」

宝香さんは義妹の頭のよさに関心している様子。俺も感心している。レイコちゃんは相変わらずキラキラした瞳でそのカプセルを見つめていた。

「で、ソレを使ってどうするんだ？」

「今回の研究対象は兄さんの魔術エネルギーであす。まあ、説明するのもアレなのでとりあえず私の部屋に行きましょう。歩きながら説明できることは説明します」

とのことで、ひとまず玄関へ足を向けて歩き出した。先頭はもちろんラウだ。それからレイコちゃん、宝香さんと俺のように続いた。

「魔術というのは数式で成立っています。別名『魔術公式』。この公式に基づいて、魔術を発動させているんです」

「簡単に言うけど、意味が俺にはわからないな…」

「私もだよ……。さっき月兄ィと数学したけど、さっぱりだったし」

「まあ、難しく考えるより簡単に考えた方がいいですよ。結果を作りたいなら、その過程を作ればいい。それだけの話です」

「……それだけ、ね」

宝香さんは苦笑しかできない。ぶっちゃけ、俺も全然わからない。この義妹の頭の中は摩訶不思議なことでいっぱいである。でもまあ、それだからこそ魔術というのを作り出せたのかもしれない。それが、奇跡だったのかそれとも偶然だったのか、運命だったのかなんて……ね。

部屋につくと、ラウを筆頭にぞろぞろと中に入る。五台のパソコンと、巨大な謎の装置。見たことのない機械でいっぱいで、床もコードがたくさん散らかっている。

「これをみてください」

ラウはまっすぐ一台のパソコンの前へ座ると、カタカタとキーボードを鳴らして画面にとある映像を流した。ソレは青色の何かの集合体で、球体を象っている。

「これが不完全な魔術（マジック・ディフェシャンシ）の人の魔術エネルギーです」

「この青いヤツが……？」

コレが霧の粒子の正体。魔術エネルギー。すこし感動する。ラウはそんなこともお構いなしにまたキーボードに指を張らせた。

「そして、不完全な魔術（マジック・ディフェシャンシ）を公式にするとこうなります」

パソコンの画面が移り変わって、そこに公式のようなものが出てきた。

『ＭＦｇ＝ｘｗ－ｊ２Ｈ』

「すまん、まったく意味が分からない」
「無理もないですよ、兄さん。私も公式は編み出せても、なにを意味しているのかは全く理解できませんもん」
「それって、大丈夫なのか？」
「はい、たぶん」

いま、たぶんって言ったぞ。

「続いてこちらです」

今度は画面に先ほどと同じような球体が現れた。今度は黄緑色をしており、先程より細かい粒子で構成されている。もちろん、俺たち三人はまた食い入るようにそれを見つめた。

「これは……」
「今度は完全な魔術（マジック・エンタイアティ）の魔術エネルギーです。こちらも同じように公式にできます」

と、先ほどと全く同じような手順で操作をすると、画面にまた公式が映し出される。

『ＭＦｇ＋Ｐｔ＝ｘｗ－ＥＺ３ｎｋ』

「……また意味不明だな。てか魔術ってこんなので出来ているのか？」
「はい、不思議ですが魔術はコレで成立っています。それがどうしてか、この数式じゃないとダメなんです」
「魔術ってふしぎなんだねえ」

レイコちゃんの関心の声に肯くことしか出来ない。何気なく俺たちが使っている魔術。それを改めて考えてみると分からないことが多すぎる。いや、知らないことが多すぎるのだ。知らないことをしている俺たち――それは世界への罵倒ではないだろうか…。

「そしてコレが兄さんの真実の魔術（グレメリー・オブ・ザ・トゥルー）です」

パチンっと音が聞こえた瞬間にパソコンの画面が三度変わった。そして、そこに映ったものを見て、俺たち全員は息を呑んだ。そして、驚愕して、目を疑った。

「な、なんだこれ……！」

画面に映ったのは先ほどと変わらない球体だった。だが色は赤色で、なにより――動いている。生き物のように、呼吸をしているかのように、心臓のようにドクンドクンと何度も脈だっていた。宝香さんは唖然とし、レイコちゃんは口をてを当てて声を出すことすら出来ない。俺自身も――気持ちが落ち着かない。

「そしてコレを公式にしようと他のですが……」

「何かあったのか？」

「いえ、とりあえず、見てください」

パチンっとキーボードがなると、公式が現れた。そして――目が眩む。

『ｈｅｏｌｈｅｔｆｏｄｅｒｏｒｍｕｒｈｅｏｌｈｅｔｆｏｄｅｒ
ｏｒｍｕｒｈｅｏｌｈｅｔｆｏｄｅｒｏｒｍｕｒｈｅｏｌｈｅｔｆ
ｏｄｅｒｏｒｍｕｒｈｅｏｌｈｅｔｆｏｄｅｒｏｒｍｕｒｈｅｏｌ
ｈｅｔｆｏｄｅｒｏｒｍｕｒｈｅｏｌｈｅｔｆｏｄｅｒｏｒｍｕｒ

heolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormurheolhetfoderormur』

「……なんじゃ、こりゃ」

「私も理解不能なんですが……これ、ちょうど区切ることが出来るんですよ」

確かにいわれて気がついたが「heolhetfoderormur」で区切ることができる。でも、なんでこんなに繰り返されているんだ？

「面白いことにこれのアルファベット、並べるとある言葉ができるんですよ」

「言葉？」

「そう、それがこれです」

四度目のエンター。アルファベットがゆっくりと並べ替えられていく。その様子を見て、俺たち四人はまた表情を驚きへとかえる。並び替えられたアルファベット。画面に映し出された言葉――

『The fool of hero murder』

……翻訳すると『英雄殺しの愚か者』。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0512j/

霧雨ラウの義兄魔術公式

2011年10月12日15時50分発行